
時空を乗り越えて～探検の歌～

ウィンデル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空を乗り越えて〜探検の歌〜

【Nコード】

N3938H

【作者名】

ウインデル

【あらすじ】

時の破壊によって暴走してしまったディアルガ、それを止めるために未来からやってきた少女、同じ目的で過去からやってきた少年、今、時空を超えた物語が始まる

プロローグ

風が吹き荒れ、雷が鳴り響くある嵐の夜。雷鳴とともに叫び声がある。

「…うおっ!!…だ、大丈夫か!？」「う、うん!」

嵐の中、必死に叫んでいる2人に、容赦なく降り注ぐ雨。

「は、離してはダメだ!もう少し…。なんとか頑張るんだ!」
さらに鳴り響く雷。

「くそっ!このままだと…。」

その時、凄まじい雷が起こった。

「うああー!ー!ー!」

この叫びを最後に声は聞こえなくなった。

プロローグ（後書き）

小説初投稿です！まだまだわからないことだらけですが、頑張りますのでよろしくお願いします！

第一話・出会い（前書き）

第一話完成です。

第一話・出会い

一匹のポケモンが、ある建物の前に立っていた。

「うーん…」

何やら悩んでいる様子だ。ぶつぶつ言いながらウロウロしている。

「いや、こんなことしてちゃダメだ！今日こそギルドに入るんだ、勇気を出さなきゃ！」

ギルドとは、超一流の探検家プクリンが親方をしている場所だ。探検家をめざすならここに弟子入りするのが一番の近道と言われている。

首にひもで掛けている石を握り締め、足を踏みだした。

何度も来ているから入り方はわかる。しかし、入ったことは一度もない。その理由は…

「ポケモン発見！ポケモン発見！」

「誰の足形？誰の足形？」

「足形はヒノアラシ！足形ヒノアラシ！」

「ひゃあー！！」

いつも入り口の前に来ると、足元から突然声が聞こえるのだ。これは、ギルドに怪しいポケモンが入らないように見張っているだけなのだが、臆病な性格ゆえにこうしていきなり声が聞こえると、反射

的に身を退いてしまうのだ。なのでいつまで経っても中に入れないのである。

「……ダメだ、結局入る踏ん切りがつかないや。今日こそ！っと思ってきたんだけど……」
首に掛けてあったものを外し見つめる。

「この宝物を握り締めていけば少しは勇気も出ると思ったけど……ハア……」

深いため息を吐き、それをまた首に掛けた。

「ああ、ダメだ。僕ってホント臆病者だよなあ……。情けないよ……」

そういつてとほとほと階段を下りていた。

そんなヒノアラシの様子を影で見ていた二匹のポケモンがいた。

「おいズバット、今の見たかよ。」

「ああ、もちろんだぜドガース。」

「さっきウロウロしてたヤツ、あいつ何か持ってたよな？」

「ああ、ありゃきつとお宝かなんかだぜ。」

「狙うか？」

「おう。」

ドガースとズバットは、ヒノアラシのあとを追った。

その頃ヒノアラシは海岸にいた。ギルドからほんの数分の距離だ。時刻は夕方、この海岸は夕方になるととてもいいものが見れるのだ。

「わあ〜！きれいだなあ！」

ヒノアラシが見ているのは海、しかしそれはクラブたちのはく『あわ』と、夕日のオレンジ色の光によって、とても幻想的な光景だった。

「何度見てもきれいだなあ。悲しいときや落ち込んだときでも、ここに来るといつも元気が出てくるよ。今日も来てよかった。」

しばらくその光景に見惚れていたが、奥の方に見慣れないものを見つけた。

「ん？…あれ？何だろう。」

近寄ってみるとそれはなんとポケモンだった！

「わっ！誰か倒れてるよ！」

慌てて近寄ってみるが、目を閉じたまま動かない。

「キミどうしたの！大丈夫！？」

身体を揺すってみるとかすかに動いた。

「しっかりしてー！」

……誰かが私の身体を揺さ振っている。誰だろう？
……風が吹いてる？ここはどこ？

「え……して……」

「うう……」

だんだん意識が覚醒してくる。……身体がだるい

「あっ気が付いた！よかつた〜！」

目をあけると、暗いところから明るいところに出たようにとても眩しかった。

「大丈夫？キミ、ここで倒れてたんだよ？」

倒れてた？私が？

まだ目覚め切っていない頭をひとふりし、声のしたほうを向く。そして驚愕した。

「僕はカズキ。よろしくね！」

「………が………」

「え？なに？」

「ポケモンが………しゃべってる………!?」

「……………へ？」

なんで！？どうして！？どうなってるの！？…………と、とにかく落ち着こう。何で私はここにいて、何でポケモンがしゃべってるか考えよう。

まだ目覚め切っていない頭をフル回転させるが、どうしたことが、どうしてここにいかどころか、何も思い出せなかった。

憶えているのは自分の名前と、自分が人間だということだけ。

な、何で思い出せないの？

そんな私にさらに追い打ちをかけるようにカズキは衝撃的なことを言った。

「キミ大丈夫？ポケモン同士なんだからしゃべるのは当たり前ですよ？」

「……………今、何て言ったの？」

「だからポケモン同士なんだから……」

「私は人間だよ！？」

「……何言ってるの？どこからどう見てもフシギダネだよ？」

私は自分の身体をしてみる。

緑色の体、背中にある大きなタネ、そして今頃気付いたが四足歩行……間違いないフシギダネの身体だ。

「わ、私フシギダネになってる！！？」

一際大きな声で叫ぶとカズキはビクつと体を震わせた。ちよつと怯えているみたいだ。

「……キミもしかして僕を油断させて騙そうとかしてる？」

「私があなを騙して何のメリットがあるの？」

「そ、そうだよ、ゴメンね。じゃあ名前は？名前は何て言うの？名前？名前なら憶えてる。

「……ヒナタよ。恐がらせてしまったのならごめんなさい。」

「ヒナタっていうんだ。僕の方こそ疑ってごめんね。最近悪いポケモンが増えてきていきなり襲ってくるポケモンもいるし…なんか最近物騒なんだよね。」

その時誰かがカズキを突き飛ばした。

「イタッ！」

「おっとゴメンよ。」

「いきなり何すんのさー！」

「へへっわからないのかい？おまえに絡みたくてちよっかい出してるのよ。」

「ええっ!?!？」

そこには、先ほどギルド入り口で話していたドガースとズバットがいた。

「こいつはもらっておくぜ。」

「ああっ！それは！！」

さっきぶつかった衝撃で首に掛かっていた石がはずれてしまったらしい。

「なんだてつきりすぐに取り返しに来ると思ったが…なんだ？動けねえのか？」

「うっ…」

カズキは後ずさる。

「さっ行こっぜ。」

「じゃあな、弱虫君。へへっ。」

二匹は近くの洞窟に入っていた。

「……………ああ……………。ど、どうしよう？あれは僕の大切な宝物なんだ…」

カズキは今にも泣きそうだ。

「あれがなくなったら、僕は、僕は……………うっ」

ついに泣きだしてしまった。

「取り返しに行かないの？」

「で、でも、僕の方じゃ……」

「そうやってあきらめるの？あれはあなたの大切なものなんですよ？私も行くから勇気を出して！」

「……うん！頑張ってみるよ！」

「決まりね！じゃあ急ぎましょう。」

「うん！」

こうして二匹はドガス達を追って洞窟に入っていった。

第一話・出会い（後書き）

これ書くの結構大変ですね、プロローグを書いた時にはもう書こうとしてたんですが……まあそれはさておきいかがでしたか？なるべく台詞とかはオリジナルにしようと思うのですが……変じゃないですよね？

感想などあればよろしくお願いします。

次回はドガース達と戦うと思います。

第二話・宝物を取り返せ！（前書き）

第二話完成です。

第二話：宝物を取り返せ！

洞窟の中は静かだった。少し薄暗く、潮の香りがする。足に砂の感触が心地よい。そんな中を私達は進んでいた。

カズキはさつきからびくびくと私の後ろに隠れているし、そんなに危険な場所には見えないけど……

「…ねえカズキ、ここって危険なところなの？」

「うん。ここは『海岸の洞窟』って言うんだけど、不思議のダンジョンと呼ばれる場所なんだ。」

「不思議のダンジョン？」

「入るたびに地形が変わるし、倒れると入り口に戻されて、道具やお金がなくなるんだ。でも、おかげで出られなくなる事はないんだけどね…」

「へえ、でもそれってそんなに危険じゃないと思うけど？」

「言ったでしょ？最近悪いポケモンが増えるって、原因はよく知らないけど、我を忘れて襲ってくるポケモンもいるんだ。だから、みんなダンジョンには極力近づかないようにしてるんだよ。」

なるほど、だから怯えてるのか。カズキはバトルとかは苦手そうね…私が頑張らなきゃね！

「ねえカズキ、私ってどんな技が使えるの？」

「え？うーん…ヒナタは草タイプだから、はっぱカッターとかつるのムチじゃないかな？」

はっぱカッターにつるのムチか……試してみるか

「……………はっぱカッター！」

シュバツ！

前にあった岩が真っ二つになった。

よし！出来た！

私は技が出せたという喜びを感じるとともに、本当にポケモンになつてしまつたんだと改めて感じた。

私が満足気な顔をしていると、カズキは驚いたような顔になつた。

「スゴい……ヒナタってホントに人間なの？初めて技を使うにしては凄い威力だけど……」

「え？これが普通じゃないの？」

「うん。」

そうなんだ…ちょっとうれいかも。じゃあ次はつるのムチね。

シュルルツ！

あつ出た。感覚は人間の時の手と同じね。

「さて！技も出せたことだし、早く行きましようか！」

「う、うん。」

私達は洞窟の最下層をめざして、階段を下りていった。なぜこんな洞窟に階段があるのか不思議に思ったが、それも不思議のダンジョンの特徴だと思うことにした。なんか聞いちゃいけないような気がしたから。

…それにしても、このポケモンって凄く弱い。私のはっぴカッタ―一発でやられちゃうんだもん。楽でいいけどさ…

そんな調子で敵を倒しながら、最下層までやってきた。そこには行き止まりで立往生しているドガース達がいた。カズキは勇気を振り絞って話し掛けた。

「お、おい！」

その声に、ドガース達は振り向いた。

「おやおや誰かと思えば、さっきの弱虫君じゃないか」

「うっ……ぬ、盗んだものを返してよ！あれは僕にとって大切な宝物なんだ！」

「ほう、やっぱりこれはお宝なんだな？」

「見た目より価値があるかもしれない、余計返せなくなったぜ。」

「そ、そんなあ……」

「返して欲しけりゃ力付くできな！」

カズキは俯いてしまう。

何やら小さい声でぶつぶつ呟いている。

「……僕は探検家になるんだ、こんなところで挫けちゃダメだ……
勇気を出さなきゃ!」

カズキは私を見る。私はしっかりと頷いた。
私達は身構えた。

「やる気か?それなら食らえ、超音波!」

「煙幕!」

「うわあ!」

「前が見えない!」

私達は煙幕に包まれた。

「ケケツ!どうだ!」

「これが俺たちの実力だ!」

「へえ〜この程度なんだ。」

私は背後から、ズバットに思いっきり体当たりしてやった。ズバットは倒れた。

「なっ!?!いつの間に!?!」

「煙幕で視界が利かなくなっただって、あんたたちの位置が変わらないな

ら前に進めばいいだけの話、安心しすぎたみたいね！」

ドガスにもつるのムチをお見舞いしてやった。

「ゲヘッ！」

ドガスは変な声を上げて倒れた。

「ほら！勝ったんだからさっさと返しなさい！」

「ケツこんなもん返してやるよ！」

そう言っつてあの石をこっちに投げた。

「覚えてろ〜」

ドガス達は逃げていった。

「ほら、取り返せたわよ？」

私は石を広いカズキに差しだした。

「うう、ありがとう……」

私達は洞窟を出た。

「さっきは本当にありがとうー！」

「どうぞ致しまして。」

カズキはあの石を見せてくれた。

「これは『遺跡の欠片』、一見ただの石ころに見えるけどほら、真ん中に不思議な模様があるでしょ？」

私は石をよく見てみた。

確かに不思議な模様ね、こんなの見たことない……って言っても記憶がないから知っててもわからないか。

「僕ね、昔から伝説とかが大好きで、そういう話を聞くたびにわくわくするんだよ！だってそう思わない？なぞの遺跡や隠された財宝、闇のまきょうや誰も行ったことがない新しい大陸、そんなところには黄金やお宝がザツザク！そこにはきつとロマンがある。僕、いつもそんなことを考えてはわくわくしてるんだよ！……あっゴメンついあつくなっちゃった。」

「ううん、私もそういうのは大好きだから、続けて」

「うん。それでふとしたことで拾ったのがこの遺跡の欠片なんだ。

この欠片が伝説的な場所や秘宝への入り口になっている、そんな気がしてならないんだよ。」

カズキは欠片を手取る。

「だから僕も探検隊になってこの欠片がはまる場所を発見したい！僕自身でこの欠片のなぞをいつか解きたい！そう思ってさっきも探検隊に弟子入りしようとしたんだけど……僕臆病でさ……。」

「（確かに勇敢とは言えないわね…）」

「ヒナタはこれからどうするの？どこか行くあてあるの？」

「あっそういえば…」

もともと人間なのだから帰る場所なんてない。

「……もしないならお願い！僕と一緒に探検隊やってほしいんだ！」

「いいわよ、何か行動を起こさないと何も変わらないしね！」

「ホント！？ありがとう！これからよろしくね！」

こうしてヒナタとカズキの探検隊が結成されました。

…同じ頃、結成されたチームがもう一つありました。

「準備はいい？」

「うん。頑張ろうね！」

これから始まる大いなる探険、探険の歌は、まだ始まったばかりだ。

第二話・宝物を取り返せ！（後書き）

…やっと書けた〜

ヒナタ

「今回はずいぶんかったわね？」

あれ？何でヒナタがここにいるの？

ヒナタ

「何で遅れたのか気になったから。」

書いてる途中で寝ちゃってそれまで書いた奴が全部消えちゃったんだよ。

ヒナタ

「ふ〜ん。ま、頑張ってたね。」

はい。頑張ります。

第三話：ギルド入門（前書き）

第三話完成です。

第三話：ギルド入門

「ここがプクリンのギルドだよ。」

カズキに案内されて、私は今ギルドという建物の前にいる。

探検隊になるには、このギルドに弟子入りして、一人前になるまで修業しなければならぬらしい。

「でもなあ、やっぱり怖い…」

「何言ってるの、探検隊になるんでしょ？」

「だ、だって入り口に近づくと足元からいきなり声が聞こえてくるんだよ。ヒナタは怖くないの？」

足元から声が聞こえるって…

私は入り口を見てみた。

入り口は鉄格子で閉じられている。その前には穴が開いていて、格子で落ちないようになっている。鉄格子の入り口は上に持ち上げて開けるみたいだ。

…なるほどね。

「カズキ、その声に関わること言われたでしょ。」

「ええー！何でわかるの？」

「やっぱりね、おそらくそれは見張りの声、その格子で誰かを判断し、怪しいものでなければ中にいれる、そんなようなシステムだと思っ。」

「…スゴいねヒナタ、そこまでわかるなんて…」

「それほどでもないわよ。さあ、行きましょ？」

「うん。じゃあ僕が乗るね。」

カズキは格子の上に乗った。

「ポケモン発見！ポケモン発見！」

「誰の足形？誰の足形？」

「足形はヒノアラシ！足形はヒノアラシ！」

「ひい！…い、いや、ここは我慢しなくちゃ。」

そこまで驚かなくても…

「…よし！そばにもう一匹いるな？お前も乗れ。」

「はいはい。」

私は格子の上に乗った。

「ポケモン発見！ポケモン発見！」

「誰の足形？誰の足形？」

「足形は…多分フシギダネ！」

「なんだ多分って!?!」

「だってここらじゃ見かけない足形なんだもん。」

「足形を見てどんなポケモンか判断するのがディグダ!お前の仕事だろ!」

「そんなこと言われても、わからないものはわからないよ!」

なんかもめてるみたいだけど、早く終わらないかな?

「……待たせたな。」

ん?終わったかな?

「確かにこの辺でフシギダネは珍しいからな。まあ、怪しいものはないようだし、入れ!」

前の入り口が、ガガガツ!と音を立てて開いた。

「うわあ!びっくりした。」

「カズキってホント臆病ね。ほら、行くわよ。」

「あつ、待ってよ!」

私達は中に入った。

中には梯子があり、地下に通じていた。

降りてみると思ったより広く、いろんなポケモン達が集い、とても賑やかだった。

「わあー！ここがプクリンのギルドかあー！」

「おい！」

カズキがはしゃいでいると、後ろから声をかけられた。

「さっき入って来たのはお前達だな？」

「は、はい！」

「私はペラップ ここらでは一番の情報通であり、親方様の一番弟子だ 勧誘やアンケートならお断わりだから、帰ってくれ。」

一瞬呆気にとられた。だがすぐに言い返す。

「ち、違うよ！僕達探検隊になりたくて来たんだよ！」

「なんだって!?!」

賑やかだったギルド内が、一気に静かになった。
ペラップは後ろを向いて何か小声でブツブツ言っている。

「まったく珍しい子だよ。こんな修業は耐えられないって、脱走する弟子だっているのに……」

「…あ、あのペラップ、さん？」

「ハッ!?!いやいやいやいやいやいやいやいや!?!な、何でもないよー！」

…今明らかに動揺したよね？本当に大丈夫かな？

「なんだ、探検隊になりたいならそう言ってくれなきゃー フッフッフッフ」

「な、なんか急に態度が変わったね。」

「まあいいんじゃないの？探検隊になれば。」

「さっチーム登録はこっちだよ ついてきて」

ペラップはさらに地下に降りていった。
私達は一度顔を見合わせ後を追った。

「地下二階は主に弟子たちが働く場所だ。」

「わあー！ここ地下なのに外が見えるよ！」

ペラップが説明してるのに、カズキははしゃいでいる。

「いちいちはしゃぐんじゃないよ！」

「ひい！」

あっ、怒られた。

「このギルドは崖の上に建っている、だから外が見えるんだよ。」

「へえ〜」

「さあ、ここが親方様の部屋だ。くれぐれも失礼の無いようにな。」
ペラップは翼でドアをノックした。

「親方様、ペラップです。入ります。」

ペラップが先に入り、私達が続く。
中には色々なものが無造作に置いてあり、中にはどう見ても貴重な物もあつた。

とても綺麗とは言えないその部屋の奥に、ウサギのような長い耳を持った、ピンク色のポケモン。プクリンはいた。

「親方様、こちらが新しく弟子入りを希望している者達です。」

「……………」

プクリンは後ろを向いて黙っている。

声を掛けようにも、何も言わないプクリンを前に言葉が出なかった。

「お、親方様？」

「……………」

ペラップが恐る恐る声をかけるが返答が無い。
またしばらく沈黙が続くと思つたその時！

「……………やあー！」

「「「!」「」」

プクリンが急に振り返った。

「僕プクリン!このギルドの親方だよ。君達探検隊になりたいんでしょ?一緒に頑張ろうね!」

……なんというかその……ホントに親方?って思った。

親方って言うくらいだからとても怖いのかと思っていたが、むしろとても友好的だった。

「それじゃあチーム名を教えてください?」

「え?チーム名?」

「そう、探検隊ならチーム名を決めなきゃね。」

「チーム名か……ヒナタは何がいい?」

何で私に振るのよ。

でもチーム名か…その時ふとある言葉が浮かんだ。

「リリース……」

「え?」

「不安や苦痛を取り除くって意味、そんなふうになれたらって願いをこめて、どうかな?」

「リリースか……うん、いいね！気に入ったよ！僕達は探検隊、チームリリースだ！」

良かった気に入ってくれて。

「決まったみたいだね。それじゃあチームを登録するよ。
登録 登録 みんな登録……たあーっ！！」

耳をつんざく叫びと共に部屋が光に包まれた！

「登録完了だよ。」

あれが登録！？凄く耳が痛いんですけど！

「それじゃあ記念にこれをあげるよ。」

そう言っただきめの箱を前に置いた。

「これは？」

「これはポケモン探検隊キットだよ。開けてみて。」

カズキは箱を開けてみた。

中には、バッジ、地図、そして茶色いバッグが入っていた。

「説明するよ。まず探検隊バッジ、これは探検隊の証だから、絶対になくさないでね。次に不思議な地図、各地のダンジョンの地図だよ。最後に探検隊バッグ、ダンジョンとかで拾った道具をしまえるよ。普通のバッグよりたくさん入るんだよ。」

便利なものがたくさんある。うまく使わなくちゃね！

「じゃあ、これから頑張ってね。リリース！」

「はい！頑張ろうねヒナタ！」

「うん！」

これからどうなるかなんてわからない。けれど、ヒナタ達は確実に
一歩を踏み出した。

第三話：ギルド入門（後書き）

ヒナタ

「今回は前みたいなへマやらなかった？」

一応は、でも文章が浮かばなくて……

ヒナタ

「頑張つてよ？応援してるから。」

ありがとう。……ところでカズキは？

ヒナタ

「寝てるわ。今度誘ってみようか？」

ではお願いします。それでは！

第四話：初めての依頼（前書き）

第四話完成です。

第四話：初めての依頼

昨日はペラップに部屋に案内され、すぐに眠ってしまった私達。窓から光が差し込んでくる。私は眠い目を擦りながら目を開けた。時刻は早朝。カズキはまだ寝ている。

私は基本早起きなので五時にはもう起きています。

……やっぱりフシギダネ……か。

今までのことは夢だった、なんて都合のいいことは無いようだ。しばらく感慨に耽っていると、スピーカーのような耳を持ち、大きな口が特徴のポケモン ドゴームがやってきた。

「すうー……起きろおおお！朝だぞおおお！」

「わあ！な、なんだ!?!」

突然の大きな声にカズキは飛び起きた。

私はとつさに耳を塞いだので大丈夫だったが、かなり大きな声らしく耳を押さえている。

「よし！起きたな。俺はドゴーム、弟子の一匹だ。

早くしないと朝礼に遅れるぞ！もし遅れたら親方の……たあーっ！が……とにかく！おまえらが遅れた所為で、こっちまでとばっちりを受けるのはゴメンだからな！」

ドゴームは言うだけ言うつとさっさと行ってしまった。

「うう……耳が痛い……。確か朝礼がどうとか言ってたような……ああ!?!まずい遅刻だ！ヒナタ急ごう!……ってあれ？」

「カズキ、早くしないと置いてくよ〜！」

私はひと足早く先に行っていた。

「あ、待ってよ〜！」

「遅いぞ新入り！」

昨日通った地下二階の広いスペースに弟子と思われるポケモン達が集まっていた。さっきのドゴームもいた。

「おだまり！お前の声はうるさいんだよ！」

「うっ……！すまねえ」

ペラップはみんなの前に立っている。朝礼の進行役のようだ。

「みんな揃ったな。よし ではこれから朝礼を行う。」

全員いるのを確認すると扉にむかって声をかけた。

「親方様 全員揃いました」

扉が開き、プクリンが出てきた。

「それでは親方様 朝の一言お願いします。」

へえ〜、いったいどんなものだろう？

「…………ぐう」

…………へ？

他の弟子達の囁きが聞こえてきた。

「ヒソヒソ（プクリン親方って凄いよな…。）」

「ザワザワ（ホントにそうだな…。）」

「ヒソヒソ（ああやって朝は起きてるように見える…。）」

「ザワザワ（実は目を開けたまま寝てるんだもんな…。）」

ええっ！？そんなのあり！？目を開けたまま寝るなんて！

「ありがたいお言葉、ありがとうございました。」

ペラッはさらっと片付けてしまった。いつもこんな調子なのか？

「それでは最後に 朝の誓いの言葉、始めっ！」

『ひとりっ！仕事は絶対さぼらない！』

『ふたーっ！脱走したらお仕置きだ！』

『みつっー！みんな笑顔で明るいギルド！』

「さあみんな 仕事に掛かるよ」

『おおーっ!』

弟子入り早々寝坊してしまったが、こうして私達の一日は始まった。

「……………そういえば、僕達は何をすればいいんだろうね?……………ってあれ?」

私はひと足早くペラップのところに行っていた。

「ペラップさん、私達は何をすればいいんですか?」

「お、さん付けとは感心感心 ではリリース、着いて来てくれ」

ペラップは梯子を登っていった。(と言うより飛んでいった。)

「カズキ、行くわよ!」

「ヒナタ行動が速いね……………」

「カズキが遅いんじゃないの?」

「そ、そんなあ……………」

へこんでいるカズキを引きずって、私達はペラップの後を追った。

上の階(地下一階)は昨日と同じく賑わっていた。

昨日はわからなかったが、ギルドの弟子以外のポケモンもいた。

「お前達には依頼をやってもらおう。」

「依頼？」

「ここに掲示板がある。ここに貼ってある紙はすべて依頼だ。好きな依頼を選んでその内容をこなせば依頼達成だ。まあ、お前達はまだ初心者だから、簡単なのを選んでやろう。」

そう言っただけで掲示板に貼ってある紙の中から一枚を選びだした。

「では読むぞ。」

咳払いを一つして読み始めた。

『初めまして、私バネブーと申します。

実は、私の大切な真珠が、悪者に奪われてしまったんです！真珠は私にとって命と同じぐらい大切なものなんです。

でも、最近近くの岩場に捨てられたって言う情報がありました。でも、私にそこに行く勇氣はありません。

探検隊の皆さん、どうかよろしくお願いします！』

「……………それってつまり……………ただの落とし物探しってこと？」

「まあ、そうなるな。」

「ええ、もっと凄いなことやらないの？お宝探したり、未知のダンジョンを探検したり……………」

「おだまり！」

文句を言うカズキに、ペラップが怒鳴った。

「お前達はまだ見習いだ！見習いには、こういう下積みが大切なんだよ！」

「でも……」

「カズキ、探険したいのはわかるけど、基礎をしつかりしないと、怪我するだけだよ？」

私も探険はしてみたいと思うが、今の私達のレベルじゃ未知のダンジョンどころか、海岸の洞窟ですら危ない。

「ヒナタがそこまで言うなら……わかったよ。」

「（素直で助かるな……）
ところでお前達、昨日話したことは覚えているか？」

「え？ええと……」

「最近各地で悪いポケモンが増えてるのは、時が狂い始めたのが原因なんでしょ？」

説明を聞いても、よく意味がわからなかったが、自分なりに考えて、時が正常に動かなくなった所為で、悪いポケモンや、我を失うポケモンが増えている、という結論を出した。

「その通り、ちゃんと聞いていたようだね。」

「バネブーの真珠は『湿った岩場』にあるらしい。気を付けて行けよ。」

「わかりました！」

私達は湿った岩場へと向かった。

「……やっぱり探険したかったな」

「だったらぐだぐだ言わないで、目の前のことに集中するのね。認められれば、きっと探険させてもらえるわよ。」

「……そうだね。よし、頑張ってバネブーの真珠を見つけよう！」

「おおー！」

湿った岩場というだけあって、襲ってくるポケモンは水タイプが多かった。

カズキは相性が悪いので、私が弱らせてから、カズキがとどめをさす、という方法で進んでいった。

しばらくそうやって進んでいると、行き止まりになった。どうやら奥地のようなのだ。

「ヒナタ、あれ！」

カズキが指差していたのは、中央にある噴水、そしてそこに、ピンク色の真珠があった。

「これがバネブーの真珠ね。」

「よし、持っていこう！」

真珠を見つけた私達は、ギルドへと帰って行った。

「ありがとうございます！私感激しました！」

ギルドに帰るとバネブーが待っていた。

「これはお礼です。受け取ってください！」

そう言って渡してきたのは、タウリン等の増強剤、そして更に……

「え！？20000ポケも!？」

ポケとはお金のことらしい。私には20000ポケが高いかはわからないが、カズキの驚き方を見ると結構な大金らしい。

「いいんですか？こんなに貰っちゃって。」

私は一応聞いてみた。

バネブーは笑顔で、

「真珠に比べたら安いものですよ。どうぞ受け取ってください。」

「あ、あの……ありがとうございます！」

感謝されるのってなんか慣れないな。でも、悪い気はしないわね！

「いえいえ、では。」

バネブーは笑顔で帰って行った。

「お前達、初めてにしてはよくやったな。それじゃあ……」ペラッ
ブは、お金の入った袋を取ると……

「はい、200ポケ。」

渡されたのは、十分の一のたった200ポケだった。

「え………な、なんで!?!」

「ほとんどはギルドの分だ。そこから差っ引いて、リリースには200ポケだ。」

「ええ〜!?!」

……流石にちょっと酷い気がした。それを口にするのではないが……

「仕方ないよ。それがこのギルドのルールなんだから。」

「納得できないー!」

しかし反論できるはずもなく、カズキの悔しそうな声が、虚しく響いていた。

第四話：初めての依頼（後書き）

ヒナタ

「カズキ連れてきたわよ。」

カズキ

「ねえねえ、僕の出番もっと増やしてよ。」

いきなりそれですか？まあカズキの努力次第ですね。

カズキ

「よし！頑張るぞ〜」

ヒナタ

「じゃあ特訓ね。」

カズキ

「へ？」

ヒナタ

「私が見つちり鍛えてあげる。」

カズキ

「え、ちよ……！助けて〜！」

カズキ………幸運を祈ります。

それでは！

第五話・時空の叫び（前書き）

第五話完成です。

第五話：時空の叫び

『みつつー！みんな笑顔で明るいギルド！』

「さあみんな 仕事に掛かるよ」

『おおー！』

早朝、昨日と同じくドゴームが起こしに来た。

私はまた聞かなかったが、できればこのまま聞かずにいきたくった。昨日と同じように朝礼をすませ、ギルドのみんなは散り始めた。

「僕達は何をすれば……つてあれ？」

またカズキは出遅れた。

「ペラップさん、今日も依頼ですか？」

「いや、今日は別のことをやってもらう。着いて来てくれ。」

ペラップは上に上がって行った。

「行くわよ！カズキ。」

「ついていけない……」

またへこんでいるカズキを引きずって、地下一階に向かった。

ペラップは昨日と違う掲示板の前で待っていた。

「今日はお尋ね者を退治してもらおう。」

「お尋ね者？」

「こいつらの事だ。」

そう言っつて、後ろにある掲示板を叩いた。

昨日の掲示板と違い、いろんなポケモンの絵が貼ってあった。

「こいつらはみんな、何らかの悪事を働いた奴だ。」

それゆえ、懸賞金が掛かっつていて、捕まえればそれが貰えるんだが……最近悪いポケモンが多いからね、手を焼いてるんだよ。」

「ち、ちよつと待っつて！つまり僕達にそんな悪者と戦えっつていうの！？」

「そんなに慌てるな。悪党っつて言っつても、ピンからキリまで様々だ。いきなりSランククラスの奴を倒せなんて、そんな無理言わないさ。」

「で、でも悪い奴には変わらないんだよね？」

カズキは少し震えている。

しかし、いくら何でも、道具の一つくらいは必要だと思っつが……

「まあ準備は必要だな。」

「おーい、ビッパ！」

ペラップが呼ぶと下から一匹のポケモンがやってきた。

「なんでゲスか？」

「ビツパ、こいつらの事は知ってるな？新しく入った新入りだ。こいつらにタウンを案内してやってくれ」

「了解でゲス！」

ビツパは笑顔で承諾した。

彼は私達の一つ先輩だ。応ギルドのメンバーには自己紹介してもらったが、こうして話すのは初めてだ。

ペラップは「頼んだぞ」と言っただけで去っていった。

……あれ？ビツパ震えてる？と言うか泣いてる！？

「せ、先輩！？どうしたんですか？」

ちょっと動揺して声をかける。

私何かしたかな……

「ぐすつ……気にしないでくれでゲス……ただ、やっとあっしにも後輩ができたと思うと、嬉しくてつい涙が……」

なるほど、つまり私達が入るまでは、ビツパが新人だったってことか。

でも、後輩ができるってそんなに泣けるものなのだろうか？よくわからない……

「……さあ、それじゃあトレジャータウンを案内するでゲスよ！」

私達はトレジャータウンに向かった。

「……とまあ大体こんな感じでゲス。

じゃあ準備ができたならギルドに戻って来てくれでゲス。」

ギルドを出てすぐの交差点を右（ギルドを背にして）に曲がると、そこにトレジャータウンがある。

たくさんのお店とたくさんのお店が賑わっていた。

ビツパの説明はわかりやすく、すぐに覚えることができた。

「ありがとうございます先輩。とてもわかりやすかったです！」

「そ、そんなお礼を言われるほどじゃないでゲスよ……」

「でも、ビツパの説明本当にわかりやすかったよ！」

…関係ないけど、カズキって先輩のこと呼び捨てなんだね。

普通目上の人と話す時って、敬語を使わないだろうか？私だけ？

「あ、あつしはギルドに戻ってるでゲス！」

ビツパは顔を赤くして、走ってギルドに戻っていった。

そんな先輩の様子に、ついくすくすと笑ってしまった。

「可愛い先輩……」

「ヒナタ、カクレオンのお店に行ってみない？」

「うん。でもその前に倉庫に寄っていい?」

「え? いいけど……なんで?」

「せっかくバネブーさんに道具貰ったんだし、使わなきゃ損でしょ?」

ギルドのルールで、お金は十分の一になってしまつが、道具はそのまま貰えるのだ。貰った道具は、倉庫に送られる仕組みになっている。

「わかつた。じゃあ行こうか。」

倉庫といったが、正確には預かりどころだ。店主はガルーラ、この辺ではガルーラおばさんと呼ばれているらしい。

「こんにちは。」

「こんにちは。……見ない顔だね?」

「一昨日探検隊になつたばかりなんだ。」

「そうかい、頑張つてね。何か大切なものがあればおばちゃん所に預けてね! しっかり管理してあげるから。」

笑顔で言うガルーラ。

ガルーラに預けた道具は、絶対に無くならないと評判なのだ。

「機会があれば使わせてもらいます。ところで、道具を引き出した
いんですけど…」

「わかったよ。」

私は倉庫から、タウリン、リゾチウム、ブロムヘキシンを引き出した。

「また来ておくれ。」

「はい。じゃあまた。」

私達は倉庫を後にした。

「じゃあさっそく、はいカズキ。」

私はカズキにビンを二本手渡した。

「これは何？」

「リゾチウムとブロムヘキシン。それぞれ特攻（特殊攻撃力）と防御を上げてくれるわ。」

「へえ、詳しいね。」

「ビンの裏に書いてあるでしょ！…まあとにかく飲みましょ？」

「うん。」

私はタウリンを飲んだ。

味は……スポーツドリンクみたいな感じね。

「じゃあ飲んだことだし、カクレオンのお店に行きましようか！」

私達は、倉庫の隣にあるお店に向かった。

「いらっしやい！ようこそカクレオン商店へ！」

店の店主はカクレオンが二匹。

一匹は普通のカクレオンだが、もう一匹は色違いのカクレオンだった。

ビッパによれば、この二匹は兄弟なんだとか。

「何買っつ？」

「え〜と……とりあえず食料の林檎かな。林檎ください。」

「毎度あり！……そういえば貴方たち初めて見ますね？」

「（またか……）一昨日探検隊になったばかりなんです。」

「そうですかー。頑張ってくださいね！ちなみにチーム名は？」

「リリーフです。」

「リリーフですか、いいチーム名ですね。

どうぞ、林檎です。」

「ありがとうございます。」

その後、せっかくなので道具の効果とかを教えてもらっていると、二匹のポケモンが近寄ってきた。

「お、マリル君にルリリちゃん。」

カクレオン達はこの二匹を知っているようだ。それにしても…可愛い〜！

「カクレオンさん、林檎二つください！」

「毎度あり！はいどうぞ。」

カクレオンは林檎の入った紙袋を渡した。

「ありがとうございます。ルリリ、帰ろう。」

「うん！」

二匹は仲良く帰って行った。

「あの二匹のお母さんは病気でね。よく兄妹で買い物に来るんですよ。まだ幼いのに、親思いの優しい子達ですよ。」

そうだったのか……。

私にも兄妹って居たのかな？

「カクレオンさん！」

そんなことを考えていると二匹が戻ってきた。

「林檎が一つ多いです!」

「わたし達こんなに買ってません!」

それを言いになぎなぎ戻ってきたのか。

「ああ、それはおまけだよ。仲良く分けて食べるんだよ。」

「本当ですか!?!」

「わーい!ありがとうカクレオンさん!」

二匹は笑顔で帰って行った。

「ふふ。可愛いねあの二匹。」

「そうね。……私達も行くか?」

「そうだね。」

私達はカクレオン商店を後にした。

「あ、ヒナタ。マリル達がいるよ。」

カクレオン商店を出てすぐ。町の広場に先程の二匹がいた。

「おーい!マリル君、ルリリちゃん!」

「あ、さっきの…」

「僕はカズキ。こっちはヒナタ。よろしくね。それで、どうしたの？」

簡単な自己紹介の後に、カズキが問い掛ける。

「実はぼく達前に落とし物をしてしまって、探してたんですが、このスリープさんが、それならどこかで見ることがあるって言ったんです！」

「それで一緒に探してくれるって！」

「そっかあ！よかったね！」

「それじゃあさっそく探しに行きましょうか。」

「はい！」

スリープに着いていく二匹。可愛い〜！

どん！

「おっと、これは失礼。」

偶然スリープとぶつかってしまっ。その時！

「っ！？（め、目眩？）」

キーン！

《言うことを聞かないと、痛い目に合わせるぞ！》

《た、助けて！！》

シュピン！

頭の中に直接声が響き、映像まで見えた。い、今のは…一体…スリープがルリリちゃんを襲っていた？

「スリープっていいポケモンだね。最近は悪いポケモンも増えるのに…。」

「…ヒナタ？どうしたの？顔色悪いよ？」

「大丈夫…。それよりルリリちゃんを助けなきゃ！」

「え？どうして？」

私は目眩で見たことを話した。カズキは訝しげに私を見る。

「ヒナタ、疑ってる訳じゃないけどさ。でも…スリープは悪いポケモンには見えなかったし…。」
きつとヒナタ疲れてるんだよ。」

疲れてるのかな……
確かに夜は技の練習とかいろいろしてるから、あんまり寝てないけど……。

「……とりあえず、ギルドに戻ろう。」

私は不安でいっぱいだった。

「お、準備できたでゲスか？」

「うん！」

ビツパは掲示板の前で待っていた。

「それじゃあ選ぶでゲス。ここは一つ、先輩のあつしが選んであげるでゲス！」

後輩ができたのが嬉しいのか、ビツパは張り切っている。

「あんまり怖そうなの選ばないでね？」

「わかってるでゲスよ。さてどれに……ん？どうしたでゲスか？カズキ。」

カズキは、掲示板を見て震えていた。

「ヒナタ、あれ……」

「え？……！？」

掲示板には、先程マリル達と一緒にいた、スリーブが載っていた。

「アイツお尋ね者だったんだ！！ルリリが危ない！行こうヒナタ！」

「うん！」

「え？え？急にどうしたんでゲスか！？」

後ろでビツパの驚きの声が聞こえたが、それどころではない。
やっぱりあの夢は本当だった！

ギルドを出て交差点に着く。
マリルはそこにいた。

「マリル！」

「ヒナタさん、カズキさん！！！」

「大丈夫？ルリリは！？」

「そ、それがスリーブさんがルリリを連れて行っちゃって……」

「二匹はどこへ！？」

「じ、こっちですー！」

私達は走りだした。
行き先は……『トゲトゲ山』！

第五話：時空の叫び（後書き）

ヒナタ

「8月の初め姿を見なかったけど、どこ行ってたの？」

部活で合宿に行っていました。一日目から手怪我してほとんど練習できなかつたけど……。

カズキ

「作者さんも大変だね。」

カズキも特訓どうでしたか？

カズキ

「まあ、少しは強くなったかな。」

そうですね。では次回にその成果を見てみましょうか。

カズキ

「頑張るよ!」

第六話・お尋ね者を探まえる！(前書き)

第六話完成です。

第六話：お尋ね者を捕まえる！

私達は走っていた。頂上に向けひたすらに。

「ヒナタ！なんで頂上ってわかるの？」

「私が見た場所は、広くて行き止まりだった。山でその条件に当てはまる場所って行ったら、頂上しかないでしょ！」

普段は慎重な私でも、今日ばかりは無鉄砲だった。

襲い来る敵は力でねじ伏せ、全速力で進んでいった。しばらく進むと頂上に着いた。

そこには夢と同じくスリープとルリリちゃんがいた。

「言うことを聞かないと、痛い目に合わせるぞ！」

「た、助けて！！！」

夢とまったく同じだった。

私は飛び出した。

「スリープ！！！」

「！？お前ら……どうしてここに！？」

「お尋ね者スリープ！僕達は探検隊リリースだ！ルリリちゃんを放せ！！！」

「探検隊だと！？」

くそっ……ん？お前、震えてんのか？」

見ると、カズキは少し震えていた。心なしか私の後ろに隠れてるようにも見える。

「なるほど、お前ら探検隊って言っても、なつたばかりなんだな？
今までいろんな探検隊を見てきたが、こんなに弱そうな探検隊は初めてだ。」

スリープは馬鹿にするような感じで言ってきた。

カズキは凶星を突かれ一歩下がる。

私はカズキに耳打ちした。カズキは小さく頷く。
それじゃあ、作戦開始！

「貴方程式、私一人で十分よ！」

「なんだとテメエ！」

よし！挑発に乗ってきた！

「食らえ！念力！」

「うわっ！」

なんとか紙一重でかわした。

あれに当たったなら、私効果抜群だよね？

「はっばカッター！」

しかし回避されてしまう。

「特性『予知夢』のオレに、攻撃を当てられると思うなよ！頭突き！」

掛かった！

私はギリギリまで引き付け、つるのムチで投げ飛ばした。相手の力を利用したので、思ったとおりに飛んでくれた。落ちるポイントにはカズキが用意した“特別な煙幕”が張ってある。

「ゲホ！ゲホ！煙幕か？」

「カズキ、今よ！！！」

「うん！火の粉！」

小さな炎が煙幕に触れた。次の瞬間！

ドッカーーーーン！！！！

煙幕が爆発し、炎に包まれた！
しばらくして煙が晴れると、黒焦げになってのびているスリープがいた。

「ルリリちゃん大丈夫！？」

「は、はい……」

とりあえずスリープはほうっておいて、隅で怯えていたルリリに近づく。

ルリリは少し泣いていた。

「よかつた〜！思ったより大きな爆発だったから、怪我してないかって心配だったのよ。」

「でもヒナタ。なんで煙幕が爆発したの？」

「粉塵爆発の応用よ。それより早く戻りましょ？マリルが待ってるわ。」

「そうだね。あ、スリープはどうしよう……」

「こんなでっかいの運べるかな……？」

「こいつ重すぎ……」

なんとか頑張つて入り口まで来たけど……、すごい重い。我ながら、よくこんな重い投げ飛ばせたなと思う。

「…あれ？誰か来るよ？」

カズキがさす方向には、コイル二匹を引きつれた、見慣れないポケモンがいた。

「初メマシテ。私ハ‘ジバコイル’ト申シマス。コノ地域ノ保安官ヲ勤メサセテモラツテイマス。ドウゾヨロシクオ願イシマス。」

「よ、よろしく……」

「今日八、才尋ネ者ノスリーブヲ捕マエテイタダキ、感謝シマス！
ホラ、行クゾ！」

コイルがスリーブを連れていく。
いつの間にか気付いていたようだ。

「トホホ……」

「デハ。」

ジバコイル達は一礼して帰って行った。

「さて！私達も行きましょうか。」

歩きだそうとした時。

「ルリリ〜！！」

「お兄ちゃん！？」

やってきたのは、マリルだった！

「お兄ちゃん……お兄ちゃん！うわぁー……ん……」

マリルを見て安心したのか、泣き出してしまった。

「ルリリ！怪我はないか！？」

「大丈夫。どこも怪我してないわ。」

「ホントですか！？よかった……」

マリルはルリリを抱きしめる。

すごく心配だったんだろうな……泣いた跡があるよ。

「ヒナタさん、カズキさん。ありがとうございます！ほら、ルリリも。」

「ぐすっ……うん。ありがとう！」

泣いたせいで少し腫れている目で、お辞儀をする二匹。

「じゃあ、帰りましょうか。早く帰らないと、お母さんが心配するよ！」

「はい！」

私達はトレジャータウンに帰って行った。

あれから私達は、マリル達を家に送った後、ギルドに戻ってこのことを報告した。

さすが情報屋と言うべきか、ペラップはもうこのことを知っていた。

「よくやったなお前達、ジバコイル保安官よりお礼の言葉をもらったぞ。」

今回の報酬だ、受け取れ。」

私達は300ポケを貰った。

「え…これだけ？」

「カズキ、ギルドのルールを忘れたの？」

「納得できない〜！」

喚くカズキをなだめ、私達は夕飯を食べると、自分達の部屋に向かった。

「あんなに頑張ったのに…」

「……ふふつ。」

まだぶつぶつと文句を言うカズキに、思わず笑いが漏れる。

「ところでヒナタ。粉塵爆発って何？凄いや爆発だったけど…」

「あの煙幕は灰で作ってたでしょ？あの灰には石炭が細かくして混ぜてあったの。」

空气中に可燃物が粉末状である時、火を点けると爆発が起こるのよ。これを粉塵爆発って言うの。」

「へ、へえー……」

全然意味わかってないみたいね……

「でも無茶だったんじゃない？もし巻き込まれたら……」

「仕方なかったのよ。予知夢のせいで攻撃は当たらないと思ったし、たとえ当たっても今の私達の力じゃ、到底かなわないと思ったから…」

足りない力は知恵でカバーするしかない。リリーのリーダーとして私がしっかりしなくちゃ！

「まあ、勝ったからいいよね！でもヒナタ。あんまり無茶しないでね？」

「ふふ、ありがとカズキ。」

カズキが居てくれなかったら、今の私はいない。心配してくれる君が居てこそこの私なんだよ？

第六話：お尋ね者を捕まえる！（後書き）

ヒナタ

「今回はややこしいのが出たね。」

カズキ

「うん。粉塵爆発だっけ……」

ちよつと強引かなって思ったけど、使ってみました。ちゃんと性質とか調べましたよ！

ヒナタ

「まあそれはいいとして、最初の方に出てきた、あの謎のチームはいつ出るの？」

結構後ですね。

話は変わりますが、次回はキャラ紹介にしたいと思います。それでは！

第七話・見張り番（前書き）

第七話完成です。

第七話：見張り番

「お前達！今日はこっちを手伝ってくれ！」

スリープを捕まえてから三日、いつものように朝礼を済ませた私達は、ドゴームに呼ばれた。

連れてこられたのは、食堂の前にある、よくドゴームがいる穴だった。

「お前達には見張り番をやってもらう。」

「見張り番？」

「ギルドに来るポケモンの足形を見て、どんなポケモンが来たか判断する、あれですね？」

私達が初めて来た時も、足形を鑑定されたっけ…

「そつだ、デイグダ！」

「はい。今日は少し用が出来てしまって、今日一日僕の代わりに見張り番をしてほしいんです。」

「すみませんがよろしくお願いします。では。」

デイグダは土の中に入って行った。

「そういう事だ。」

この穴に入って、光が差し込んでるところまで進め。

…いいな？」

「エエッ!？」

私は、蛙が潰れたような声を出してしまった。

「?どうした？」

「い、いえ……なんでも……」

私は苦笑いを浮かべる。

だ、だってこの穴……暗い。怖い。

「か、カズキ先行って!」

「え?うん。……ヒナタ大丈夫？」

「大丈夫!……ではないかも……」

もうわかると思うが、私は暗闇が大の苦手なのだ。

カズキに心配されつつ、穴の中に入った。

中は暗かったが、カズキの背中の炎のおかげで、問題なく進めた。しばらく進むと光が見えてきた。

「……着いた？」

「……みたいだね。」

私は大声でドゴームに着いたことを知らせた。

「よし！じゃあ、ちゃんとやれよ！」

倍の音量で返ってきた。

この仕事ドゴームに向いてるかもね。

さて！頑張りますか！

「足形発見！足形発見！」

「誰の足形？誰の足形？」

「足形は……………」

「足形はベイリーフ！足形はベイリーフ！」

仕事を始めて数時間が経った。

ギルドには意外にたくさんポケモンが来た。

「ヒナタ、大丈夫？」

「ダイジョウブ……………多分。」

凄いしんどい…………

カズキは、足形を見てもほとんどわからない、声を出しても聞こえない、っていう状況なので、私が一人でやってるに等しい。

おかげで首は疲れるし、喉は痛いしさんざんだ。

「来客終了 来客終了」

「おーい！今日はありがとう！戻ってこーい！」

「はーい！」

やっと終わった……

「ご苦労だったなあ前達

……ヒナタは大丈夫か？」

「ダ、ダイジヨブ、デス……」

「……」

私は声が擦れて、とても大丈夫とは言えない状態だった。

「……チリーンに頼んでおくから、後で治療室に行きなさい。」

「ハイ……」

「さて、今回の報酬だが……今日は一回も間違えなかったからな、500ポケとカテキン、さらに幸せの種、命の種をやるう。」

「今度もこの調子で頑張ってくれ。」

「今度もか……出来ればもうやりたくないが……」

「いつもより多い報酬に喜びもそこそこに、私は治療室に向かった。」

「ありがとうございます、チリーン先輩。だいぶ楽になりました！」

「いえいえ、これも私の役目ですから」

「いい人だな〜！（ポケモンだけど…）
尊敬しちゃう！」

「ヒナタさん。もうすぐ夕飯なので、このまま食堂に行ってくださいね。」

「わかりました。」

私は食堂に向かった。

「あ〜美味しかった。ね、ヒナタ！」

「うん。」

夕飯を食べ、部屋に戻ってきた私達。喉の痛みは完全に引き、普通に喋れるようになっていた。

カズキとたわいもない話をしていると、窓の外が突然光った。

ごろごろ……

外を見てみると、雨が降り、雷が鳴っていた。

「嵐か……」

「……………そういえば、ヒナタと出会う前の日も、こんな嵐だったっけ。」

「どお？何か思い出せそう？」

「（そんな簡単に思い出せるわけないでしょ……）
うん……だめ、思い出せない……」

「やっぱりそう簡単にはいかないか。まあ、ゆっくり思い出せばいいよ。」

優しく微笑むカズキ。

心配してくれる人がいるのは、とても嬉しい事だ。

「ところでカズキ。聞きたい事があるの。」

「何？」

「これまでいろいろなポケモンと戦ったりしたけど、彼らが襲ってくる理由は、“時が狂い始めた”のが影響してるって、前にペラッブが言ってたよね？」

「うん。」

「私なりに時が正常に動かなくなったから、って考えたんだけど、わからないのは、どうしてそうだったか、なのよ。」

カズキはこの答え、わかる？」

私の真剣な問いに、カズキは少し黙ると話し始めた。

「なぜ狂い始めてるのは僕もよく知らないけど、みんなが言うには“時の歯車”が影響してるんじゃないかって言われてるよ。」

「時の齒車」？」

「うん。“時の齒車”は、森の中とか湖といったようにいろんな場所にあつて、その地域の時間を守つてると言われてるんだ。」

そう、なんだ……

「時が狂い始めたのは…多分“時の齒車”に何らかの異常が起こつたんじゃないか、つて思つてるんだ。」

“時の齒車”、その地域の時間を守る、この世界の秘宝。

「…話が長くなつちやつたね。もう寝よう。」

おやすみ、ヒナタ。」

「おやすみ、カズキ。」

部屋の明かりを消して眠りにつく。

“時の齒車”。その名を聞いたとき、少しドキドキしたのは、気のせいだろうか？

ある森に、一つの影が走つていた。

嵐の夜だというのに、気にも止めず、森の中を疾走していた。

「…初めて見るが、これがそうなのか……」

まずは……「一つ目!!」

影は、全速力で駆けていった。

第七話・見張り番（後書き）

ヒナタ

「見張り番。大変だったなあ。」

お疲れ様です。

ところで、カズキから質問を預かってます。

ヒナタ

「何？」

『スリープの時の灰とか石炭とか、どうやって手に入れたの？』
だそうです。

ヒナタ

「ああ、あれはギルドの篝火から、ちよっとね。」

そんなところから！？本当に夜なにやってるの？

ヒナタ

「修業。」

そ、そうですか……

第八話：初めての探険（前書き）

第八話完成です。

第八話：初めての探険

翌日。

空は昨日の嵐が嘘のように晴れ渡っていた。

いつものように朝礼を終え、みんなが仕事に掛かるうとしたとき、ペラップがみんなを引き止めた。

「えー……みんなに伝える事がある。

ここから北東に行ったところに『キザキの森』という森があるのだが……その森の時の歯車が、何者かに盗まれてしまったらしい。」

……………え？

周りがざわめいた。

「一体……誰がそんなことを？」

振り絞るようにヘイガニが言った。

「わからない。

だが、キザキの森は、時が止まってしまったらしい。」

「時が、止まった、だと!？」

みんな驚きを隠せない。

ペラップは、静かに話している。

「時が止まったキザキの森は……風も吹かず……雲も動かず……葉っぱについた水滴すら落ちない……」

いつもは騒がしくらいなのに、今はとても静かだった。

「既にジバコイル保安官が、調査に乗り出している。不審な者がいたら、知らせてほしいとのことだ。

伝える事は以上だ。

それじゃあみんな 仕事に掛かれ」

『おおーっ!!』

時の歯車を盗んで、一体何をするつもりなんだろうっ？

「ああ、お前達。ちょっと来い。」

思索していると、ペラップに呼ばれた。
何だろう？

「お前達、ギルドにもだいたい慣れたな。特にこの前のスリープの件は見事だったぞ
そこでリリーフ、今日はお前達に、初の探検隊らしい仕事をやってもらおう」

「ホント！？やったあ!!」

驚き、そして嬉しさに声を上げたのは、臆病だけど探検好きの力ズキだった。

「ヒナタ、地図を出してくれ。」

「はい。」

私は地図を広げた。

ペラップは翼である場所を示した。

そこは地図で見るかぎり、何の変哲もないただの滝だった。

「この滝は一見普通に見えるのだが、実は何か秘密があるのではないか、という情報が入った。

そこで、お前達にこの滝を調査してほしいのだ。

目的はわかったな？」

「はい！」

「よし それじゃあ頑張ってくれ

……おや？どうしたカズキ？震えてるのかい？」

「……………」

見るとカズキは、身体を震わせ、涙まで流していた。

「だ、大丈夫かい？」

「……………うん、大丈夫。武者震いだよ。僕、初めて探検隊の仕事が出来るんで……………感動してたんだ……………」

うう……………僕、なんか凄くワクワクしてきたよ！

ヒナタ！頑張ろうね！！」

「え、あ、うん……………」

完全に自分の世界に入ってるよ……………ま、わからなくも無いけどね。

「ここが、ペラップに言われた滝よね？」

カズキを自分の世界から連れ戻して、さっそく滝を調べに来た。

「その筈だよ。でも周りには何も……イタツ!？」

「?!大丈夫カズキ!？」

「う、うん。でも、あの滝凄いよ。近づくだけで吹き飛ばされそう……。
ヒナタも気を付けて。」

「うん……、っ!？」

バシユツ!!

カズキの言うとおり、吹き飛ばされてしまった。

「(凄い勢い、ちょっと触っただけなのに……)
これじゃあ迂闊に近付けない……っ!？」

ぐわん……

「(め、目眩?ま、た……)」

キーン!

見えたのは一匹のシルエツト。
そのシルエツトは、この場所において数歩下がったと思うと、滝に突っ込んで行った！

滝の中は洞窟になっていて、シルエツトはそのまま進んで行った。

シュピン！

そこで映像が途切れた。

あのシルエツト、もしかして…。

「ヒナタ、どうしたの？」

私は目眩のことを話した。

前の事もあり、今回はすぐに信用してくれた。

「なるほど……それで、ヒナタはどうしたいの？
やっぱり行ってみたい？」

「うん……」

あの目眩が本当なら、確かに行ってみたい。

でも、もし滝の裏がただの壁だったら……私達は滝壺に真っ逆さまだ。怪我だけじゃ済まないかもしれない。

でも、行動を起こさなければ、何も変わらない。

ちょっと危険でも、ここは！

「……行く。ここにいっても意味ないし……初めての探険をここで終わらせたくないしね！」

「……そっか。うん、わかった！
ちよっと……いや、かなり怖いけど、勇気を出して行ってみよう！
あの滝の中へ！！」

「カズキ……。ありがとう！」

私達は数歩下がる。

「カズキ、あの滝は勢いが凄い強い。思い切り行かなきゃ突破できない。

本気で行こう！」

「うん！」

(怖いけど、ヒナタもいるんだ！勇気を出さなきゃ！！！)

「行くよ……。3、2、1……。それ！」

滝の中へ突っ込んで行った。

「うわぁー！！」

「ぐろぐろぐろ……。どかつ！」

「痛ア……。鼻打った……」

「びびびび……。どいつ？」

見回してみると、目眩で見たあの洞窟だった。

「洞窟？じゃあ、やっぱりヒナタは正しかったんだ！やったあ！！」

「カズキ、信じてなかったの？」

「え？そ、そんな事ないよ！さ、早く行こ！」

「（流された……）」

私達は洞窟の奥へ進んで行った。

…それにしても、目眩で見たあのシルエット……。

あれは……いや、カズキには黙っておこう。

シルエットが誰なのかは……

洞窟の中は、滝の裏からか水タイプが多かった。

カズキは相性が悪いので、湿った岩場と同じ要領で進んで行った。

しかし、湿った岩場より階数が多く、少し苦戦したが……

しばらく進むと行き止まりになった。

しかし、周りには大きさまざまたくさんの宝石があった。

「うわあ〜！凄いね！！」

「うん！…あつ、あそこに大きな宝石があるよ！」

カズキがさす方向には、とても大きい宝石が壁に埋め込まれていた。

「こんな大きな宝石見たことないよ！！」

「ホント！凄いお宝ね！！」

普段冷静な私でも、さすがにテンションが上がった。

「これ持って帰ったら、みんな驚くだろうね！」

カズキは宝石を引き抜こうとした。

「う~~~~ん！う~~~~ん！」

「頑張つて、カズキ！」

カズキは思い切り引き抜こうとするが、ビクともしなかった。

「はあはあ……。」

駄目だあ……。ヒナタ、バトンタッチ。」

「えっ、わ、私!?!」

のカズキが抜けないのに、の私が抜けるわけ無いでしょ!と思
ったが、やらないよりはマシか、と思い、宝石にツルを巻き付けて
引き抜こうとした。

「（ぐっ……か、硬い！全然動かない！）

はあはあ……。無理、動かない……。」

「ヒナタでも駄目かあ……」

……いや、諦めなければなんとかなるよ！もう一回やってみるね！」

カズキは、また引き抜こうとし始めた。

「（頑張るねえ。でも、全然動かないよね……っ!?!）」
ぐわん……

「う……（これは……あの目眩?）」

キーーン!

見えた映像は、先程のシルエットだった。

シルエットは宝石を見つけると、引き抜こうとした。しかし抜けない。

するとシルエットは何を思ったか、宝石を押しした。

カチッ!

そんな音がした。しかし何も起こらない。

ところが、突然地響きが起こった。そして同時に、津波が押し寄せてきた!

シルエットは逃げようとしたが、逃げ切れずに流されてしまった。

シュピン!

今のは……罨!?

「う……ん!

だあーもう!引いて駄目なら、押してみる!」

カチツ！

カズキは苛立つて宝石を押しした。……って！

「カズキ！それ押しちゃったの！？」

「えっ？駄目だった？」

地響きが始まった。

「え？ええ？」

カズキはまだ状況がわかっていないようだ。

「逃げるわよカズキ！！」

「な、なんで？！」

「説明してる暇はなーーーーい！！！！」

そんな事をしてるうちに津波が来てしまった。

「津波イイイイ！！？」

「うわあああっ！！？」

私達は、津波に呑み込まれてしまった。

津波に吞まれ少しすると、上に吹き上げられた。

「落ちる〜!!」

バシャーーン!

うう……あれ? 温かい?

「ここは、一体……?」

「ちよつと貴方達大丈夫? 貴方達上から降ってきたのよ? もうビツクリしたわよ!」

降ってきた? 私達が?

……ああ、そうだ!

私達津波に流されて……噴き上げられたんだっけ……

「ここは、どこ?」

「ここは温泉よ。」

「温泉!?!」

「そう。ここは温泉じゃ。」

後ろから声が聞こえた。

振り返ってみると、ゆっくりとした足取りで一匹のポケモンがやってきた。

「この温泉は肩凝りなんかによく効くでの、たくさんのお客さんが訪れるんじゃない。」

「コータスさんは、トレジャータウンの長老さんなんだよ。」

近くにいたヒメグマが言った。

よく見ると、トレジャータウンにいる、ヒメグマやリングマがいる。

「ほっほっほ！気軽に呼んでくれてかまわんよ。」

お主達、地図は持っておるか？」

「え、ええ。あります。」

私はバックから地図を取り出した。

「ほれ、ここが温泉じゃ。」

トレジャータウンから見て東南東、滝から見て南東の場所。そこに温泉があった。

「ここ！？相当流されちゃったね、僕達……」

「なんと！お主達、そんなところから流されてきたのか！？大変じゃったのう……、ここでゆっくり休んでいきなされ。」

「ありがとう。そうするよ。」

「仕事中、とも思ったが……いいよね！」

私達は、しばらく温泉に浸かっていく事にした。

ゆっくりと温泉に浸かった私達は、ギルドに戻りペラップに報告した。

「フムフム……なるほど。」

つまり、滝の裏には実は洞窟があって、その奥には大きな宝石があり、そこを押すと罫が作動して、なんと温泉まで流された……
と言う事!？」

「はい。」

「残念ながら、宝石は取ってこれなかったけどね……」

悔しそうに言うカズキ。

正直私も悔しい。

初めてだったから、と自分を立て直そうとしても、目の前に宝があったのに……何も持って帰れなかったんだから……。

「いやいやいやいやいや!! そんな事ないよ!

これは大発見だよ!!」

「え……」

「ホント!？」

大発見なわけない。プクリンから聞いてないの？

「ホントだ だって、あそこの滝の裏が洞窟だったなんて、今まで誰も知らなかったんだからな」

あの時見たシルエット……。

あれは、間違いなくプクリンだった。

ということは、ペラップは聞かされてないのか？
言うべきだろうか？

「そっかあ！発見かあ！！」

「いや、ホントに凄い発見だよ！

早く親方様に知らせなくては」

「あ、あの……」

「ん？どうした、ヒナタ？」

「い、いえ！なんでも……」

「？そっか。」

言わないでおこう。

カズキをガツカリさせたくないし……。

ずっと笑顔でいてほしいから！

その後私達は、夕飯を食べ、部屋に戻った。

「（今日は疲れたなあ……早めに寝よう……）」

「今日はいろんなことがあったね。」

窓から星を眺めながらカズキが言った。

「でも、探険できて凄く楽しかったよ！」

そりゃあ、少しはガツカリしたけどさ……初めての探険で、ホントにワクワクしたんだ！

やっぱり探検隊になってよかったって思うよ！」

カズキは、視線を外から私に移し、笑った。

私も連られて笑ってしまふ。

カズキは、遺跡の欠片を取り出し、前に置いた。

「そしていつかは、この遺跡の欠片の謎を解く。それが僕の夢なんだ。」

もし本当に夢が叶ったら……僕、もう嬉し過ぎて死んじゃうかもね！」

「死んじゃうなんて大袈裟ね〜！」

「ハハハハハハ！！！」

「ふふふっ！」

「……でも、ありがとう。」

「え？」

「こうして探険が出来るのも、ヒナタのおかげだよ。」

本当にありがとうね！」

カズキ……ありがとうは、こっちの台詞だよ。
記憶をなくして倒れていた私を、何者かもわからないのに助け
てくれた。

「こっちこそありがとう。」

「え？」

「ううん、なんでもない。

今日はもう寝ましょ？」

外はもうすっかり暗くなっていた。

「そうだね。おやすみヒナタ。」

「おやすみ。」

これからも、ずっとカズキと一緒にいたい、なんていうのは、
過ぎた願いだろっか？

ある森の中で、三匹のポケモンが話していた。

「情報ありがとう。」

僕達のために裏切るような行為をさせて、すみません。」

「気にするな。命の恩人のお前達がすることだ。いくらでも協力するぜ！」

「ありがと。またね。」

三匹は、手短かに話すとすぐにその場から離れた。

「次の満月が勝負だ！」

第八話：初めての探険（後書き）

ヒナタ

「探険楽しかったわね！」

カズキ

「うん！でも、宝石を取れなかったのは残念……」

そんなに落ち込まないで、楽しかったんでしょ？

カズキ

「まあね。」

ヒナタ

「それより、最後のあれ、何？」

いずれわかります。もう少し待ってください。
それでは！

第九話：遠征への期待（前書き）

第九話完成です。

第九話：遠征への期待

「起きろおおおお！朝だぞおおおお！」

朝早くから、ドゴームの大声が響く。

こんな鼓膜が破れるほどの大声を毎日聞いてて、カズキの耳は大丈夫だろうか？

「うう……おはようヒナタ。」

「おはよう。相変わらず、朝は苦手みたいね。」

目がぐるぐるになってふらふらのカズキ。

私みたいに早起きすれば、ドゴームの声を聞かなくても済むのに……

「朝礼に行かなくちゃ……、行こう……ってあれ？」

「カズキ……いい加減に学習しようよ……」

いつもこんな調子だ。

でも、そんなカズキが、嫌いじゃないんだよね。

「みんな、朝礼の前に言うことがある。」

みんな揃ったところで、ペラップは話しだした。

「え………と言う訳で、その遙か南東にあるその湖には、今だに

未知の部分が多く残り、それらを解明すべく、我がギルドもしばらくぶりに遠征に繰り出そうと考えている」

その言葉に、弟子達はおおいに盛り上がった。

「遠征なんて久しぶりですわ！」

「あっしも行ってみたいでゲス！」

「静かに！」

遠征は数日後だ。その数日の間に精鋭を選び、そのメンバーで遠征に出かける。

みんな、遠征隊に選ばれるよう、頑張ってくれ」

弟子達はさらに盛り上がった。

「それではみんな 今日仕事に掛かるよ」

『おおーっ!!』

ギルドで遠征かあ、私も行ってみたいな。

「ああ、お前達。今日も掲示板やお尋ね者ポスターを見て、その依頼をこなしてくれ。頼んだぞ」

「はい！」

私達は、上の階に向かった。

「あつ！ヒナタ、あいつら！」

「え？」

地下一階について早々、カズキが声を上げた。

カズキが指差す先には、過去にカズキの大切な宝物を奪った、あの二匹がいた。

「あいつら……ああ！戦ってみたら意外に弱かったドガースとズバツト！」

「「なんだと！！！」」

私の声が聞こえたのか、二匹揃って返してきた。

「って、お前らあのときの……」

「どうしてここに！？」

「それはこっちの台詞だ！」

何でお前達がここにいるんだ！？」

カズキが叫ぶ。

確かにそうだ。このギルドにお尋ね者が入れるわけないし……

「ケツ、オレ達は探検隊なんだぜ。」

「へへっ、探検隊が掲示板の前において、何がおかしいんだよ？」

……今何て言った？
あんなことしたこいつらが探検隊？

「そう言うお前達こそ、何でここにいるんだよ？」

「僕達は、探検隊になりたくて、このギルドで修業してるんだ。」

「「なんだって!？」」

ドガスとズバットは顔を見合わせる。

「お前ちよつとこつち来い。」

「な、何？」

ドガスとズバットがカズキを隅の方に連れていった。

「悪いことは言わねえ。探検隊は諦める。」

「ええ〜!?!なんで!?!」

カズキ達は、小さな声で話している。

何を話してるんだろう？

「だってお前臆病じゃないか。お前みたいな弱虫に、探検隊は無理だぜ。」

「そ、そんなあ……」

「ズバットの言うとおりだ。無理なものは無理だぜ。」

……何を話してるか知らないけど、嫌な事を言われてるのは間違いなさそうね。

ここは私が！

「む、無理なんかじゃない!!」

私が、何か言おうと近付いた時。
突然、カズキが声を上げた。

「確かに僕は弱虫だよ！」

でも、そんな自分に負けないよう、修業してるつもりさ!!」

カズキがここまで言うなんて……

今までのカズキなら、怖がってこんな事言えなかったはずだ。

「ケツ、せつかくの忠告を。」

「バカな奴だ。」

カチーン。

ドガース達の言葉に、私の堪忍袋の尾が切れた！

「……そんな事言っている暇があるなら、さっさと依頼をこなしたらどうですか？」

まあ、戦闘は初めての私達に負けるほど、弱い貴方達なら、たとえEランクの依頼でも、危ういでしょうがね。」

流石にこれは言い過ぎだろうとは思った。

あの時のドガース達の作戦も、悪いわけじゃない。正面からいったら、負ける可能性もあるかもしれない。

「あ、あの時は、油断してただけだ！」

「そ、そうだ！アニキがいたらお前達なんか……！」

必死に取り繕う二匹。観ていると少し面白い。
それにしても……

「アニキって、誰？」

「オレ達の探検隊、ドクローズは全部で三匹。」

「そのリーダー……つまりアニキが、物凄い実力の持ち主なのだ！」
声を張り上げて言う。

それにしてもドクローズなんて……どう考えても、いい印象ではないわね……

「おっ、噂をすれば、アニキが来たみたいだな。」

「どうしてわかるの？」

「臭い、さ。」

ズバットがニヤリと笑うと同時に、梯子から強烈な臭いがしてきた。梯子から降りてきたのは、全体的に身体が紫色の、図体のでかいポケモン スカタンクだ。

意地の悪そうな顔で近付いてくる。

「邪魔だ。」

「!?!?」

スカタンクは私の前まで来ると、いきなり毒ガスを放ってきた。

「うっ………（酷い臭い………）」

私は毒ガスに包まれてしまった。

「ヒナタ!?!」

「お前もアイツみたいになりたいか?」

カズキの前に、ドン!と立つスカタンク。

「ひい………」

思わず、情けない声を上げて道を開けた。

「やっぱアニキはスゲエや!」

「クククツ、それほどもあるがな。」

それより、儲かりそうな依頼はあったか?」

「掲示板には、せこい依頼しかなかったんですが、耳寄りな話を聞けましたぜ。」

「ほう、どんな話だ?」

スカタンク達が話している間、私は甘い香りを出して、必死に消臭していた。

絶対許さないから！

「ギルドで遠征があるのか……確かに耳寄りな話だな。」

「でしよ〜。」

「よし！さっそく帰って悪巧みだ。いくぞオマエら！」

「「へい！アニキ！！」」

……何であいつらが遠征のこと知ってるんだらう？

「ヒナタ、大丈夫？」

カズキが心配して話し掛けてきた。

「ええ、大丈夫。カズキこそ大丈夫？」

「うん。大丈夫。」

口では大丈夫と言ってるが、表情はとても暗かった。

「カズキ……カズキは弱虫なんかじゃないよ。

確かに少し臆病かもしれないけど、カズキには、誰にも負けない、優しさっていう強さがある。

私は、カズキのそういうところが好きだよ。」

「ヒナタ……ありがとう！」

元気になったみたいね。

やっぱり、カズキには笑顔が一番ね！

「それにしても、嫌な奴だったね。」

「ええ。だから少しばかり復讐してみたの。」

「？何したの？」

「ちょっと、タネを、ね。」

その頃、スカタンク達は……

「……なんか力が……」

バタッ！

「あ、アニキ！？」

「しっかりしてください！！」

スカタンクの身体には、タネから伸びた、ツルが巻き付いていた。

その後、私達は依頼をこなし、夕飯を食べ、現在は部屋にいる。

「疲れた〜」

ドサツ！とベットに倒れこむ。

救助の依頼が三件、お尋ね者の依頼が二件……さすがに疲れた……

「う〜ん……」

窓の外を見ながら、唸っているカズキ。

「どうしたの？」

「……ヒナタが見るあの夢ってさ、いつも何かに触れたあとに起こってるな、って思ってた。」

「あの目眩の事？」

カズキはコクリと頷いた。

確かに言われてみるとそうだ。

ルリリちゃんの時は、スリーブにぶつかって……

探険の時だって、滝や宝石に触って……

「まだあるよ。」

ルリリちゃんの時は未来が見えた。でも、探険の時は、誰かのシルエットが見えたんだよね？

ということとは……、今回は過去が見えたんだ！」

「！そっいえば、そっね！」

「つまりさ、ヒナタは何かに触れることで、その過去や未来が見え

る……。

そんな特殊な能力を持つてるんだよ！

これって凄い事じゃない！？

ポケモンを助けたり、探険とかにも、役に立ちそうじゃない！？凄
いよヒナタ！！」

過去や未来が見える能力か……。

「ありがとう、カズキ。

……でも、何かに触ったからといって、それが自由に見られるわけ
じゃない。

見たい時に見れば、役に立つんだけどね……」

私の持つ不思議な能力。

この能力が自由に使えたら、どんなに楽か……

まあ、目眩の謎が、少し判っただけでもよしとするか。

「お前達、親方様がお呼びだ。」

そこに、ペラップが入ってきた。

「プクリンが？」

「ああそうだ。早く来い。」

私はカズキと顔を見合わせ、ペラップについていった。

「親方様、リリーフを連れてきました。」

「……………」

プクリンは黙っている。

「親方様……………親方様?……………」

「……………」

今だに黙っているプクリン。

前にもこんな事があったような……………?

「……………やあ!…」

「「「!?!?」「」」

やっぱりそう来るか!

わかっていてもびっくりする。

「君達、洞窟の時は大変だったね。

君達の活躍は、ちゃんと見てるから、安心してね!」

…………… 一体いつ見たんだ?

流石親方様、と言ったところか?

「さて、ここからが本題だよ。

近々、遠征があるのは、知ってるよね?

それで、いつもなら新弟子はメンバーに入れないんだけど、君達とでも頑張ってるじゃない?

だから、今回は特別に、君達を遠征の候補に入れることにしたんだ

よ!!!」

「ホントですか!?!」

「コラッ! まだメンバーにするって決まったわけじゃないぞ!」

「わかってます!

数日後の遠征までに、高い成績を出したものが、優先的に選ばれる
んでしょう?」

「頑張りますから!」

「僕は、君達を信じてるよ。頑張ってね!」

「「はい!!!」」

「頑張ろっね! ヒナタ!」

「うん!」

硬い決意をかわした私達は、遠征のことを胸に抱きながら、眠りに
ついたのであった。

「おい、テメエ!」

森の高台、二匹が帰ったあと、一匹は別の二匹に問い詰められてい
た。

「組織を裏切って、生き残れると思ってるのか!？」

「過去に生き残ったものは、いないんだぞ!」

「だからどうした!組織の目的を知った今、協力なんてできるか!」

一匹は二匹を振り払った。

「俺はあいつらの側につく。たとえ死んでもな!」

「おい、スカイ!」

スカイと呼ばれたポケモンは、去っていった。

「……どうすればいいと思う、アラン?」

「わからない。」

しかし、あいつの言うことは、正しいと思う。

……お前はと思う、ガラン?」

「同意見だ。」

そう言って空を見上げる。

「だが、俺はどっちを信じりゃいいんだ?」

その問いの答えは、誰にもわからない。知っているのは、自分だけだ。

答えはわからないまま、決戦の日は、近付いている。

第九話：遠征への期待（後書き）

ヒナタ

「ついに最後のポケモンの名前がわかったね！」

カズキ

「でも、まだ最初の二匹がわかってないね。」

彼らの出番は、もっと先のはずだったんですが、どうせなら、声だけでも出そうと思ひまして。

最初の二匹は、次か、その次にわかんと思ひます。

?????

「できるだけ早くお願いしますね？」

はい。それでは！

第十話：林檎の森で（前書き）

第十話……完成、です。

ヒナタ

「どうしたの？」

ちょっと疲れただけです。

カズキ

「無理しないでね？」

はい……。

第十話：林檎の森で

「え、朝礼の前に、新しい仲間を紹介するよ」

遠征の発表から数日後。

いつもよりも活気のある弟子達に、ペラップも楽しそうに言った。

「また弟子入りかな？」

「どんなポケモンでゲスかね？」

周りが騒めく。

「おい！こっちに来てくれ」

ペラップが呼んだ瞬間、梯子の方から悪臭が漂ってきた。

「うぐっ、この臭いは……」

梯子から降りてきたのは、できればもう二度と会いたくなかった、あの三匹だった。

「ケツ、ドガースだ。」

「へへっ、ズバットだ。よろしくな。」

「クククツ、そして俺様が、このドクローズのリーダー、スカタン
クダ。覚えておいてもらおう。」

特に、お前達にはな。」

私を睨みながら言うスカタンク。

「？知り合いか？」

「一応ね……」

できれば、もう顔も見たくないが……

「それなら話は早い

この三匹は、弟子ではなく、遠征の助っ人として参加することになったのだ」

「ええ〜!？」

一体どうやってギルドに潜り込んだんだ!?
そして何を企んでいる？

「短い間だが、仲良くしてやってくれ。

それではみんな 今日仕事に掛かるよ」

『おおー……』

「あれ？みんな元気ないね？」

「だって、なあ……」

「あんまり乗り気になれないでゲス……」

見ると、みんなスカタンクに対して、いい印象は持っていないようだ。

「…………たあ……………」

すると、プクリンが悲しそうな声を上げ始めた。

「（まずい！）」

みんな！無理にでも元気出すんだよ！

今日も仕事に掛かるよ！！」

『おおーっ！！』

なんとかプクリンを落ち着かせ、騒がしい朝礼が終わった。

朝から気分が悪くなったが、気を取り直して依頼をやるうとした時。

「ああお前達、ちょっと来てくれ。」

ペラップに呼び止められた。

「何ですか？ペラップさん。」

「今日はお前達に、食料を採ってきてほしいのだ。」

「？それはいいですが…………もう食料が尽きたんですか？」

「ああ。今朝食料庫を見たら、食料がなぜかいきなり減っていたのだ。」

しかも、セカイイチだけが、すべてなくなっていた。」

「セカイイチ？」

「大きくておいしいリンゴだよ。ほら、夕飯の時、よく頭の上で回してるでしょ？」

ああ、そういえば、クルクル回してたわね。

「セカイイチがないと、親方様は………なのだ。」

「「???」」

「だから頼む。セカイイチを取ってきてくれ。言うておくが、これは重要な仕事だぞ！」

……まあ、プクリンがどうなるかは、大体想像がつく。確かに、ある意味重要な仕事ね。

「じゃあ、行きましようか？」

「うん！」

こうして私達は、セカイイチがあるという、『林檎の森』へと向かった。

「ここが『林檎の森』ね。」

そこは、その名のとおりに、たくさんの林檎の木があった。

「それじゃ、行きましょうか。」

「……………ん？」

「どづしたの？」

「……………ううん。何でもない。」

またあいつらか……………

「ここ、お腹が空いても困らないね。」

林檎をムシヤムシヤと食べながら、カズキが言った。
林檎の森と言うだけあって、たくさん林檎が落ちているので、お腹が空いても困らなかった。

しかも、落ちているのは、林檎だけではなかった。

「あ、これは……………技マシン？」

見つけたのは、円いディスク状のもの。

これには、技が記憶されていて、瞬時にその技を覚えられるという、とても便利な道具なのだ。

「そうだね。えっと中身は……………水平斬りか。使ってみれば？ヒナタ……………ってあれ？」

私は既に使っていた！

でも、水平斬りってどんな技なんだろう？

と、ちょうどいい具合に、スピアーとクサイハナが、やってきた。
……試してみますか！
私はツルを伸ばし、気持ちを落ち着ける。

「……水平斬り！」

ザシュー！！

スピアーとクサイハナは、攻撃する間もなく、倒れた。

「凄い……。一撃で二匹とも倒しちゃった。」

カズキは驚いている。私自身も驚いた。

威力もそこそこあるし、なにより、複数の敵に同時攻撃できるのが
素晴らしい！

また戦略に幅が出るわね。

こんなことを思ってしまう私は、策士に向いているのだろうか？

……まあ、それはさておき、その後は順調に進めた。

「ここが、奥地だよね？」

「ええ。ペラップの話だと、ここら辺にあるはずなんだけど……多
分あれね。」

目の前には、一際大きな林檎の木があった。

「結構高いね。どうやって取るのか？」

「クククツ、そんなの簡単じゃねえか。」

突然、声が聞こえたと思うと、セカイイチの木から、あいつらが降ってきた。

「ククククツ！ドクローズ参上！」

「ケツ、遅かったなお前等。」

「へへっ、待ちくたびれたぜ。」

「また貴方達ですか……」

私は、若干呆れた声を出す。

「また邪魔する気？」

「クククツ、失礼な奴だな。せつかく協力してやろうと思ったのにな。」

「「協力？」」

スカタンクの意外な言葉に、気が緩んだ、その時！

「なぐんてな！！」

食らえ！俺とドガースの、毒ガススペシャルコンボ！！」

「「！？」」

気付いた時には、時既に遅し、私達は毒ガスに包まれてしまった。

「甘い香り！」

すぐに消臭したので、なんとか耐えることができた。しかし、毒ガスが晴れた頃には、既にドクローズはいなくなっていた。

「うう……………大丈夫カズキ？」

「う、うん。だけど、セカイイチが……………」

見ると、さっきの毒ガスの影響か、周辺の林檎は皆腐り、地面に落ちていた。

もちろん、セカイイチも。

「やられた……………」

「どうするヒナタ！もうセカイイチがないよ！？」

ここにセカイイチがないとなると、もうセカイイチを持ちかえる手段がないということ、つまり、失敗……………

……………こうなったら！

「……………カズキ。悪いけど、先に帰っててくれる？」

「え？どうして？」

「ちょっと、用があるから。」

カズキは、困惑していたが、私の真剣な目を見ると、了承してくれた。

「すぐ戻るから。」

こうして、私は森の奥に、カズキはギルドに、それぞれ向かったのだった。

「ええ！！取ってこれなかったあ！！？」

「ひい！」

ギルドに帰った僕は、ペラップに報告した。
言った瞬間に大声上げるから、変な声出しちゃったよ。

「ああ、どうしよう！親方様に何て言えば……！！？
それに、ヒナタはどうした！？」

「用があるって言って、どこかに行っちゃったんだ。」

「なんだと！？」

……しょうがない。このことは、ヒナタが戻ってきてから報告する。
私だけ親方様のあれを受けるのは、不公平だからな！！」

うう、怖いよ……

ヒナタ、早く帰ってきて。

「駄目だ！見つからない。」

あの後私は、他にもセカイイチの木がないか探していた。森のポケモンを説得して、聞いて廻ったが、皆知らないと言う。日もすっかり落ち、私は途方に暮れていた。そんな時だった。

「お困りのようですね。」

そんな声を掛けられた。

振り返ると、暗くてよくわからないが、誰かがいた。

「誰？」

「そうですね……月の使者、とでも呼んでください。」

「月の使者？」

そのポケモンは、ゆっくりと頷いた。

「（何、こいつ……）」

見た感じ敵ではなさそうだが、警戒した。だって、今日は新月。月も出てない月の使者なんて、変な話だ。

「そんなに警戒しないでくださいよ。」

少しの笑いを交えて言うが、それくらいで警戒をとく私ではない。

「……まあいいです。」

それより、着いてきてくれませんか？……強制はしませんが。」

そう言つて、どこかに行こうとする。

このまま言うことを聞かずに帰れば、この状況を変えることなく話は進むだろう。

しかし、生憎私は、この状況を変えたかった。

それに、彼の言うことは信じて大丈夫だろう、という不思議な安心感があった。

私は決心すると、慎重に後に着いていった。

しばらく歩くと、彼は立ち止まった。

「ここです。」

「わぁ……凄い！」

私は驚きに、目を見開いた。

そこは、新月だというのにほんのりと明るく、そこにある木々セカイイチの木を照らしていた。

「ここは、森のポケモンもほとんど知らない、セカイイチの森です。これを持っていけば、依頼を果たせますね？」

「！何でそれを！？」

私、セカイイチのことは言っていないのに！？

「さあ？何ででしょう？」

貴方が一生懸命だから、ですかね？」

……意味がわからない。

でも、これでセカイイチが手に入る！

「頑張ってくださいね、ヒナタさん。」

「何で私の名前……ってあれ？」

振り向いた時には、もう誰もいなかった。

「一体、何者だったんだろう？」

さっきまで彼がいた場所を見ながら、呟いた。

「遅い！」

ギルドでは、ペラップとカズキが、入り口で待っていた。

「いったいどこで何をやってるんだ！」

ヒナタの帰りがあまりにも遅いので、さっきからペラップはずっと
ピリピリしている。

「……あつ！帰ってきたよ！」

そんなところに、私は帰ってきた。

「……………ただいま。」

「ヒナタ！お前今までどこに行ってたんだ！？」

さっそくペラッパに怒られた。

私は、ペラッパが次の言葉を言う前に、セカイイチを差し出した。

「これは……………！？」

「ごめんなさい！林檎の森で取れなかったので、探してたんです！」

深く頭を下げる。いまさら許してくれるとも思えないが……

「ヒナタ、ずっと一人で探してたの！？」

「うん……………」

カズキにも心配を掛けてしまった。

「しかしどうしたものか。」

親方様は、もうお休みになられたはず……………」

「僕ならここにいますよ。」

「……………！……………！……………」

そこに、プクリンが出てきた。
どうやら話を聞いていたらしい。

「わあ、セカイイチだあ！取ってきてくれたんだね!？」

「……………はい。」

これだけ待たせたんだ、きつと怒られる。

「ありがとう。依頼成功だね。」

「え?でも……………」

「ちゃんとセカイイチを取ってきてくれた。
それだけでも、十分成功だよ。」

「親方様……………」

「じゃあ、もう遅いから、君達も早く寝なよ?。」

そう言って、中へ戻っていった。

親方様。本当にありがとうございます！

……………

「どうだった?」

「彼女で間違いない。」

どこか古風な感じの家の中で、二匹が話していた。

「じゃあ、セレビィに伝えておくね！」

「よろしくお願いします。」

世界征服も時の破壊も、どっちも止めてやる！

第十話：林檎の森で（後書き）

グダグダだ〜！

バタツ！

ヒナタ

「ち、ちよつと大丈夫!？」

大丈夫……ちよつと倒れただけだから……

カズキ

「全然大丈夫じゃないじゃん！」

もうネタが無くて、次回は少し遅れるかも知れませんが、
それでは。

第十一話：遠征開始！沿岸の岩場（前書き）

第十一話完成です。

第十一話：遠征開始！沿岸の岩場

あれから数日後。

ついに遠征当日となった。

メンバーの発表は、朝礼でされるらしい。

努力はしてきた。これで落ちるなら、悔いはない！

小さく決心すると、朝礼に向かった。

「えー、それでは！これより、遠征メンバーの発表を行う！」

周りが少し騒めく。

「いよいよでゲスね。」

「緊張してきたぜ。」

「それでは発表する。」

呼ばれた者は、前に出るように。」

みんな、固唾を飲んで耳を傾ける。

「まずは……ドゴーム」

「よしっ！！やったあ！！」

いつもよりも大きな声を出して、前に出た。

「次、ハイガニ」

「ヘイヘーイ！選ばれたぜ！！」

「そして……おっ？なんとビツパ！」

「えっ！？あ、あっしが、遠征隊に……！！？」

よほど驚いたのか、ドゴーム並みの大声を上げた。

「ん？どうしたビツパ。早く前に来なさい。」

「そっちに行きたいのは、山々なんでゲスが……。感動のあまり、足が動かないんでゲス……。」

情けない声を上げるビツパ。
ペラッパは、呆れている。

「仕方がない、放っておくぞ。
じゃあ、一気に行くよ」

キマワリ チリーン デイグダ ダグトリオ グレックグル そして
カズキ ヒナタ

「えっ！？」

私は、カズキと顔を見合わせた。
徐々に嬉しさが込み上げてくる。

「以上……っつて！ええ〜！？」

親方様！これって、ギルドのメンバー全員じゃないですか！？」

「うん！そつだよ！」

混乱しているペラップに、プクリンはニコニコ顔で答えた。

「そ、そつだよつて、それじゃ選んだ意味がないじゃないですか！？それに、そんな事したら、ギルドに誰もいなくなっちゃいますよ！？」

「大丈夫。ちゃんと鍵掛けて行くから。」

それに、みんなで行った方が、楽しいでしょ」

「……………」

ペラップは、黙ってしまった。

あのペラップを黙らせるなんて……………さすが親方様！

「うー……………仕方ないですね……………」

じゃあ、今後の予定を言うよ。

この後、遠征について説明をする。選ばれたメンバーは（全員だけ……………）各自遠征に行く準備をしてくれ。

準備が済んだら、またここに集まってくれ。

以上だ。解散！」

みんなは準備のために散っていった。

「ヒナタやったよ！僕達選ばれたんだよ！！」

「うん！本当に、よかった！」

嬉しくてちよつと涙が出てきた。

とにかく！選ばれたんだから、頑張らなくちゃね！

その後の説明で、目的地の『霧の湖』があるとされる、『濃霧の森』の麓にベースキャンプを張る事になった。

また、全員揃って進むには、機動性に欠けると言う事で、いくつかのグループに別れて行くことになった。

一つ目のグループは、キマワリ・ドゴーム・ディグダ・グレッグルだった。

言われた瞬間、キマワリとドゴームは、口喧嘩を始めてしまったが……。

二つ目のグループは、チリーン・ハイガニ・ダグトリオだった。プクリンとペラップは、二匹で行くらしい。

プクリンは、乗り気じゃなかったみたいだが……。ドクローズは単独で行くことになった。

最後に私・カズキ・ビツパというグループになった。新人だけのチームだったので、比較的迷いにくい、海沿いの道を進む事にした。

三匹で力を合わせて頑張ろう！

「うわぁ！ヒナタ、海だよ!？」

「見ればわかるわよ。」

ギルドを出発して、一時間程経っただろうか？ 私達は『沿岸の岩場』という場所に来ていた。

「でも、物凄い崖だよ、ここ。」

「やっぱり、遠征に行くだけあって、それだけ道も険しくなるのか
もしれないでゲスねえ……。」「
不安な声を上げるビツパ。」

「そして、これが噂のガルーラ像でゲスね。」「

「ガルーラ像?」「

「そうでゲス。ガルーラ像は、道具の整理とかができるんで、旅先
ではかなり重宝されてるらしいでゲス。
あっしも、見るのは初めてでゲス。」「

道具の整理、ってことは、ガルーラさんの倉庫の道具を、自由に使
えるって事よね?
それは便利ね!」

「今いるのが、沿岸の岩場だから……とりあえずここを抜けて、こ
こまで行こう!」「

カズキが、地図を見ながら言う。

「賛成でゲス。」「

「そうね。ここに着いたら、少し休みましようか。」「

それにしても、いつも私に頼っていたカズキが、いつの間にかリ
ダーシップを取っている。

ちよつと前まで、あんなに臆病だったのに……。

「あれ?」「

「どうしたでゲスか？」

「ここ、入り口が二つあるよ。」

分かれ道か……確か対処法は……

私は、バッグから“石の礫”^{つぶて}を取り出した。

「何するつもり？」

「まあ見てて。」

私は、二つの入り口に、それぞれ石を投げると、耳を澄ませた。

「……こっちね。」

私は、右を指した。

「なんでわかるの？」

「この分かれ道の、どちらかが行き止まりなら、反響して音が返ってくるでしょ？それを利用したのよ。」

「ヒナタ、物知りでゲスね。」

ビツパが、感嘆したように声を上げる。

「そんな事ないですよ。」

「じゃあ、頑張っていこうか！」

私達は、先に進んで行った。

「タネ爆弾！」

「チャージビーム！」

海沿いだからだろうか？襲ってくるポケモンは、水タイプが多かった。

……「ここの辺、水タイプ多くないか？」

「先輩、結構強いですね。」

「これでもキマワリに鍛えてもらってるでゲスからね。」

カズキはほとんど出番なしだったが、とてもスムーズに進めた。

「やっと抜けたあ〜！」

出た瞬間に大声を上げるカズキ。そんなに長いというわけではなかったが、炎タイプのカズキには、ちよつと長かったかもしれない。

「だいぶ近づいたよね？」

「ええ。地図上では、この『ツノ山』を越えた先ね。」

くう〜！

「うぐつ。お腹が鳴ったでゲス……。」

少し顔を赤くしながら、恥ずかしそうに言うビツパ。

「もうすぐ夕方だし、今日はここで休もうか？」

「賛成でゲス。」

「じゃあ、ご飯にしようか！」

二匹で盛り上がっている。

そう言えば……

「先輩にカズキ。貴方達って、料理とかできるの？」

「「あ……」「」

やっぱりできないか。

私が頑張るしかないか！

「しょうがないわね……。あんまり得意じゃないけど、私が作るわ。」

「ホント！？」

「ありがとうでゲス！」

「ただし！手伝ってね？」

こうして、三匹で夕食を作ることになった。

今更だが、チリーンのいるグループを、羨ましく思った。

その後、夕食を食べた私達は、少し談笑した後眠りに就いた。

明日も、頑張ろう……

「くそっ！このままじゃ……！」

ここはどこだろうか？

まわりに景色というものはなく、空間が捻れているような感じだった。

「このままじゃ全員御陀仏だ！お前等だけでも行け！」

「しかし……！」

「俺を舐めるな！？元“ルナティック”の暴れんぼう、スカイ様だぜ！？」

そう言って、襲ってくる元仲間を蹴散らす。

「早く行け……！」

「くっ！すみません、行かせてもらいます……！」

「頑張れよ！ウィン！ルナちゃん！」

直後に大きな爆発が起こった。敵も味方もそれに巻き込まれ、どこかに飛ばされる。

「どうか無事で……」

そんな咳きは、風に溶けて消えた。

第十一話：遠征開始！沿岸の岩場（後書き）

ヒナタ

「ついに最後の二匹の名前がわかったね！」

カズキ

「これからどんな活躍をするのかな？」

本格的な登場は、いつになるかわかりません。なるべく早めに出したいと思います。

ヒナタ

「でも、前に更新が遅くなるって言ってなかった？」

夏休みの課題を終わらせてからと思ったんですが……やっぱりこっちの方がやりたい！！

ヒナタ

「あのねえ……ちゃんとやらないと、後で泣くことになるわよ？」

承知の上です。

第十二話：思わぬ出会い？ツノ山を越えて（前書き）

第十二話完成です。

第十二話：思わぬ出会い？ツノ山を越えて

翌朝。

空は、雲一つ無い快晴だった。

朝日によって起きた私は、なかなか起きてこない二匹を起こし、探険の準備をしていた。

「さて、そろそろ行くわよ？」

「う、ん……」

まだ半分寝てるようなカズキを引きずって、ツノ山に向かう。

また入り口が二つあったが、沿岸の岩場と同じ要領で進んで行った。

「そう言えば、言うのを忘れてたでゲス。」

しばらく進むと、ビツパが言った。

「何を？」

「出発する前にキマワリが言ってたんでゲスが……。最近この辺りで、お尋ね者のボスゴドラが、よく目撃されるらしいでゲス。」

「お尋ね者のボスゴドラ？」

「なんでも、子分を数匹引きつれて、ランクも二つ星で、結構強いらしいでゲス。」

二つ星って、相当強いじゃない……!？

「……わかったわ。じゃあ、慎重に行きましょうか。」

気を引き締めて進んで行った。

襲いくるポケモン達は、虫タイプが多かったため、ここまで出番な
しだったカズキが、とても頑張ってくれた。

順調に進んでいた、その時！

ゴゴゴゴッ！

「！？地震だ！」

突然地震が起こった。

しかし規模は小さく、すぐに収まった。

「いきなりだったね！」

「ええ。予兆すら、感じられなかった……」

ゴゴゴゴッ！

また地震が起こった！

「これってもしかして、技の“地震”！？」

「誰かいるのかもしれない！行ってみよう……」

私達は、地震の中心と思われるほうに向かった。

しばらく行くと、周りを岩に囲まれた場所に出た。

そしてそこに、地震の元凶と思われる、コドラ達を引きつれたボスゴドラがいた。

さらに、それと対峙するように、一匹のイーブイがいた。

状況から察するに、どうやらイーブイを襲っているようだ。

「だから、僕は友達を探してるだけです、って何度も言ってるですよっ?」

「根城を知られた以上、生きて還すわけにはいかねえんだよ!」

そう言つて、地震を繰り出した。

しかも、コドラ達も同時に地震を起こし、大地震になった!

「助けるわよ!」

「うん!」

「了解でゲス!」

私達は、ボスゴドラ達の前に立ちはだかった。

「なんだテメエ等は!??」

「私達は、探検隊リリースよ!お尋ね者のボスゴドラ、観念しなさい!」

突然の乱入者に、地震を止めた。

一瞬驚いたようだが、すぐに不敵な笑みを浮かべた。

「探検隊だあ？こりやまたずいぶんと弱そうな奴だな！？
ちよつどいい、そのイーブイ共々、葬ってやるわ！！」

ボスゴドラがそう言った瞬間、コドラ達が引き始めた。

「（……何か仕掛けてくる！？）」

「地の底に落ちろ！地裂隆起！」

そう言った瞬間、地面を思いつきり叩いた。
その瞬間地震が起こった。

しかも、同時に地面が割れ、迫ってきた。

「くっ！」

私は、ツルのムチで上の足場に逃げる。

「掴まって！」

そして、素早くみんなにツルのムチを伸ばす。
しかし、地割れの方が速い。

なんとかカズキは助けた。

しかし……

「先輩！！イーブイさん！！」

ビツパ達は間に合わない。

地割れに呑み込まれそうになった、その時！

「電光石火！」

イーブイがビツパをはね上げて、助けた。

「イテテテ……た、助かったでゲス……。」

ビツパは、私達のいる足場に、とんできた。

「イーブイさんは!？」

ビツパの無事を確認すると、すぐに下を見た。

「僕は無事ですよ。」

当の本人は、呑気に手を振っていた。

あんな攻撃をされて、どこにそんな余裕があるんだろうか？

イーブイは、ボスゴドラの前に立つ。

「素晴らしい攻撃ですね。」

地割れに地震を合わせることで、命中率を上げるなんて……並大抵の技じゃないです。」

イーブイは、笑顔で話し続ける。

攻撃を警戒する様子は、まったく無い。

「しかし、結構体力を消費するみたいですね？」

しかも、お仲間のコドラ達は、後退していてすぐには動けない。

……この意味、わかりますよね？」

「くそっ！」

ボスゴドラは、反動で動けないらしい。
イーブイは、表情を崩さずに言う。

「水の波動！」

「ぐあああつー!!」

攻撃は見事にヒットし、ボスゴドラは倒れた。

「凄い……」

「一撃で……」

「倒しちゃったでゲス……。」

私達は、とても驚いていた。

だって、いくら動けなかったと言っても、あの守りの堅いボスゴドラを……一撃で……

一体、何者？

「すみません！コドラ達を倒すのを手伝ってくれませんか？」

イーブイは、私達に向かって言う。

「大丈夫です！もう倒しましたから！」

「ええっ!?!」

私の言葉に反応したのは、カズキ達だった。

「「いつの間に!?!」」

きれいにはもる二匹。

いつの間に、って言われても……

「なるほど。僕が話してる間に、上から宿り木の種を播いたんですね?」

「えっ?ええ。統率力を失った集団は、時折思いがけない行動を起こすことがあるから、早めに倒しておかないと。」

しかし、よくわかったな……。とりあえず下に下りた。

「自己紹介しましょう。」

僕はウイン。正式ではありませんが、探検隊のリーダーをやっています。どうぞよろしく。」

「私はヒナタ。探検隊リリーフのリーダーよ。」

こちらはパートナーのカズキ。そして先輩のビツパ。

こちらこそよろしく。」

なるほど。探検隊をやってるなら、あの強さも領ける。でもこの声、どこかで聞いたような?……そうだ!

「あの、もし迷惑じゃなかったら、触れてもいいですか?」

「?何する気?」

「ちょっと、気になることがあって……触れたらあの目眩が発動するかなって。」

「なるほどね。」

「よくわかりませんが、いいですよ。」

「ありがとうございます。」

私は、ウィンの身体に触れた。

ぐわん……

「（来た！あの目眩、だ……）」

キーン！

見えたのは、林檎の森の一画だった。

『誰っ？』

『そうですね……月の使者、とでも呼んでください。』

『月の使者っ？』

シュボン！

やっぱり！

「貴方、月の使者ね!？」

「おや、覚えていてくれたんですか？」

「?知り合い？」

あつ、カズキ達は知らないんだっけ。

「林檎の森の時、助けてもらったの。」

あの時は、どうもありがとう!」

「いえいえ、お礼を言われるほどではありませんよ。」

言いながら微笑む。さっきからずっと笑顔な気がするけど…。

「でも、その目、珍しいね。きれいな水色。」

「え？」

カズキに言われ、よく見てみると、確かに水色……空色?の目をしていた。

「ところで、ちょっとお願いがあるんですが、聞いていただけますか？」

「何でゲスか？」

「はい。実は、ここに来る途中、ちょっとしたアクシデントがありました。仲間とはぐれてしまったんです。」

なのでよければ同行させてもらって、探してほしいんですが……
まあ、無理に、とは言いませんが。」

「だ、大丈夫ですよ！」

ベースキャンプまでいけばみんなもいるし、探してくれるように頼んでみます。」

そんなふうに言われたら断れないじゃない！
まあ、断る気なんてはじめからないが……

「ありがとうございます。」

改めてよろしくお願いします。」

こうして、イーブイのワインを加え、私達はベースキャンプへと、歩きだした。

第十二話：思わぬ出会い？ツノ山を越えて（後書き）

ウィン

「という訳で、これからよろしくお願いします。」

本当は、遠征が終わった頃だそうと思ったんですが、このほうが面白いか、って言う思いつきで出してみました。

ヒナタ

「これからよろしくね！」

カズキ

「よろしく、ウィン！」

それではこれで。

第十三話：ウィンの再会！濃霧の森で（前書き）

第十三話完成です。

第十三話：ウィンの再会！濃霧の森で

「や、やっと到着したでゲスウ〜!!」

ツノ山を抜けて約一時間。

私達は、ようやくベースキャンプについた。

「遅い!!みんなとっくに到着してるよ!」

ついたそうそう、ペラップに怒られてしまった。

「まあまあ、そう怒らないくださいよ。」

「?この方は?」

「彼はウィン。ここに来る途中に会って、はぐれた仲間を探してほしいそうです。」

私は、ウィンのことを説明する。

「そう言う訳で、あまり叱らないで下さい。」

「なるほど。事情は分かった。仲間のことはこれからみんなに言う。しばらくの間は、一緒に行動してくれ。」

「ありがとうございます。」

その後、荷物を置くと、すぐにこれからの説明が始まった。

「ええ、これからの動きを説明するよ！
まず、ここは見ての通り深い霧に覆われている。おそらく、この霧のせいで湖が発見しにくいのだと思われる。もしかしたらこの霧をとる方法があるのかもしれない。

なので、各自森を探索し、霧の湖を見つけるか、霧をとる方法を見つけたら、私か親方様に報告してくれ。

そしてもう一つ、ここにいるウインさんが、仲間とはぐれてしまったらしい。

もしかしたらこの森にいるかもしれないので、もし見つけたら、私か親方様、それかウインさんのところに連れてきてほしい。

以上だ。それでは、頑張って行こー！！」

『おおーっ！！』

長い説明が終わり、みんな動き始めた。

「ヒナタ、僕達も早く行こ？」

「……………」

……………何だろう、この感覚。

どこか……………懐かしいような、この感じ……………

「……………ヒナタ？」

「はっ！ごめんごめん。

さっ、早く行こー！！」

ガルーラ像で道具を整理し、私達は、『濃霧の森』に入っっていった。

「あれ？何だろう？」

森に入った直後、カズキが何かを見つけた。

「石のようですが、赤くてとても綺麗ですね。」

「それにこの石、暖かいよ？」

……とりあえず持つてるね。早く奥に行ってみよう！」

私達は歩きだした。

しばらく進んでいると……

「……ん？」

「どうしたの？」

「何か聞こえたような気がしたんだけど……」

「（この気配……まさか！）」

ウインは、急に走りだした。

「ちよっ、待ってくださいよ！」

私達も、慌てて跡を追って走りだした。

しばらく走って、やっとのことで追いついたそこには、見知らぬ一匹のポケモンがバトルしているところだった。

……いや違う。これは、襲われている！

「ルナ！」

「あっ、ウイン！？」

ルナと呼ばれたキュウコンは、こちらによってきた。

「無事だったんだ！？」

「ああ。」

会話からして、知り合いのようだ。

「おっと、ターゲットの方から来てくれるとは、幸先いいねえ。」

「……ラクシアですか？」

「ほう、あたしの名を知ってるのか。スカイの野郎が、どこまで話した？」

ラクシアと呼ばれたライボルトは、爪の間にナイフを光らせながら言った。

「貴方に教える義理はない。」

「あっそう。なら………死ね!!！」

言っが早いか、電気を帯びたナイフを投げてきた!

「禁!」

ルナはそれを見えない壁で防ぐ。

「ちっ!」

「ウインさん!あいつは一体!?!」

まったく状況が読めない。

「詳しくは後で話します!

とりあえず今言えるのは、敵ってことです!」

敵か。なら倒すまでね!

「はっばカッター!」

「火炎放射!」

私達の速攻は見事に命中した。

「………なんか余計なのがいたな。」

「なっ!!!?!」

ラクシアは無傷だった。
確かに直撃したのに!?

「邪魔だから先に殺つとくか!サンダーショット!」

電気を帯びたナイフが飛んでくる。
私達はとっさに動けなかった。

「(当たる!)」

「アイアンテール!」

その時、ウインがナイフを尻尾で叩き落とした。

「下がって下さい!危険です!」

必死に言ってくるウイン。
言い返したかったが、攻撃が効かない以上、ここにおいても足手纏いにしかない。退かざるをえなかった。

「水の波動!」

「エナジーボール!」

「雷!」

三つの技がぶつかり合い、爆発を起こす。
レベルが違いすぎる……
三匹を見てそう思った。

技の威力もそうだが、ウインの技の多彩さ、ルナの不思議な防御、ラクシアの電気とナイフの合わせ技。どれをとっても、私達は足元にも及ばなかった。

「（何か私にもできることは………そうだ！）」

私は、ラクシアの背後に回る。戦いに気をとられて、ラクシアは気付かない。

「これならどうだ！毒の粉！」

「なっ！？しまった！！」

よし！攻撃が効かなくなつて、状態異常にならできる、正解だったわね。

「ちっ！やっぱり先に殺しとくんだったな。癩に障るが、いったん退くぜ！命拾いしたな！」

毒が身体に廻る前に、ラクシアは逃げていった。

「……ふう。ありがとうございます。助かりました。」

「そんな！大したことはしてませんよ。それより、色々と聞きたいのですが？」

「わかりました。簡単に説明しましょう。」

結構激しかったのに無傷というのには驚かされたが、とにかく話を聞くことにした。

「まずはじめに紹介します。
彼女はルナ。僕のパートナーです。」

「よろしくね、（*）！」

「い、こちらこそ……」

テンション高いな……

私達よりかなり大きいのに、まるで子供みたい。

「そしてラクシア、さっきのライボルトですが、さっき言ったように敵です。」

「わたし達、訳あってあいつらに狙われてるの。」

「詳しくはまた今度時間があるときに話しますが、彼女はある組織の一員なんです。」

「“ルナティック”って言って、ポケモンを殺したりするのが目的で創られた、犯罪組織だよ。」

これはまた、凄いのが出てきたわね……
カズキは少し震えている。

「彼らは、殺しの依頼を受けて、僕達を狙ってるようです。」

「なるほど……つまり貴方達は、逃亡中の身だと？」

「そうですね。」

まさかたまたま会ったこのポケモンが、そんなことに巻き込まれるなんて……驚きだわ…。

「しかも、こう言うっては失礼かも知れませんが、先程のヒナタさんの行動で、ヒナタさん、そしてカズキさんは、ルナティックに狙われることになるかも知れません。」

「「ええっ!!?」」

二匹同時に声を上げた。

「あいつらは実力は確かだから、失敗なんてしたことがないの。しかも、今回はボスからの直々の命令みだから、もしこのことが知れば、確実にヒナタを殺しに来る。」

「そんな………」

何で私が、こんな目に……

「まあ、彼らは隠密行動が原則なので、ギルドに堂々と攻め入るような真似はしないでしよう。」

今遠征の途中でしたよね？無理かも知れませんが、元気出してください。

もし何かあったら、僕が責任を持って貴方達を守ります！」

そう言って微笑むウイン。

「……まあ、今更この事実を変えられないし、せつかくの遠征だもん、楽しまなきゃ！」

「わかったわ。せつかくの遠征を、嫌な思い出したくないしね！」

ほら、カズキも楽しみましょ!？」

「う、うん……頑張るよ……」

カズキはまだ震えている。

私はカズキの背中をさすりながら、やさしく言う。

「大丈夫……。きっと大丈夫だから……」

「……不思議だね。ヒナタが言うと、本当に大丈夫に思えてくる……」

やっと震えが止まった。

「さっ、探険を再開するわよ!」

「うん!」

私達は歩きだした。

といつても、森はすぐに抜けてしまったが……

「凄い!ここ、滝がいっぱいあるみたいだね!？」

森の奥に着くと、カズキの言うとおり所々に滝が流れていた。

カズキも調子を取り戻したみたいだし、一安心ね。

と、その時。

「ハイハイ!!」

「ハイガニ先輩!？」

霧の向こうから、ハイガニがやってきた。

「ハイハイ! ヒナタ達は何か手掛かりあったかい？」

「手掛かりは見つかってませんが、ウィンさんの仲間なら見つきましたよ。」

ルナが微笑む。

「そりゃよかったな!」

「先輩は何か見つけましたか？」

「手掛かりかはわからねえが、気になるものなら見つけた。ちょっと来てくれ。」

先輩に言われ、着いていくと、大きな石像が見えてきた。

「なに、これ？」

「全体がはつきりしませんが、おそらくグラードンではないですか?」

「グラードン？」

「大地を広げたとされ、カイオーガとの死闘の末、眠りに就いたとされる、伝説のポケモンです。」

そんなポケモンの石像が、何でこんなところに……？
私は、石像に触ってみた。

ぐわん……

「うっ……（目眩、だ……）」

キーン！

『なるほど、ここに……が……』

『わかったぞ！グライドンの心臓に日照り石をはめる。それで霧は晴れるのか！』

さすがオレのパートナーだ！』

シュピン！

そこで目眩が治まった。

今回の今までと少し違ったわね……声しか聞こえなかったし、誰の声なのかもわからなかった……

えーと確か……グライドンの心臓に日照り石をはめる、それで霧は晴れる、って言ってたわね。

日照り石、って……もしかして！？

「どうしたの？」

気付くとカズキが顔を覗き込んでいた。
私は、石像の胸の辺りを見る。
胸のところには、へこみがあった。

「本当にどうしたの？ヒナタ？」

「カズキ、森に入るとき石を拾ったわよね？」

「え？うん。」

「それを石像胸の部分にはめてみて。」

「？わかった。」

カズキは、へこみに持っていた石をはめた。
その瞬間、石像の目が光り、地響きが起こった！

「わわっ！ここは危ない！離れよう！」

私達は、グラードン像から離れる。
一瞬辺りを強い光が包み、思わず目を瞑る。

「……………！？霧が……………」

次に目を開けたときには、あれほど深かった霧が、嘘のように消えていた。

「晴れちゃったね。お日様が眩しいよ……………！？あれは！？？」

空を見上げたカズキが、驚きの声を上げる。
私や他のみんなも、空を見る。

「あ、あれは!？」

だれもが驚いた。

霧が晴れたそこは、見事な絶景だった。

第十三話：ウインの再会！濃霧の森で（後書き）

またまた登場です！

ルナ

「よろしく〜！」

ウインとルナは、空ダンの主&パだったりします。

ヒナタ

「それはいいけど、ずいぶん中途半端な終わり方ね？」

ルナとの出会いをいれたら、結構長くなってしまったので……

ヒナタ

「そうですか……」

第十四話：霧の湖の宝物（前書き）

遅くなりましたが、第十四話完成です。
今回は少し長めです。

第十四話：霧の湖の宝物

言い伝えの一説

『グラードンの命灯しき時、空は日照り、宝の道開くなり……』

「……………」

思わず言葉を失う。

私は、上にある“それ”を、ただただ見つめるしかなかった。

「…………霧が晴れて、やっとわかった。

霧の湖が、今まで見つからなかったわけだよ。

霧が晴れなきや、あんなの見つかりっこないもん。」

「へい！それってまさか…………！!?」

「先輩の考えてる通りだと思います。

霧の湖は、きつとあそこにあるのよ!」

私が指差した先には、空にそびえる高台から、滝が流れ落ちる光景だった。

「へい！こうしちゃいられねえぜ!

おいらは親方様に知らせてくる。オメエ等は先に行っててくれ!」

そう言って、ヘイガニは去っていった。

「では、行きましょうか。」

歩きだそうとしたその時。

「待ちな！」

どこからともなく、声が聞こえてきた。

「オマエ達は……!?!?」

「クククツ！ここまでご苦労だったな。」

「ドクローズ！」

現れたのは、いつも邪魔ばかりしてくるドクローズだった。

「……誰ですか？」

ウインが小声で聞いてきた。

「ムカつく奴らです。」

ちょっと感情を込めて言う。

「なるほど、わかりました。」

こんないい加減な説明で、よかったのかな……

「ケツ！謎さえ解いてくれれば、オマエ等にもつ用はねえ。」

「へへっ！お宝はオレ達がいただくぜ！」

「やっぱり最初からこれが目的だったのね!？」

「ケツ！当然のこと！」

吐き捨てるように言うドガス。こいつらが考えそうなことだ…。

「ククククツ、悪いがお前達には、ここでくたばってもらおう。」

スカタンクがニヤリと笑う。

また、あの毒ガスをやるつもりか？だとしたら、ちょっとまずいかも……

「すでにオレ達の勝ちは決まってるんだよ。

食らうがいい、俺様とドガースの毒ガススペシャルコン……」

「あ〜ん！待つてえ〜〜！」

スカタンクがいい終わらないうちに、目の前にセカイイチが転がってきた。

「セカイイチー セカイイチー」

転がるセカイイチを追い掛けてきたのは、セカイイチ大好き プクリンだった。

「やっと捕まえた 僕のセカイイチ
……あれ？君達、それに友達も、みんな一緒だ」

この緊迫した雰囲気打ち壊すには、十分なニコニコ顔のプクリン。

「お、親方様……。ここで何をしてるのです？」

スカタンクが、驚きつつも聞いてみる。

「ん？何って…森を散歩してたらね、セカイイチが僕からコロコロ逃げ出しちゃったの。それで追いついたら、ここに来ちゃったってわけ」

「ペラップさんと、森の入り口にいたんじゃ……」

「だって、つまんないんだもん……。」

つまんないって、それだけの理由で……
ペラップも大変だ……

「親方様！」

「やあ！友達は見つかった？」

「ええ。」

これもあなた方の協力のおかげです。本当に感謝です！」

ウィンが頭を下げる。

それにしても、表情が全然変わらないな……

「ところで親方様。少しお話をしたいのですが、構いませんか？」

「もちろん じゃあ戻ろうか。友達もね」

「！？親方様、我々も探索に……」

「大丈夫 探索は弟子達に任せて

…というわけで、君達も行ってね。」

「わ、わかりました……。」

プクリンは、ウィンとルナ、ドクローズを連れて、キャンプに戻っていった。

「……ま、まあ、とにかく邪魔者はいなくなったし、行くところか？」

「そ、そうだね……。」

私達は、先に進んで行った。

「あっ！ヒナタ、あそこじゃない？」

しばらく歩くと、入り口のような場所に着いた。

「ここから入って行けそうだね。

……これ、水蒸気だよね？」

入り口の周りには、水蒸気がたくさん出ていた。

「…相当熱いわね、この中。」

あまり熱いのは好きじゃないんだけどな……

それに比べてカズキは…。

「うつつ、ワクワクしてきた！この中に何が待ち受けているのかわからないけど、誰も行ったことのない場所に僕達が挑む。

そう考えるだけでドキドキしてくる！

ヒナタ！頑張ろうね！」

「…うん！」

探険のことで、頭がいつぱいのような。

でも、カズキの笑顔を見ると、どんなことでも乗り越えられる気がする。

そう思ってしまうのは、なぜだろう？私達は、『熱水の洞窟』に入って行った。

その頃、プクリン達は……

「ホント！？ありがとう！これからよろしくね 友達友達」

「いえいえ、こちらこそよろしくお願ひします。」

「（くそっ！俺様の作戦が……！）」

ワインとプクリンが話してる間、ドクローズの三匹は、小声で文句を言っていた。

「ねえ、暇だから遊ぼ」

「！？お、おまつ！何を……ぎゃあああ……！」

ドクローズは、ルナに遊ばれていた。

もう半分は来ただろうか？

私達は、広いスペースに出ていた。

グオオオ……

「ん？なんだろう？」

カズキが呟く。

何？この音……。

グオオオオ……

「何か…聞こえ、た……？」

これは……声？何かが吠えているような……そんな声。

「……気のせい……だよな？」

あと少しだし、頑張ろうね！」

「う、うん……。」

そうは言っても、やはり私には辛い。

予想どおり炎タイプのポケモンが多く、草タイプの私は、若干カズキに頼り気味になってしまった。

グオオオオ……

「今の聞こえた!？」

「ええ。」

この先に何かいるのは、間違いなさそうね。

「気のせいじゃなかったんだ……。」

怖いけど……せっかくここまで来たんだ！進もう、ヒナタ！」

「もちろん！」

まとわりつく不安を振り払い、私達はさらに奥へと進んで行った。

しばらく進むと、また広い場所に出た。頂上だろうか？

「……何か……妙な感じがする……。」

「うん。空気が張り詰めてるっていつか……とにかく、危険な予感がする……。」

何だろう……何か、とてつもなく恐ろしい存在を……感じる……。

グオオオオオオーッ!!

「ひい! さっきの声だ!」

グオオオオオオーッ!!……!!

「な、何か……。」

「何か……近づいてくる!」

ドシン! ドシン!

「わわっ! あ、あれは……石像の……!?!」

「伝説では、眠ってるはずなのに!?!」

「グオオオオオオッ!」

びりびりと身体を突き抜けるような恐怖が、私達を襲う。緊張感が、その場を包んだ。

「ひええ……。」

「貴様等！ここを荒らしに来たのか！？」

「ち、違うよ！僕達はただ、霧の湖に行きたくて……」

少し怯えながらも、カズキが言い返す。

「霧の湖だと！？」

我が名はグラードン！霧の湖の番人だ！
侵入者は生きては返さん！！」

「ひい！……い、いや、逃げちゃダメだ！勇気を出さなきゃ！」

カズキ……。

私でさえ、圧倒的な威圧感で逃げ出しそうになったのに……。成長したわね。

私も頑張らなくちゃ！

「覚悟っ！！」

グオオオオオオオツ！！！！！！」

グラードンが雄叫びを上げる。

今、戦いの火蓋が切って落とされた！

「食らえ！地震！」

かなり強力な地震が迫ってきた。

私達はジャンプで回避し、反撃した。
しかし、ほとんど効いてないようだ。

「ソーラービーム！」

「くっ！」

私達はいったん岩影に逃げる。

「さすが伝説のポケモン。

強さが圧倒的ね……。」

「感心してる場合じゃないでしょ!？」

カズキに突っ込まれた。

でも、この状況で、どうやったらグライドンを倒せるか……ん？

「（少し……濡れてる？）」

壁からほんの少しだが、水が流れていた。

「（グライドンは、自分のことを“霧の湖の番人”と言った。ということは、湖が近くにあるのか？）」

この奥に水脈があるのかもしれない。これを利用すれば！

「（かなり固そうね……。」

そうだ!）」

私は、グライドンの前に飛びだした。

「!？何してるのヒナタ!？」

「カズキはそこで援護をお願い!」

「えっ?…よくわからないけど、わかった!」

説明してから飛び出すんだった、と少し後悔しながらも、作戦を開始した。

「ソーラービーム!!」

私は、グライドンのソーラービームを必死に避ける。

避けきれないものは、私の攻撃とカズキの援護で迎撃し、確実に壁を壊していった。

「（早く溜まって!）」

私の狙いは、水脈の水を湧きださせ、グライドンの立っている場所に溜めること。

この辺りの土は固いみたいだけど、水でぬかるませ、グライドンの体重を加えれば……!

「……!?!」

「（来た!）今よカズキ!大技決めるわよ!!」

「そういう事か!わかった!」

グライドンがバランスを崩した際に、一気に間合いをつめる。

「ソーラービーム!!」

「オーバーヒート!!」

グライドンの特性『日照り』の効果で、速く高威力の技を至近距離で当てたため、グライドンは倒れた。

「や、やった！」

「グライドンを、倒した！！」

飛び上がって喜ぶ。

信じられない…伝説のポケモンに、勝った！！
喜びに浸っていた、その時！

「「！？」」

急にグライドンが光に包まれたと思うと、消えてしまった。

「消えた！？」

「まさか“あれ”を倒すなんて……」

今度は声が聞こえてきた。

「誰だ！？」

「私はユクシー。霧の湖を護るもの。」

先ほどグライドンがいた場所に光が集まったと思うと、精霊のようなポケモンが姿を現した。

「この先へは行かせません。記憶を消させてもらいます。」

「なんだって!?!」

ここに来た時に感じた懐かしさ、そして記憶を消すというユクシー。もしかしたら、私は以前ここに来て、ユクシーによって記憶を消されたんじゃないだろうか。

「ユクシー、聞きたいことがあるの。」

以前ここに人間が来たことがない?そして、記憶を消した覚えはある?」

これで答えが肯定ならば、少し希望が見えてきたというものだ。しかし、答えは違った。

「……いえ、ここに人間が来たことはありません。」

それに記憶を消すといっても、湖に関する記憶だけです。すべての記憶を消す力は私にはありません。」

「そっか……」

「ヒナタ……。」

やっぱりそう簡単には行かないか……。

「……貴方達は悪いポケモンではないようですね。着いてきて下さい。」

そう言って奥に進んで行った。

私達は一度顔を見合わせると、後に着いていった。

辺りはすっかり暗くなっていた。
ずっと洞窟の中にいたから、気付かなかった。

「もう夜なので、少し見ずらいですが、御覧下さい。
ここが霧の湖です。」

ユクシーの言う霧の湖は、一瞬言葉を失うほどのとても美しい景色
だった。

「凄い！こんな高台にこんな大きな湖があるなんて！」

「それにバルビートやイルミーゼが飛んでて、ホント綺麗…」

バルビートやイルミーゼの光で、さらに美しさを増す湖。

「ここは、地下から水が絶えず湧き出ること、大きな湖になって
いるのです。」

湖の真ん中にあるものが見えますか？」

「うん。あの青緑色の光でしょ？」

「前に行つてよく見てください。」

光っている場所にあつたのは、どこか不思議な感じがする歯車だっ
た。

…何だろう…あれを見ると胸騒ぎがする。

このドキドキは、何？

「何だろう、あれ？不思議な感じがするけど……」

「あれは、時の歯車です。」

「「時の歯車！？」」

つい大声を出してしまった。

ユクシーはゆっくり頷き、歯車に視線を移す。

「あの時の歯車を護るために、私はここにいるのです。」

これまでも多くの者が侵入してきましたが、そのたびに幻影で追い払ってきたのです。」

「幻影？」

そう言えば、あれはなんだったの？」

「あのグラードンは、私が念力で創りだしたものです。」

このように……」

辺りが一瞬光った。

「うわあああ！！？」

光が消えると、そこには先程倒したはずのグラードンが立っていた。

「驚くことはありません。」

先程も言いましたが、これは私が創りだした幻なのです。

貴方達のように、幻影に打ち勝ちここに到達する者も少なからずい

ました。

そういった者達には、今度は私が記憶を消すことによって、「ここを護ってきたのです。」

ずっと、ずっと長い間、そんなことしてたんだ……
それがユクシーの使命というものだろうか？

「時の歯車かぁ 残念」

「「!?!?」」

その時、背後から、聞き覚えのあるのんびりとした声が聞こえてきた。

「さすがに時の歯車は持って帰っちゃダメだもんな」

「僕としては、持ち帰ってじっくりと調べてみたいものですが……」

「残念残念」

「お、親方様!?!?それに、ウィンさん達も」

「いつからここに!?!?」

今までまったく気配を感じなかったんですけど!?!?

「わぁ〜!?!?すごい」

ちよっと!?!?無視しないでよ!

「この方は？」

「私達のギルドの親方です。」

「初めまして」 友達友達

わあ〜！君凄いね 友達友達」

幻影だつてわかつてるのかな……

「それにしても、素晴らしい景色ですね。」

「うん 来てよかったよ」

「やっと着いた……」

他の弟子達が到着したようだ。

「って……ぎよええええ〜！！！！？」

「ぐぐぐ……ぐウウ……」

「はつきり言つてよ！グラードンってえー！！」

「キャー……！！！！！！」

……まあ、目の前にグラードンがいれば、誰でも驚くわよね。

「へ、ハイ！おいら食べてもまずいぞ！食わないでくれー！！」

「ぎゃああああー！！あ、あっしもでゲスよ〜！！！！」

ぎゃあぎゃあ騒いでるところに、ひょっこりとプクリンが姿を現した。

「やあみんな どうしたの？」

「お、お、親方様〜！」

「あつ、噴き出し始めました。」

『…………へっ？』

ユクシーの声に湖を見ると、水が噴き上がっていた。

「綺麗……………」

「この湖は、時間によって間欠泉が噴き出すんです。まるで噴水のようじ。」

そして、水中からは時の歯車が、空中からはバルビートやイルミィゼ達が噴水をライトアップして、あのような美しい光景になるのです。」

「きつと、霧の湖のお宝って、この景色のことだったんだね。」

私達は、しばらくの間この美しい光景に魅入っていた。

「色々とお騒がせしました ホントに楽しかったよ
ありがとう 友達友達」

間欠泉が噴き出してからどのくらい経っただろうか？
結構な時間が経った気がする。

「私は貴方達の記憶は消しません。貴方達を信頼しているからです。
ですので、ここでの事は秘密にしていただけではないでしょうか？」

「うん、わかってるよ

最近、時の歯車が盗まれる事件もあって、物騒だしね。このこと
は誰にも言わないよ
ブクリンのギルドの名にかけて！」

「よろしくお願いします。」

「それじゃ、僕達はそろそろおいとまするね
ペラップ、号令を！」

「はい！」

それじゃあみんな ギルドに戻るよ」

『おおーっ！！』

みんな一斉に手をあげ、ギルドに戻るのだった。

第十四話：霧の湖の宝物（後書き）

ヒナタ

「遠征もこれで終わりか……」

カズキ

「ウインさん達ともお別れだね……」

それはわかりませんよ？

カズキ

「！？それ、どういう意味！？」

それはまたのお楽しみです。それでは！

第十五話：ウィンとルナの秘密（前書き）

第十五話完成です。

第十五話：ウィンとルナの秘密

「起きろおおおお！朝だぞおおおお！」

「み、耳があ！」

耳を押さえてうずくまるカズキ。久しぶりの一撃は、かなり効果があつたようだ。

私も危うく食らうところだった……

「大丈夫？さっ、行くわよ？」

「うん……。」

「みんな！朝礼の前に、新しい仲間を紹介するよ」

周囲が騒めいた。まだ眠そうなカズキも、ぴくりと反応する。

「こっちに来てくれ」

梯子から二匹のポケモンが降りてきた。

みんな、一瞬言葉を失う。

そのポケモンとは……

「お久しぶりです、皆さん。」

今日から、チームクレスントとして、ここに弟子入りしたウィンで

す。

改めてよろしくお願いします。」

「パートナーのルナです！よろしくね」

私はまだ驚いていた。

まさか、弟子入りしてくるなんて、思わなかったから……

「霧の湖であった者も多いだろうが、仲良くしてくれ

それと、皆遠征で疲れてると思うので、今日はフリーとする。各自自由に過ごしてくれ。

では、朝の誓いの言葉、始め！」

『ひとつ！仕事は絶対さぼらない！』

『ふたーつ！脱走したらお仕置きだ！』

『みつっー！みんな笑顔で明るいギルド！』

「よし！それでは、解散」

朝礼が終わった瞬間、弟子達は皆、ウイン達に声をかける。もちろん私達も。

「ウインさん、ルナさん。

これからよろしくね！」

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

それと、呼び捨てでいいですよ？僕達は、あなた方の後輩なんですから。」

そう言っつて微笑む。

とても優しい笑顔だった。

しばらくして、みんなは外に出ていった。

グレッグルやチリーンは残っていたが……。

何をしているのか聞いてみたが、グレッグルは

「グへへ」と笑うだけだし、チリーンは

「治療室の整理を」と言っつて、とても忙しそうだった。

せっかくの休みなんだから、休めばいいのに……とも思ったが、チリーンはこちらの方が落ち着くらしい。

やっぱり尊敬するわ。

「ねえヒナタ。僕達はどうしよっか？」

「うーん……そうね……」

特にする事ないし……

思案していると、声をかけられた。

「少しお時間よろしいですか？」

「え？あつ、ウィンさ……ウィン。どうしたの？」

「ちょっと、お話したいことがあります。」

「？わかったわ。じゃあ、海岸にでも行きましょっか。」

私達は、海岸に向かった。

「最初に言っておきます。これから話すことは、すべて本当のことです。」

どうか、驚かないで聞いてください。」

海岸に着くと、ウインは真剣な目で言ってきた。
私は少し緊張してきた。

「まず始めに、はっきりと言いましよう。
僕達は、過去から来たポケモンです。」

「「え……………ええー!!」」

理解するまで数秒かった。

「か、過去からって……………!
ええ〜つまり、タイムスリップしてきたって事!!?」

「そつだよ。」

そんなことありうるのか!?
と、とにかく落ち着こう。

「僕達がこの時代に来た理由は、ヒナタさん。貴女を手助けするためです。」

「私を、手助けする？どうして？」

「それを説明するには、僕達のいた時代より、さらに昔の話をしなければなりません。」

ウインは、一度空を見上げると、話しだした。

「昔、正確にはわかりませんが、約千年前の話です。この世界は、人間とポケモンが共存していました。」

「人間が！？この世界に！？」

「うん。昔、人間とポケモンは、仲良く暮らしていたの。」

「しかし、いつからか人間の心は荒み、争うようになった。それはいつしか大きな戦争になった。」

「その戦争によって、人間はほぼ死に絶えたの。あとに残されたのは、ポケモン達と荒れた大地、そして、不安感だけだった。」

そんなことがあったんだ……。

じゃあ、私は生き残っていた人間の子孫だったのかな？

「人間という先導者を失い、ポケモン達は途方に暮れていた。それを救ったのが、フィンソンという銀色の毛並みのキュウコン。ルナの母親だった。」

「えっ！？」

「気付かない？わたしも少し銀毛が交じってるんだよ？」

……確かによく見ると、金色の毛に交じって、ほんの少しだけ銀色の毛があった。

「救ったって、何をしたの？」

「ポケモンだけの国を創ったんですよ。」

人間の残した書物などを読み漁り、知識を身につけてね。」

ということは、今のこのポケモンだけの世界があるのは、ルナのお母さんのおかげって事か。

「これにより、皆人間の真似をして暮らし始めた。」

しかし、かつて人間にひどい仕打ちを浮け、心を失ってしまったポケモンが、世界征服という名目で暴れ始めたんです。」

「アルテルって言うミュウツーで、ルナティックのボスでもあるの。」

「アルテルは、ポケモンの心を操ることができ、心の弱いものは、魂の抜けた人形のようになってしまふのです。」

「す、凄い力ね……。」

でも、そのルナティックと私は、何の関係があるの？」

いまいち話がつかめない。

「これから話します。」

まず、フィノンさんの先祖は代々、未来を予知する力を持っていて、

その未来の中にこんな事があった。」

「世界の時間が止まる時、ヒナタという人間とそのパートナーが世界を救う、と言うのがあったの。」

「「ええ!!?」」

わ、私が、世界を救う!?

そんな大それた事を、私が!?

少し混乱してきた……。

「ですが、アルテルの出現によって、未来が変わろうとしている。そこでセレビイの力を借り、ヒナタさんを手助けしようと考えた。しかし、僕達がいた時代もアルテルの支配によって、もう限界のところまで来ていた。」

「そこで、未来へ行く者とアルテルを倒すもので別れることになったの。

レジスタンス活動をしている場所は、いくつかあったけど、お母さんが作ったチームは三つ。その内の一つが、わたし達クレセント。」

「他のチームは、一つはアルテル討伐に、もう一つは僕達と一緒に、ヒナタさんの手助けをするために、未来に来ました。」

「ちょっと待って!それならもう一つのチームはどうしたの?初めて会った時も一匹だったし。」

一緒に来たのなら、なぜ一緒にいないのだろうか?

「前に言いましたよね?アクシデントで仲間とはぐれてしまったっ

て。

僕達が未来、つまり今この時代にくるのに、セレビィの作り出した『时空ホール』と言うトンネルのような穴を通ってきました。しかしその時、ルナティックの攻撃を受けたのです。」

「空間が不安定な場所で激しい爆発まで起こったから、生きているかどうかもわからないの……。」

ルナの表情が沈む。

「僕達の顔はわれていきますし、フィンソンの作ったチームですから、なんとしても消したいんでしょう。」

今では、アルテルと唯一互角に戦えるポケモンですからね。」

ウインは、ルナを慰めつつ言う。

「とにかく。ルナティックも何匹かこちらに来ているようですが、予定通り貴女を手伝います。」

僕達に出来る事だったら、何でも言うってください。きっと力になれるでしょう。」

「……………わかったわ。」

まだよくわからない部分はいけど、私は私に出来ることをする。ただそれだけよ。」

これから何が起こるか分からないけど、挫けずに頑張ろう！

「飲み込みが早くて助かります。」

おっと、もうすっかり夕方になってしまいましたね。」

辺りを見回すと、もう日が隠れるところだった。

「ギルドに戻りましょうか。遅くなったら、怒られちゃう。」

私達は、ギルドに戻っていった。不安は大きくなったけど、これからの日々はきつといい方向に傾くだろう、そんな感じがした。

第十五話：ウィンとルナの秘密（後書き）

やっぱり説明は難しい。

ウィン

「まあ、概ねいいんじゃないですか。」

ルナ

「カズキの台詞が異様に少ない気がするけど？」

勘弁してください……。

カズキ

「じゃあ、僕の出番を増やしてくれない？」

うう………努力します。

カズキ

「よろしいー！」

ヒナタ

「カズキって、こんなキャラだっけ？」

第十六話：来訪者 探検家ヨノワール（前書き）

第十六話完成です。

第十六話：来訪者 探検家ヨノワール

『みつつー！みんな笑顔で明るいギルド！』

「さあみんな 仕事にかかるよ」

『おおーっ！！』

いつもの朝礼を終え、みんなはそれぞれの仕事にかかる。
今日も頑張る！

「なに！？足形がわからないだと！？」

「だってえー、わからないものはわからないよう……」

気合を入れたその時、ドゴームの怒鳴り声が聞こえてきた。

「どっした？」

ペラップは異変を感じたのか、ドゴームの下へいく。

「足形不明のポケモンが来てるらしい。デイグダは優秀な見張り番だ。足形がわからないなんて、滅多にないんだが……」

「…え？親方様に会わせて欲しいんですか？

お名前は……ヨノワールさん！？少々お待ちくださいね。」

名前を聞いた瞬間、デイグダの音が驚きに変わった。
ドゴームもペラップも驚いている。

「よ、ヨノワールだって!？」

「ヨノワールって、あの有名な!？」

ヨノワール? 誰だろう?

「訪ねてきてくれてありがとう」

「いえいえ、滅相もない!こちらこそお礼を言わせてください。
かの名高きプクリンのギルドに来て、誠に光栄です。」

大きな手を激しく振るのは、プクリンよりも大きく、体全体が黒の
ポケモン ヨノワールだ。

「みんな、どうしたの？」

騒ぎを聞き付けたのか、上からキマワリと一緒にルナが降りてきた。
……あれ?

「ルナ、ウインは？」

あのいつも微笑を湛えているイーブイの姿が見えない。

「ここにいますよ。」

そう言って背中を見せる。

その背中には、ウインが俯せで乗っていた。

「ど、どうしたの!？」

「気にしないで。ウインは朝に弱いだけだから」

動けないほどのなのか?それならそれで問題のような……

「ところで、あれは誰?」

「!?!お前、ヨノワールを知らないのか!？」

「うん。」

ドゴームはとても驚いている。

さっきから何なんだろう?

「私も知りませんね。」

「僕も。」

「何!?!お前等も知らないのか!？」

とつても有名な探検家だぞ!」

そんな事言われたって……。それにうるさい。

「まあ無理もないですわ。知られるようになったのは、つい最近のことですし。」

突如彗星の如く現れて、一躍有名になった方ですから。

でも、それだけ探検家としての能力は凄いらしいですわ。」

「これは聞いた話だが、まず特徴的なのは、チームを持たず、一匹で行動する事だ。」

「一匹で？」

「よほど腕に自信があるんだろうな。」

さらに凄いのはその知識の多さだ。世の中で知らない事はないというくらい、色々なことを知っているらしい。」

「…それは……凄い、ですね……ぐう……」

これまで何も喋らなかったウインが、とつても眠たそうな声で言った。

…ていうかいい加減起きようよ。

「ま、まああくまで噂ですわ。でも、その知識で次々と探険を成功させているわけですし、あながち嘘ではないと思いますわ。」

ここでようやくウインが起きた。まだ眠そうだが……

「ねえ、ヨノワールって前にもここに来たことあるの？」

「デイグダ先輩が知らないんだから、ないと思うけど？」

「ヒナタの言うとおりだ。親方様も会うのは初めてじゃないかな？」

「ええっ！？あんなに仲良さそうなのにな？」

「親方様はああいう御方だからな。初めてだろうがなんだろうが、関係ない。」

ああ、わかる気がする。

ユクシーに会った時も、あんな感じだったし。

「みんな聞いて！」

その時、プクリンの声が響いた。

「このヨノワールさんが、しばらくトレジャータウンにいると思うからよろしくね

ヨノワールさんは有名だし物知りだから、色々聞きたい事もあると思うけど、そこは迷惑を掛けない程度にお願いね」

「みんな！有名だからって、間違ってもサインとかねだらないように！」

ペラップが釘を差す。

「……いや、サインくらいならお安い御用ですよ。私の知識など拙いものですが、それでも役に立てたら幸いです。何か相談などあれば、遠慮なく言ってくださいね。」

「こ、光栄でゲス！」

「こちらこそよろしくですわ。」

「それじゃあみんな 解散」

ペラップが言うと、みんなは仕事に戻った。

「それじゃあ、わたし達も行きませうか。ルナ、ウィン。」

「はい！」

「了解です。」

どうやらこれからダンジョンに行くようだ。

「キマワリ先輩達は、どこへ行くんですか？」

「親方様の命令で、クレストの実力を見るために『小さな原っぱ』へ。」

ヒナタ達はどこへ？」

「ヒメグマの依頼で、林檎を取りに林檎の森まで。そっちも頑張ってくださいね。」

「応援ありがとう じゃね」

キマワリ達は、梯子を上っていった。

「私達も行きませうか。」

「うん。」

「これでよしっ。」

さっそく林檎の森に来た私達。
以前はドクローズのおかげで、散々な目にあつた。
今思い出しても腹が立つ！

「依頼完了だね。」

「どうする？ちよっと早いけど、もう戻る？」

「せっかくだし、奥まで行きましょ？鍛えておかなくちゃ！」

「一応私達は命を狙われてるんだ。ウィン達が護るとは言ったものの、
護られてばかりでは申し訳ない。」

「じゃあ、行こっか。」

私達は、奥へと進んで行った。

「一方ウィン達は……」

「……おかしいですわね。」

「ええ。さっきからまったくポケモンに遭遇しません。」

小さな原っぱに来てからだいぶ経つが、まだ一匹もポケモンを見ていないのだ。

「つまんな〜い！」

ルナがただっ子のように言う。

「そんなに暇なら、オレ達が相手してやるよ。」

「え？」

前を見ると、ブラッキーとポリゴンという変な組み合わせの二匹がいた。

「確か……ガランにアランでしたか？」

「その通り。さあ、オレ達と勝負だ！」

ブラッキーのガランは、気合い十分だ。

「……知り合いですの？」

キマワリが聞く。ギルドのみんなには話していないから、なんとか誤魔化さねば。

「ちょっとバトル好きの友達ですよ。」

「ちょうどいいですし、ここで実力を見るといっけいのはいかがでしょう？」

相手の実力はスカイからよく聞いている。

油断さえしなければ、負けないはず。

しかし、倒すわけにもいきませんが……

「…そうですね。ではわたしは見ていますので。」

「わかりました。」

…そういう訳ですので、よろしくお願いします。」

「おう！行くぜ！」

戦いの火蓋が、切って落とされた！

「電光石火！」

「シグナルビーム。」

二匹は、同時に攻撃を仕掛ける。

「ルナはアランをお願いします。」

「うん！」

ウィン達は二手に分かれる。

「水の波動！」

ガランのスピードはかなりのもの。避けられないはずだ！
しかし、水の波動が当たると思った瞬間、ガランは姿を消し、目の前に現れた！

「おっと……」

「ジェットナックル！」

ウインは避けられず、回転しながら吹っ飛ばされる。だが、難なく着地する。

「さすがスカイの友人。強いですね。」

「まだまだ！ストリームナックル！」

ガランは容赦なく突進してくる。

「…アイアンテール！」

「何！？ぐわっ！」

ウインは攻撃をかわし、背中に尻尾を振り下ろした！

「くそ……ッ!？」

ガランは痛みで立ち上がれないようだった。

一方ルナは……

「シグナルビーム、チャージビーム、冷凍ビーム。」

「禁！」

続けざまの攻撃を必死に防いでいた。

「（反撃する暇がないよ）…。」

一応防いでいるが、守ってばかりでは勝てない。

「電磁砲。」

「!?!」

度重なる攻撃に耐えかねたのか、守りの壁が砕けた。

「チャージビーム。」

ここぞとばかりに攻めてくる。

「封!そして火炎放射!」

ルナは攻撃を一瞬止め、相殺した。
爆発が起こり、煙が視界をふさぐ。

「裂破!アイアンテール!」

白銀の鳥が煙を貫き、ルナが一気に駆け抜ける。
アランは避けようともせず、飛ばされた。

「…破壊光線。」

「嘘!?!」

空中でバランスが悪いのに、それは正確にルナをとらえていた。

「封、禁!」

なんとか威力を弱め、防いだ。

「もうちょっと遊びたかったけど、そろそろ止めだね。縛！」

「……………」

見えない綱がアランを拘束する。

「勝負ありですね。」

正確にはまだ倒してはいないが、動けないのだからもう戦えないだろう。

「凄いですわ！予想以上の実力ですわ！」

キマワリは拍手していた。

「ありがとうございます。」

あの、もしよければ、あの二匹と話していききたいのですが……………」

「わかりました。では、わたしは先に戻ってますわね。」

キマワリは帰って行った。

「……………なぜ殺さなかった？」

振り向くと、ガラランが怖い顔で睨んでいた。

「オレ達は動けない状態だ。バトル中でも殺せたくはない。なぜ殺さなかった！？」

まるで殺されて当然な言い方をする。

「殺せるわけじゃないじゃないですか。貴方はスカイの友達でしょう？」

「「!？」」

「その友達を殺してしまつては、こっちがスカイに殺されてしまいますよ。」

ウインはギルドへの道を歩き始めた。

「僕は信じています。貴方は、悪いポケモンではないと。」

やがてガラン達からは見えなくなつてしまつた。

「どいつもこいつも……」

「スカイの裏切りを報告したのは俺達なのに、あいつはまだ友達とってくれるのか……？」

空を見上げるアランは、どこか悲しそうだった。

視点を戻して林檎の森の奥地。

「えーと……」

私とカズキは困惑していた。理由は二つ。

一つは、どう見てもこちら辺じゃ見かけない、両前脚に妙なアクセサリーらしきものを付けたウインディが目の前にいること。

二つ目は、そのウインディが、ここはどこだ？、と聞いてきたこと。

「だから！ここはどこだって聞いてんだよ！」

「ここは林檎の森ですけど、貴方誰！？」

「林檎の森か。サンキューな！」

私の問いは軽く無視して、ウインディはどこかに行ってしまった。

「……………なんだったの？あれ……………」

「さあ……………」

あのウインディがスカイだなんて、ヒナタ達を知る由もなかった。

その日は、キマワリによるウインの活躍を着に、とても楽しい夕飯になった。

そしてその夜。

みんなが寝静まった頃、ギルドの前に三匹の影が集まっていた。

「ア、アニキー……………」

遠征では、散々でしたね……………」

その正体は、遠征の途中でいなくなっていたドクローズだった。

「あのキュウコンには参ったぜ…なんとか仕返ししたいが、正直俺達じゃかなわねえ……。チクショー。」

「ケツ、でもこのままじゃ気が治まらねえし……。」

「へへっ、こつなりや腹いせだ。代わりにリリーの奴らに仕返しできれば……。」

「お！そいつはいい考えだ！クククツ。」

よし、さっそく帰って作戦を考えようぜ。」

「「へい、アニキ！」」

不適な笑みを浮かべ、ドクローズはギルドを去っていった。

第十六話：来訪者 探検家ヨノワール（後書き）

なんかタイトルがメインに見えない……。

ガラン

「オレ達を登場させたからだろ？」

アラン

「出してくれたことには感謝するが。」

部活の友達が考えたキャラです。リクエスト通りとはいかないけど、御了承ください。

次回は、キャラ紹介の予定です。

第十七話：盗まれ続ける時の歯車（前書き）

第十七話完成です。

第十七話：盗まれ続ける時の齒車

朝。

朝礼が終わり、いつものように仕事にかかろうとした時、ペラップに呼び止められた。

「ああ、リリース。仕事の前に、頼みたいことがあるのだが…。」

「なんですか？」

「カクレオンのお店に行つて、セカイイチの入荷情報を聞いてきてほしい。」

入荷情報を？

「ギルドの倉庫には、たくさんのセカイイチが保管されている…はずなのだが。

ちよつと目を離すと親方様が食べてしまい、すぐになくなってしまふのだ。

セカイイチがなくなると親方様は…。」

かといって、セカイイチが底を突くたびに林檎の森まで行くのも大変だし。」

なるほど、確かにセカイイチがなくなつたら、大変なことになるのは目に見えている。

「それで、カクレオンのお店で売ってるようなら買っちゃおう、てわけだね。」

「その通りだ」

「わかりました。聞いてきます。」

「頼んだぞ」

トレジャータウンは、相変わらず活気に満ちていた。賑やかな広場を抜け、カクレオンのお店にたどり着く。

「あつ、ヨノワールさん！」

お店の前には、ヨノワールが立っていた。

「貴方達は、確かギルドの……」

「うん。僕達はリリーフ。」

ギルドで働いてるんだ。よろしく！

ところで、ヨノワールさんは何してたんですか？」

先輩は呼び捨てなのに、ヨノワールさんはしっかりさん付けなのね

……

「いや、お喋りしてただけですよ。」

「ワタシが呼び止めたんです。ヨノワールさん有名ですから。」

そしたらびっくり！本当に色々なこと知ってるんですよ！もう感激しました！」

少し興奮気味に話すカクレオン。

「へえ。みんなも言ってたけど、ヨノワールさんて物知りなんだね
！」

静かに微笑するヨノワール。

どこでそんな知識を身につけたんだらう？

「ところで、カズキさん達こそどうしたんですか？
もしかして、何か買いに来てくれたとか」

「悪いけど違います。実は……」

私は簡単に説明した。

「セカイイチですか…うん……」

「申し訳ありませんねえ」。セカイイチの入荷は、当分ないんです
よお。」

「そうですねか…。」

ペラッパガツカリするだらうな……

そんなことを考えていると、聞き覚えのある幼い声が聞こえてきた。

「ルリリ、早くー！」

「待つてよお兄ちゃん！」

通りかかったのは、いつかのマリルとルリリの兄妹だ。

「あれ？マリル君にルリリちゃん。」

「あ！カクレオンさん！」

「ヒナタさん達も！」

「どうしたの？そんなに急いで。」

「何かあったの？」

小首を傾げて聞くカズキ。

「ぼく達ずっと落とし物を捜してたんですが……」

「落とし物って、前に捜してた？」

「はい。水のフロートっていう道具です。」

「水のフロート？」

それはまた貴重な道具ですね。」

ここでヨノワールが話に入った。

「はい。ですので、ずっと捜してたんですが……。」

「そしたら！海岸で水のフロートが落ちてるのを見たって誰かが！」

「それで、海岸に急いでるんです！」

そんな会話をしている私達を、秘かに見ているものがいた。

「へへっ、これはいいこと聞いたぜ。」

「ケツ、さっそくアニキに報告だ。」

私達は、その存在に気が付かなかった。

「そっか、よかったね！」

「はい！（うん！）」

「さあ、早く行こう！」

「うん！お兄ちゃん！」

そう言っつて、海岸へと急いでいった。

「あの二匹の落とし物は、ちょっと気になってたけど、見つかったみたいだしよかったね。」

「そうね。」

でも、水のフロートってなんだろう？

「水のフロートというのは、ワタシも知らないですよ。どんな道具なんですか？」

「なかなか手に入らない貴重なもので、とても稀な道具といわれています。」

「ひゃー！そんなんですか？」
商売をしているワタシですら知らないんですから、相当珍しいもの
なんですね。」

カクレオンはただただ驚いている。

「さて、私達も戻ろうか。」

「そうだね。」

私達は、ギルドに戻っていった。

「え~~~~っ!?セカイイチの入荷予定はないだってえ!?
……うう、どうしよう!」

さっそくペラップに報告したのだが……予想以上にガツカリしてい
る。

「…あの、私達が取ってきましようか?」

少し遠慮がちに言ってみる。

「い、いや。お前達には別のことをやってもらいのだ。」

「別のこと?」

「ああ。『輝きの丘』という場所を調べてもらいたいのだ。」

……にしても、セカイイチはどうするか……」

「それなら、僕達が行きましょうか？」

そこに現れたのは、ウイン達だった。

「依頼で出てたんじゃなかったのか？」

「思ったより早くかたがつかまして。

この後は予定はありませんし、よろしければ行きますよ？」

そう言つて微笑む。

でも、私達がセカイイチの入荷情報を聞いている間にかたをつけて……早すぎないだろうか？

「そうか。ならちようどいい 頼んだぞ」

「お任せを。」

こうして、クレセントは林檎の森へ、私達は輝きの丘へと向かった。

「……ペラップ、ウイン達が来た時、妙に嬉しそうじゃなかった？」

「例えそうだとしても、今は目の前の仕事に集中すべきよ。」

今は輝きの丘を進行中。

ペラップのおかげでテンションは低めだが、一応ここは未開の地。慎重に行かなくては…。しばらく進んで行くと、そこに現れたのは、いつかのウィンディだった。

「貴方は……」

「よう！また会ったな！
で、ここはどこだ？」

「ここは輝きの丘です！
貴方は誰なんですか！？」

「そうか！サンキューな！」

ウィンディは、どこかへ行ってしまった。

「無視するなー！」

ウィンディが気付くはずもなく、その声は虚しくこだましていた。

さて、ギルドに戻って夕食の時間。

『いっただきま……』

「みんなっ！ちょっと待った~~~~~!!」

さあ食べようというその時、ペラップがストップをかけた。

「えー。夕飯を食べる前に、伝えたいことがある。」

「ハイハイハイ！」

「なんだよ！早く食べさせろよ！」

すかさずブーイングが入る。

「静粛に！静粛に！」

えー。これは先ほど入ってきた情報だが………時の歯車が……また盗まれたらしい。」

『なっ！？』

食堂にどよめきが走った。

「と、時の歯車ですか！？」

「また盗まれただつてえ〜っ！？」

「それって……霧の湖の……？」

誰かがぼつりと呟いた。

「いや、違う。盗まれたのは別の場所だ。

……しかし、盗まれた時の歯車はこれで二つ目だ。

みんなのことは信用しているが……でも、念を押しておく。

遠征で見たことについては、絶対に言わないように！わかったな！
！」

ペラップが強い口調で言う。

「当たり前だ！」

「言っわけないだろうが！！！」

「ユクシーとの約束を破るわけにはいきませんわ！」

「わかったわかった！みんな静粛に！」

では、待たせたな。

改めて、せーのっ！」

『いただきまー！すー！！』

「さっき…夕飯の時、また時の歯車被盗まれたって言ってたわよね
……………」

夕食を食べ終わり、部屋に戻ってきた私達。

「うん。いったい誰が、何のために盗んでるんだろう……？」

考えてもわからない。

でも…霧の湖で初めて時の歯車を見た時、何であんなにドキドキし
たんだろう？

いや、考えすぎか。私が時の歯車を見てドキドキするのは時の歯車

が盗まれたことは、あまりも関係ないよね…。

「今思うと、霧の湖に行ったことが随分昔のことのように思えるね。あの時の景色は綺麗だったなあ…。ユクシーは元気にしてるかな？」

カズキが何気なく呟いたこの一言。

この時感じた胸騒ぎ。何か嫌な予感がした。

「やはり…信用すべきではなかったんですね。」

絶景だった霧の湖には、あれだけたくさんいたバルビートやイルミ
ーゼがいなくなっている。

「こんなにも早く、別のポケモンがくるなんて……。
しかも、今度は本当に時の歯車を盗みにくるとは！」

ドサツ！と音を立てて、グライドンの幻影が倒れる。
あれほど強かったグライドンが、一瞬で倒された。
それをやった彼は、今ユクシーの前にいる。

「……………」

やはり、あの者達の記憶は消しておくべきでした。」

「……………なんのことかわからんが、違うな。」

俺は誰かに聞いてここに来たわけではない。俺はここに時の歯車があることを前から“知っていた”のだ。」

彼はひゅっ、と素早くユクシーの懐ふところに入る。
防御したにもかかわらず、バタリと倒れる。

「悪いが、貰っていくぞ！」

三つ目の、時の歯車を！」

第十七話：盗まれ続ける時の歯車（後書き）

どうしよう……。

ヒナタ

「どうしたの？」

一週間後に定期テスト、近日に資格試験が二つ、修学旅行の班長で色々……。

カズキ

「つまり、執筆する時間が少ないと？」

そう……。今日もテストがあるし……。

というわけで、少し更新が遅くなるかもしれませんが。

ヒナタ

「まあ、試験が終われば元に戻るわよね？」

そのつもりです。

第十八話：水のフロートを取り戻せ！（前書き）

第十八話完成です。

第十八話：水のフロートを取り戻せ！

『みつつー！みんな笑顔で明るいギルド！』

「さあみんな 仕事にかかるよ」

『おおーっ！！』

いつものように朝礼を終え、仕事にかかる弟子達。

私達も依頼を見ようと上にいこうとした時、ドゴームが私達を引き止めた。

「なんですか？」

「お前達にお客さんだ。

入り口で待ってるから、早く行ってやれ。」

「わかりました。」

私達にお客なんて、いったい誰だろう？

疑問に思いつつ、私達は入り口へ向かった。

「あつ、ヒナタさん、カズキさん。」

「マリル君にルリリちゃん。お客さんて、貴方達のことだったの？」

「はい。」

入り口で待っていたのは、先日会ったばかりのマリルリリ兄妹だった。

「実は、頼みたいことがあって。」

「頼みたいこと？」

「水のフロートを取ってきてほしいんです。」

「「え？」」

思わず声を上げてしまう。

海岸で見つかったって、言ってなかったっけ？

「実は、海岸に行ったら、こんなものが……」

そう言って差し出したのは、一枚の紙切れだった。

「何か書いてある。読んでみるね。え」と……

『海岸にあった水のフロートは、我々が預かった返してほしかったら“エレキ平原”の奥まで来い。しかし、力の弱いお前達が、果たしてここまで辿り着けるかな？クククッ。』

無理なら探検隊にでも頼むこつたな。ククククッ。』

……って、これって脅迫じゃないか!？」

こんな若い兄妹を脅すなんて!

「僕もすぐにエレキ平原に行ったんですが、あそこは電気タイプのポケモンが多くて、僕じゃ歯が立たなくて…何度行ってもすぐ倒されちゃうんです…。」

僕は、弱い自分が…悔しくて…悔しくて…うっっ…。」

ついに泣き出してしまった。

「…わかったわ。私達が、水のフロートを取り返すわ!」

「本当ですか!?!」

「もちろん!だからもう泣かないで。」

「!」

…はい!

ありがとうございます!」

「絶対取り戻してみせるよ!」

「そうと決まればさっそく準備よ!

行くわよ、カズキ!」

「うん!」

私達は、トレジャータウンに向かった。

「ありがとうございました！」

カクレオンのお店で道具を買い、準備をする。
電気タイプが多いということで、麻痺対策に癒しの種などを用意した。

「これでいいわね。」

「じゃあ、行きましようー！」

「うんー！」

いざエレキ平原へ行こうと歩きだした時……。

「おや？ヒナタさんじゃないですか。」

「ウイン。」

広場で、ばったりウイン達と出会った。

「これからダンジョンへ？」

「ええ。水のフロートを取りにエレキ平原へ。」

「そうですか。」

ウインは少し考える素振りを見せる。

ちなみにルナは、ゆらゆら揺れるウインの尻尾にじゃれている。

「…これは独り言として聞いてください。」

もしも、敵に囲まれるようなことがあったら、むやみに攻撃せず、まわりの環境を確認することが大事です。」

「は、はあ……」

……随分興味深い独り言で。

「一つ一つが弱くても、大勢いけば強大な力になります。そんな敵に少数で挑むときは、周りを利用すると勝率が上がります。」

「……高説ありがとう。
参考にするわ。」

ウィン達に別れを告げ、私達はエレキ平原へ向かった。

「ここね。エレキ平原は。」

ギルドを出発して約三十分。

私達は、エレキ平原へと辿り着いた。

「行くわよ、カズキ！」

「うん！」

私達は、エレキ平原に入って行った。

「それにしても、誰があの紙切れを置いたのかな？」

「…まあ、大体見当は付くけど…。」

ドクローズ。一回しめた方がいいかな？

物騒な考えを持ちつつ、進んで行くリリーフであった。

その頃、トレジャータウンでは……

「なるほどー。水のフロートがねー。」

カクレオンのお店の前で、マリル兄妹とカクレオンが話していた。

「僕達の代わりに取ってきてくれるって！」

「それはよかった！リリーフなら安心できるものね。」

「はい！ルリリも助けて貰いましたし、本当に感謝してます。」

リリーフは気付いていないが、結成してから一度も失敗していないリリーフは、トレジャータウンのみんなにとって、とても信頼できる存在だった。

「皆さん、どうかしたのですか？」

と、そこにヨノワールが話に入ってきた。

「あつ！ヨノワールさん！
いやね…実はこんなことがありまして……」

カクレオンは、マリル達のことを話した。

「なるほど、そんなことが……。
誰がどういう理由でそんなことをするのかわかりませんが、しかし
悪質な輩ですね。」

「でしょう！？こんな幼い子に意地悪するなんて！ワタシ達絶対許
さないですよ！」

カクレオン達は怒り心頭だ。

「それで、リリーフは今どこに？」

「エレキ平原です。」

「え、エレキ平原ですって！？」

ヨノワールは、ひどく狼狽する。

「エレキ平原は…この時期は確か……。」

リリーフが危ない！」

「えっ？」

「私これからエレキ平原に行ってきますー！」

「えっ！ちよっ…！ヨノワールさん！？」

急いで走っていくヨノワールを、カクレオン達は見ているしかできなかった。

「ここが一番奥かな？」

空は雷雲に覆われ、太陽の輝きは見えない。

「凄い…。今にも雷が落ちそう…。」

「そうだね…。早く水のフロートを…。ん？あれは！ヒナタ、あれ！」

「…あれは、もしかして！」

カズキが示した先にあったのは、水フロートと思われるリング状のもの。

マリル達の大切なもの。

「近づいてみよう。」

そう言って近づき、触れようとした次の瞬間！

「うわっ！？」

突然雷が落ちた。驚いて、大きく退く。

「ここへ何しに来た！」

「ここは、我々の縄張りだ！」

「誰がいる！？」

「隠れよう、ヒナタ！」

今だに姿を見せない声は、不適に笑う。

「隠れても無駄だ。

私の眼はあらゆるものを透視できる。

この眼で物陰に隠れた獲物を見付け…そして、仕留めるのだ！」

「…くっ！ここにいては危険ね。

貴方は誰！？姿を見せなさい！」

「フフフフ…」。

私の名はレントラー。

そして、ルクシオ一族のリーダーだ！」

現れたのは、一匹のレントラーと数多くのルクシオ達。

「（まずい！囲まれた！）」

「覚悟！」

レントラーの声に、ルクシオ達が一斉に襲い掛かってきた。

「くっ！つるのムチ！」

「火炎放射！」

とっさに反撃するが、数が数だけに返しきれず、攻撃を受けてしまふ。

しかも、一度体勢を崩すと次々に別の攻撃がくるので、なかなか立て直せない。

「ううっ……水平斬り！」

なんとか砂を巻き上げて相手の目をくらまし、脱出する。

「（数が多すぎる……）」

このままではやられる……。

そう思ったとき、ある言葉を思い出す。

『もしも敵に囲まれるようなことがあったら、むやみに攻撃せず、周りの環境を確認することが大事です。』

……そうだ。こんな大勢の敵相手に正面から挑んだって勝てっこない。周りを利用しなきゃ！

「カズキ！背中合わせになって！いったん防御に撤するわよ！」

「わかった！」

背中合わせになることによって、背後の敵を気にせず正面の敵に集中する。

私は攻撃を迎撃しながら周りを確認する。

「（…とは言っても、何も無いわね……。）」

何度も雷が落ちているのか、荒れた大地が広がっている。
あるとすれば、ちょっと大きめの岩があるくらい……。

「（でも、雷は利用できるかも。）」

かなり危険で、成功するかもわからないが、賭けに出てみることにした。

「カズキ！煙幕を使って離れて！」

「えっ！？わ、わかった！」

「つるのムチ！」

カズキが煙幕を放ったと同時につるのムチでレントラー達を捕縛する。

そして、煙幕がこの場を覆い尽くす前に、私は岩の上に乗った。
さらに空に向かってつるをピンと伸ばす。

「くっ！こんなもの！」

レントラー達はつるを振りほどこうとする。

「（うっっ、早く来て！）」

空は雷雲でいっぱい。さらに地上で電気技を多用し、避雷針を造れば――

ピカッ！！

轟音と共に雷がつるに落ちる。

「ぐわああああー！！」

つるを伝ってレントラー達に電流が奔る。いくら電気タイプでも、視界が効かない状況でいきなり攻撃がくれば、効果はあるはず。しかし、自分が受けるダメージも半端ない。

ビリビリ……

雷が終わる。同時に煙幕も晴れた。

「ヒナタ！」

カズキが駆け寄ってくる。私は痺れて動けなかった。

「大丈夫ヒナタ！？」

「う…ん。な、ん、とか…。」

痺れているせいか、うまく喋れない。

「もう。無茶だよ！自分に雷を落とすなんて！」

「う、めん、なさい。」

確かに無茶だった。

でも、他に思いつかなかったし、あのままの状態だったら、多分負けていた。

倒れているルクシオ達を見て、私達は完全に気を緩めていた。

「ぐおおおおお！！！！」

「！！！！？」

「おのれよくもツ！！雷！！！」

突如雄叫びをあげたレントラーは、起き上がると一気に攻撃してきた。

油断していたためとっさに動けない。

当たると思った。その時！

「待て！！！」

大きな手が、雷を打ち消した。

「この者達は、ここを荒らしに来たのではない！」

「よ、ヨノワールさん！？」

突如現れたのは、探検家ヨノワール。

ヨノワールは、チラッとこっちを見ると、小声で

「任せてください。」と言った。

「貴様！何者だ！」

「私の名はヨノワール！探検家だ！」

レントラーよ！貴方達の怒りはもつともだ！

特に！以前貴方達が受けた仕打ちを考えれば、無断で侵入するものに対して攻撃的になるのは当然だ！

また、この地が貴方達に安らぎをもたらしている事も、私は理解しているつもりだ！

この者達が縄張りに入ったことは詫びよう！

しかし！それは決して危害を加えるためではない！

用が済みしだい、我々はここを立ち去る！信じてくれ！レントラーよ！」

声を張り上げて説得するヨノワール。

レントラーは、驚いたような顔をする。

「……………」

わたし達のことをよく知っているのだな、ヨノワールとやら。

……よかるう。少し時間をやる。その間にここから立ち去れ。行くぞ。」

レントラーはルクシオ達を引きつれて去っていった。

「ありがとうヨノワールさん。」

「おかげで助かりました。」

私達はお礼を言う。

ちなみに癒しの種を食べたので、痺れは無くなっていた。

「でも、彼らはなんだったの？」

「レントラーとルクシオの一族です。」

彼らはいつも過ごしやすい場所を求め、絶えず移動しているんです。この時期のエレキ平原は雷が多いせいか、この時期は必ずここで生活するんです。

しかし、以前彼らはここでいきなり襲われたことがあり、その時だにぶ傷を負ったそうです。

それ以来ここに侵入する者は、やられる前にやる。いつしかそれが彼らの掟となったそうです。」

「へえ。」

カズキは感嘆している。また尊敬の念を強めたようだ。

「ヨノワールさん。これが水のフロートですか？」

ヨノワールが話している間にとってきたのだ。

早く出ていけって言われてるんだし、急がなきゃ。

「はい。間違いありません。」

「やった〜！これで届けられるね！」

でも、誰がこんな事を？」

「おそらくこれを仕掛けたものは、ここがレントラー達の縄張りとしていたんでしょう。そして、レントラー達と衝突するのを期待して置いたんだと思います。」

「そして、戦いが終わって疲れ切っているであろう私達をさらに痛め付けて、理由はわからないけど八つ当たりしようとしたんでしょうね。」

「そうですね！？そこにいる輩達！」

「そうよね！？ドクローズ！」

二匹同時に背後の岩影に向かって言い放つ。

しばしの沈黙。

「……………」

クククツ。わかっていたのか。じゃあしょうがない。」

そう言って現れたのは、意地の悪い笑みを浮かべたドクローズだった。

第十八話：水のフロートを取り戻せ！（後書き）

ヒナタ

「テストが終わってから更新するんじゃないの？」

そんなこと一言も言ってないよ？ただ遅れると言っただけで。

ヒナタ

「……もっほっとしよ。」

第十九話：盗賊ジュプトル（前書き）

第十九話完成です。

第十九話：盗賊ジユプトル

「なぜオレ達だとわかった？」

岩影から姿を現したドクローズは、少し不思議そうな顔をしていた。

「貴方達が考えそうなことだもの。わかって当然よ。それに、あの紙切れの文字を見れば、誰だってわかるわよ。」

「え！？僕わからなかったんだけど…。」

驚いたような顔で言うカズキ。少し呆れてしまう。

「お前の読みどおり、お前達がレントラーにスタボロにされたところで、さらに痛め付けてやろうと思っていた。」

「なぜそんな真似を？」

ヨノワールが少し低い声で問う。

「胸くそ悪いキュウコンにおもちやにされた腹いせだ！」

スカタンクは声を荒げる。

キュウコンって、ルナのことかな？

「つまり八つ当りですか。」

そんな理由でリリースを襲うとは。」

「ケツ、そんなのオレ達の勝手だ。」

そつぱを向くスカタンク。謝るつもりなど欠けらもないようだ。

「ところで、その作戦が見破られた今、貴方達はとうするつもりですか？」

「リリースだけならこのまま話を進めるが、天下のヨノワール様が相手となつちゃあ話は別だわな。ずらかるぜ！」

「「ハイ！」」

ドクローズは逃げていった。

「もう！今度という今度は絶対許さないからね！」

カズキの声は、平原中に響き渡った。

「しかし、残念でしたねアニキ。」

奥地から少ししたところで、ドクローズが話していた。

「クククツ、なに。次の機会にやってやるさ。」

「なにをやるのかな？」

ゾクリッ！と寒気がした。

ぎこちない動きで三匹が振り返ると、満面の笑みを浮かべたキュウコンがいた。

「心配で来てみたけど、まさかこんなことになってるなんてね。」

顔は笑顔だが、スカタンクはその笑顔に恐怖を覚えた。

「ま、待て！話せばわかる！！」

「話なんていいよ……また遊び相手になってもらうから」

「ちよっ、やめっ！アアアアア！！！」

「お兄ちゃん！水のプロートが返ってきたよ！」

エレキ平原から戻ってきた私達。

マリル達は、カクレオンのお店の前で待っていた。

「ルリリを助けていただいたうえに、今度もまた……本当にありがとうございました！」

「いやあ〜！」

でも、お礼ならヨノワールさんに言ってよ。」

「私達だけじゃ取り戻せなかったから。」

あの時、ヨノワールが止めてくれなかったら、あそこで力尽きていただろう。

「本当にありがとうございました！」

「ありがとう！ヨノワールさん！」

マリル兄妹はペコリとお辞儀する。

「いえいえ。よかったですね。水のフロートが戻って来て。」

「いや、さすがヨノワールさんですねでも、リリースも凄いと思いますよ。」

今回もしっかり依頼を成功させましたし、ルリリちゃんの時もすぐに場所をつきとめていち早く駆け付けましたしね。」

「ああ、あれはつきとめたって言うより、偶然ヒナタが夢を見て…。」

「夢？夢ってどういうものなんですか？」

気になったのか、ヨノワールが聞いてきた。

「あっ！そうか！ヨノワールさんならわかるかも。」

何かに触れた時にめまいに襲われて、過去や未来が見える、っていうものなんだけど……。」

「！……！」

そ、それは、時空の叫びでは！？」

「知ってるんですか!？」

まさか知っているとは!

もしかしたらあのことも…。

「ヨノワールさん。ちょっと相談したいことが…。」

私達はヨノワールを連れ、海岸に向かった。

「なるほど、ここに倒れていたわけですね?」

「うん。…ちょうどこの辺りだよ。」

カズキは実際に倒れていた場所に立って説明する。

「実は、元は人間だったらしいんだ。」

「ええっ!?!?人間!?!」

でも、どう見てもポケモンの姿をしていますよ?」

ヨノワールは、少し動揺している。

「うーん……そこが謎なんだよね。気が付いたらポケモンになって、しかも人間時の記憶もなかったんだって。」

「覚えていたのは、私が人間だったという事と、自分の名前だけでした。」

「な、なるほど。」

……貴方は自分の名前を覚えているとおっしゃいましたね。して、その名前とは？」

「ヒナタです。」

「ヒナタ……さん……。」

ヨノワールは、ゆっくりと繰り返した。

「どう？何かわかった？」

カズキが期待の眼差しを向ける。

「うーん……。残念ながらにも。」

「（あれ？さっき一瞬だけ、ヨノワールが笑ったような？）」

ゾクリ、と少しだけ寒気がした。

「ですが、夢については知っています。」

「本当ですか!？」

「はい。“時空の叫び”と言って、何かに触れた時、稀に時空を越えた映像が夢となって現れる、というものです。」

「ヒナタに……そんな能力が……。」

カズキはまじまじと私を見る。

「うん。よろしい！」

「えっ？」

「私もヒナタさんに協力しましょう。」

……まあ、正直に申し上げると私にわからないことがあるのは悔しい、と言っのが本音なんです。ハハハハ！」

「本当！？ヨノワールさんがついてくれるなら心強いよ！」

自然と笑みがこぼれる。

そんな私達の耳にバサリ、という羽音が聞こえた。

「あっ、ペリッパーだ。」

空を見上げると、急がしそつに空を駆けるペリッパーがいた。ペリッパーは、手紙を運んだりする配達員だ。

「いつもより多く飛んでるね。」

「何かあったのでしょうか。」

少し不安にかられる。

「お~~~~い！！！」

とそこに、聞き慣れた先輩の声が聞こえた。

「ビツパ先輩！？どうしたんですか？そんなに急いで。」

「はあはあ、召集がかかっているでゲス！ギルドの弟子はすぐに集まるようにとー！」

よっぽど急いでいたのか、息を切らしている。

「やっぱり何かあったんだ。」

「ギルドに戻るわよカズキ！」

「私も行きます。」

「急ぐでゲス！」

四匹はギルドに向かって走りだした。

「あ！もうみんな集まっているでゲス！」

ギルドに着くと、いつも活気のある弟子達が、深刻な表情で掲示板の前に集まっていた。

「あつ、ヒナタさん。かなり深刻な事態になってきました。」

ウィンが焦ったように言う。

「いったい何があったの？」

「時の歯車が……また盗まれたのだ……。」「

私の問いに答えたのは、苦々しい表情のペラップだった。

私は一瞬呼吸が止まったように思った。

「こ、今度はどこの？どこの時の歯車が！？」

「そ、それが……」

少し声を荒げて問うカズキ。

ペラップは、さらに表情を歪める。

「どうしたんでゲスか？何か言いにくいことなんでゲスか？」

「……まさか！」

私は周りの様子から確信した。

「そう。そのまさかですわ。」

今回盗まれたのは……霧の湖の時の歯車ですわ……。」「

「そ、そんな！あそこに時の歯車があることは、僕達しか知らないはずだよ！？」

『……………』

みんな押し黙る。その問いの答えは、誰にもわからないから。

「まさか…ギルドの誰かが？」

「カズキ！？」

「そんなわけあるか！！」

「みんな約束を破るようなポケモンではありませんわ！」

カズキの言葉にみんなから叱責がくる。

「……ごめん。そうだよな。」

誰かが秘密を漏らすなんてありえないのに、本当ごめん。」

「まあそう思うのも仕方がないことだ。我々が遠征にいった直後にこうなったわけだから…。」

「ちょ、ちょっと待ってください！

あそこに時の歯車があるなんて、私初めて聞きました！それに今回の遠征は、失敗じゃなかったんですか！？」

ああ、ヨノワールには失敗だったって言ったんだっけ。

「ごめんね。ちょっと訳があつて、ヨノワールさんには言えなかったんだよ。」

プクリンはシュンとしながら答える。

「すみません、ヨノワールさん。」

……ともかく、犯人はユクシーを倒し、時の歯車を盗んでいった。」

「ユクシーは!？」

ユクシーはどうなったの!？」

「大丈夫無事だ。今はジバコイル保安官に保護されている。」

「よかつた。」

ホツと安堵の息を漏らすカズキ。

「それで、犯人は誰なんですか？」

「ユクシーの証言から判明した。掲示板を見てみる。」

そう言われ、視線を掲示板に移す。

「こ、こいつが。」

「ジュプトルって名前なんだ。」

「いかにも悪そうな感じでゲスね。」

掲示板には、少しきつい目付きのジュプトルのポスターが貼っていた。

「このポスターは、先ほど一斉に指名手配されたものだ。」

「そっか。だからペリッパーがあんなにたくさん。」

「ジバコイル保安官も事態を重く見て、ジュプトルに多額の懸賞金をかけた。」

みんなも協力してジュプトル確保に全力を尽くしてくれ。
それでは親方様。さっそく号令を。」

「うん。それじゃあみんな！ジュプトルを捕まえるよ！プクリンの
ギルドの名にかけて、絶対捕まえるよ！！」

『おおーっ！！』

「プクリンさん。

事情は大体分かりました。ジュプトル確保、私もお手伝いしましよ
う。」

「あ、ありがとうヨノワールさん！」

「よし！ではこれからジュプトル捕獲の段取りを親方様と話し合っ
みんなは準備を整えてきてくれ。

準備ができたらまたここに集合。ではみんな！頑張っていくよ！」

『おおーっ！！』

先程より大きな声で気合いを入れる。

ギルドのみんなは、それぞれ準備にかかるのだった。

一通り準備を済ませてギルドに戻ると、ペラップからの説明が始ま
った。

ペラップとプクリン、そしてヨノワールで、ジュプトルが現れそう

な場所。つまり、時の歯車がありそうな場所の目星をいくつか付けたらしい。

そこで、グループに別れてそこを探索することになった。

ドコーム、ヘイガニは『東の森』へ。

ビツパ、ダグトリオ、キマワリは『水晶の洞窟』へ。

そして、私達とクレセントは『北の砂漠』へ行くことになった。

これ以上時の歯車が盗まれないように。

私達は北の砂漠へと向かったのだった。

第十九話：盗賊ジュプトル（後書き）

そろそろテスト休みに入ります。

ヒナタ

「さっき見たけど、結構範囲広いじゃない！ 本当に大丈夫!？」

母にそっくりだね、その性格。大丈夫ですよ。
それより、次回は驚くことが起こるかもよ？

カズキ

「何が起こるの？」

それは次回のお楽しみ。
それでは！

第二十話：命を賭けて！北の砂漠の戦い（前書き）

第二十話完成です。

第二十話：命を賭けて！北の砂漠の戦い

辺りには砂しか見えない。

照りつける太陽の下、私達リリーフとクレセントの四匹は、北の砂漠を進んでいた。

「暑い……。」

思わずそう呟く。

暑さには強いはずのカズキやルナまで疲弊しているのだから、相当暑いんだろう。

しかしウインは、若干ルナが寄り掛かっているにもかかわらず、平然と歩を進めていた。

「……ウインは暑くないの？」

「暑いですよ。」

しかし、今そんなことを言ったところで、余計に暑さを倍増させるだけですから。」

そう言っただけで微笑む。

この冷静さは見習わないとね。

時折起こる砂嵐に悪戦苦闘しながらも、私達は進んでいった。

「……ここが奥地かな？」

カズキが疲れたように言う。私もちょっとバテ気味だった。

ここの敵は地面タイプが多く、私とウインでほとんど倒してきたのだ。

「これは……流砂ですね。」

私がバテているのに対して、ウインは涼しい顔で言う。

「いったいあの小さな体のどこにそんな体力があるのやら……。」

そんな疑問を持ちつつも、辺りを見回してみる。

ウインの言うとおり流砂が所々にあったが、それを除けば何も無い場所だった。

「流砂があつて危険だけど、時の歯車は……ないみたいね……。」

でも、なんだろう？どこか懐かしい気がする……。

前にも感じたこの感覚に考えを膨らませていると、不意に後ろから声をかけられた。

「おい！お前等！」

その声に振り向くと、見知らぬブラッキーとポリゴンがいた。

「おや？ガランにアランじゃないですか。」

ガランにアラン。以前ウイン達が小さな原っぱで出くわしたという、ルナティックの一員だ。

彼らのことはウインに聞いていたため、敵だということはすぐに理解できた。

私とカズキは、戦闘態勢に入る。

「ま、待て！今日は戦いに来たんじゃない！」

「……………」

そんな私達を見て、慌てて言うガラン。

「じゃあ何しに来たの？」

「仲間にもらいに来た。」

「えっ？」

思わず目を丸くする。

「気付いたんだ。組織はやっぱり間違ってる。スカイは正しいって。でも、信じられるものが何もなかったオレ達は、組織を抜ける勇気を持ってなかった。」

「…だが、そのイーブイ……………ウインだったか？に勇気をもらった。」

「僕が…勇気を？」

ウインは首を傾げる。

「“信じている”。お前はそう言ってくれた。信じるものが何もなかったオレ達に、その言葉は救いの手としか思えなかった。」

「あの後、決意したよ。組織を抜けてアンタ達に着いていくと。だから頼む！オレ達を仲間にしてくれ！」

そう言い切ると、深々と頭を下げた。
その体は若干震えている。

「（プライドの高いガランがここまでするなんて……。まあ、答えははじめから決まっていますよ。）
もちろん。大歓迎ですよ。」

「ホントか!？」

ガバツ!と顔を上げるガラン達。

「ええ。これからよろしくお願いしますね。」

「…ああ!もちろんだ!」

握手をしようとガランが近づく。が、その時!

「ポイズングランド!」

「!?!?危ない!?!」

ウインがガランを突き飛ばす。それと同時に私達の立っている地面が、紫色に染まった。

「な、何!?!」

驚きに声を上げる。が、その時。

ぐらりっ……

「あ、れ？ちからが……抜けていく……」

身体にだんだん力が入らなくなり、とうとう動けなくなってしまった。

「こ、これは!？」

ウインのおかげで助かったガランが声を上げる。

「予想通り庇ったか。」

「!？」

アランの後ろの砂が盛り上がり、何者かが姿を現す。

「そして、やはり貴様等は裏切ったか!ガランにアラン!」

「ギフト!!」

現れたのは、見上げる程大きなドラピオンだった。

「前に失敗してから、どうも様子がおかしいと思って監視していたが、貴様等はくだらん情に流され、組織を裏切った。」

組織を裏切ったものは即処刑。よもや忘れたわけではあるまいな?」

「くっ……」

ガランは後退りする。アランは微動だにしなかったが……。ガランの様子から、彼もルナティックだと予想が付いた。そして同時に、かなりの実力者だということも。

「…怯えているのか？」

「だ、誰が!？」

口ではそう言うものの、その声は明らかに上ずっていた。

「なに、怯えるにはまだ早い。我は慈悲深いからな。チャンスをやろつ。」

「チャンス？」

「簡単なことだ。今我が痺れ毒で捕らえているターゲットを、今の場で葬るのだ。」

上もこれだけのターゲットを仕留めれば、文句は言えんだろつ。」

まさに究極の選択。

ここでギフトの言うとおりにすれば、先程着いていくと決めた相手の命と引き替えに自分達は生き残れる。

言うとおりにしなければ、自分達は間違いなく殺される。

いくら相手が一匹とはいえ、実力を見ればギフトのほうが強い。勝ち目はない。だけど、それでも!こいつらを殺すなんてできない!できるわけない!!

ガランとアランが選んだのは、ウィン達を殺して生き残るのでも、諦めておとなしく殺されるのでも、ましてや逃げることでもなかった。

「オレは……オレ達は……」

目の色が変わる。ガラン達は戦闘態勢に入った。

「テムエを倒し、生き残る！
行くぜ！ジェットナックル！」

「電磁砲。」

二匹の技が迫る。しかしギフトはその場から動かず、静かに言う。

「組織に戻る気はないか……残念だ。」

そうして大きな爪を備えた手を払い、電磁砲を防ぎ、さらにもう一方の手でガランを捕らえる。

「貴様等を抹殺する。」

そう言ってガランを投げ飛ばした。

ガランは為す術なく飛ばされ、アランを巻き込んで地面に叩きつけられた。

「ぐはっ！」

「……………」

苦痛に呻き声を上げるもすぐに立ち上がる。

しかしその目は、先程の怯えた目に戻っていた。

「本当に残念だ。情などというくだらん感情で組織を裏切るとは。」

ギフトは静かに歩み寄る。

「友情。信頼。そんなものは戦いにおいて何の役にも立たないということを、最後に身を持って知るがいい！」

ギフトが爪を振り上げる。
が、その時！

「させるか！！」

突風がギフトを襲った。思わず一步後退する。

「何者だ！？」

「俺様だ！」

風が止み視界が戻ると、ギフトに立ちはだかるように一匹のウィンデイが立っていた。

緑色の瞳に前脚に付けたリング状のアクセサリ。そして、その風を纏った姿は、この場にいる全員が知ってる存在。

「スカイ！！？」

「テメエ！よくも俺のダチを酷い目にあわせてくれたな！？」

突如風と共に現れたスカイは、明らかに怒っていた。
それこそ、今なら弱いものなら目を合わせただけで卒倒するくらいに。

「スカイ！何でここに！？」

「ダチがピンチだったのに黙ってみてられるか！

とにかく一緒にアイツ潰すぞ！
アランも黙ってねえでまともに動け！」

「あ、ああ……」

二匹が立ち上がったのを見ると、今度は私達の方を見る。
もうすっかり衰弱して、息をするのも苦しい状態だ。

「ルナちゃん、待ってる！？アイツを倒してすぐに助けてやるから！ついでにウインと場所を教えてくれたお前達も、助けるまでくたばるんじゃないぞ！？」

「…言われなくても………くたばりませんよ………」

苦しげながらもウインが答える。

それにしても、ルナ以外の態度が酷いのは、気のせいだろうか？
スカイはすぐにガラン達のもとに向かう。

「…ターゲットの一匹、裏切り者のスカイ。まさかそちらから出向いてくれるとはな！」

敵が一匹増えたというのに、ギフトはむしろ喜んでいようだ。

自分が不利になったというより、ターゲットがすべて目の前に現れたという喜びのほうが大きいらしい。

それとも、絶対に勝てるという確信でも持っているのだろうか？

「これからやられるっていうのに、随分余裕だな？」

「ふん！所詮裏切り者の貴様等に負けるなど、ありえんわ！」

「その言葉、後で後悔させてやるよ！」

スカイとギフトの間にバチバチと火花が散る。

「ガラン！アラン！“アレ”やるぞ！」

「“アレ”を！？だが、“アレ”は練習中で……」

「実戦でやってないだけで、技は完成してんだろ！？

アイツに一泡吹かせてやるうぜ！アランもいいよな！？」

「お、おう！」

「わかった。」

スカイの勢いに押されて、ガランもアランも頷く。

「こちらから行くぞ！ポイズングランド！」

ギフトが地面に爪を立てる。すると、地面が紫色に染まり迫ってきた。

ギフト自慢の必殺技だ。

「そう簡単に食らうか！風よ！」

スカイが叫ぶと風が集まり、三匹の身体を包む。三匹は宙に浮いた。

「何！？そんな使い方が！？」

ギフトは驚愕する。

彼もルナティックなのでスカイの能力については知っていたが、こんな使い方は見たことがなかった。

「組織を抜けて、少しは成長したんだよ！」

「くっ！」

空中に逃げられては、ポイズングランドは当たらない。

「ならばこれでどうだ。ミサイル針！」

ギフトが無数の針を飛ばしてくる。

「当たらねえよ！」

空を走るように回避する。

慣れているのか、動きに乱れない。

「ぬう……。避けてばかりでは勝てないぞ！」

「テメエは攻撃しても勝てねえじゃねえか！」

「減らず口が！」

「それで結構！」

強きに言葉で攻めるスカイ。

「さっさとくたばれ！」

そんなスカイの言葉に苛立ったのか、現れてから一步も動いていなかったギフトが、初めて動いた。爪を振り上げ、一気に距離を詰めてきた。

「（かかった！）トルネードウォール！！」

最初からこれを狙っていたスカイは、風の壁で攻撃を弾く。ギフトは大きくよろめいた。

「ガラン！アラン！今だ！」

スカイが叫ぶ。

それに答え、ガランとアランが同時に叫んだ。

「「天国と地獄！！」」
（ヘルランドへサン）

叫んだと同時に、二匹の身体から黒と白のオーラが発せられる。最初に動いたのはアランだった。

「シャイニングレーザー！」

始めに使った電磁砲なんて目じゃないくらい高威力で太い、白のレーザーを放つ。

それはギフトの腹を直撃する。

「ガハッ！」

予想外の上、バランスを崩していたギフトは、為す術もなく空高く打ち上げられる。

しかし、攻撃はこれで終わらない。

打ち上げられた先には、黒いオーラを纏ったガランが、待ち構えていた。

「ダークネスレーザー！」

拳の先から真っ黒のレーザーが放たれる。

同じ場所に当たり、今度は猛スピードで落ちていく。

この技のコンセプトは、一度天国に送った後、一気に地獄に突き落とす、らしい。

本当にそうなっているかはともかく、威力は絶大だった。

「グエツ！」

変な呻き声を上げ、ギフトは地面にめりこんだ。

「見たか！これが俺達の必殺技だ！」

ほとんど何もしてないスカイが、ビシッ！と言い放つ。

ギフトはそれに答えず、光の粒子となって消えてしまった。

「……………！！？」

その光景に私は驚くが、もう驚く余裕はなかった。

「……………」

ガラン達は、静かにそれを見届ける。

こうなることはわかっていたらしい。

スカイの手を借りたものの、ガラン達は恐怖を乗り越え、見事にこの勝負を制したのだった。

第二十話：命を賭けて！北の砂漠の戦い（後書き）

というわけで、ガランとアランが仲間になり、さらにスカイがウィン達に合流しました！

スカイ

「やっと会えたぜ！」

ガラン

「これからよろしくな！」

アラン

「……………」

テストやらなんやらで、少し更新が遅れ気味になってますが、なるべく早くしようと思えますので、応援よろしくお願いします
次回はキャラ紹介……だと思えます。

スカイ

「なんだそりゃ…………？」

設定がまだ決まってない…………。

スカイ

「おいおい…………。」

第二十一話：ジュプトル登場！地底の湖にて（前書き）

第二十一話完成です。

第二十一話：ジュプトル登場！地底の湖にて

「しっかし、また会えてよかったぜ！」

嬉しそうに言うスカイ。

スカイがなぜか大量に持っていた、オレンの実や癒しの種などのおかげで、すっかり回復した私達。
感動の再会に、スカイは上機嫌だ。

「でも、あの時は焦りましたよ。爆発まで起きたんですから。」

「結局誰も死ななかつたみたいだ。敵も味方もな。」

「ひとまずサン達が無事で何よりです。」

それから約一時間ほど話し続け、ようやく本来の目的に入る。

「でも、見る限り流砂しかないし、本当に時の歯車があるのかしら？」

「発想の転換だ。俺に任せろ！」

スカイは、自信たっぷりと言う。

「流砂しかないなら、この流砂に何か秘密があるってことだろ？
竜巻！」

スカイは前に出ると、流砂にむかって竜巻を放つ。
風で巻き上げられた砂が、視界を覆う。

「…………！？これは!？」

つぶつていた目を開くと、先程まで流砂があつた場所に大穴が開いていた。

「ほらな？言つたとおりだろ？」

「確かにそうだが……やり過ぎだろ！」

ガランがスカイを殴る。

辺りは最初に来たときに比べると、酷い有様になっていた。

「つてえ〜…………いいじゃねえか！別に！」

「あまり良くはないですが、とりあえず道が見つかったことですし、先に進みましょう。」

ウインの発言に、それもそうだな、と進むことにした。

スカイって大胆だな〜、とか思いつつ、私達は『流砂の洞窟』に入つていった。

中は意外に広く、敵ポケモンも北の砂漠より強かったが、完全に回復したうえにスカイ達も加わつたため、ほとんど苦戦はしなかった。唯一砂嵐に苦戦するも、順調に進んでいった。

「うわあ〜！凄い！」

ようやく奥地に到達した私達。

ついで早々、カズキは感嘆したように声を上げる。

その視線の先には、地底にもかかわらず、綺麗な湖が広がっていた。

「こんなところに湖があるなんてな。」

「驚きだぜ…………。」

「……………」

「…なんか喋れよ！アラン！」

何も言わないアランに、スカイが突っ込む。

「……………何か光ってる。」

「え？」

その発言によく目を凝らしてみると、湖の中央から仄かな光が発せられていた。

「あれは……………時の歯車？」

「もっと近くに行ってみよう。」

湖に近づこうとした、その時。

「待て！なんなの！？お前達は！？」

突然、どこからか声が聞こえてきた。

「だ、誰！？」

「ここへ何しに来たの！？」

「ぼ、僕達は時の歯車を探しに……」

「時の歯車！？あれに触れてはダメだ！」

カズキの言葉を遮り、一匹のポケモンが、湖から飛び出した。

「私はエムリット。」

地底深くのこの湖で、時の歯車を護る者！」

「時の歯車を……護る者！？」

ということは、ユクシーと同じ！

「時の歯車は渡さない！行くよ！！」

「うわぁ！？」

「わぁっ！！」

エムリットは、いきなり念力で攻撃してきた！私とカズキは寸でるところで後ろに回避する。

「大丈夫ですか!？」

「ええ、なんとか。でも、私達敵だと思われてるみたい。」

思い込んでいるだけだから、下手に攻撃するわけにもいかないし…。

「エナジーボール！」

「!?!火炎放射！」

スカイが攻撃を相殺する。

「くっ!こうなったら僕が時間を稼ぎます。その間に解決策を見つけてください！」

ウインはそう言うと、エムリットの注意を自分に向けた。次々に繰り出される攻撃を、ギリギリで回避していく。

「(解決策といっても、どうすれば……)。」

あの様子じゃ話を聞いてくれそうもないし……気が進まないけど、倒すしかないわね……。

「止むを得ないわ!戦いましょう!」

「わかりました!」

「やるしかねえか!」

みんなで一斉に攻撃を繰り出す。

「マジカルリーフ！」

「火炎放射！」

「水の波動！」

「エナジーボール！」

「竜巻！」

「悪の波動！」

「チャージビーム。」

私、カズキ、ウイン、ルナ、スカイ、ガラン、アランの攻撃がぶつかる。

小爆発がおき、爆風が視界を塞いだ。

視界が戻ると、エムリットが倒れていた。

「うぐっ…うぐぐぐっ……。でも、渡さない…。時の歯車だけは！」
唸りながらも、ゆっくりと起き上がる。

「だから！僕達は時の歯車を盗みに来たんじゃないってば！」

「とぼけるな！私はユクシーからテレパシーで聞いてるんだよ！！
霧の湖の時の歯車も盗まれたことを！」

あれはお前達の仕業だろう!？」

「違う! 私達じゃない!」

「じゃあ誰だというの!？」

言い返そうと口を開いた、その時!

「それは多分:俺の事じゃないかな。」

『!??』

突如背後から、聞き覚えのない声が聞こえた。
バツ!と振り返ると、そこにいたのは……

「ジュ、ジュプトル!」

そう。そこにいたのは、ポスターで見た顔と同じ。盗賊ジュプトル
だった。

ジュプトルは、エムリットの前に立つ。

「悪いが、時の歯車は貰っていくぞ。」

「い、嫌よ!時の歯車は、絶対に渡さない!」

「そうか……ならば仕方がない!」

冷淡な声で言うと、エムリットを地面に叩きつけた。

「づづづ!」

「エムリット!!」

「お前は先程の戦闘で相当なダメージを受けているはずだ。無理をするな。」

さっきと変わらぬ口調で言うと、時の歯車を盗ろうと湖に近づく。

「その先へは行かせない!」

「時の歯車は渡さないよ!」

私とカズキは、ジユプトルの前に立ちふさがる。
が、しかし。

「……………悪いな。」

ポツリ、とそう言うと、見えないほどの速さで、電光石火をしてきた。

私達は、為す術もなくやられてしまう。

「ぐっ!は、速い…!」

「お前達に恨みはない。勘弁してくれ。」

「勘弁できませんね。」

ジユプトルの言葉に反発したのは、ウインだった。

「僕は仲間を傷つけられるのが大嫌いなのですよ。」

場合によっては、死をもって償ってもらいます。」

凄みをきかせて言うが、ジュプトルは動じない。

「…ならば裁きを受ける前に、動きを封じておこう。」

そう言って何かを取り出す。

その青く丸い物体は、不思議玉と呼ばれるものだった。

「縛り玉！」

不思議玉には種類があり、ジュプトルはその中の“縛り玉”を使った。

“縛り玉”とは、周囲の敵を硬直させ、しばらくの間自由を奪ってしまう、という道具だ。

「くっ！」

「俺には時間がないんだ。悪く思わないでくれ。」

そう言うと、湖に飛び込んだ。

「ぐっ、時の歯車が…盗まれちゃう……。」

「す、すまない……。ユクシーが言っていたのは、アイツだったんだね……。疑って、ごめん……。」

体中に傷を負いながらも、なんとか立ち上がる。

だが、次の瞬間。

ゴゴゴゴゴッ！！！

急に地鳴りが起こった。

「わわっ！！ど、どうしたの急に！？」

「アイツが時の歯車を盗ったんだ！そしてそれにより、この辺り一帯の時間も止まる！」

湖は、歯車があったところを中心に、どんどん灰色になっていく。

「早くしないと、私達も吞まれてしまう！」

「でも、ウイン達は動けないんだよ！？」

灰色の侵食は速い！縛り玉の効果が切れるのを待ってる暇はない！

「くっ、一か八かだ！俺の周りに集まれ！」

スカイが声を張り上げる。

私達は、素早く移動した。

「風よ！力を貸してくれ！」

スカイが叫ぶと、嵐のような風がこの場にいる全員を包む。

身体が思うように動かないにも関わらず、スカイは風を操り、見事に流砂の洞窟から脱出した。

「ハア…ハア…もう、ダメだ……。」

安全な場所まで避難すると、スカイはヘタリ込んでしまった。風を操るのは、体力を消費するらしい。

もう縛り玉の効果は解けたが、スカイは自力で歩けそうになかった。

「スカイ。よく頑張ってくれました。早くギルドに戻って、休みましょう。」

その後、身体の大きいスカイをみんなで協力しながら運び、ギルドに帰るのだった。

「おお、帰ってきたか。遅いから心配したぞ。」

ギルドに帰ると、ペラップが入り口で待っていた。辺りはすっかり暗くなっている。

「で、そいつらは誰だ？」

「実は、こんなことがあります……。」

ウインが簡単に事情を説明する。ルナティックのことは言わなかったが。

「なるほど。では、エムリットさんはジバコイル保安官に保護してもらうとして、スカイ、ガラン、アランは、クレセントのチームに入るのか？」

「あ、いや……できれば別チームになりたい。」

「えっ？」

ガランの発言には、私だけでなく、ウインも驚いたようだ。

「別チームになれば、それだけ多くの場所を同時に調べられる。着いていくって言うつといて悪いが、その方がいいと思う。」

いい加減（印象）なガランにしては、もっともな発言だ。ウインは少し考え込む。

「…確かにそうですね。貴男方なら戦力は申し分ないですし、効率もいいですね。」

ウインも納得したようだ。

「じゃあ、三匹は別にチームを作るのか？」

「あつ、俺はクレセントに入る。」

ここに来るまでに少しでも回復したスカイが言う。

「わかった。では、今日はゆっくり休め。報告は、明日まとめて聞く。」

「わかりました。」

その後夕飯を食べ、私達は部屋へ戻った。

疲れ切っていた私は、ベットへまっしぐら、すぐに眠ってしまった。隣の部屋でウイン達がガラン達と話していたらしいが、まったく気付けなかった。

第二十一話：ジュプトル登場！地底の湖にて（後書き）

ようやくテストが終わりました！

ヒナタ

「お疲れさまでした。じゃあ、今度は小説を頑張っ
てね。」

はい。少し疲れましたが、頑張ります。

第二十二話：残された可能性（前書き）

第二十二話完成です。

第二十二話：残された可能性

「みんな！新しい仲間を紹介するよ」

翌朝。朝礼を終えると、ペラップは報告を聞く前に、ガラン達三匹を紹介した。

「クレセントのチームに入ることになったスカイだ！よろしくな！」

「チームイクリプスとして弟子入りすることになった、リーダーのガランだ。」

時の歯車の件は、精一杯協力しようと思っている。」

「…イクリプスのアラン。よろしく。」

三匹のことは、昨日夕食の際に簡単に説明をしたため、いつものようなうつるさはなかった。

「では、昨日の成果を聞こうか。」

みんなは次々に報告する。

もちろん、注目されたのは私達だった。

「な、なんだって〜！！じゃあ北の砂漠には、時の歯車があったのか！？」

「はい。でも、歯車はジュプトルに奪われてしまって……本当にごめんなさい！」

深々と頭を下げる。

悔しい。それが今の気持ち。

ジユプトルを前に、まったく歯が立たなかった。

エムリットを、時の歯車を護れなかった。

ただただ、悔やむばかりだった。

「いやいや！みんなよく頑張ったでゲスよ！」

「……ありがとうございます、ビツパ先輩。

……ん？先輩。それなんですか？」

ビツパが、大事そうに何かを持っている。

「ああ、これでゲスか。」

そう言って見せてくれたのは、綺麗な水色の結晶。水晶だった。

「水晶の洞窟で、拾ってきたんでゲス。」

「まあ、いつの間に？全然気付きませんでしたわ。」

「おい、ビツパ！我々は時の歯車を探しに行ったはずだ。なのに目的を達成するどころか、こんなお土産まで拾ってきて、お前は一体何なのだ！？」

ダグトリオの叱責がくだる。

私的には、普段からサボってる貴男に言われたくない、と思うけど……。

サメハダ岩という場所で、よくサボっているのを私は目撃している。

「ヘイヘイ！リリーフ達を責めるわけじゃないが、次に繋がる手がかりがないのが、残念だよな。」

怒られているビツパを尻目にヘイガニが言う。

それを言われると、悪気がないにしても、ちょっと辛い。

「いや、そうでもないですよ。」

そこに、フォローするようにヨノワールの声が入った。

「手掛かりはあります。」

まず、霧の湖ではユクシーが、そして地底の湖ではエムリットが、時の歯車を護っていた。

ということとは、最後の時の歯車は“アグノム”が護っている可能性が高いです。」

「“アグノム”？」

おうむ返しに訊ねる。

「はい。」

言い伝えですが、ユクシー、エムリット、アグノムの三匹は、精神を司り、世界のバランスを保っていると言われていました。」

なるほど。ユクシー、エムリットが時の歯車を護っていたのだから、アグノムも時の歯車を護っている。

つまり、アグノムがいる場所を捜し出せば、ジュプトルも現れるかもしれない。ということね！

「これらの三匹は、湖に住むと言われています。」

現に、ユクシーとエムリットは湖にいました。

ですので、アグノムもどこかの湖にいると思われます。

ただし、ユクシーは高台の頂上に。エムリットは砂漠の地下深くと
いうように、普通ではない場所に湖がありました。

ですのでアグノムのいる湖も、想像を超えた場所にあるのではない
かと思われます。」

「そっかー！普通に湖を捜しても見つからんのか！」

「いやいやいやいや やっぱりヨノワールさんはすごいですね

ペラップは羽根を激しくばたつかせる。

「ということは、他の皆さんが調査した『東の森』や『水晶の洞窟』
にも、まだ謎が残ってるかもしれませぬね。」

と、ウインが冷静に指摘する。

「可能性はあります。そこで、ビツパさんをお願いがあるのですが。

「へ？あつしですか？あつしに何か？」

「貴方が持っている水晶なんですが、ちょっと貸して頂けませんか
？」

「ええ！？

い、嫌でゲス！これはあつしの宝物でゲス！」

「い、いや。別に盗ったりしませんから、ご安心ください。
…ヒナタさん。」

「何ですか？」

「貴方に、ビツパさんの水晶を触ってもらいたいのです。
もし、水晶の洞窟に謎が残されているならば、水晶に触れた時に時
空の叫びが発動し、何か見えるかもしれない。」

…なるほど、そういう事か。

「時空の叫び？何だそれは？」

「ヒナタが持つてる能力だよ。
ヒナタは何かに触れると、たまにその過去や未来に起こった出来事
を視ることができるんだ。」

『ええ〜っ!?!?』

カズキの説明に皆驚く。
まあ、当然だよね……。

「お前…そんな能力があつたのか…!?!?」

ガラン達も、このことは知らなかったようだ。

「ですので、ぜひ水晶をお借りしたいのです。
…どうでしょうか？」

「ううっ…。そういう事なら仕方がないでゲスね。」

ビッパは渋々了承し、水晶を私に手渡した。

「（この水晶から…見えるのかな…）」

周りを見渡すと、みんなが注目していた。

「（見えるかどうかわからないけど、集中してみよう。）」

私は目を閉じて集中する。

すると、その時！

グラリ……

「…っ！（き、来た！）」

キーン！

辺りにはたくさんの水晶が煌めいている。

目の前には、湖に囲まれた島のようなところがある。

そこにはジュプトルと、ユクシー達によく似たポケモンがいた。あれがアグノムだろうか？

『つぐぐっ…うおっ…』

アグノムと思われるそのポケモンは、かなりの傷がある。

『貰っていくぞ。時の歯車を！』

『ダメ、だ…、あれを盗っては…絶対に…!』

シュピン!

今、のは……ジュプトルが時の歯車を盗もうとした。

じゃあ、やっぱりあのポケモンはアグノムなのかな?

とにかく。この水晶から時空の叫びが視れたって事は…!

私は、時空の叫びで見聞きした事を話した。

「な、なんだってえ!!?」

「ジュプトルがアグノムと思われるポケモンを倒して、時の歯車を盗もうとしてたつてえ〜〜!!?」

ばかでかい声で叫ぶペラップ。その音量は、最初に叫んだドゴームの声が、小さく聞こえるほどだった。

「きゃー! 凄いですわー!」

「なんだってそんなものが視えちゃうんでゲスか!? 凄すぎでゲス!」

「ハイ! ヒナタ!

そのポケモンはアグノムで間違いないのか?」

「はい。ユクシー達と姿がそっくりでしたから、恐らく間違いないと思います。」

「私もヒナタさんに質問があります。」

ヒナタさんが視たのは、過去のものだったのでしょうか？
それとも未来のものだったのでしょうか？」

「えっ……………」

驚きに目を見開く。

そういえば、そうだ…。

視えたものが過去か未来かなんて、いつもわからない…。

「…すみません。私にもわからないんです……………」

「そうですか……………」

「なるほど。」

視えたものが過去か未来かわからないということは、ヒナタが視たものは過去のものということもありえる。

つまりその場合は、もうすでに盗まれてしまったかもしれない、ということだな。」

「じゃ、じゃあ、もう手遅れって事!？」

ざわざわと騒めきはじめるみんな。

過去か未来か、それが不安を募らせる。

しかし、その騒めきは、ヨノワールによって消える。

「皆さんちよつと待ってください！」

確かに過去が視えたのかもしれませんが、未来が視えたという可能性もあります。

カズキさん！エムリットは時の歯車が盗まれたことをユクシーから聞いた。これは間違いないですね？」

「うん……」

確かエムリットは……

『とぼけるな！私はユクシーからテレパシーで聞いてるんだよ！！
霧の湖の時の歯車が盗まれたことを！』

「うん。間違いないよ。」

「アグノムの名前は出ましたか？」

ヨノワールの質問に、カズキは首を振る。

「出てないよ。」

ここでヨノワールさんに言われて、初めて知ったくらいだし。」

「それなら、まだ可能性はあります！」

パツ！と表情が明るくなる。

「エムリットが、時の歯車が盗まれたことをアグノムから聞いたというのなら、ヒナタさんが視た時空の叫びは、過去のものとして間違いないです。」

しかしエムリットは、アグノムの名を出さなかった。

つまり、未来である可能性だって、あるということですよ。」

「な、なるほど……。」

「もう一つわかることがあります。」

この水晶から時空の叫びを聞いたということは、水晶の洞窟のどこかに、時の歯車があるんじゃないでしょうか。」

「おおっ！確かに！」

私の意見に、ドゴームが同意する。

「確かにもう手遅れかもしれませんが。」

しかし、まだ間に合う可能性だってあるんです！
ならば、その可能性に賭けてみてもいいんじゃないでしょうか！」

「その通りだぜ！ハイハイ！」

「賭けてみる価値はあるな！」

「さすがヨノワールさんでゲス！」

「きゃー！燃えてきましたわー！」

「みんなで調べようぜ！水晶の洞窟を！」

望みは薄いかもしれない。でも、少しでも可能性があるなら！
そんな想いに勇気づけられ、次々に声を上げる。

「ヨノワールさん。」

これはもう行くしかないようですね
行きましょう！ギルドをあげて、水晶の洞窟へ！
では親方様！さっそく号令を！」

「……………」

長い沈黙。

「……親方様？」

「……ぐう……。」「

「へっ？」

「ぐうぐう……。」「

かすかに聞こえる寝息。

「（まさか親方様……。）」

「（いや、あれはどう見ても……。）」

「（寝てますわね。しかも、目を開けたままで……。）」

「（しかし、いつから寝てたんでゲスかね？）」

「（もしかして、最初から寝てたんじゃ……。）」

「親方様！親方様——！！」

弟子達のひそひそ話が、聞こえているのかいないのか。ペラップは、必死に起こそうとする。

「……はっ……。」「

「親方様〜！」

「ペラッブ！」

どつやら起きたらしい。

「はっ！親方様！」

え〜、親方様。最初から申し上げると……」

「みんな！ジユプトルを捕まえるよ〜！！」

『お、おおーっ！……』

寝ていても聞いていたのだろうか？（だとしたら凄い……）（ペラッブの言葉を遮って、掛け声をあげた。弟子達もそれに答える。

「行きましょう！水晶の洞窟へ！」

「どこかに謎があるはずだぜ！ハイハイ！」

「気合いを入れて調査しようぜ！」

「私も水晶の洞窟に行きます。

頑張りましょう！皆さん！」

『おおーっ！……』

ヨノワールさんもいるとは心強い！

「頑張つていきましょう。ヒナタさん。」

「…うんっ！」

ウインの激励に頷く。

小さな不安を覚えつつも、一つの可能性に賭け、私達は『水晶の洞窟』へと向かうのだった。

第二十二話：残された可能性（後書き）

つなぎの話のはずが、結構長くなってしまった…。

スカイ

「おい！俺の台詞が最初の挨拶の時だけってどついう事だ!？」

…ダメだった？

スカイ

「あつたりめえだ!!少しは出番増やせ!」

うーん……じゃあ、次回に活躍するような場面があったら、ね？

スカイ

「そうか！早く書いてくれよ!？」

今考えてる途中なんだけど……まあ、頑張ります。

第二十三話：因縁の友達（前書き）

第二十三話完成です。

今回はガラン視点です。

第二十三話：因縁の友達

辺りは水晶が煌めいている。そう、ここは『水晶の洞窟』。ウインやギルドのみなどと一緒にここに来たオレ達。

入り口でそれぞれグループに別れ、今はアランと二匹で進行している。

ウインと一緒に行かないか、と誘われたが、効率を考えて結局別れてしまった。

別に一緒に居たくなかったわけじゃない。あくまで効率を考えて、だ。

まあ、そんなことはどうでもいい事だ。

「（にしても暇だな……。アランは話相手にならないし……スカイでも引つ張ってくればよかったな。）」

ときどき襲ってくるポケモンは弱いし、退屈だ。

そんなことをつらつら考えつつ、先に進んでいくのだった。

「暇だ！退屈だ！」

「黙れ。ガキか？」

あまりにも暇だったから叫んだら、ようやくアランが口を開いた。

「なら、話相手にでもなってくれよ。」

「断る。」

…バツサリ一言で切り捨てやがった。
前はもう少しおしゃべりだったのに…。

しかし、そんなことを言っても、また一言で切られそうなので、仕方なく歩を進める。

しばらくして、曲がり角に差し掛かった、その時！

「…!!!?!」

突如、曲がり角から音もなく何かが現れた。

思わず飛び退き、戦闘態勢に入る。

しかし、現れたのは、あまりいい関係ではないものの、敵ではなかった。

「長おの。それに無月むじつき！」

そこにいたのは、ドククラゲとツボツボ。

ツボツボは、ドククラゲの頭の上に乗っている。

「あれ、ガランにアランじゃん。」

意地の悪そうな（そう思い込んでるだけ）笑みを浮かべながら、無月と呼ばれたツボツボが言う。

「こんなところで何してんの？迷子にでもなったの？」

「誰が迷子だ！」

「君だよ。そんなこともわからないの？」

「ここいつく。なめやがって！」

「お前こそなぜここにいる！？守護者の使命を忘れたのか！？」

「ルナティックみたいな集団に入ってる君に言われる筋合いはないよ。」

「あんなところ、もう抜けた！」

「へえ、首になったんだ。」

「違う！首なんかになったら、とっくに殺されとるわ！」

「じゃあ、やっぱり抜けてないじゃん。」

「あゝのゝなゝ！」

いや、落ち着けオレ。ここで熱くなったら負けだ。

「…スカイと同じだ。裏切ってウインの側に着いた。」

「えっ！？……ふ、ふーん。そうなんだ。」

毒舌の無月も、さすがに驚いたようだ。

「お前はなぜここにいるんだ？お前が守護すると決めたのはフィノンだろ？」

説明しておくが、『守護者』とは、先祖代々守護すると決めたものを守りぬくガーディアンだ。

しかし、その多くは過去の戦争によって、命を落としている。

「そのフィン様からお願いされたんだよ。ルナを君みたいな野蛮な奴から守ってくれ、って。」

「なっ！だから抜けたって言ってるだろ！」

「効率は考えてるくせに勇気のない君が？」

小馬鹿にしたような目で見てくる。

「うるせえ！この引きこもりが！」

「なっ！言ったな！？この突撃バカ！」

「こ、この野郎！こうなったらバトルで勝負だ！」

「望むところだ！」

…さて、オレ達がギャアギャアと舌戦を繰り返しているあいだ、アランと長はというど。

「久しぶりだな、長。」

「こちらこそ、お久しぶりです。」

最初にとてつもなく短い会話をしたあとは、黙ってこの“無駄な言い争い”を見守っていたのだった。

「おいアラン！こいつ殺るの手伝え！」

「長！これ潰すの手伝ってよ！」

そんな彼らに、オレと無月が同時に声をかける。
返答は……

「断る。」

「一匹でどうぞ。」

これまた同時に言うアランと長。
なんだ？このシンクロ……。

「ちっ、ならオレだけでやってやるぜ！」

「やれるものならやってみなよ！」

今の俺に何を言っても、もう止まらないぜ！
拳を固め、殴りかかろうと近づく。
しかしその時、どこからともなくシャドーボールが飛んできた。

「無月様！」

「わかってる！」

無月は素早く殻の中から、手裏剣を取り出し、シャドーボールに向
かって投げた。
シャドーボールは、粉々に壊れる。

「誰だ！？」

いったん攻撃を中止し、辺りを見回してみる。

「あつ、気付かれちゃった。」

気弱そうな声で呟きながら、岩影から一匹のポケモンが姿を現わす。

「あの…初めまして。僕はルナティックのハイドと言います。」

律儀に自己紹介してくれたのは、怖そうな面構えをしたグラエナ。話し方と顔が全然あってねえ……。

「えと…裏切り者のガランとアラン！貴方達を抹殺します！」

「（迫力ねえ！）」

突っ込みたくなるほど弱気な言い方だった。

大したことない、そう思って脅して帰らせようとした、その時！

「ガラン！危ない！」

「!？」

その声に驚いて振り返ると、無月がグラエナの攻撃を受けているところだった。

さらに後ろには、アランと長が二匹のグラエナを相手にしている。

「（これは、いったいどういう事だ!?!）」

気配なんて感じなかった。いつのまに仲間を!?!

「アイアンテール！」

「!?!?くっ!」

再び前を見ると、グラエナが三匹。その内の一匹が、攻撃してきた。とっさにガードするが、なかなかの威力だ。

「(まただ。いったいどうやって…。)」

無月の方を見ても、やはり数が増えている。

「ストリームナックル！」

とにかく、一匹ずつ倒すしかない。

しかしグラエナの数は、疲労がたまるのと反比例するかのようが増えていった。

「ぜえ…ぜえ…カノンナックル！」

小一時間ほど経った頃には、グラエナの数はアラン達を確認できないほど増えていた。

残りの体力は少ない。早くどうにかしないと……。

疲れていたオレは、背後から近づいてくる敵に気付かなかった。

「噛み砕く！」

「しまった！」

ここまでか…。そう諦めかけた時。

「守る！」

オレの周りに球状の緑色のバリアが張られ、グラエナの攻撃を弾く。

「何疲れてんのさ。」

助けてくれたのは、なんとあの無月だった！

「………どういつ風の吹き回しだ？」

あの無月がオレを助けるなんて、どう考えてもおかしい。

「別に何もないさ。僕は使命を守っただけ。」

「ルナを護るのが使命じゃなかったのか？」

「フィンロン様は正確にはこう言ったんだ。」

『ルナとその仲間達を護ってくれ』

君がウインの側についたというのなら、君も仲間さ。」

…こいつ、本当に無月か？

記憶のなかの無月と今の無月が一致しない。

「それより、おかしいと思わない？これだけの数が潜んでいたのなら、気配の一つも感じるはずなのに…まったくわからなかった。

“まるで生気がないみたいだ。”」

無月の言葉にピンと来るものを感じた。
バリアに護られながら、グラエナをよく見てみる。

「（…やっぱり。こいつら“影”がない。）」

「何にやけてんのさ。何かわかったの？」

「ああ。こいつらが“本物じゃない”ってことがな。」

「……どういう意味？」

「恐らくこいつらは、“影分身”と“身代わり”の合わせ技だ。
影分身で作り出した分身に、身代わりの要領で体力を与えてるんだ。
分身だけでは攻撃できないが、自由に動かせる身代わりを合わせれば、こんな大群を作り出すことも出来る。」

「ふーん。つまり簡単に言うと、身代わりの強化版でこと？」

「そつだ。」

相手を攪乱させるための影分身を攻撃に使うとは、侮れないな。

「で？それがわかったところでどうするの？」

その考えがあつてるとすれば、倒しようがないじゃん。」

「いや。これだけの数だ。操るために近くにいるに違いない。
さらに身代わりを使ってるなら、相当疲弊してるはずだ。
そいつを見つけて、殺る。」

「…どうやって?」

「高くジャンプして上からそいつを見つける。
だが、どんなに頑張っても滞空時間は5、6秒が限界だ。
だから…つまり…」

「その間グラエナにかまつてる時間はないから、協力してくれって
こと?」

「……………ああ。」

無月に借りを作るのは癪だが、仕方がないだろう。

「いいよ。援護すればいいんですよ。」

…そろそろバリアも消える。消えた瞬間に飛んでね。」

「わかった。」

すう、とバリアが薄れていく。

消えたと同時に、出来るかぎり高く飛んだ。

すぐさまグラエナが追い掛けてくる。

「ガランに近づくなあー!!」

無月は殻の中からマシンガンを取り出し、それを打ち落とす。
もちろん、守るでオレを覆っている。

…しかし、あの殻の中はどういう構造になってるんだ?

鳴り響く銃声のなか、岩影でじっとしているハイドを発見する。

「そこだ!メテオナックル!!」

オレは電光石火で加速をつけ、隕石のごとく突き進む。

「わっ!?! 気付かれちゃった!」

ハイドはそう言うつやいなや、何かを口にする。

ズドーン!!

地面に小さなクレーターが出来た。

しかし、肝心のハイドの姿はない。

あの時口にしたのは、“ワープの種”だったようだ。

ハイドがいなくなったことにより、グラエナの大群が消える。

「やった?」

無月と、今まで姿の見えなかったアランと長が近づいてくる。

「いや、逃げられた。」

「ええ!?!…… (使えない奴) 小声」

「今何て言った!?! 無月!」

「別に」。」

あからさまに悪口を言ったオーラをだしながら、明後日の方を向く。
とことんムカつく奴だな!

「はあ…なんか疲れちゃった。バトルはまた今度ね。」
そう言っつて、無月は去っていく。長も一礼して去っていった。

「……とりあえず休むか。」

退屈は脱したが、かなり体力を消費してしまった。
やっぱり平和が一番かな、と今更思っただった。

第二十三話・因縁の友達（後書き）

……なんかグダグダになってしまった気がする。

無月むつき

「もっと僕の強さを強調してよ。」

長おさ

「ワタシなんてほとんど出番がない……。」

……次に出てきたときにどうにかします。

それからお知らせです。

番外編的なものをやるうかと考えてるんですが、何か意見や要望などあったら感想欄に書いていただけると有難いです。
では！

第二十四話・水晶の湖 ジュプトルとの闘い（前書き）

第二十四話完成です。

第二十四話：水晶の湖 ジュプトルとの闘い

「ここで行き止まりね。」

水晶の洞窟を進み、一番奥まで来た私達。

「ここまで特に変わったところはありませんでしたし、ここに何か秘密があると思いますよ。」

「まあ……そうでしょうね。」

そこにあつたのは、とても大きな水晶。三角形を作るように等間隔に並んでいた。

「キマワリ達。これを見て何も感じなかったのかな？」

そう言つて、カズキは水晶に触れてみる。

すると水晶は、その色を紫色から橙色へと変えた。

「わっ!?!この水晶触ると色が変わるよ!」

「…ホントだ!面白い!」

ルナも水晶を触る。今度は、赤色から緑色へと変わった。

「ヒナタも触つてみなよ。」

「え、ええ……。」

近くの水晶に触れてみると、黄色から青色に、もう一度触れると赤色になった。

「いろんな色に変わるんだな。」

スカイも触れてみると、緑色になった。

「（これは……謎解きかしら？）」

そんな考えを巡らせた、その時だった。

ぐわん……………。

「う！？（目眩が……………）」

キーン！

『なるほど。三つの水晶の色を合わせれば、道は開くのか！問題は何色に合わせるかだな……………。』

時の歯車を護る三匹のうち、アグノムは意志を司る神だ。

意志とは成し遂げようとする心。つまりアグノムの心の色。

では、アグノムの心の色は何か……………。

アグノムは水晶の湖に住む。ならば、アグノムの心もまた、水晶のよう……………。』

シュボン！

…声だけの時空の叫び。

いつもの時空の叫びと違って、映像は視れないけど、進む道を示してくれる不思議な声……。
この声は、いったい誰なんだろう？

「…おい。大丈夫か？」

「へっ？」

気付くと隣にいたスカイが、心配そうに見つめていた。

「え、ええ。大丈夫よ。」

「…もしかして、時空の叫びですか？」

ウインの問いに頷く。

えーと確か……三つの水晶を一つの色に合わせれば道は開く……だったわね。

問題はアグノムの心の色ね。

アグノムが住んでいるのは水晶の湖。なら、その心もまた……透き通ってる？

あるいは、冷たい水のような色なのかもしれない。

「この場はヒナタに任せたほうがいいね。」

「そうですね。ヒナタさん。お願いします。」

「わかったわ。」

私には、ある考えが浮かんでいた。

「（私の考えが正しければ……）」

そう頭の中で呟きながら、三つの水晶の色を“青色”に変えた。
すると……。

ゴゴゴゴッ！！

色を合わせた瞬間、地鳴りが起こった。

「ここは危ない！離れよう！」

水晶の中心にいた私達は、急いで端の方に避難する。

三つの水晶は光りだすと、バチバチと電気のような音を立てながら、エネルギーのようなものを中心に集める。

それは段々形になっていき、とてつもなく大きな水晶になった。
先程の三つの水晶も大きかったが、これはその倍は軽くなる。

「どつやら道が開けたようですね、」

ウインの視線の先には、でかい水晶の真ん中に出来た大きな裂け目。

「この先に、アグノムがいるのかな？」

「恐らくね。行きましょう！」

私達は、大きな水晶の裂け目『大水晶の道』へと、入っていった。

「あつ、湖だ！」

「綺麗」

青く澄んだ湖。所々から水晶が張りだし、青をより一層際立たせる。

「……！ヒナタ！あれ見て！」

「えっ？どれ？」

「ほらあそこ！湖の真ん中の島みたいなところ！」

そう言われ、よく目を凝らしてみると……。

「づぐづっ……うおっ……」

「貰っていくぞ。時の歯車を！」

「ダメ、だ……。あれをとっては、絶対に！」

そこで見えたのは、時空の叫びで視たものと、まったく同じだった。

「わわっ、アグノムが危ない！急ごうヒナタ！」

「うん！」

私達は、急いでアグノムがいる方へ駆けていった。

「あそこに沈むのが、時の歯車か。貰っていくぞ。」

「ま、待て……。待つんだ……。ジュプトル……。」

「……俺の名を知っているのか？」

「盗賊ジュプトル……。」

お前がここに来ることは、エムリットから聞いた。

本当は僕だけの力で倒せばよかったんだけど、もしダメだったときを考えて、ある仕掛けをしておいたんだ。」

「何だと!？」

ずっとアグノムに背を向けていたジュプトルは、最後の言葉に慌てて振り返る。

アグノムは構わず、目を一瞬光らせた。

すると、轟音と共に湖から水晶が突き出し始めた。

それは湖を覆うようにして広がり、ついには湖を見ることが出来なくなってしまうた。

「こ、これは!?!水晶が邪魔で、時の歯車を取ることが出来ない!」

「時の歯車は渡さない!僕の命に代えても!」

「くそっ!俺はなんとしてでも手に入れる!貴様を倒してでもな!」

「待て!」

ジユプトルがアグノムに攻撃しようとしたその瞬間。そこに私達は駆け付けた。

「ジユプトル！お前に時の歯車は渡さない！」

「お前達に用はない！そこを退け！」

「退くもんか！」

いつもは弱気なカズキが、今日に限っては強気に出る。

「僕達全員。退く気などありません！」

「……………そうか。ならば、ここでお前達を倒す！」

ジユプトルは、素早くリーフブレードで斬り掛かってくる。前にも見たが、かなりの素早さだ。

「禁！」

ルナが不可視の壁でそれを防ぐ。
反撃開始よ！

「エナジーボール！」

「『火炎放射！』」

「シャドーボール！」

「ちっ！」

体勢が崩れていたのにもかかわらず、ジュプトルは五体同時攻撃をジャンプしてかわした。

…前より素早さがあがってる。これは“高速移動”！？

「種マシンガン！」

「禁！」

ジャンプで距離を取りながら攻撃してくるジュプトルを、しっかりと防御するルナ。

「やっかいだな。…なら、こいつを食らえ！」

ジュプトルは何かを取り出すと、ルナに向かって投げる。防御しようとするが、ぎりぎりで間に合わない。

「…あれ？……なんだか……眠い……。」

それが当たった瞬間、ルナは眠ってしまった。

「“睡眠の種”！？」

守りの堅いルナが一番厄介だと思ったのだろう。

これでこちらの防御力は一気に落ちた。

しかし、攻撃力は上がったたりしてしまう。

「テメエ！よくもルナちゃんを！竜巻！」

ルナがやられたことにより、スカイが怒りだしたのだ。

「リーフブレード！」

だが、ジュプトルはそれを切り裂く。さながら、一流の剣士だ。

「…つるのムチ！」

「なにつ！？」

しかし、スカイが引き付けてくれたおかげで、背後から縛り上げることが出来た。

「今よ！」

「オーバーヒート！」

「大文字！」

「シャドーボール！」

三匹の攻撃がヒットする。

私にも少しダメージはあったが、それは覚悟のうえだ。

しかし、攻撃による煙が晴れると、ジュプトルはいなかった。

「なっ！？どこに行ったの！？」

「ぐあっ！」

短い悲鳴が聞こえた。

「お前も厄介だ。」

振り向くと、スカイが倒れていて、その前にはジュプトル！

「身代わりですか？」

「……………」

身代わり……………なるほど、身代わりで脱出したってわけね。

「これで終わりだ！リーフストーム！」

「うわぁー！」

「ぐうー！」

「くっ！」

もろに受けてしまい、吹き飛ばされる。

辛うじて意識は保ったが、もう戦う力は残っていなかった。
やっぱり、ジュプトルに勝つのは無理なのか。

「そこを退け！」

「（……………え？）」

誰に言っているのだろうか？

閉じかけていた目蓋を開くと、そこには！

「（カズキ！？）」

私と同様体中に傷を付けたカズキが見えた。

「……………！！？（こ、声が出ない！！？）」

その体は、小刻みに震えている。

だがその背中には、出会った頃よりとても遅しく見えた。

「（でも、絶対に退くもんか！）」

「退かないというのだな！？ならば仕方がない！」

ジユプトルが腕を振り上げる。

このままじゃカズキが！

必死に体を動かそうとするが、もう限界だった。悔しさに歯噛みする。

と、その時！

「ウィンドモード！」

そんな声と共に、一陣の風が吹き抜けた！

「はあはあ……………甘く見ないてくださいよ。」

それを起こした張本人は、カズキの横に立つ。

正直私は驚いた。

そこに立っていたのはウィン。驚いた理由は色々あるが、一番驚いたのはその容姿だった。

全体的に少し毛の色が青みがかかり、さらに背中からは青みがかつた

白い翼が生えていたのだ！
少し明るめの水色の瞳が、彼がウィンだということを認識させてくれた。

「お前……その姿は……。」

ジュプトルも、想定外の事に動揺を隠せない。

「次は……こちらの番です！」

ウインは体を前に屈め、前傾の姿勢をとる。
そして、小さく呟く。

「「終焉の疾風」」

その瞬間、ウインの姿が消え、気付くとジュプトルの後ろにいた。
ジュプトルはなぜか辛そうな顔をしている。

「まだまだ！」

またしてもウインの姿が消え、気付くと別の場所にいる。

そのスピードは、回数を積むごとに速くなり、目視では確認するのが難しい程にまでなった。

そして、ウインが消えるたびにジュプトルの体にいくつもの裂傷ができる。

「フィニッシュ！」

「ぐはっ……！」

ウィンが叫んだと同時に、ジュプトルが水晶の壁に叩きつけられる。この時になってようやく気付いた。ウインは消えたのではなく、“見えないほどのスピードで攻撃していた”ということ。

「はぁ……はぁ……これで……僕達……の……」

バタツ！

恐らく体力を使い果たしたのだろう。ウインはその場に倒れこんだ。声を出そうと思ったが、そんな気力さえも私には残っていなかった。しばらくの間沈黙がこの空間を支配する。

「…ぐっ……く……」

その静寂をいち早く破ったのは、ジュプトルだった。

「見つけたぞ！ジュプトル！」

「!?!」

満身創痍のジュプトルの前に現れたのは、憧れの探検家ヨノワールだった。

「久しぶりだな。探したぞ。」

「（えっ？それってどういう事!?!）」

ヨノワールさんは、ジュプトルを知っているの!?!
いったいどういうことなのだろうか。

知りたい。なのに無常にも私の意識は、闇に溶けていくのだった。

第二十四話：水晶の湖 ジュプトルとの闘い（後書き）

ワインを強くしすぎたかな…？

スカイ

「急にどうした？」

もともと別々の小説のキャラを合わせたから、ちよつと差が開きすぎたかなあ、と思つて…。

スカイ

「おいおい。しっかりしてくれよ？」

精進します。

第二十五話：小さな協力者（前書き）

第二十五話完成です。

ちよつと短めかな？

第二十五話：小さな協力者

「久しぶりだな、ジュプトル。」

アグノム、クレスント、そしてリリーフを次々に倒し、疲れ切ったジュプトルの前にあらわれたヨノワール。

「ヨノワール。まさかここまで追ってくるとはな。」

「貴様が逃げ続ける限り、私はどこまでも追いつける。」

不適な笑みを浮かべるヨノワール。

「さあ、一緒に来てもらうぞ。ジュプトル。」

「お断わりだ。」

先の戦闘でかなり疲弊していたが、なんとか戦闘態勢をとる。

「私と戦うつもりか？そんな傷だらけの身体で？」

「やってみなくちゃわからないだろ。」

「戯言を。」

ヨノワールは勝利を確信していた。ここまで傷を負っているなら、たとえこの場から逃げたとしてもそう遠くへは行けないと思ったからだ。

ヨノワールはジュプトルに近づく。

と、その時！

「！？」

ヨノワールの進路を阻むように、足元にクナイが二本飛んできた。

「誰だ？」

「どこ見てんの？こっちだよ。」

ヨノワールが振り向くと、ジュプトルの前にツボツボとドククラゲの姿。

「（いつの間に…。）何者ですか？」

「それはこっちの台詞だよ。たった一匹でみんな倒しちゃうなんて、君こそ何者？」

どうやらヨノワールがこの場にいるみんなを倒したと思っているらしい。

「誤解です！私は探検家のヨノワール。そして貴方達の後ろにいるのが、時の歯車を盗む盗賊ジュプトルです。」

私はプクリンさんのギルドと協力し、時の歯車を護るため、そしてジュプトルを捕獲するためにここに来たのです。」

ここまで言っつて、ヨノワールはふう、と息をつく。

これだけ言えば、わかってくれるだろう。ヨノワールはそう思った。しかし、対する無月達は…

「へえ、捕獲しに来たの。」

それならなぜ、疲れ切った相手に殺気まで込めた目で近づくのさ？」

「!？」

「いくら犯罪者相手でも、殺しなんてやってはいけない。この時代に“死刑”なんてないからね。」

なのに君の目は、明らかな殺気がこもってた。」

「それに憶測ですが、時の歯車は全部で五つあります。この五つが世界の時間を守っていると云うならば、なくなれば当然世界の時間は崩壊しますよね？」

すでに時が停止している“霧の湖”や“地底の湖”と同じ状態が世界中で起こるとしたら、この行為には何のメリットもない。むしろデメリットのほうが大きいはずです。」

こう返してきた。

こつも核心に迫るものをズバズバと……。

「貴方達はそう考えるかもしれませんが、殺したかったから殺した。なんていうわけのわからない理由を述べる犯罪者もいますよね？きつとそいつも、そういう類のポケモンに違いありません。」

内心焦りながら、つじつまが合うように必死で言葉を並べるヨノワール。

「それはないね。この場を見てわかるけど、時の歯車を護ろうと戦ったポケモンは、怪我こそしたけど誰も死んでない。」

そんな理由で犯罪を犯す精神異常者なら、死者の一匹や二匹とつくに出てるよ。」

「（…できたぞ。）」

「（…わかりました。）」

無月が話しているなか、その背後で小声のやりとりが行われる。

「（無月様、そろそろ…）」

「（ん、わかった。）」

無月はここに来るまでの道を見つめる。

「ちょうど応援も来たみたいだし、そろそろ終わりにしようか。

最後に言うておくよ。僕は君を信じない。必ず正体を見破ってやる。

」

「黒い霧！」

無月が言い終わると同時に、長の技が視界を覆い隠す。

霧が晴れたときには、その場に大きめの穴を残して、三匹の姿は消えていた。

「穴を掘って逃げたか。あと少しというところだったのに…。」

ヨノワールは悔しそうな表情を浮かべる。

「逃がしはしない！」

そう言って、消えるようにその場から離れた。

…その数秒後。

「なっ！これは、どういうことだ！？」

「これはひどい……」

現れたのはガラン達だった。

「おい！どうしたんだ！？なにがあった！」

ガランはルナを揺さ振る。

「ふえ！？な、なにになに！？」

「寝ぼけてんじゃねえ！！何があった！？」ルナは辺りを見回し、ようやく今の状況を理解した。

「え、と……確か、ジュプトルと戦ってた……」

「ジュプトル！？ジュプトルがいたのか！？」

「うん。それで途中で何か投げ付けられて、そしたら眠くなっちゃって……」

ルナはシュン、とうなだれる。

「……まあ、今は早くヒナタ達をギルドに運ぶことが先決だな。他のみんなを呼んでくる。」

そう言って、アランはもと来た道に戻っていった。

しばらく後に来たギルドの弟子達によって、ヒナタ達は水晶の湖から脱出するのだった。

水晶の洞窟に程近い森の中、逃げるのに成功したジユプトル達は、無月の案内である場所に向かっていった。

しばらく無言で歩き続ける。
森を抜け、小さな山を越えると、村らしきものが見えてきた。目的地だ。

「……ここは？」

村の入り口まで来ると、ジユプトルは問い掛けた。

村……正確には“村だった”と言ったほうがいいのか。そこには、壊れた家々が沢山あり、ポケモンの気配はまったくなかった。

「ここはレンレン村。…僕が住んでいた場所さ。」

「今は廃村となっておりますので、一時休息するにはもってこいかと。」

「…そうか。」

無月の台詞に少し驚くも、とりあえず隠れられそうな場所を探した。怪我の手当もしなくてはならない。

長の見つけた家の残骸に身を隠すと、ジユプトルはすぐに座り込んだ。かなり無理をしていたらしい。

「はい、木の实ジューズ。オレンの実を多く入れといたから。」

「……すまない。」

無月からジューズの入ったコップを受け取ると、一気に飲み干した。すると、ジュプトルの傷はみるみる治っていった。落ち着いたところで、ジュプトルが尋ねる。

「お前達は何者なんだ？」

「僕は無月。守護者だよ。」

「ワタシは長。無月様の世話係りをしております。」

「そうか。…礼がまだだったな。ありがとう。」

ジュプトルは頭を下げる。

「それより、こっちも聞かせて。どうして時の歯車を盗むの？理由は何？」

「それは……いや、どうせ言っても信じないだろう。言うだけ無駄だ。」

「そんなのわからないよ。とにかく言って。……でないと埋めるよ？」

最後の台詞に、ジュプトルはゾクツ！と寒気を覚えた。

「わ、わかった、言おう。
まず、俺は未来から来たポケモンだ。」

「へえ〜。そうなんだ。驚いたね。」

全然驚いた様子もなく、無月が言う。

「!?!?信じるのか!?!?俺の言葉を!?!?」

ジュプトルはかなり驚いている。まさか信じるとは思っていなかったから。

「僕も似たようなもんだからね。僕達は過去から来たんだよ。」

「過去から?」

「そ、世界を救う、その手助けをするためにね。」

ジュプトルはまたしても驚く。

「俺も…世界を救うために来た。」

目的が同じということ、すっかり打ち解けた二匹。

その後、お互いの情報を交換しあった。

未来では“星の停止”という、世界の時間がすべて止まってしまいう現象が起こっているらしい。

それを防ぐには、時の歯車が必要なんだそうだ。

無月は、ここを拠点として提供し、情報を逐次伝えるという約束をして、ジュプトルと別れた。

小さな、けれど頼りになりそうな協力者に出会ったジュプトル。

無事に目的は達成できるだろうか？と、沈みゆく夕日を見ながら思う、ジュプトルだった。

第二十五話：小さな協力者（後書き）

はい。ジュプトルに協力者です。
にしても、長が空気に……

長

「これは運命さだめなのか…。」

いつかきつと出番があるって。

番外編の方は今構想を練ってます。もうしばらくお待ちください。
では！

第二十六話：ヨノワールの秘密（前書き）

第二十六話完成です。

第二十六話：ヨノワールの秘密

「あつ、気が付きました？」

「ん……………あれ、ここは？」

痛む身体を起こしてあたりを見回してみる。見慣れた部屋だ。

「ギルドの貴方達のお部屋ですよ。」

二匹とも傷ついて、ずっと眠っていたんですよ？」

と、隣にいたチリーンが言う。

ずっと看病してくれていたらしい。

「う、うん……………」

そこで、カズキが目覚めた。

「カズキ！大丈夫！？」

「ヒナタ！うん、大丈夫だよ。」

ヒナタは？」

「私も大丈夫！」

そう言つて笑顔になる。

「そっか。僕達水晶の洞窟で気を失つて……………」。

あつ！他のみんなは！？アグノムやウィン達は怎么样了の！？」

思い出したように慌てて問い掛ける。

「大丈夫。クレセントの皆さんは、隣の部屋でガラんさん達が看病しています。」

アグノムさんは、ヒナタさん達に比べるとダメージが少なかったようで、先ほど気が付いて、今はギルドにいらっしやいますよ。」

チリーンはそう答えた。

それを聞いてホッ、と安堵する。

「そっか！よかった！」

「ヒナタさんやカズキさんも無事で何よりです。他の皆さんにも伝えましょう！」

チリーンは身体を揺らして鈴を鳴らす。

「皆さん！リリーフが目を覚ましましたよー！」

しばらくすると、ドタドタといくつもの足音が聞こえてきた。

「うおおー！！ホントかあー！！」

「キヤー！よかったですわー！」

「うつつ…無事で何よりでゲス。二匹にもしものことがあったら、あっしは…あっしは…うつつ。。。」

ドドドドドッ！と、ドゴームを先頭にギルドのみんなが集まってきた

た。

「ヒナタ！カズキ！」

「大丈夫か？お前ら。」

最後にルナとスカイが入ってきた。

「ルナ！それにスカイ！無事だったのね！」

「少しは鍛えてるからな！」

「わたしは眠らされちゃっただけだしね。」

二匹の無事に安堵のため息をつく。

…あれ？そういえば……

「ウインは？」

いつも笑顔を絶やさないイーブイの姿が見えない。

「ウインは部屋にいるぜ。」

「無理しすぎちゃったみたいで、ガランとアランが看病してるよ。」

「そう、なんだ……。」

気を失う前に見たあの姿。やっぱり無茶してたのね……。

「ところで皆さん。お腹すいてませんか？」

少し暗くなった雰囲気を変えるようにチリーンは言った。すると……

ぐうううー！

「あっ……」

カズキのお腹が鳴った。

一瞬の間を置き、笑い声が響く。

「ふふっ、すぐにご飯にしますね。」

チリーンは笑いながら食堂に向かう。

ウインのことは心配だが、とりあえず空腹を満たすため、私達は後についていくのだった。

翌日……。

朝礼の場にウインの姿はなかった。

まだ、目が覚めないのかな……。

気持ちが沈んでいた、その時だった。

ギルドに響き渡るサイレンの音。緊急のサイレンだ！

「どうした？ デイグダ！」

「コイルさんからです。ジバコイル保安官より緊急の連絡だそうです。」

コイルさん。見張り穴からどうぞ。」

デイグダの呼び掛けに、コイル特有の片言が聞こえてきた。

「エー、聞コエマスカ？ジバコイル保安官ヨリ伝言デス。

重要ナ話ガアルノデ、スグニトレジャータウンノ広場ニ集マツテ欲シイソウデス。

ギルドダケデナク、周辺ニ住ムポケモン達ニモ声ガカケラレテイマス。

以上デス。デハ！」

重要な話って何だろう？

疑問に思いつつも、言われたとおりトレジャータウンに向かうのだった。

トレジャータウンは、かなり騒がしかった。

たくさんポケモンが集い、出店でも出てれば、お祭りと間違えるかもしれない。

ポケモン達に囲まれるようにして、広場の中央にジバコイル保安官。そしていつ帰ってきたのか、ヨノワールの姿があった。

「エー、皆サン集マツタヨウナノデ、話ヲ始メタイト思イマス。

話トハ、時ノ歯車ニツイテデス。

最近ジユプトルトイウ盗賊ガ、時ノ歯車ヲ盗ンデイルトイウ事件ハ、皆サンゴ存ジカト思イマス。

ソレガ今回！ジユプトルノ魔ノ手カラ、初メテ時ノ歯車ヲ守ルコト

「ガデキマシタ！」

静かに聞いていたポケモン達は騒ぎ立った。

「守ッタノハソコニイルアゲノムサン！ソシテ、アゲノムサンヲ救イ、ジユプトルヲ追イ払ッタノガ、コノヨノワールサンデス！」

「す、すげえ。」

「さすが有名な探検家だな！」

「ジバコイル保安官。すみませんが、ここから先は……」

「ワカリマシタ。デハ、才願イシマス。」

ジバコイルが下がり、代わりにヨノワールが前に出る。

「皆さん！確かに時の歯車を守れたのはよかったです。ジユプトルには逃げられてしまいました。

ですのでまったく安心できる訳ではありません。ジユプトルは必ずまた現れるでしょう。」

周囲が騒めく。

私は、気になった疑問をぶつけてみた。

「ヨノワールさん。ヨノワールさんは、前からジユプトルのことを知っていたんですか？」

「はい。知っています。」

その訳を説明する前に、皆さんに話しておくことがあります。ここ

から先の話は、とても信じられないかも知れませんが、事実です。ですので、真剣に聞いてください。

まず……ジユプトルは“未来”から来たポケモンです。」

「み、未来からだって!？」

「そんなこと、ありえるのか!？」

騒めく周囲に構わず、ヨノワールは話を続ける。

「未来でのジユプトルは、やはり悪党で、指名手配中のポケモンでした。」

そして、未来世界から逃げ延びるために、この過去の世界へとやってきたのです。」

そしてジユプトルは、この世界である悪巧みを考えました。」

「い、いったい何を?何を考えたんですか?」

ペラップは若干上ずった声で問う。

「それは………“星の停止”です。」

「星の、停止?」

「星の停止とは、星自体の動きが止まってしまうことです。」

時の歯車を盗ると、その地域の時は止まりますよね?それがどんどん広がっていき、やがて星までもが止まってしまふ。」

それが“星の停止”なのです。」

「ほ、星が停止すると、どうなっちゃうの?」

震える声でヒメグマが尋ねる。

「星の停止が起きた世界は、風も吹かず…昼もこないし…春も夏もこない。まさに……」

“暗黒の世界”

世界の破滅といっても言い過ぎではありません。」

「せ、世界の破滅だってえ〜!?!?」

「最近時が狂い始めたのも…すべては時の歯車が盗まれた影響です。このままでは、世界は破滅してしまうのです。」

「そ、そうだったのか…」

「俺たち、どうしたらいいんだよ!」

先程の歓喜とは違い、不安によって騒めく。

「へい!質問!ちょっとわかんないことがあるんだが…」

そんな中、ハイガニがヨノワールに質問した。

ヨノワールは「何でしょう?」と、聞き返す。

「今が大変なのはよくわかったんだけど、わからないのは…ヨノワールさんのことだよ。」

確かにヨノワールさんとはとても物知りだけどさ。いくら物知りでも…未来のことまではわからないんじゃないか?へいへい!」

「そつえば…」

「そうだよな…」

そつだ。いくら物知りだつて、未来予知の能力でもないかぎり未来のことを知るのとは不可能だ。つまり、考えられる可能性は一つしかない。

「ヘイガニさんのおつしゃるとおりです。」

普通なら知りようがない。でも私がなぜそんなことを知ってるのか…。

それは、私もジュプトル同様…：未来から来たポケモンだからです。」

そつ。ヨノワールも、未来から来たポケモンだからだ。

「ヨノワールさんも…：未来から来たポケモン!？」

「ひゃー! あつしにはややこしくて頭が変になりそつでゲス!」

「私の目的。それはジュプトルを捕まえることなのです。」

私はジュプトル捕獲を成功させるため、この世界のことを色々調べました。

私がこの世界に詳しいのも、そのおかげなのです。」

「な、何で今まで黙つてたんだよ…?」

ヤルキモノの問いにヨノワールは困つたよつな表情で答える。

「すみません…。それについては、私も心苦しかったです。」

しかし、もしいきなりそんな事を言つて、いったい誰が信じてくれ

たでしょうか？」

「うぐっ…」

まあ、確かにそうだ。

周囲に「私は未来から来たポケモンです。」なんて言ったところで、変人扱いされるだけだろう。

「また、ジュプトルに感付かれないためには、このことは秘密にしておいたほうがいいと思ったのです。」

…しかし、今まで皆さんに黙っていたのは事実です。本当に、申し訳ありませんでした。」

「いやいやいやいやいや！」

謝らないでくださいヨノワールさんっ！そういうことなら仕方ないでしょう！」

「ソウデスヨ。ヨノワールサン八間違ッテイナイ。

憎ムベキハジュプトルデス。ナントシテモ捕マエナクテハ！」

ジバコイルの声に一瞬の沈黙の後、活気に満ちた声が広場に響いた。

「そうだ！ジュプトルをこのままにしておいては危ない！」

「世界のために、何としてでも捕まえなくちゃ！」

「私達も協力します！」

「盗まれっぱなしじゃ、納得行かないもんね！」

「もう絶対に盗ませないよ！」

広場のポケモンだけでなく、ユクシーやエムリット、アグノムまでもがヨノワールに協力した。これだけいると、とても心強い！

「皆さん、ありがとうございます。」

皆さんの……ポケモン全員の力を合わせ、何としてもジユプトルの悪巧みを阻止しましょう！」

『おおーっ！！』

……でも、本当にジユプトルは悪いポケモンなのかな……？
何かが……何かが違う気がする……。

「ヨノワールさん。」

水晶の湖の時の歯車を手に入れるには、僕を倒せばいいことをジユプトルは知っている。

だから、ジユプトルは僕を倒しにくるはず。」

「そこで、私達三匹が水晶の湖に行き、二度と奪われないように時の歯車を封印するという噂を流せば……。」

「ジユプトルは必ず現れるんじゃないかしら。」

「なるほど。囮作戦ですね。」

しかしそれだと、貴方達が危険な目にあってしまいますが……。」

「望むところよ……。」

「それでジユプトルを止められるなら。」

「私達、覚悟はできています。」

「……………わかりました。」

皆さん！これから作戦を言います！まず……………」

そんな広場の様子を、遠くから見ているポケモンがいた。

「よく平然と嘘がつけるよねえ。」

「報告しますか？」

「うん。急ぐよ！長！」

「はい。」

二つの影　無月と長は、ある場所へと向かった。

しばらくして着いたのは、壊れた家々が目立つ、廃村だった。

「……………どうした？」

壊れた家の影から、ジユプトルが顔を出す。

「ちよーつとまずい事になったかもね。」

無月は、広場でのことを話した。

「そんな事を！？……いや、これも予測していたことだ。」

「捕獲は自分だけでやるって言ってたけど、注意してね。」

「わかった。…情報、ありがとう。」

ジユプトルは無月に背を向けると、どこかに行ってしまった。

「どういたしまして、っと。」

…長。サン達には逢えた？」

気配を感じ、振り返ると、長の姿があった。

「はい。無月様の読みどおり、サンに振り回されていましたよ。事情を話して、協力してくれることになりました。」

「ありがとう、長。」

…さて、一眠りするかな。」

ふああ…と欠伸を一つして、頭と手足を殻に引っ込める。

「……………やれやれ、困った御方ですね……………」

そんな無月に、長はため息を吐くのだった。

第二十六話：ヨノワールの秘密（後書き）

最近インフルエンザで学級閉鎖が続出しています。

ヒナタ

「作者さんは大丈夫なの？」

はい。丈夫ですから。
でも、気を付けます。

第二十七話：ルナピンチ！？新たな仲間（前書き）

第二十七話完成です。

第二十七話：ルナピンチ！？新たな仲間

「そういう訳で、みんなは通常どおり仕事に励んでくれ。ではみんな 今日仕事に掛かるよ」

『おおーっ！！』

あれからギルドに戻った私達。

ヨノワールは作戦のため、アグノム達と共に水晶の洞窟へと向かった。

気にはなつたが、作戦もあつたので信じて待つという形にまとまつた。

とりあえず依頼を探そうと、掲示板へと向かう。

「どれにしようか？」

「今日は軽めにしましょう。最近依頼をこなしてないし、身体を慣らさないよ。」

「わかった。……………あれ？ルナ？」

と、そこにルナが通りかかる。

スカイの姿はなく、一匹だった。

「ルナ！」

カズキが声をかける。

しかしルナは、気付かずに外に出ていった。

「……落ち込んでたわね。」

「うん……」

いつもは明るい元気なルナだが、さすがにショックが大きいようだ。

「あんな状態で……何か起きなければいいけど……」

去りゆく背中を見つめながら、心から心配するのだった。

さて、ルナはというと……

「はあ……」

ギルドから程近い森のなか、そこをルナは進んでいた。目的などない。もやもやした感覚を持ちながら、ただ歩を進めていた。

そんな最悪な気分の時、突如感じた殺気！

「!?!?」

ルナはとっさに右に避ける。

すると、さっきまでルナがいた場所に毒針が数本刺さっていた。

「誰!?!?」

「おれっちの不意打ちを避けるなんて、やるね。」

木の後ろから現れたのは、毒針を放ったと思われるアリアドスと、サイドンだった。

「誰なの？貴方達！」

「おれっちはリグド。こっちはベルク。ルナティックさ。」

「！？ルナ、ティック！？」

よりによって、こんな時に……

「私の部下を随分とこけにしてくれたな。

この礼は、たっぷりとさせてもらおうぞ！」

ベルクはそう言って、背中に背負っていた幅の広い大剣を抜く。

「（部下？……そういえば、ルナティックには階級があるんだって、スカイが言ってたっけ……。」

よく、俺は結構上の方にいるんだぜ！と、自慢していたのを思い出す。

ということとは、今日の前にいるのは、幹部クラスということだろうか？

どちらにしても、2対1では分が悪い。自然と後退りしてしまう。

「逃げるのか？やっぱり一匹じゃ何もできないんだな！」

嘲笑を含めていうリグド。

その言葉は、ルナの怒りに触れてしまったようだ。

「そんなことないもん！」

ちようど新しいおもちゃが欲しかったところ！相手になってあげるわ！！」

ルナは、リグドに向かって走りだす。

「燃えちゃえ！火炎放射！！」

いつもより三割り増しぐらいの威力の炎が、リグドに迫る。

「させぬわ！！」

ベルクは剣を盾代わりにして炎を防ぐ。

「邪魔しないでよ！エナジーボール！！」

「守る！！」

緑色のバリアが張られ、ルナの攻撃を防ぐ。

「リグド！！」

「あいよ。毒づき！！」

剣の後ろから飛びだし、顔めがけて向かってくる。

「禁！裂破！！」

ルナは不可視の壁で攻撃を防ぎ、すぐさま反撃する。

「むうん！」

しかし、またしてもベルクに防がれる。

「もう！守ってばかりじゃ、つまんないよ！！」

「ふん！隙をうかがっているだけだ！」

ルナもどちらかという守りが多いが、敵にやられるのは気に入らないらしい。

「わたしに隙なんてない！アイアンテール！」

「守る！」

またしても防御。だんだんと苛立ちが募ってくる。

「リグド。行け！」

「あいよ！影分身！」

瞬く間にアリアドスの分身が作り出され、まわりを包囲されてしま
う。

「火炎放射！」

苛立ちのせいか、闇雲に攻撃を繰り返すルナ。
速さはあるが、肝心の本物には当たらない。

「もう！どれが本物の！？」

「……リグドに気をとられすぎだ。」

リグドを倒すことに集中していたルナは、背後から近づいてくるベルクに気づかなかった。

気づいて振り向こうとしたときにはもう遅く、大きな剣の腹で思いっきり殴られる。

なすすべもなく、木に叩きつけられてしまった。

「うつつ……」

…足に力が入らない。木にぶつかった時に痛めてしまったらしい。

「覚悟はいいな……？」

剣先をルナに向け、目の前に立つベルク。

「まだ……まだ負けてない！」

動けないながらも、力を振り絞って声を出す。

「縛！」

見えない糸が、ベルクを縛り上げる。

「…リグド、やれ。」

「あいよ。糸を吐く！」

リグドの糸がルナの口を塞ぐ。
それと同時に、ベルクは拘束を力づくで振りほどく。

「これで終わりだ！」

そう言っつて剣を振り上げる。

「（ここまでなのかな……）」

諦め掛けた、その時だった。

「ルナお嬢様あーっ！！！」

必死な叫び声。

突如疾風の如く現れた“それ”は、ベルクの大剣を弾き飛ばした。

「大丈夫！？ルナ嬢！」

「（レイにサン！？）」

現れたのは、長めの尻尾に二本の傷があるライチュウと大きな瞳が可愛らしいピカチュウだった。

ピカチュウはルナに近づくと、口を塞いでいた糸を外してくれた。

「サン！どうしてここに！？」

「説明は後でね。兄ちゃんがすぐに終わらせるから」

そう言っつて前方のライチュウを見る。

ちなみに台詞からわかると思うが、この二匹は兄弟だ。

「お嬢様をよくも！！ただでは済まないぞ！」

そう言って、手に電気を集める。それはだんだんと形になっていき、白く輝く槍になった。

「いくぞ！疾風迅雷！」

レイは走り出す。その速さは、まさに疾風の如きスピードだった。ベルクは防ごうとするが、もともとそれほど速くないため、防御動作が間に合わない。

「ベルクーー！！！」

ベルクが回避不能なのを知ったのか、リグドはギリギリでベルクの前に滑り込んだ。

当然攻撃は、リグドに直撃する。

「リグド！！？貴様……！！？」

レイの攻撃が終わると、そこには黒焦げになって倒れているリグドの姿。

リグドはその身を犠牲にして、ベルクを守ったのだ！

「……くっ！よくもリグドを……」。

そのライチュウ！貴様は絶対に許さんぞ！！必ずこの手で葬ってやる！！」

ベルクはそう言い残し、落ちていた剣を拾って去っていった。

「ルナお嬢様！ご無事ですか！？」

「う、うん。…ちょっと足が痛いけど……」

ルナの後ろ足は血が滲み、若干向きがおかしかった。

「これは、酷い…。すぐに手当を！」

そう言って、バッグの中を探りはじめる。しばらくして見つかったのか、試験管のようなものを取り出す。中には白色の小さな玉がいくつか入っており、その一つを手に取り取った。

「シルフから貰った薬です。どうぞ。」

レイはルナの口にその玉を入れる。

ゴクリ、と飲み込んだ音が聞こえた。すると驚くことに、足の傷は跡形もなく消えてしまった。

「ふう……。ありがとうレイ！おかげで助かったわ！」

「礼にはおよびません。当然のことをしてだけです。」

先ほどベルクに見せていた表情が嘘のように、今はとても嬉しそうな笑顔だ。

「でも、今までどこにいたの？心配してたんだよ？」

「申し訳ありません。このバカ弟が……」

「バカっていうな!!」

レイの言葉にすかさず反論するサン。
その様子に思わず笑いがこぼれる。

「ところでお嬢様。ウィン殿は？」

「それが……………」

一気に暗い表情になり、今までのことを話す。

「なるほど…………。では、さっそくギルドに向かいますよ。」

「うん!」

こうしてルナ達は、ギルドへと向かうのだった。

「あつ、ルナ!」

ちょうど依頼を終え、ギルドに帰ってきた頃だった。

私は見知らぬピカチュウとライチュウを連れたルナを発見した。

「ごめん!後でね!」

ルナは少し慌てた様子で弟子部屋へ向かった。

「どうしたんだろう?」

「さあ……。でも、嬉しそうだったね。」

何があったかは知らないが、いつものルナに戻ってよかった!

その後、夕食の席でピカチュウとライチュウ サンとレイがルナによって紹介された。

サン達はギルドに弟子入りを希望し、『スターズ』を結成した。

ウィンもレイの薬によって回復し、明日には目覚めるそうだ。

新たな仲間を加え、さらに気分が高揚するギルドだった。

第二十七話：ルナピンチ！？新たな仲間（後書き）

ああ……全然ダメだ……。

ヒナタ

「何が？」

最近まったく書く気がわかない……。

カズキ

「大丈夫？」

頑張ります……。

おそらく次は番外編の方を更新すると思います。

第二十八話：時の歯車を求めて（前書き）

第二十八話完成です。
今回は無月視点です。

第二十八話：時の齒車を求めて

廃村になった村に朝日が差し込む。

その光で、僕は目を覚ました。

「お目覚めですか、無月様。」

「ん…おはよ、長。」

僕が目を覚ました頃には、長もジュプトルも起きていた。

「みんな早いね。」

「……今日くらいは早起きしてもらいたかったですよ……。」

長が呆れたように言う。

まあ、今日は大事な“決戦当日”だし、気持ちは分かるけどね。

ヨノワールがでたらめな事を言ってくれてから数日経った。

道具などを揃えたりして、なるべく万全の状態を作り、今日はいよいよ水晶の湖に時の齒車を取りに行くことになったのだ。

…別に急がなくなたって、時の齒車は逃げたりしないと思うけど……。

「しかし、本当にいいのか？俺と一緒に乗り込めば、敵視されるのは必然だぞ？」

少し心配そうに言うジュプトル。

もともと一匹で行こうとしていたのを僕が引き止めたのだ。

「そんな心配無用だよ。自分の心配でもしてたら？」

「……ふっ、そうだな。」

本当の盗賊なら他の心配なんてしない。やっぱりこいつは正しいんだ。

「じゃあ、行こうか。」

「ああ。」

「そうですね。」

僕達は時の歯車を取りに水晶の湖へと向かった。

相も変わらず綺麗な水晶がきらきらと輝いている。

……気に食わない。そんなに輝いたら、僕が目立たないじゃないか。と、心の中で文句を言いつつも洞窟を抜け、湖へ辿り着いた。

「ようやく来たか。待ちくたびれたぞ。」

前に戦った場所には、大胆にもヨノワールが腕組みをして待っていた。その後ろには、時の歯車を守るユクシー、エムリット、アグノムの姿。

前と変わらず、湖は水晶で覆われていた。

「ヨノワール……。随分余裕だな。俺ごとき一匹で十分ということか？」

「貴様は私には勝てない。それは未来にいた頃からわかっているだろっ?」

「それはやってみなくちゃ分からないだろ。」

「僕達もいるのを忘れないでよ?」

さつきから二匹しかいないような会話して、無視するなつての。

「お前はあの時のツボツボか?」

「そうだよ。…つまらない話はいいからさ、とっとと始めようよ。どうせ通してくれないんでしょ?」

「…ふん、そうだな。しかしお前達にこの私が倒せるかな?シヤドーパンチ!」

「当たり前でしょ!守る!」

ヨノワールの拳から放たれた影は、守るによって防がれる。

「ジュプトル様。彼はワタシ達に任せて、時の歯車を!」

「だが……いや、わかった!」

何か言おうとしていたが、結局言わずにジュプトルはヨノワールの横を通って時の歯車のある湖に近づく。

「させんぞー！」

「それはごつちの台詞です！」

ジュプトルの前に立ちはだかろうとするヨノワールを、長が触手でからめとる。

ジュプトルはその間に先に進んだ。

「それ以上は行かせません。」

「時の歯車は渡さないよ！」

「おとなしく捕まれ！ジュプトル！」

ヨノワールに代わってジュプトルの前に立ちふさがったのは、時の歯車を守護する三匹だ。

「できれば戦いたくはないが、これも未来のため…世界のためだ！」

ジュプトルはリーフブレードを構え、突進していく。

が、しかし……

「封印！」

「なっ！？身体が…動かない！！？」

ヨノワールは雷パンチで長を振り払うと、ジュプトルに向かって技

を放った。

封印は、対象の相手の動きを一定時間封じる技だ。まためんどくさい技を……。

「長！これ持って！」

「お、おっと……！？」

僕は殻の中からバズーカ砲を取り出して、長に渡す。そして、その中に入った。

「無月様！？まさか……」

「よく狙ってよ？さあ、撃って！」

「……わかりました。」

僕が使える、とっておきの技だ！
長はヨノワールに照準を合わせる。

「……！？皆さん！逃げてください……！」

さすがに慌てた様子のヨノワールが、ユクシー達に言う。

「他の心配してる場合か！？食らえ！モンスターキャノン……！」

ドオオーン……！！

轟音とともにバズーカ砲から発射された！

「くっ…！」

防ぐのは無理と判断したのか、とっさに左に避ける。

「甘いよ！」

「!?!」

僕は触手でヨノワールをからめとる。

少し避けるくらいじゃ、この攻撃はかわせないよ！

そのまま勢いに乗って水晶の壁に激突する。

「ヨノワールさん！」

壁に激突し、倒れたヨノワールにユクシー達が近づく。

「さて、仕上げに…っ」と

ヨノワールを解放して、僕は殻の中から“手榴弾”を取り出す。

安全ピンを外し、ヨノワールの傍にそれを置くとジユプトルのもとに急ぐ。そして……

ドカーーン……！！

凄まじい爆発音とともに辺りの砂が舞い上がる。

同時に何かが碎けるようなガシャーン！という音も聞こえたため、おそらく水晶の壁が壊れたのだろう。

「（……ふっ、計算どおり。）」

ジユプトルを爆発から守るために張った守るの壁の中で、ちょっと嬉しい誤算にほくそ笑む。

「……お前等…本当に何者だ…？」

ヨノワールが倒れたせいか、封印が解けたジユプトルが驚きの表情を浮かべる。

「感心しないでとつと時の歯車を取ってきてよ。」

「あ、ああ…。」

ジユプトルが時の歯車の沈む湖に近づく。が、その時！

「舐めるなあー!!！」

「何!?!?!ぐふっ!?!？」

突如倒したはずのヨノワールが砂煙の中から姿を現し、ジユプトルに炎のパンチをたたき込んだ。

「ジユプトル!?!？」

「おのれ! やってくれましたね!！」

すぐさま近づこうとするが……

「重力!！」

「なっ!?!？」

急に身体が重たくなった。

重力は、相手のまわりの重力を強くして動きを制限したり、鳥ポケモンを地上に引きずり落としたりする技だ。どこまでめんどくさい技を使うんだ！

「散々てこずらせてくれたな。」

爆発で起こった砂煙が晴れる。

さすがに無傷ではなかったが、まだまだ余裕といった表情だ。後ろには爆発に巻き込まれたのか、ユクシー達が倒れている。

「覚悟はできているだろうな？食らうがいい。シャドーボール！」

「ぐっ……」

まともに食らってしまった。重力のせいでうまく動けない…！

「（ここはいつたん引くか…？）」

ちょっと格好悪いけど、ここにくたばるよりはましだ。ジュプトルには悪いが、後でサン達に知らせて助けてもらおう。

……やっぱり出しゃばるのはまずかったなあ。

動かしにくい身体を動かして、殻の中から“煙玉”を取り出す。

「ジュプトル！後で助けるからね！」

僕は煙玉を地面に叩きつける。その瞬間、辺りが煙に包まれた。ヨノワールが立往生している隙に僕達はその場から逃げ出した。

「…………逃げたか。」

煙が晴れ、静寂に満ちた空間にヨノワールの声が響く。
結局、時の歯車を取ることはできなかった。

「お前の仲間は、随分と頼りないのだな？」

「……………」

ヨノワールは、自分の攻撃によって気絶したジユプトルに問い掛ける。当然返答はない。
その後ヨノワールは、ユクシー達が起きるのを待ってトレジャータウンへと戻るのだった。

水晶の湖からなんとか脱出した僕達は、できるだけ急いで元レンレン村に戻る。

僕の感が正しければ、おそろくいるはずだ。
しばらくして到着すると予想どおり、村の北の外れにある海が見渡せる場所にピカチュウとライチュウの姿が見えた。

「サン！レイ！」

「ん？無月に長か。どうした……って聞くまでもないか。」

「ジユプトルがないってことは、失敗しちゃったんだね？」

「…そ、そうだよ。悪い!？」

自分が悪いのはわかっているが、どうも素直になれない。
僕は湖での事を話す。

「なるほど。つまり簡単に言うと俺達にジユプトルを助けだして欲しいというわけか？」

「う、うん。。。」

そんな呆れたような目で見るとの！

「わかった。難しいが、出来る限りやってみよう。」

「任せてよ！兄ちゃんがなんとかしてくれるから。」

「…………お前もやるんだよ。」

「わかってるよ。」

…………今更だが、本当に大丈夫だろうか。

「だが無月。一つ言っておく。

自分に出来ないからって、すぐに人に押しつけるのはどうかと思うぞ。」

「っ…………!？」

レイはそう言うと、サンを連れて行ってしまった。

「無月様……」

「わかってるよそのくらい……。でも、僕だって、誰かを守りたいって気持ちは、人一倍あるさ！」

なぜかムカつく。それは、悲しみにも似た感情。

「そんなこというなら、次は守護者の禁忌の技を使ってでも護ってみせるさ！」

もう聞こえないと知りつつも、レイに向かって力一杯叫ぶのだった。

第二十八話：時の歯車を求めて（後書き）

昨日今日と部活で大会がありました。

ヒナタ

「結果は？」

…ベスト16です。

カズキ

「まあ、よく頑張ったと思うよ？」

さすがに県内トップクラスは強い…。

…まあそれは置いといて、そろそろキャラ人気投票でもやるうか
とってます。その内番外編の方にも載せるので、よかったら見
てくださいね！

次回はキャラ紹介の予定です。
では。

第二十九話：ジュプトル救出作戦！（前書き）

第二十九話完成です。

第二十九話：ジュプトル救出作戦！

あれから数日が経った。

相変わらず掲示板に依頼は絶えなかったが、何の問題もなく平和な毎日が続いていた。

今日も朝早くから朝礼をやっている。

「まだジュプトルが捕まったという情報は入っていない。今日も普段どおり……」

ペラップが話している途中、突如サイレンの音が響き渡った。

「デイグダ！どうした！？」

「コイルさんです。コイルさん！どうぞ！」

コイル特有の片言が聞こえてくる。

その内容は

ジュプトルの捕獲に成功した

というものだった。

ジュプトルを捕まえたヨノワールは、“時空ホール”というトンネルのような穴を通って、未来に帰るそうだ。

それを聞いたギルドの弟子達は、いてもたってもいられなくなって急いでトレジャータウンに向かうのだった。

弟子達が慌ててトレジャータウンに向かう中、動こうとしないものがいた。

チームスターズ レイとサンだ。

「……………どうするか。」

弟子達が全員いなくなるのを待って、ため息混じりにレイが呟いた。

「無月に偉そうなこと言ったはいいが、どうやって助けたらいいんだ……………」

「誰を助けるんですか？」

「決まってるだろ……………って!?!?」

すでに自分達しかいないと思っていたのですんなり答えそうになるが、すぐに気付き振り返る。

そこにいたのは、一匹のイーブイ。

「ウイン!?!いや、その……………」

突然の事態に慌てふためくレイ。

別に隠す必要はないのだが、つつい混乱してしまう。

「あの、レイさん? そんなに驚かなくても……………」

「兄ちゃん慌てすぎ……………」

そんなレイの姿に思わず苦笑いする二匹。
レイが落ち着いたところで、本題に入る。

「それで、誰を助けるんですか? ……最も、今の状況からすると、そ

れに当てはまるポケモンといたら……ジュプトルしかいませんね。」

「そ、その通りだ……」

ウインの洞察力に驚きつつも、レイとさんはこれまでのことを説明する。

「なるほど。つまり今の目的は、ジュプトルを助けだす、ということですね？」

「うん。」

「では、急いで作戦を考えなくては。残り時間は少ないです。」

「それはそうだが、どうやって助ければいい？ ヨノワールがジュプトルを連れて未来へ帰るのだとしたら、トレジャータウンやギルドの皆が見ているはずだ。」

助けだすのは難しい。」

確かにそうだ。

たとえ助けるのに成功したとしても、ギルドの皆を敵にまわすことになる。

へたをすれば、ルナにも影響が出るかもしれない。

「トレジャータウンで助けるのは無理か……」。

となると、“トレジャータウン以外の場所”で助けるしかありませんね。」

「トレジャータウン以外の場所って……まさか！」

「確かにリスクは高めですが、うまくいけばすべて丸く収まるかも知れない。」

ウインの言う“トレジャータウン以外の場所”。

ギルドの皆を敵にまわすことなく、ジユプトルを救出できる場所。

「行きましょう。“未来”へ。」

「……………」

ウインの衝撃の発言に声が出ないレイ。

いつからこんなに勇敢になったのだろう？昔は悲しみや寂しさに怯えていたのに……。

ウインの“成長”には、心底驚かされてばかりだ。

「そう、だね。それが、最善策だね！」

一瞬奔った沈黙を破るようにサンが声を上げる。

確かに現状では、それが最善策。

ならば、迷う事など何もない！

「よし！それで行こう。」

ジユプトル救出、必ず成功させるぞ！」

「「おおーっ！」」

手を振り上げ、気合いを入れる。

ジユプトルを救出すべく、いざ、トレジャータウンへ向かうのだった。

「それでは皆さん…。名残惜しいですが…」

トレジャータウンはお別れのムードに包まれていた。

ギルドからジュプトルが時空ホールへ入れられるのが見えたから、ヨノワールも未来へ帰るのだろう。

「うつつ…寂しいですわ…」

「また会いたいです…」

皆が口々にお別れの言葉を言う中、ヨノワールは時空ホールに近づく。

しかし、直前でぴたりと止まり。

「…そうだ。最後にぜひ挨拶したい方が…。
ヒナタさん。そしてカズキさん。」

ヨノワールの言葉に、ヒナタ達が前に出る。

「これでお別れだね…。ヨノワールさん…。
今まで、本当にありがとうございました！」

ぺこりと頭を下げる二匹。

しかし、ヨノワールは無表情で何も答えない。

「これで、お別れ…か。」

……それはどうかな？」

「（まさか！あいつ！！）」

集まったポケモン達を掻き分けながら進んでいたレイは、ヨノワールのねらいに気付いた。

「別れるのはまだ早い！！」

「ヒナタ、カズキ！危ない！！」

一番前に出ていたサンが叫ぶが、その時にはすでにヨノワールの大きな手がヒナタ達を捕らえていた。

「レイさん！」

「おう！電光石火！」

こうなったらジュプトルと一緒に未来で助けるしかない！
時空ホールが閉じようとする中、全力で駆け抜ける。
なんとかギリギリで飛び込み、それと同時に時空ホールは跡形もなくなってしまうた。

「い、今のは……一体……」

「何が起こったのでしょ……？」

トレジャータウンに残されたポケモン達は、何が起こったのか、またどうしてそうなったのか、理解できずにいた。

「サン、ウイン！無事か！？」

時空ホールの中。

景色が捻れたような空間は、あまり長居したくない場所だ。
ヨノワールは先に行ったからか、姿は見えない。

「うん！」

「なんとか！」

三匹は泳ぐようにして、同じ場所に集まる。

「いいか？もしかしたらついたらすぐに戦いになるかもしれない。
気を引き締めていくぞ！」

「「おおーっ！」」

掛け声が響く。

それは、ジュプトル救出作戦開始の合図だ。

第二十九話：ジュプトル救出作戦！（後書き）

今回ちょっと行間をあけてみました。

これで少しは読みやすくなる。……………多分。

ヒナタ

「今回私達の台詞少くない？」

その辺はご勘弁を……………。

色々とあるのですよ。

人気投票締切まであと四日。まだの方はお早めに。

第三十話：未来世界！？広がる不安（前書き）

第三十話完成です。

第三十話：未来世界！？広がる不安

暗い暗い空の下。

今にも崩れそうな塔があった。

「……いや、もう“崩れている”と言ったほうがいいだろうか？

塔の一部だったものが空中で静止している。

もはや塔とは言えないその塔の最上階に二つの影があった。

その一つはヨノワール。そしてもう一つは、ヨノワールの何倍も大きな、時を司る神。

「お待たせいたしました、ディアルガ様。

少し苦勞はしましたが、ようやく捕らえる事が出来ました。」

かつては時の神と崇められたディアルガ。しかし、今のディアルガを神と呼ぶ事は出来ない。

今のディアルガは……そう、“人形”と化していた。

『グルルルルル……』

体の模様と赤い瞳が不気味に光る。

「……十分心得ております。

歴史を変えようとするものは 消すのみ。すぐに排除いたします。

」

『グルルルルル……』

「……わかりました。必ず。

……では。」

「……………ねえ、ヒナタ。」

起きてよヒナタ。目を開けて。」

「……………うう……………」

聞き覚えのある声が私を呼ぶ。

少し重い瞼を開くと、そこにいたのは。

「カズ、キ…？ここは、一体…」

「気が付いた！」

ヒナタ…。多分、ここは牢屋みたいだよ。」

「えっ！？ろ、牢屋！？」

ビククリして飛び起きる。

カズキは困った顔をしながら説明し始めた。

「僕もさつき起きたばかりだからよくわからないんだ。

でも、あの扉を開けようとしても開けなかつたんだ。」

カズキは視線を私の後ろへと向ける。

その視線を追うと、そこには見たことのない、大きな扉があった。

「ほかに出口は見当たらないし…。多分僕達、閉じ込められたんじ

カズキはパニックになっている。
その目には、うっすらと涙が見えた。

「落ち着いてカズキ！」

帰る方法は…私にもわからない。でも、きっとあるはずよ！

……とにかく、ここから脱出する方法を考え……」

と、言っている途中だった。

ガコン！という音とともに扉が開かれたのだ。

「ウイー！起きていたか。」

おい、手っ取り早くやるぞ！」

入ってきたのは六匹のヤミラミ達。

こいつら、ヨノワールさんが連れてたヤミラミだ。

「て、手っ取り早くって…何を？」

カズキは後退りする。

ヤミラミ達はお構いなしに近づくと、白い布で私達の目を覆った。

「うわっ、目隠しされた！何も見えないよ！」

「こっちに来るんだ。」

「いてっ！押さないでよ！」

目が見えないので詳しくはわからないが、カズキが必死に抵抗しているのがわかる。

「(どこへ連れていかれるのかしら…?)」

ヤミラミ達に連行されながら、そんなことを思うのだった。

「着いたぞ。」

目隠しが外される。

しかし辺りは暗く、目隠しされている時とあまり変わらなかった。

「こ、ここは!? 真っ暗……」

じたばたしてみるが、体が動かない。

見てみると縄で体を縛られていた。

「こ、ここはっ!?!」

!今、カズキの声が!

しばらくして暗闇に目が慣れてくる。右を向いてみると…

「あっ!」

「カズキ!」

よかった…!

私は小さく安堵の息を洩らす。

カズキも同じように縄で縛られていて身動きできない状況だったが、

ジユプトルが処刑されるのはわかるよ？でも、何で僕達まで！？僕達何もしてないよ！」

「フン！俺の知ったことか。何かろくでもない事でもやったんじゃないのか？」

「僕達は何もやってない！一緒にしないでよ！」

「どっちだっていい。

そんな事言ってる間にほら、お出ました。」

ジユプトルが扉の方を向く。私達もつられてそちらを向いた。今まで暗かった部屋が急に明るくなる。

そして、閉まっていた扉が開かれた。

いきなり明るくなったので、眩しくて一瞬目をつぶる。

薄目で前を見ると、六匹のヤミラミ達。

「わわっ！あいつらは！？」

「奴らは処刑場の執行人であり、そして……ヨノワールの手下だ。」

「えっ…ヨノワールさんの！？」

カズキは驚く。

ちよっと待って…なんでヨノワールさんの部下が私達を処刑しようとしてるの！？どうして……

「あっ！ヨノワールさん！」

混乱しているとカズキの声が聞こえたのはっ、と我に返った。

開いた扉からヨノワールが現れる。

その目は、以前の優しそうな目ではなく、とても冷徹な目をして
いた。

「ヨノワール様。三匹を柱に縛り付けました。」

「よろしい。」

「ヨノワールさん！どういうこと！？何でこんなことになってるの
！？？」

私は必死に訴える。

しかし、ヨノワールはその声を無視して、そして……

「ではヤミラミ達よ。これから“三匹の処刑”を始める。」

命令した。

「ええーーーーっ！！？」

「ヨノワールさん！」

「それでは、処刑準備用意！」

『ウイーーーーッ！！』

ヤミラミ達の宝石の目が、キラリ、と光る。

「ちょっと待ってよ！どうしちゃったのさヨノワールさん！何で僕

達まで！」

「あいつに何を言っても無駄だ。それより…」

（ここからは、あいつらに聞かれないように小さな声で話せ。）「

「うぐっ…」

（ち、小さな声で？）「

ぎりぎり私にも聞こえるような声で話し始めるジユプトル。
一体何なのだろうか？

「（まず確かめたいことがある。ヨノワールの後ろの扉に隠れてるやつ、誰だか知ってるか？）「

「（え？）「

ジユプトルに言われ、扉の方をしてみる。

ヨノワールのせいで見え難かったが、よく目を凝らしてみるとオレ
ンジ色の体に長い尻尾の先に二本の傷があるライチュウの姿を確認
できた。

「ッ！？（れ、レイさん！？）「

「（知り合いか？）「

「（僕らのいた世界でギルドの探検隊で、スターズのリーダーだよ。
「

「（ほう）（…）「

ジュープトルは驚きに少し目を開く。
レイの方もこちらがきずいたのにきずいたらしく、声を出さずに口を動かしている。

「（いまたすける
今助ける！）」

口の動きで、レイの言っている事がわかった。
私はレイに向かって頷く。

レイは一度深呼吸をした後、電光石火で私達の前に来た。

「!?!? 貴様、何者……」

「フラッシュ！」

「ぐっ!?!?」

ヨノワールが何かを言う前にレイは激しい閃光を放つ。
光に弱いのか、ヨノワールとヤミラミ達は目を押さえてひざをつく。

「急いで逃げるぞ!」

レイは手に電気を集める。それはだんだん形になっていき、やがてナイフとなった。
それを使って素早く縄を切っていく。

「通路にサンとウインがいる。一緒に逃げろ!」

「レイさんは?」

「すぐに追いつく。早く行け！」

「わかったわ。」

「ありがとう！」

私とカズキは、ヨノワールの隣を通過して扉の向こうへと脱出した。

「お前も一緒に来い。」

「…いいのか？俺みたいな犯罪者を助けて。」

ヒナタ達が逃げた後、レイはジュプトルの縄を切った。

「こんなときぐらい強がるな。話は無月から聞いている。」

「無月から！？…だがあいつは、俺を見捨てて逃げたはず…！」

「戦略的撤退だ。見捨てたわけじゃない。」

…とにかく今は逃げるのが先、説明は後だ。一緒に来い！」

「……………わかった。」

レイはジュプトルと共にこの場から逃げ出した。

「うつつ…おのれえ……………」

処刑するものがいなくなった処刑場には、悔しそうな声を上げるヨノワールとヤミラミ達だけが残っていた。

第三十話：未来世界！？広がる不安（後書き）

今回から未来編突入です！

テスト中だと書く時間が少なくて大変だ……。

次回はテスト終わりなので早く書けるかな？
では

第三十一話・誰を信じればいいのか？（前書き）

第三十一話完成です。

第三十一話・誰を信じればいいの？

「出口はこっちだよ！急いで！」

真っ暗な通路をヤミラミ達にみつからないように走る私達。

どれくらい走ったかはわからないが、結構な時間こうして走っている。

「…ねえ、ウイン。ここはもしかして…未来の世界なの？」

「ええ、そうです。…残念なことに。」

「…やっぱり、そうなんだ…。僕達…元の世界に帰れるのかなあ…」

心は不安に満ちている。それは消えることなく、際限なく増え続ける。

「…わかりかねます。しかし、今は逃げるのが最優先です！」

「つかまったら元も子もないからね！ほら、出口が見えてきたよ！あとちょっと！」

サンの言うとおり、すぐ先には大きな扉が見えた。

私とカズキ、そしてウインとサンはその大きな扉を開け　そして。

「やった！やっと…外だあ！」

思わずふう、と一息つく。

まだ危険が去ったわけではないが、とにかく外に出れたという事実

に少し安堵した。

「うまく逃げきれたみたいだね。……それにしても暗いね。月でも出てないのかな？」

サンの言葉に私は空を見上げてみる。空は灰色に染まり、サンの言うとおり月は見えない。

せめて星でも見れたら良い、けど

そこで。私はあることに気づき、思わず目を見開いた。

こ、これって…!？」

「どうしたの？ヒナタ。」

「カズキ…。空、見て…」

震える声で言う私に疑問を感じたのか、カズキは小首を傾げながら空を見る。

しかし、空を見た次の瞬間

「……!？なっ…こ、これ、は…!？」

カズキは驚愕の声を上げた。そしてそれは、私も同じだった。

空には、星一つ見えなかった。…これはまだ理解できた。

だが私が見たのは、“宙に岩が浮いている”光景だった。

周りをよく見れば、森の木々は生き生きと茂らず、空と同じく灰色。地面からも暖かさは感じられず、同じく灰色に染まっている。

色が、暖かさが 一切無い。

すべてがモノクロと化している

「こ、ここが…ここが未来の世界なの？
岩とか浮いてて、随分不思議なところだけど…。
なんか真っ暗だし…風も吹いてない…。」

「これじゃあまるで…すべての動きが…」

止まっているみたい

「……その通りだよ。」

「えっ？」

「その通りって…？」

サンは静かな声で呟くように言った。
どういう事が詳しく聞こうと思った、が、その時。

「…！誰か来ます！」

ウインが近づいてくる足音を聞き取った。
私も耳を澄ませてみるとかすかに『ウイイーッ！』という声が聞
こえた。

「早く逃げよう！」

「ええ！……あ……」

私はあることに気づき、足を止める。

「？…どうしたの？早く！」

「でも、レイさんがまだ中に！」

後から追い付くといっていたが、ヤミラミ達にとって有利なこの建物から無事に脱出できるのだろうか？

「あ、……い、いや！今は逃げるのが先だよ！兄ちゃんなら大丈夫！」

サンは一瞬建物の方に足を向けたが、すぐに首を振ってそれを戻し、走りだした。

私は一度振り返った後、それに続いた。

レイが無事だといいと。そしてなぜか、ジユプトルも無事だといいたと思った。

「……はあはあ……はあはあ。
ねえ、僕もう疲れたよ……」

「いったん休みましょうか。」

またしばらく走り続けていた私達だが、さすがに体力にも限界というものがある。

カズキの声をきっかけに一時休息することにした。
適当な岩影に身を隠し、乱れた息を整える。

「ここならヤミラミ達も発見しにくいでしょう。」

「でも、少し休んだらすぐ出発するよ！」

休みなく走ってばてているカズキとは対照的にウインとサンはまだまだ余裕そうだった。

一体どこにそんな体力があるのだろうか？

「ん？あれは……」

何かに気付いた様子のサンが空を見上げる。

私もそちらを見てみると、灰色の空に黄色の花火が何発も上がっていた。

一体誰が打ち上げてるのだろうか？

「兄ちゃんからだ！ よかったあ！無事で。」

「え、どういふこと？」

「あれはサンとレイさんがお互いの位置を確認したりする時に使う合図なんです。」

あれで会話もできるみたいなんです……僕にはさっぱりです。」

「へえ……」

そんなことができるサン達に感心しつつ、レイの無事にほっと安堵する。

サンも返事だろうか、空に電撃を飛ばし、花火のように弾けさせる。

「ジユプトルと一緒に『黒の森』に向かってるって！僕たちも早く

行こ！」

「…え、今、ジュプトルと一緒に言った!？」

サンの言葉にカズキが反応した。

「うん。言ったよ。なんで？」

「だってあいつは悪いやつだよ!?!どうして助けたのさ!」

「…じゃあ聞くけど、ジュプトルが悪いやつで…あのヨノワールが良いやつなの？」

ジュプトルと一緒に君達まで消そうとした、あのヨノワールが!？」

「う…。でも…かといって僕はジュプトルも…」

口ごもるカズキにサンはふうと小さく息を吐く。

「……そんなに信じたくないならもういいよ。僕と兄ちゃんだけでジュプトルを手伝えれば良い話だ。

僕は先に行くよ。じゃあね。」

「ちよ、ちよつと待って！」

今はあたりが暗くて見通しも悪いわ。だから今動くより、朝になるのを待ったほうが」

「……朝は、来ないよ。」

「!?!?」

「この未来は暗黒の世界…。日が昇ってくることはないし、従って朝も来ない。ずっと暗いままなんだ…」

「ど、どうして?」

震える声で問うカズキ。サンは静かに答える。

「それは…星が“停止している”から…。」

「星が…停止…?」

「前にヨノワールさんが言ってたわね…。」

『星の停止とは、星自体の動きが止まってしまうことです。』

時の歯車を盗ると、その地域の時は止まりますよね?それがどんどん広がっていき、やがて星までもが止まってしまう。

それが“星の停止”なのです。』

『ほ、星が停止すると、どうなっちゃうの?』

『星の停止が起きた世界は、風も吹かず…昼も来ないし…春も夏も来ない。まさに、』

暗黒の世界

世界の破滅といっても過言ではない。そんな世界。ヨノワールはそう説明していた。

「星の停止…。」

確かにヨノワールさんの説明と同じ感じだけど…。でもまさか…未

来では、星が…停止してたなんて…」

「これは全部ジュプトルに言ったことだよ。信じる信じないは君達の自由だ。」

…今度こそ僕は行くよ。じゃあね。」

サンははき捨てるように言うと、洞窟へと入って行ってしまった。未来世界の…不思議のダンジョンへと。

「……ヒナタ…。僕、もう何がなんだかわからなくなってきたよ。星の停止は時の歯車がなくなることで起きるんだったよね？だから僕達はジュプトルが時の歯車を盗むのを防ごうとした。そしてそれは成功したはずだよな？」

盗り返した時の歯車はユクシー達が元の場所に戻すって言ってたし。星の停止は、防いではずなんだ。でも、それなのに……、どうして未来では、星が停止してるんだろう…。

ああ、もう何を信用して良いかわからなくなってきたよ！」

カズキは俯く。私は声をかけることができなかった。しばらく沈黙が続く。…その時。

「ヤミラミ達が来ます！」

雰囲気を感じて離れていたウィンがあわてた様子で戻ってきた。…さっきの花火のせいかしら？

「ホント！？こうしちゃいられない！早く逃げなきゃ！」

私達は、あわてて洞窟の中へ入っていった。

「あっ！あっちに見えるの、出口じゃないかな？」

「そうみたいね。」

しばらくして、サンが入って行ったダンジョンを抜け出した。各フロアでサンを探してみたが、結局見つからなかった。

「だいぶヤミラミ達を引き離れたかな…。はあ、はあ…。ちょっとここで休もうか。」

「そうね…。あっ！あそこに水がある！」

私が見つけたもの、それは小さな滝だった。ただし、水の流れは止まっていた。

「水しぶきが跳ねたまま固まってる…。…やっぱり、未来では…時間が止まってる、のかな…。」

ヨノワールさんは何で僕達を連れてきたんだろう。あんなに親切だったヨノワールさんが…。

僕もう、何を信じていいのか、わからないよ…。」

「カズキ…。」

「せめて真実を説く手がかりがあれば…。ウインは何か知らない？」

「残念ながら、何も…。僕がサンから聞いたのは、ジュプトルは悪人ではない、ということだけなので……。お役に立てず、すいません…。」

「い、いいんだよ！

何か他には　そうだ！良い方法がある！」

「え？」

真実を突き止める方法…？

それは

「“時空の叫び”だよ！ヒナタの時空の叫びを使えば、何かわかるかもしれない！」

「なるほど…。確かにやってみる価値はあるわね！」

私は滝に近づき、その水しぶきに触れてみる。
目を閉じ集中してみるが

「……………」

ダメだ…。何も感じない…。

私は首を横に振った。

「だ…ダメかあ…。良い方法だと思ったのに…。」

「結局わからず終いね…。

…だいぶ時間が経っちゃったわね。ヤミラミ達に追いつかれないうちに早く行きましょう。」

「はあはあ…。だ、だいぶ登ってきたね。」

進むたびにだんだん傾斜が高くなり、だいぶ高いところまで来た。見晴らしはよく、未来世界を見渡せるほどだ。

「ヒナタさん、カズキさん。ここでいったん休憩しましょう。」

「えっ、でも…」

「無理して進んで倒れたりしたら大変ですから。…僕はヤミラミ達
が来ないか見張ってますので、少しでも休んでください。」

ウインはそう言って行ってしまった。

心配してくれてありがとう、と心の中でウインにお礼を言う。

「ねえ、ヒナタ…。」

ヨノワールさんは今まで僕達を助けてくれたし、いろいろなことをおしえてくれた…。だから、ヨノワールさんのことは、凄く尊敬してた。

…でも…、ヨノワールさんは僕達のこと…騙してたのかなあ…。こ
うなった今でも信じられないよ…。

僕もう、何を信じていいのか…。頭の中がぐちゃぐちゃだよ…。」

「…カズキ…。」

「僕達…これからどうすればいいんだろう…。いつたどこまで逃

げ続ければいいんだろう…。元の世界に、帰れるかなあ…。
…ギルドのみんなはどうしてるだろう…。僕達のこと、心配してくれたり、してるのかな。プクリンやペラップや先輩達…みんな、元気にしてるのかな…。

ツ、ギルドのみんなに、会いたい…」

カズキの目からぼろり、と涙が一粒流れるのが見えた。
その姿はとても悲しそうで、思わず胸がしめつけられるような…そんな感覚になった。

「（…カズキもだいぶ参ってるよね…。無理もない。これまでに起きたことは…とても信じられないようなことばかりだったから。私だって、何を信じていいのかわからないし…不安でいっぱいだよ…。

でも、ここでくじけちゃダメ。今頑張らなかつたら、ヤミラミ達に捕まってしまう。何とかしてカズキを元気付けなくちゃ。

こんなときに慰めるのは、むしろ逆効果だし…そう、何か突破口があれば…。何か光が見えれば、それに向かって頑張っていける。何か一つでいい。何ができるのか…何をすべきなのか、考えるのよ…）」

私はそれまで俯いていた顔を上げた。

それに気づき、カズキもまた、顔を上げる。その目じりには涙がたまっていた。

「ん？どうしたの、ヒナタ…？」

「カズキ…ジュプトルと…ジュプトルと合流しよう。」

「えっ！…？ど、どうして！…？」

「…聞きたいことがある。」

「聞きたいこと、って…。」

…そっか…。元々ジュプトルはここから僕達の世界へ行ったんだもんね。ジュプトルなら、僕達の世界へ行く方法も知ってるはずだよ
ね。

でも……。ジュプトルは悪いやつだよ！？あいつは時の歯車を盗むために、僕達の世界へ来た…。そんなやつ言うことなんか、信用できないよ。

…ヒナタはどうなの？ヒナタはジュプトルのこと、信用、してるの？

「…信用してるかと言えば、それは違うのかもしれない。でも、私は、何を信用していいのか、何を信用すべきかじゃなくて、何を“信じたい”か、だと思う。」

私はジュプトルを信じたい。少しでもいいから、信じてみたい。「自分が信じたいものを、ただ信じればいい。」

「カズキは どうなの？」

「……………」
僕は、信用なんかできない！あんなやつ絶対に信用なんてできるわけがない！……………けど…。」

……………でも、ヒナタの言ってることもわかる…。
ヨノワールさんはなぜか僕達を狙ってる。となると、この未来で他に過去へ戻る方法を知ってるのは…ジュプトルしかいないもんね…。
今はジュプトルに頼るしか…ジュプトルを信じてみるしか、ないんだよね…。

……。
……うん、わかったよ、ヒナタ。ジュプトルを追いかけよう！ジュプトルに会って、元の世界に帰る方法を聞き出そう！」

カズキの顔に笑みが戻った。

くじけないで、自分が信じた道を進めばいいんだ。

「行こう、ヒナタ！ジュプトルに会いに！」

「うんっ！」

私は力強く返事をする、歩み始めようとする。しかし、カズキの言葉で、その歩みは止まった。

「ヒナタ、ありがとう。」

「え？」

「僕が元気がないから、心配してくれたんだよね。ヒナタだって不安でいっぱいのはずなのに……ごめん。」

一番大切なパートナーか近くににいるのに、僕は……一匹で悩んで……一匹で、くじけそうになってしまった。本とは、一匹じゃないのにな。僕はもうあきらめないよ。ヒナタが傍にいと、僕は勇気が出てくる。僕はもう、大丈夫。

頑張ろうね、ヒナタ。必ず一緒に……元の世界へ帰ろう！」

「くじけずに、自分が信じた道を進めばいい、か…。」

近くにあった岩にもたれながら、ウィンはヒナタとカズキの会話を聞いていた。

「では、僕はヒナタさん、あなたを信じて進んでいきましょう。」

真っ暗な世界でもくじけず、光り続けようとするあなたを、僕は信じたい。

第三十一話：誰を信じればいいのか？（後書き）

もうちょっとひねりを加えたかったけど、結局思いつかずにゲームの展開どなりに……。。

ああ、文章力がほしい……。

第三十二話：封印の岩場で（前書き）

遅くなりました！

第三十二話完成です。

第三十二話：封印の岩場で

「だいぶ深くまで来たな。もう少しだ。」

若干息を切らせながら呟くのは ジュプトル。

レイと共にヒナタ達とは別のルートで脱出したジュプトルは、目的地である『黒の森』に向け、ここまで休みなく歩いてきたのだ。

「大丈夫なのか？ここまで休みなしだし、休んだほうがいいんじゃないか？」

ジュプトルと同じく息を切らせながら言うのは レイ。

自分の体力などお構いなしに進んでいくジュプトルに最初は黙っていたレイだが、ここまで来ると、さすがに心配になってくる。

「ヤミラミ達が追って来るんだ。ぐずぐずはしてられない。」

それにここを抜ければ、森はすぐそこだ。」

ジュプトルはそう言って足早に歩を進める。

だが、急に立ち止まり

「…そういえば…あいつらは、無事なんだろうか…。」

ヤミラミ達に捕まったりしてないだろうか…。」

「…いや、それより、だ。今は自分の使命を優先させなければ！どんな犠牲を払ってもやり遂げると誓ったではないか！」

そうだ…。俺はやり遂げると決めたんだ。この未来を…世界を救うと。

「ジュプトル…。」

気持ちを改めるジュプトルをレイは静かに見つめる。
誰かを救いたいという気持ちは、俺と同じかもしれない…。

「 行こう。」

と、ジュプトルが歩みを再開しようとしたとき

「 待て！」

「！？誰だ！？」

ジュプトルとレイの進行を阻むように響いた声。

ジュプトルはバツ！と振り返るが、その場には誰もいなかった。
レイもとっさに身構え、辺りを見回している。

しかし、この薄暗い岩場には、ジュプトルとレイの姿しか確認できない。

「 我的縄張りに勝手に入り、眠りを妨げたにもかかわらず、そのまま立ち去ろうというのか？」

「 貴様、何者だっ！？ 」

「 我を怒らせたのだ。それなりの償いはしてもらおう。」

「 どこにいるんだっ！？ 隠れてないで出てこい！…！ 」

姿を見せない相手に、ジュプトルは苛立ったように荒々しい口調でそう言った。

「我は隠れてなどいない。我はここにいる！
我が名はミカルゲ。私の縄張りに入ったものは許さん！！」

「！！！？わ…わあああー！！」

「そろそろ奥地かな？」

ぼつり、と呟くように言ったのは サン。

ヒナタ達と別れたサンは、兄のレイとジュプトルに合流すべく、
人ダンジョンを歩いていた。

サンはふう、と一息つくと後ろを振り返った。

「ヒナタ達、だいじよぶかなあ…」。

…いや、ウインもいるし平気だよね。早く行こ。」

サンは再び歩き始めた。

しばらくすると、少し広い空間が目の前に広がってくる。…どつちや
ら奥地のようだ。

「ぐ…」

「！？」

今の、ジュプトルの声だ！

かすかに聞こえたうめき声をサンはしっかりと聞きとめた。そして、

声のするほうへ足早に行ってみる。

「あ、ジュプトル！兄ちゃん！」

「うぐ……お前、か……」

苦しそうに声を上げたのは 全身傷だらけのジュプトル。その隣に、同じく傷だらけな状態のレイがいた。二匹の体は、紫色のもやのようなものに包まれていた。そのもやはどこか不気味で、まるで生き物のような感じがする。

「だ、だいじょぶ！？二匹とも！」

と、サンは駆け寄ろうとする……が。

「来るなっ……！」

「え……？ど、どうして……？」

「気をつける、サン……。敵がいる……」

振り絞るように言うレイ。

サンはきよろきよろと辺りを見回すが、敵の姿は確認できない。

「ど……？ど……？ど……？ど……？ど……？」

いまだ辺りを見回すサンの背後に紫色のもやが忍び寄る。サンはまだ気づいていない。

気配を殺して近づいていくそれは、十分近づくとサンを包み込もうと襲いかかるうとする。

が、そのとき！

「サン！後ろ！！！」

「！？十万ボルト！！！」

突然響いた声に、サンは反射的に技を繰り出した。

サンに襲いかかろうとしていたもやは、その攻撃に思わず身を引く。サンは離れていく紫色のもやを見た後、声をかけた者のほうを向く。

「ヒナタ、カズキ、それにウィン……。」

そこにいたのは、数時間前に別れたはずのあの三匹だった。

「みんな、どうして……」

「ヒッヒッヒッヒッヒッ！」

サンはここに来た理由を尋ねようと近づくが、そこに不気味な笑い声が入る。

四匹は笑い声のしたほうを見る。

「我の“かげうち”を見破るとはな。

我の縄張りに足を踏み入れるものは許さん！もちろんオマエ達もだ！」

「だ、誰なの！」

「彼は”ミカルゲ”というポケモンです。何百年も前に罪を犯し、要石に繋ぎ止められた、と言われています。」

おそらく、レイさんとジユプトルさんを束縛しているあのもやは、彼の身体の一部なのでしょう。」

ヒナタの問いに冷静に答えたのはウィン。
ミカルゲはニヤリと口端を吊り上げた。

「そいつは強い！気をつけ　ぐあっ…！」

「ジユプトル…！」

「黙っている。さあ…覚悟しろっ！」

くっ！動けないところを攻撃するとは卑怯なまねを！

「葉っぱカッター！」

「火炎放射！」

「シャドーボール！」

「十万ボルト！」

各々が持っている遠距離技で攻撃を仕掛ける。
相手がどういふ攻撃方法なのかわからないため、様子見の一撃だったが、四匹分ともなればその威力は絶大だ。

ドゥーン…！

技は見事に命中！確かな手ごたえもあった。
が、しかし

「フ…ヒヒヒ！その程度か？」

あれだけの攻撃を受けたのにもかかわらず、ミカルゲはぜんぜん余裕の様子だった。

「今度はこちらの番だっ！あやしい風！」

ミカルゲはブワアア…と生暖かい風を飛ばしてきた。

うっ…気分の悪くなる技ね…

気味悪いことこの上ないこの技は全体攻撃。つまり食らったのはヒナタだけではないわけで…

周りを見るとみんな倒れふしている。

「不意打ち！」

「！？」

その様子に目を奪われていると、身体全体に激痛が走る。ヒナタはその場につづくまる。

「ヒヒヒヒ！」

不気味に笑うミカルゲ。その声に思わず、ゾクリ、と寒気がした。

「くっ、どうしたら…」

あやしい風に不意打ち。どちらも遠距離技のため、思うように近づけない。無理に近づけば、それこそやられに行くようなものだ。

かといって遠距離だけでは勝ち目はないし……

あれこれ考えをめぐらせていると、急に身体が軽くなったような感じがした。それはカズキ達も同様のようで、さっきまで倒れていたとは思えないほどだった。

「これは、いつたい…」

「“願い事”です。とにかく早く作戦を考えないと、本格的にヤバイですね。」

さらっ、と言うウインだが、あの状況でとつさに願い事を使うなんて…さすが、と言ったところか。

「でもどうするの？遠距離攻撃だけじゃ決定打にはならない。」

「それなんです…遠距離でも決定打にする方法があります。」

「えっ!?!」

ウインの発言に少し驚くカズキ。ウインはかまわず説明を始めた。

「この中で遠距離技の威力が最も高いのはサンです。そこで、僕が”手助け”で威力を高め、高められた技が命中すれば、何とかなるかもしれません。」

「でも、強化の間は無防備になっちゃうよ?」

「そこをカバーするのが私達の役目。…そうでしょ?ウイン。」

「その通りです。…では、早速作戦開始です!」

『おおーっ!』

ヒナタとカズキは、ウィンとサンから離れるとミカルゲの気を引こうと行動を開始する。

「おいっ、この鈍感！僕達からやれ！」

「！鈍感、だと…!?!」

ミカルゲは癪に障ったのか、体を完全にこちらに向け、シャドーボールを連射してきた。
よしっ！かかった！

「エナジーボール！」

「ふんえん！」

激しい攻撃を何とか捌いていくヒナタとカズキ。…だが、いかにせん数が多すぎる。

「（早く…早くして!）」

そんな祈りが通じたのか、ミカルゲの背後に黄色の電撃をまとったサンの姿が見えた。

「サン！今です！」

「貫け降雷！ライティングスラスト!!」

第三十二話：封印の岩場で（後書き）

“十万ボルト”は、ポケダンでは遠距離技ではありませんが、これはサンの特技です。そういうのが得意な設定なので。

サン

「…フォローできないなら余計なこと言わないでよ。」

最近いいネタが浮かばなくて、ちょっとつまり気味です…。

サン

「無視しないでよ!」

はいはいわかったわかった。

では、サンがうるさいのでこれで失礼します。

第三十三話：すべての真実（前書き）

なんか、だいぶ遅れちゃいましたけど……、
第三十三話完成です。

「いったい…何が起ころの!？」

その様子にかズキは思わず身震いするカズキ。
そして、絶叫が最高潮に達した時。

「ヒャー！」

今まで絶叫していたミカルゲから、先程とはまったく違う弱弱しい
とても小さな声の悲鳴が聞こえた。

………つて、み、ミカルゲ？

目の前には、さっきまで紫色のもやのような顔のミカルゲの姿はな
く、小さな石ころ 要石があるだけ。

「に、逃げる……!!」

ミカルゲはそう言うなり、一目散に逃げてしまった。

「な、何……？今の……」

「急に弱気になったわね……」

「……逃げただけだ……」

苦しそうな声。振り返ると、ふらふらしながら危なっかしく立ち上
がるジュプトルとレイの姿。

「!……ジュプトル！兄ちゃん！だいじょぶなの!？」

それを見るなり、サンはいち早くジュプトル達の下へ駆け寄る。

サンと近くにいたウインは彼らが立ち上がるのを手伝う。

「立てる?」

「……何とか、な……」

「このくらい……心配ないさ……」

「そんな弱弱しい声で心配ないなんて誰も信じませんよ。

今“願い事”をしますから、ちよっとおとなしくしてて下さいね。」

ウインはそう言うと、ジュプトルとレイの回復を祈る。

少し時間が経てば、傷も癒えるだろう。

「それにしても……あいつ、悪い奴だったね。」

「……いや、そうじゃない。ミカルゲは自分の縄張りが荒らされたことに怒っただけだ。

怒ると見境がつかなくなる恐ろしい奴だが、さっきのように旗色が悪くなると逃げて行ったように、本当は臆病なポケモンなのだ。

しかし……世界が闇に包まれてるせいで、本来はとても良いポケモンでも心が歪んでしまう。

未来にはそんなポケモンがほとんどなのだ。」

「……そうなんだ……。世界が闇に包まれてるせいで、良いポケモンも悪い奴になっちゃうなんて　とても、悲しい、よね。」

「……!?カズキ!ジュプトルの言うこと、信じてくれるの?」

驚きの声を上げるサン。

数時間前までは信じないと言っていた相手が急にそんなことを言ったら、驚きもするだろう。

カズキはその問いに少し困ったような顔をして答える。

「……うん……。そう……。なのかな……。正直、まだ半信半疑ではあるけど……。ね。」

「……ふん！そんな不確かな信用なら無いも同じだ。信用が無ければ、一緒にいても仕方が無い。」

「待つて！信じないとは言っていないでしょ。」

「……私達、正直言つて、もう何がなんだかわからないのよ。だから、少しでも情報がほしいの。」

それに……。私はジュプトルを信じたい。

お願い、ジュプトルの知ってることを聞かせて！
すべての、真実を。」

「……俺の言うことがすべてでたらめだったら、どうする？」

「鵜呑みにはしない。嘘か本当か、それは自分で判断する。」

「……。わかった、話そう。」

「ジュプトル……。」

ジュプトルは適当な岩に腰を下ろす。

それを見てその場にいた全員がいったん座る。

「……ジュプトル。未来では……。なんで星の停止が起こったの？」

張り詰めた空気の中、カズキが遠慮がちに問う。
ジユプトルはゆっくりと語りだした。

「 星の停止が起こった原因……。それは……
お前達が住んでいた過去の世界で、ディアルガが司る“時限の塔”
が崩れたからだ。」

「！ディアルガ!？」

「ウイン知ってるの?」

「はい……。時間を司ると言われる、伝説のポケモンです。
ディアルガは時限の塔に住み、世界の時間を護っている、と言われ
ています。」

「よく知ってるな。」

そう。ディアルガは時限の塔で時を護っていた。しかし、時限の塔
が崩れたのをきっかけに、少しずつ時が壊れ始め、そして つい
には“星の停止”を迎えてしまったのだ。」

なるほど、ね。

ディアルガの住む時限の塔は、いわば“世界の時計”だ。塔が崩れ
たことによっていままで正確に時を刻んでいた時計の針が、少しず
つ狂い始め ついに止まってしまった。

「それで……ディアルガはどうなったの?」

「ディアルガは時が壊れた影響で暴走した。
そして、星の停止を迎えた今のディアルガに至っては……ほとんど
暗黒に支配され、意識も無い状態だ。」

もはや“あれ”をディアルガと呼ぶことはできないだろう。
まったく別の……そう、“闇のディアルガ”と言う存在になっているのだ。」

まったく別の存在……。

暗黒に染まった、闇のディアルガ……。

「闇のディアルガに感情は無い。ただ……歴史が変わるのを防ぐこと働く。」

だから俺はディアルガに狙われてるんだ。

俺は歴史を変えるため 星の停止を防ぐために、未来からお前達の世界へタイムスリップしたのだから。」

「えっ……ええ！？そ、それじゃ僕達が聞いてた話とまったく逆だよ！？

ジュプトルは星の停止を“起こす”ために未来からやってきたんじゃないの！？

そのために時の歯車を盗んでたんじゃなかったの！？」

「冗談じゃないっ！！

俺が時の歯車を集めてたのは、星の停止を防ぐのに必要だったからだ！」

急に叫んだジュプトルにカズキはビクツ、と体を震わせる。

興奮したジュプトルを宥めつつ、サンとレイは事情を説明しはじめた。

「時の歯車を五つ時限の塔に収めれば、塔の崩壊を止めることが出来るんだ。」

「そしてもう一つ。
時の歯車をとると確かにその地域の時間は止まってしまいが、それは一時的なもので、塔に時の歯車を収めればまた元通りに時間は動きだすんだ。」

「……それじゃあ、ヨノワールさんが言ってたことは…全部でたためだったってこと？」

カズキの問いに、落ち着きを取り戻したジュプトルはコクツ、頷く。そして、こう言った。

「ヨノワールは…俺を捕らえるために闇のディアルガを送り込んだ“刺客”だからな。」

「…うそ……。ヨノワールさんが…刺客だって…？」

「そうだ。さっきも言ったように闇のディアルガは、歴史が変わるのを防ごうと働く。
だから俺が過去へとタイムスリップしたのを知ると、ヨノワールを刺客として差し向けたのだ…。」

「……そんな……。ヨノワールさんが……。」

カズキは俯き、うわごとの様に呟く。

無理も無い…。私だって信じられない話だ。

でも…ジュプトルの眼は、嘘をついているような眼じゃない。

この話は、嘘ではなく 本当のこと…。

しばらくの間沈黙が流れる。

その中でカズキの姿は、とても痛々しく見えた。

「……お前達には信じられないことだろうが……」

「信じられるわけないよっ!!」

だって…あんなに親切にしてくれたヨノワールさんだよ！
僕の…尊敬してた…あの、ヨノワールさんが……」

「カズキ……」

カズキは迷ってるんだ……。

ヨノワールはカズキにとつて、とても尊敬してた存在。

……確かに信じられないことばかりだけど……、でも、今までのことを振り返ってみれば、ジュプトルの言ってることは筋が通ってるし、納得がいく。

そしてそれはカズキも、本当はわかっているはず……。
だからこそ、迷ってる。

裏切られたことを、ちゃんと受けとめられていないから……。

私は……どうなんだろう？

私は…ちゃんと受けとめられている？

私は 彼をどう思っている……？

「おい！どこへ行くんだ!？」

ジュプトルの慌てたような声に、私ははっ、と我にかえる。

顔を上げてみると、カズキが立ち上がり、来た道に戻ろうとしていた。

「……僕、ヨノワールさんに会ってくる。」

「何だと!？」

「ヨノワールさんに会って、ジュプトルの言ってたことが本当かどうか、確かめてくる。」

「何言ってるんだ！」

そんなことしたら、捕まって処刑されるだけだぞ！」

「そっだよ！」

ヨノワールは強い。自ら命を捨てに行くようなものだよ!？」

「っ……!じゃあ……僕は、どうすればいいのっ!？」

カズキは震えた声で叫びながらこちらを振り返る。

目尻にたまった涙が、粒状になって飛び散った。

「どうすればいいだと!？」

さっきお前は俺に言っただろう!？」 “自分で判断する”と!

何を信じていいか分からないからこそ、話を鵜呑みにせず自分で考えると!」

「あ……」

「苦しい時こそ、気持ちを強く持て。

あとは自分で考えて行動してみる。」

カズキは俯き、小さく身体を震わせる。

近くにいたウインは、心配そうにカズキを見つめる。

「……ジュプトルは…これからどうするのっ?」

「俺は星の停止を食い止めるためにもう一度過去に行く。そしてそのために“セレビィ”を探す。俺に着いてきてもいいし、着いてこなくてもいい。自分の進む道は自分で決める。じゃあな。」

ジユプトルはそう言うと足早に去ってしまった。それを見てレイとサンも慌てて着いていった。

「……………」

カズキは俯いたまま話そうとしない。

私はそんなカズキに声をかけることが出来なかった。

私には……カズキを責めたり、励ましたりする資格は 無いと思
ったから……

「（……私も…カズキと同じなんだ……。ジユプトルを“信じたい”と言った。でも、それは私の考えであつて、カズキの考えじゃない。もっともらしい事を言つて、自分の考えをカズキに押しつけてしまつたんだ。」

カズキのことも考えないで……。でも、いまさらそんなことを言つても仕方が無い。今考えるべきなのは今後のこと！

落ち着け私……。今私ができることは何か考えるのよ……。私ができること……。するべきことは、星の停止を食い止めること。そしてそのためには 過去に戻らなくちゃいけない！」

今の私に出来ること……。

それは、カズキに帰ろうと伝えること！

「カズキ……」

「ヒナタ……。うん……。わかってるよ……。」

ジュプトルの言うとおりだね……。こんな時だからこそ、気持ちを強く持たなくちゃ。

……僕は、もう大丈夫。行こう、ヒナタ。

絶対に……絶対に帰ろう！」

「……もちろん！」

絶対に帰ろう。私達の世界に！」

決意を固めた私達は、ジュプトルを追って歩き出した。

「……完全に忘れられてますね……。これは……。」

希望に向かって歩いていく二匹の後姿を見ながら、残されたウインは呟いた。

「……しかし、そこに隠れてるルナティックさんとは、話しやすくなりましたね。」

ウインは近くにあった岩を見る。

その指摘に、黒い影が慌てて顔を引っ込める姿が見えた。

「どうやってこの世界に来たのかは知りませんが、今回はあなた方と戦っている余裕は無いんです。監視しているだけならそれ以上の行動には出ないでいただきたい。」

……もし、ヒナタさん達に危険が及ぶ行動を起こした場合は…本気で死を覚悟してくださいね？」

ウインはそう言うと、ヒナタ達を追ってその場を後にした。

「さ、さすがフィノンの次に危険なターゲット…。威圧感が半端ないよ……」

ウインが去ったのを確認すると、黒い影はそろそろと岩陰から出てくる。

黒い犬のような体躯のポケモン　グラエナのハイドだ。
よほどウインの威嚇が怖かったのか、若干身体が震えている。

「あれが……ウインか…?」

「え？あ、はいー！リヒトさんー！」

ハイドの背後に、黒いマントを纏った小さな影は、ウインの後姿をじっと見つめている。

マントのせいで、姿まではわからない。

「ハイドがあいつに挑んだらどうなる?」

「そそ、そんなこと聞かないでくださいよー！僕じゃ敵いつこありませんっ！

………四天王のあなたなら勝てるかもしれないですけど…。」

「………その肩書きを言うのはやめる。」

「す、すみません！」

自分の身体の半分ほどしかない相手に必死で頭を下げるハイド。
マントを纏ったポケモン リヒトは、ハイドのことなど気にせず、
興味深そうにウィンの去ったほうを見ていた。

第三十三話：すべての真実（後書き）

遅れた理由はいくつかありますが、一番の理由は、学校が始まって夜にしか執筆できないから……ですかね。

基本僕は夜にとても弱いので、部活とかで疲れてるとすぐにベッドに直行してしまってほとんど書けないんですね。

ヒナタ

「しつかりよね？読者さんも怒ってるよ。」

はい……精進します……。

次回は頑張ってペースを取り戻したいです。……………自信無いけど……。

第三十四話：時の妖精（前書き）

第三十四話完成です。

第三十四話：時の妖精

あれから私達はジュプトル達に追い付いた。
少し遅れてウインも合流し、ようやく全員が揃う。
目指す行き先は“黒の森”。
そうサンに聞かされた後は誰も一言もしゃべらず、黙ったまま歩き続けた。

そして、歩くこと数分

「（ん？この感じ……）」

前にも感じた……どこか懐かしい感覚……。
なんなんだろう……？

「……？」

「ここは黒の森だ。」

絶えず森に黒い霧がかかっていることからそう呼ばれている。
そして、この森の奥に セレビィがいるはずだ。」

「セレビィって、時渡りの力を持ってるっていう幻の……」

「そうだ。」

俺が過去の世界に行けたのもセレビィのおかげなのだ。」

「セレビィといえば、僕達も過去の世界から未来へやってきたのも、セレビィの力なんですよね。」

ウインは思い出したようにそう呟いた。

「そう言えばそうだったね。」

ジュプトル。そのセレビィって、もしかしてピンク色の色違い？

「あ、ああ……。」

まさか、お前達もそのセレビィに!？」

「うん！」

すごい偶然だね!」

はしゃぐサン。

そういえば、ウインとサン、レイは、私達の世界から見て過去の世界から来たんだっけ。

それにしても、過去と未来、まったく違う時間に同一のセレビィが関わってるなんて……ホント、凄すぎる偶然ね……。

「……そのセレビィに逢えば　僕達はもとの世界に帰れるの?」

サンとは対照的に不安そうな声で問うカズキ。

ジュプトルは首を縦に振った。

「ああ、帰れる。」

ただし、セレビィは俺を過去に送ったポケモンだ。つまり……。」

「セレビィも歴史を変えることに協力している。」

つまり、セレビィも命を狙われてるって事ね。」

「そういうことだ。」

「ぐずぐずしている暇はない。早くセレビィを捜そう。」

そう言っつて準備をはじめるとジュプトル。

この世界にもガルーラ像はちゃんとあって、ジュプトルも普通にそれを使っつて準備していた。

ここは未来のはずなのに、なんでガルーラさんの倉庫の道具が使えらんだらう？

準備の最中そんなことを思ったが、私はこの懐かしい感覚がなんなのか必死に考えていた。

何だらう。この懐かしいような。。。

何だらう。前からこの場所を知っているような。。。

ぐるぐると考えをめぐらせていると、すでに二匹が準備を終わらせているのに気付いた。

私はいったん考えを止めると、急いで準備を済ませるのだった。

「……行くう。」

「ちょっと待って！」

準備を済ませ、いざ森に入ろうとしたとき、カズキがジュプトルを引きとめた。

「…なんだ？」

「もしみんなで元の世界に戻れたら……ジュプトルはまた時の歯車を盗むの？」

「……ああ、そうだ。
そうしないと星の停止は止められないからな。」

「僕は、ジュプトルを完全に信用したわけじゃないからね！
時の歯車を盗むことが星の停止には関係なく、ジュプトルが間違っ
てるようだったら……そのときは、僕、ジュプトルを止めるからね
！」

「……………フン。好きにしろ。
だが、今は無事に過去の世界へ行けるかが大事だ。
だから、今はそのことだけに集中しろ。
……………行くぞ。」

ジュプトルはそう言うのと前へ進んでいった。
ジュプトルとカズキ……すっごく仲悪いわね……。
これから先大丈夫かしら……？
私はちよっぴり不安を覚えた。
また、私は先程から感じている妙な感覚について考えていた。

「（なんなの、この感覚は……。
どこか……懐かしいような……。
私は、この場所を……知っている……？）」

以前にも感じたはず。
あれは　そう！ベースキャンプに来たときの感覚と同じだ。
でも、なんでそう感じるんだろう……？

「……………ヒナタさん？」

「 !? 」

突然の声に私はハッ、と我に返った。
となりを見てみると、ウィンが心配そうに見つめている。

「ヒナタ、どうかしたの? 」

「早くしないと置いてっっちゃうよ。」

前を見れば、ジュプトルと一緒にカズキやサン、レイの姿。
どうやら考えをめぐらせている間に皆動きだしていたらしい。

「行きましよう。」

「う、うん。。。」

「……………ん? 」

「?どうしたの、兄ちゃん? 」

「いや……………なんでもない。」

誰かの視線を感じたような気がしたんだが……………気のせいか……………

「ウイイ……………」

この時のレイの勘は当たっていた。
木の影に隠れて、あいつの手下がそこにいた。

歩くこと数分。

暗い暗い黒の森を進み、ようやく奥地へとたどり着いた。

「ここに、セレビィがいるの？」

「ああ。前に出会ったのもここら辺だった。

闇のディアルガがこの場所をすでに知っていたら、セレビィはもう逃げているだろうが……。

知られていないのであれば、まだここにいるはずだ。

おーい、セレビィ！

俺だ！姿を現してくれ！」

静かな森にジユプトルの声が響く。

わずかに余韻を残しながら、沈黙が森を駆け抜ける。

返事が、返ってこない。

「……………出てこないね……………」

やっぱり、闇のディアルガに見つかって逃げちゃったんじゃないか……………」

「あるいはすでに捕まってしまったか。

……………考えたくないですが。」

……………確かに、その可能性はある。

暴走しているとはいえ、相手は神だ。

セレビィといえど、勝てないだろう。

そんな誰もが絶望的な考えを抱いていた、その時だった。

「誰が捕まるですって?」

「!?!?どこからか声が!?!」

突如聞こえた高く可愛らしい声。

私たちは耳を澄ませ、辺りを見回してみるが

「……………何も、聞こえないね……………」

気のせいだったのかな……………」

でも……………確かに聞こえたはず……………」

「気のせいじゃないわ!」

わたしが捕まるですって?失礼ね。

わたしが捕まるなんて絶対にありえないわ!フッフツ!」

先程の声が森に響く。

やっぱり気のせいじゃなかった!

前方に光が集まり、そして

「お久しぶりです。ジュプトルさん。」

「ああ、久しぶりだな　セレビィ。」

ピンク色の、妖精のような見たことのないポケモンが、現れた。

「え…ええ!?!これがセレビィ!?!」

カズキはピンクのポケモンを指差しながら驚きの声を上げた。

それが癢に触ったのか、セレビィはムツとした顔になる。

「ちよつと君ねえ！」

君にこれ呼ばわりされる筋合いはないんだけど……」

「え……あ、ごめん！」

時を越える力を持つなんて聞いてたから、物凄いのを想像してたんだけど……」

「失礼ね！見た目で判断するのはよくないわよ！」

「まあまあセレビィ。落ち着いてください。」

ウインがセレビィを宥める、

すると、セレビィの顔がパツ、と明るくなった。

「あら、ウイン君じゃない！」

サン君もレイさんも、何でこの時間にいるの？」

「まあ……色々ありまして……。」

ヨノワールが開けた時空ホールを使って未来に来たんです。」

……妙にセレビィが嬉しそうに見えるのは気のせいだろうか？

「セレビィ……」

「わかってます。また力を貸してほしいんでしょう？」

セレビィはジュプトルの方を向く。

「ジュプトルさんがまたこうやってやってきたってことは、過去の
世界で失敗したからでしょう?」

「うっ……まあ、そうだが。」

「じっくりしてくださいよね。こんな暗い世界もう嫌ですから……」

「悪いが無駄口を叩いてる暇はないんだ。
ヤミラミ達に追われている。」

早くしないと、この場所も安全じゃない。」

ジュプトルはチラチラと後ろを見ている。

「フフツ。大丈夫ですよ。」

わたし、ヤミラミが来たってどうってことないですから。
それに、星の停止を食い止めて、この暗黒の世界が変わるなら……
わたしも命を懸けて、ジュプトルさんに協力します。」

「それで……“時の回廊”は?」

「近くにありません。」

この森を抜けた高台の先に“時の回廊”はあります。」

「よかった!早く案内してくれ。」

……時の、回廊……?

「時の回廊って……何?」

「時の回廊っていうのは、セレビィが時渡りに使う秘密の道だよ!」

と、得意げに答えてくれたのは、サンだ。

「小さな時渡りならわたしだけでもできるんだけど……。
時代を大きく越えるような時渡りは時の回廊を使わないとできないの。」

「じ、じゃあ、僕達もその回廊を通れば……」

「ああ。過去へ戻ることができる。」

なるほど……。

「じゃあ早く行こうよ！ヒナタ！」

「うえ！？ち、ちょっと、カズキ！？」

うんうんと納得していると、カズキに手をひっぱられる。
希望が見えたからか、その表情はとても明るかった。

「おい！お前達！」

「…ジュプトルさん以上にせっかちなね……。」

「暗い顔して進むよりはよっぽどいいんじゃないですか。」

「そうそう！元気が一番だよ！」

「……元気すぎなのは問題だな。」

それぞれ想いを述べながら、先に行くヒノアラシと引っ張られてい
るフシギダネを追うのだった。

「あつ、見えてきました！あそこです。」

森の高台を抜け、私達は目的の場所に着いた。
私達の目の前には、青いゲートのようなもの。
これが 時の回廊…。

「あれが……時の回廊……？」

「そうだ。あそこを通って俺は過去にいったんだ。
時の回廊を開けるのはセレビィだけだ。」

セレビィ、さっそく頼む。」

「はい。」

セレビィは時の回廊に近づく。

そして、目を閉じ、両手を伸ばした。

スツ……

あたりの空気が変わった。

セレビィの手に青く輝く球状の光。

その光は回廊を包み、回廊の扉の鍵を開く。

フォ……

時の回廊が……開いた。

ああ、これで……

これでやっと……元の世界へ帰れる。

「そこまでだ！」

「!?!?」

「この声は……!？」

「まさか…っ！」

ジユプトルは頭上を見上げる。
そこにいたのは

「久しぶりだな……お前達…？」

「……ヨノワール。」

ヨノワールだった。

ヨノワールは崖の上から私達を見下ろしている。

『ウイーーーーッ!』

「ヤミラミまで……」

ヨノワール達は崖の上から飛び降りると、素早く私達を包囲した。

「ずいぶんと逃げ回ってくれたようだが　これで終わりだ。」

ヨノワールが不敵な笑みを浮かべて言う。

しかし、何でここが……？

「ふん。そういうことがヨノワール。」

俺達をわざと泳がせ、セレビィも一緒に捕らえたかったって事か。」

「あの時感じた気配……。やはり気のせいではなかったか。」

もっとしっかりしていれば…！」

「悪いなセレビィ。こんなことになって。」

「あら？謝るなんてらしくないですよ、ジュプトルさん。

それに、わたしが捕まると思います？フッフ！」

くすくすと笑うセレビィ。

こんな状況でも笑ってられるということは、よほどの自信があるんだろう。

「ふっ、抵抗する気か？」

止めておけ。貴様らに勝ち目はない。」

「そんなこと…やってみなくちゃわからないだろ！」

ヨノワール、たとえお前が相手でもな！」

「……ジュプトル。」

ここに来たのは私だけだとも思っているのか？」

「！？な、なにっ!？」

「ディアルガ様。」

フッ、とあたりが暗くなる。

それと同時に、とてもおぞましい何かの気配を感じた。

私は崖の上を見る。

バチィッ！！！！

突然奔った閃光。

何かが 来た！

「グオオオオオーッ！！！！」

「ッ！？」

圧倒的な威圧感。

その一声に知らずの内に身体を引いてしまう。

「ジュプトル……。あれが…ディアルガ…なの……？」

「……あ、ああ……」。

あれが 闇のディアルガ、だ…。」

とてつもなく巨大な姿。

その表情は虚ろで、何の感情も感じられない。

まるで心のない人形のような そんな表情だった。

だが、心が無いからこそ、言いよつの無い恐怖がこみ上げてくる。

怖い……コワイ……！！

「どうしたジュプトル？

さっきの威勢のよさはどうした？」

「ぐっ……」

「ジュプトルさん……。」

「もはや……これまで……か……」

ジュプトルはガクリ、と膝をつく。

その姿に私達は目を見開いた。

「な、なんで!？」

戦うんじゃないの!？」

「む、無理だ……。」

ヨノワールだけならともかく……ディアルガが相手じゃ、とても敵わない……!」

「っ……」

説得していたカズキも、ジュプトルの言葉に黙り込んでしまう。

いまだに感じる威圧感。

神を相手に戦って……勝てるわけ無い。

「諦めるのはまだ早いです!

何か……何か方法があるはず……!」

みなが戦意を喪失する中、諦めずに立ち向かおうとしたのは、ウィンだった。

だが、ウィンとてこの状況を打開する策が浮かんでいるわけではない。

しかし

ここで屈したら……未来は最悪の結末を迎えてしまう。

ここで負けるといふことは、イコール星の停止を止めることができ

ない。

未来を　　変えることができない！

「諦めたくない……けど、ディアルガが相手じゃ……諦めるしか……」

カズキは威圧感に押されて膝をつく。

レイも、サンも、そして、私も

「くっ……」

「諦めがいいのはいいことだ。

これがお前達の　　最期だ！」

『ウイイー……ッ……！』

ヤミラミ達が戦闘体制に入る。

本当に……ここまでなのか……？

諦めかけた、その時！

「イリユージョン・スプリット！」

背後から気の弱そうな声とともに八匹のグラエナが飛び出してきた。

グラエナ達はヤミラミ達の攻撃を相殺する。

「ま、間に合った……！」

振り返ってみると、そこにはグラエナと黒いマントを纏ったポケモン。

ルナティックのハイドとリヒトが、そこにいた。

第三十四話：時の妖精（後書き）

や、やっと書けたよ。

ヒナタ

「最近更新ペース落ちてない？」

色々やりたいことがあるんだよ。
次回は久々にバトルが入るかな？

カズキ

「ちゃんと書いてね？」

はっい

第三十五話・四天王リヒトの実力（前書き）

第三十五話完成です。

第三十五話：四天王リヒトの実力

私はこの状況を理解するのに数秒かかった。

いや、私だけじゃない。この場にいるすべてのポケモンがそうだったろう。

突然乱入してきて私達を助けてくれた、謎のポケモン。

「……誰？」

ほとんどのポケモンはそう感じただろう。

私の記憶の中には、グラエナの知り合いなどいない。……記憶喪失で忘れているだけかもしれないが。

そんな中、正体に気づいたものがいた。　　ウィン、そしてレイだ。

「……あなたは確か、ハイド、ですね？」

ずっと監視していたのもあなたでしょう？」

「何が狙いだ。お前達の目的は俺達を葬ることだろう。何を企んでいる？」

……ウィンとレイの反応でわかった。

こいつら　　ルナティックだ！

ルナティックは過去の世界からウィン達を消すために未来へやってきた悪の組織だ。

立場的に言えば、ヨノワールと似ているかもしれない。

一方強い口調で言われたハイドは、

「ひい……べ、別に何も企んでないよう〜！」

前脚で顔を隠してびくびくしながら答えた。
レイはさらに何か言おうとしたが、ハイドの隣が存在が動いたのに気づき、動きを止めた。

「……………」

ハイドの隣にいたのは、黒いフード付きのマントを纏った小さなポケモン。ちょうどサンと同じくらいだ。

そのポケモンは左手を腰にあて、もう片方の手をマントの中へ入れる。

体制を低くし、まるで居合い斬りのような構えになった。

そして、小さく呟くように一言……

「氷牙の舌……“刹那”！」

ヒュッ、という風切り音とともにマントのポケモンのが視界から消えた。

あわてて辺りを見回してみると……

「い、いつのまに……………」

私達の背後。つまりヨノワールとヤミラミがいるその真ん中にそのポケモンはいた。

不思議なことにヨノワール達は行動を起こさない。

「……………」

不思議な点はもう一つ。

その手には先程はなかった澄んだ碧い刀身の剣が握られていた。

氷のように透き通ったその剣をそのポケモンはゆっくりとマントに
しまっ。

キンッ

剣が鞘に収まった音が聞こえる。

剣の長さはそのポケモンの身長より少し長く、絶対にマントのなか
に収まるはずはないのだが……

そんな疑問に気付けないほどのことが、まさに今起こった。

「ぐは……っ!?!」

呻き声をあげたのはヨノワール。

ヨノワールは前のめりになって倒れた。

そして、それをきっかけにして、ヤミラミ達もバタバタと倒れてい
く。

「こ、これは……いったい、なにが起こったの……?」

まさに一瞬 “刹那” の出来事。

たった一匹でこれだけの数を倒すなんて……

「……あなたは……いったい何者ですか?」

普段滅多に動じないウィンが声を震わせて聞いた。

しかし、マントのポケモンは答えない。

その代わりに

「この方は、ルナティックが誇る四天王!

『七星剣の操り手』、リヒトさんだ!」

マントのポケモン　リヒトに気をとられ、まったく注目されていなかったハイドが、私達の前に回り込んで答えてくれた。それを聞いたリヒトは、またマントのなかに右手をいれ、しかし無造作に剣を引きぬいた。

今度は碧ではなく紅の刀身。ゆらゆらと揺れる乱れ刃がまるで炎のように見える。

先程の剣　氷牙よりも少し大きなそれを片手で振り上げ、まだのこっていたハイドの分身めがけて振り下ろした。

ズバツ！

ハイドの分身は一瞬で両断された。

切り口に火がつき、燃えながら分身は跡形も無く消えてしまった。

「…貴様もこうなりたくなかったら、二度とその肩書きを口にすな。」

声は静かだが、その威圧感はいアルガをも凌駕するかもしれない。ハイドは声も出ないのか、コクコクと必死に首を縦に振った。

「……どういう、ことですか……？ 貴方達の目的は……」

「少し待て。」

ウインの言葉をさえぎって、リヒトは私達に背を向ける。

フードに隠れたその目が見つめるのは　闇のディアルガ。

ディアルガはヨノワールがやられたのにもかかわらず、怒りや悲しみの表情は無かった。

本当に人形のようにだ。

「神もこうなってしまうてはただの道化だな。…目障りだ。」

リヒトは言いながらマントから剣を取り出す。

今度はピンク色の二本の剣。その色はセレヴィイの身体の色に似ている。

先の二本の剣よりはだいぶ短く、細いが、神秘的な感を漂わせていた。

リヒトは二本を顔の前でクロスさせる。

「胡蝶の巻…“空間転移”。」

クロスさせた剣の前に薄紫色の球体が出現する。

それは膜の様な感じで、薄く、中には何も無かった。

「転移対象、ディアルガ。」

ある程度まで大きくなると、それはふわふわと漂い始め、やがてディアルガを包み込んだ。

ディアルガは出ようと暴れるが、見た目より強固ならしく、ひびこつ入らない。

リヒトは少し間をおいて、言った。

「転移！」

クロスさせていた剣を振りぬく。

球体に包まれていたディアルガはだんだんと揺らいでいき、そして消えてしまった。

「う…嘘……」

そんなものを見せられては私達はもう絶句するしかない。
何なのよ、こいつ……。ルナティックなのに私達を助けたり、デイアルガを消したり……
敵なの……？それとも、味方なの……？
私はデイアルガに感じたものとは違う恐怖を感じた。

「……質問に答える。」

リヒトは二本の剣をしまいながら振り返り、そう言った。

正直私は、恐怖で質問したことすら忘れていた。

「おれ達ルナティックの目的。それは未来に行ったウイン、他数名と、ブラックリストに載ったヒナタ、そしてカズキを抹殺すること……あくまで貴様らを抹殺するのはルナティックだ。こんな雑魚共に殺されるのは気に食わない。」

「だから……助けたと？」

「そつだ。」

自分達で受けた依頼は自分の手で、というわけか。確かに私だって、依頼を横取りされたら横取りした相手を邪魔すると思う。

しかし彼のいうことが正しいなら、邪魔者が消えた今、するべきことは一つ。

ターゲット（私達）の、抹殺

ヨノワールに処刑されなかったのはいいが、ルナティックはプロの殺し屋だ。

いったいどんな殺され方をするか………

考えただけで戦慄が走った。

が、

「だが……」

次に発せられた言葉に私はキョトンとしてしまった。

“だが”？まだなにかあるの？

リヒトはゆっくりと右手を揚げ

「おれの目的はウイン、貴様とバトルすることだ。」

ビシッ！とウインを指差した。

全員の視線がウインの方を向き、驚きの表情を浮かべる。

「ち、ちょっとリヒトさん！？そんなこと一言も聞いてないですよ！？」

「もしこの申し出を受けてくれるなら、貴様以外の者は見逃してやるわ。」

……受けるか？」

慌てふためくハイドを無視して、リヒトは勝手に話を進める。

「……もし、受けなかったら？」

「この場で全員を斬り殺す。」

「……」

なんて条件を出すんだらう。それってつまり、ウインを置いて行け
ってことだ……

「リヒト…貴様あ！」

「待ってください。」

レイが前に出るのをウインは片手を挙げて制す。

「……僕が残れば…本当にみんなを見逃してくれるのですか？」

「約束は守る。」

「……わかりました。その申し出、受けます。」

僕の使命は、ヒナタさんを守り、平和な未来を取り戻すこと。

命に代えても、ヒナタさんだけは……！

リヒトの力は強大だ。さすがのウインでも勝てるかどうかはわからない。

リヒトはウインの返事に頷くと、ディアルガを消し去った双剣胡蝶を取り出す。

「胡蝶の式…“時間転移”。」

先程と同じように剣をクロスさせ、膜のようなものでできた球体を出現させる。

ただし、色は薄紫ではなく、群青色だった。

「転移対象、ヒナタ、カズキ、レイ、サン、ジュプトル、ハイド。」

群青色の球体は分裂し、私達を包み込んだ。

「ッ！？ウイン！？」

「ヒナタさん。後は任せましたよ。」

ウインの表情はどこか悲しげで、しかし、安心したような顔だった。

「転移！」

視界が揺らいでくる。

身体が、だんだんと薄れていき、だが、怖さは感じなかった。

「……絶対に、死ぬなよ。」

「えっ？」

消える寸前にそんな言葉が聞こえた。

だが、その瞬間未来から消えた私には、それが誰の声だったのか、確かめる術は無かった。

「これでやっと二人きりだな。」

ヒナタ達が未来から消えてから数分後。

セレビイを無理やり別の場所に転移させたりヒトは、ウインとある程度の距離をとって向かい合っていた。

「…これはお礼を言うべきなんでしょうね。」

みんなを見逃してくれて、ありがとうございます。」

「おれは自分の目的を果たすために行動したまでだ。礼を言われる筋合いは無い。」

リヒトは胡蝶をしまい、氷牙を取り出す。

その切っ先をウィンに向け、

「これで邪魔者はいなくなった。存分にバトルをしよう。」

「…持てる力すべてを使って、戦います。」

二匹の間に緊張が走る。

先に動き出したのは リヒトだ！

「氷牙の式…“銀の雨”！」

リヒトが剣を一振りすると、空気中の水蒸気が一気に冷やされ、鋭い銀の針となる。

それらをウィンめがけて飛ばしてきた！

「火炎放射！」

ウインは冷静に炎でそれを焼き尽くした。

その勢いはすさまじく、針の雨を抜けてリヒトに向かう。

リヒトはすぐさま氷牙をしまい、真ん中に柄があり、弓のようにピンと糸が張っている剣 弓剣を取り出す。

リヒトが弦を引き矢を放つ体制をとると、一筋の光の矢が出現した。

「白閃の参…“裂光”！」

一筋の閃光が奔る。

それは火炎放射を打ち貫き、ウィンに直撃した。

「なっ……！？」

何が起こったのかわからなかった。

なんだ、今の……？まったく見えなかった……

震える足で倒れないように踏ん張りながら、ウィンは状況を整理する。

リヒトが矢を放とうとしたのは見えた。だが、リヒトが手を放した瞬間矢は消え、自分に衝撃が走った。

つまり、あの矢のスピードは数値で表せるものじゃなくて、もっと速い……

例えるなら……そう、光の速さだろう。

「（強い……強すぎる……。このままじゃ……）」

ウィンは背中から氷塊が滑り降りたような感覚を覚えた。久しく感じていなかったもの　恐怖だ。

「お前の力はそんなもんじゃないだろう？」

本気で来い。おれを失望させるな。」

こんなふらふらな状態。殺そうと思えば殺せたはずだ。

それをしなかったのは……おそらく、バトルを楽しみたいから。リヒトはバトルがただの殺し合いでないことをわかっている。

バトルは、常に全力を出し、常に集中して行うのが礼儀というものだ。

……プレッシャーのあまり、どうかしてたな。

「……始める前に“持てる力すべてを使って”なんて言っておきながら、こんな無様な戦いをしてしまいまことに申し訳ありませんでした。」

今度こそ本気で行かせてもらいます！」

バトルは常に全力全開の真剣勝負。レイさんやセイジ君に、散々聞かされたじゃないか。

「ウインドモード!!」

ウインの身体を風が取り巻き、その姿を変化させる。

毛の色が全体的に青みがかかり、背中からは青みがかつた白い翼が生えた。

もう迷わない。僕は全力で戦う!

「ようやく本気を見せたか……」

リヒトはその姿にため息を一つ吐く。

ウインは空へ駆け上がると、その翼を大きく羽ばたかせた。

「一陣の烈風」

ウインの翼から空気の刃が生まれ、リヒトめがけて飛んでいく。

対するリヒトは……

「白閃の参……“裂光”！」

再び光の矢を放った。

空気の刃と光の矢がぶつかり合い、小規模な爆発。威力は互角だ。

「ツバメ返し！」

「くっ！？」

しかし、これを予想していたウインは、技を放ったと同時にリヒトの背後に回っていた。小さな呻き声を上げ、リヒトは吹っ飛ばされる。

「これで決めます！」

ウインは体制を低く構える。

ウインドモードの体力消費を考えると、長期戦になったら勝ち目は無いのだ。

「“終焉の疾風”」

先程の“裂光”ほど速くはないが、バランスを崩した今なら十分に当てられるはず！

一撃目がリヒトに当たると思った、その時

「白閃の漆…“降雷塵葬閃”！！」

リヒトは剣を真ん中で分け、二本とし、その切っ先をこちらに向けて突っ込んできた！

ガキンッ！キンッ！キンッ！

ウィンとリヒトがすれ違つた際に剣の擦れ合う音が聞こえる。リヒトの技はウィンの“終焉の疾風”とまったく同じだった。もはや第三者には目視できないほどの速さにまでなっている。

「「フィニッシュ！」」

最後の攻撃を交わし、お互いに背を向けた状態になる。両者ともそのまま動かず、しばし沈黙が流れる。

「……………くっ……………」

バタツ！

耐え切れなくなって倒れたのは

「おれの勝ちだな。」

ウィンだった。

第三十五話：四天王リヒトの実力（後書き）

ルナティック最強の四天王です！
もちろんボスには勝てませんが……

ヒナタ

「ウイン…大丈夫かしら？」

惜しくも敗れてしまったウイン。

こんな終わらせかたしたらあとが続かないような気がします……

まあ、頑張ります

次回もお楽しみに！

第三十六話・リヒトの想い（前書き）

第三十六話完成です。

第三十六話…リヒトの想い

……

……

……

「う、ううん……」

ウインは真つ暗な空間で目を覚ました。

「……」

見渡すかぎりの黒、黒、黒。

何も聞こえず、ただただ広がる、暗い空間……。

しかし、不思議なことにそんな暗闇でも自分の姿だけははっきり見えた。

「夢の中……なのかな……？」

何も見えない……。何も聞こえない……。

ウインはこの空間を夢だと思ったが、すぐに「いや……」と言って否定する。

「……僕……死んでしまったんですね……」

死後の世界。ウインはそう考えた。

僕はルナティックの四天王、リヒトの手によって殺されてしまったんだ……

怒りや悲しみと言う感情はわかかった。無事にヒナタ達を守りき

れた、ということに安堵していた。
後は…他の皆が、目的を達成してくれる……

「本当にそれでいいのか？」

「!？」

突如響いた声。

まさか誰がいるとは思わなかったウインは、驚いて振り返る。

フード付きの黒いマント、両手に握られた淡いピンク色の剣……

リヒトの姿が、そこにあつた。

「本当に、それでいいのか？」

繰り返し問うリヒト。ウインの心を読んでいるようだ。

ウインは、なぜここにリヒトが?と思ったが、今の自分にはどうでもいいことだと、その疑問を振り払った。

「それでいいのかって……」。

僕はもう…死んでるんですよ?納得するしか…ないじゃないですか
……」

「生きているか、死んでいるか、そんなことはどうでもいい。今、
貴様はどうしたいか聞いている。

もう一度聞く、本当にそれでいいのか？」

「……………」

今、どうしたいか……か。

自分で殺しておいてよく言うよ。それに腹を立てない僕もおかしい

けど……

ワインは自嘲気味に笑って、口を開いた。

「いいか悪いかと聞かれたら、もちろん答えは“悪い”、です。できるなら、もっとヒナタさんと一緒にいたい……。ヒナタさんを、守ってあげたい……。」

「……それでいい。」

フードに隠れた顔が、ほんのわずか、笑った気がした。

リヒトはワインに歩み寄ってくる。その手に握る双剣は、ほんの少し発光していた。

「リミット・ブレイク！」

振りぬかれた剣の軌跡が波動となってワインに迫る。

ワインとリヒトの合間は狭かったので、当然ワインはよけられない。ギョツ、と目を瞑ると、体の中を何かが駆け巡っている感覚を覚えたを覚えた。

「うぐ……あああ……！」

身体の中に入った“何か”が激しく動くたびに身体中に激痛が走る。

熱い、熱い、熱い……！

まるで身体が溶けているような錯覚に陥る。

熱い、熱い、熱い、熱い、熱い、熱い……！！

パリンッ！

熱さで悶え苦しむ中、確かに聞こえた何かが砕けるような音。

その音が聞こえた瞬間、あれほど熱かった身体が一瞬にして冷めた。

「はあはあ、はあ……はあ……」

「貴様の中に眠る“破壊の神”の力。その一部を開放した。生きる！そしてヒナタを守りきれ！…おれの大切な、コトネを……いや、ヒナタを、なんとしてでも守り通せ！」

意識がだんだん薄れていく。

なぜルナティックのポケモンがそんなことを言うんだらう？

なぜヒナタをそこまで守れと言うのだらう？

何より、“コトネ”とは誰だらう？

たくさんの疑問が浮かんでくるが、それを聞こうと口を開く前に、ウインの意識は、闇に沈んだ。

「……………ん……」

誰だらう？誰かが、呼んでる？

「……………きて、ウイン君！起きてっばー！」

「う、うう……」

頭痛がする。まるで長い間眠っていたときのような痛みだ。

ウインは頭を振って痛みを振り払うと、呼びかけていた存在に目を向ける。

「よかった！目が覚めたのね！」

少し涙目になって安堵の息を漏らすのは、ピンク色の身体の妖精の
ようなポケモン　セレビィだ。

「セレ、ビィ？どうしてここへ…？」

「あいつに飛ばされた後、やっとの思いでここまで戻ってきたの。
そしたらウィン君が倒れてて…ほんとに無事でよかった。」

手で涙をぬぐうセレビィ。

ウインは困惑した。

「僕は……生きてる、のか……？」

自分の身体を見してみる。

激しい戦闘でついた傷は一切なく全快の状態だった。

なぜだろう、なぜだろう。

なぜ傷一つないんだろう？

なぜ　僕は生きているんだろう？

「生きてるってことは…あれは、夢？」

真っ暗な空間でリヒトが言った言葉。

『貴様の中に眠る“破壊の神”の力。その一部を開放した。
生きる！そしてヒナタを守りきれ！…おれの大切なコトネを……い
や、ヒナタを、なんとしてでも守り通せ！』

破壊の神？コトネ？いったい何のこと？

疑問は絶えない。

ただ、一つだけわかっていることがあった。

「リヒトが…助けてくれた…？」

あの時僕はリヒトの攻撃の前に倒れた。けど、その時点では死んでいなかった。

今思えば、あれは夢なんかじゃなくて、生と死の狭間の世界だったのかもしれない。

「（リヒトはヒナタさんを守ってほしくて僕を助けた？）」

そう考えると納得がいく。

リヒトはなぜかヒナタに好感を持っていた。しかし立場上、リヒトはヒナタを殺さなければいけない。

そのためにヒナタを守る“盾”が必要だった。それが ウィン。しかしそれならルナやレイでもよかったはずだ。僕でなければいけない理由があった？

あの時言ってた“破壊の神”と言うのに関係があるのだろうか…？

「まあ何にしろ、助けてくれたことにお礼を言わなければなりませんね。」

疑問はまだある。

あのリヒトが使った、あの技。リミット・ブレイク。

あれはどういう意味なんだろう？直訳すると、限界破壊。

強いものの力を抑えるための枷が“限界”、だとしたら、それを“壊した”ということ？

でも、何の“限界”を“破壊”したんだ？僕にそんな力あるわけ……

と、ここまで考えてあ、と気づく。

「（“破壊の神”。これがリミット？）」

この“破壊の神”と言う言葉が最大の疑問だった。

僕の中に神の力が眠っていたってこと？

誰かが教えてくれるわけでもないのに、いつまでも自問自答を繰り返すウイン。

「……ウイン君。さっきから何ぶつぶつ言ってるの？」

「！？」

そんなウインの様子にセレビィは訝しげな表情で睨んでいる。

ウインはその言葉にハッ、と我にかえった。
しまった！完全に自分の世界に入ってた！

「い、いや、何でもありません……」

……そういえば、リヒトは？」

いまさらな質問だが、ウインはこの場を取り繕うために聞いた。

「わたしが来た時にはもういなかったわ。」

「……そうですか。」

ウインはほっとしたような、残念なような、複雑な心境になった。

お礼は言いたいですが、この場にいたらいろいろと面倒なことになりそうで……

とにかくリヒトがない以上、ウインのすべきことは一つ。

「セレビィ。時の回廊は使えますか？」

「え？ええ、いつでも使えるわ。

……行くのね？」

「はい。」

ウインの使命は未来を救う救世主　ヒナタを守り、手助けすること。そのためにウインは過去の世界からやってきた。
ウインは時の回廊の前に立つ。

「気をつけてね、ウイン君。……負けないで。」

「……はい。」

ウインは時の回廊に飛び込んだ。
リヒトが僕を助けた理由はわからない。けど、ヒナタさんは僕が必ず守って見せる！
ウインは決意を新たに時空の道を進んでいくのだった。

第三十六話・リヒトの想い（後書き）

なんかぐだぐだになってしまったような……
とりあえず、ウイン復活です！

ウイン

「僕のなかに眠る力とはなんなのですか？」

いつかわかるよ。……多分。

ウイン

「多分、て……」

第三十七話・元の世界へ（前書き）

第三十七話完成です。

第三十七話・元の世界へ

ザアアア……………

波が打ち寄せる音が聞こえる。

その音はどこか懐かしく、とても心地よいものだった。

「……………う……………」

どこかで打ったのか、痛む背中をかばいながら私はゆっくりと立ち上がった。

潮の香りが混じった風が頬をなでる。この香りも懐かしい。

「……、は……………」

キョロキョロと辺りを見回してみる。見えるのは、白い砂浜に打ち寄せる波。

私はここが“あの海岸”だということに気がついた。

「……ん……………。あ、ヒナタ……………」

同じく目を覚ましたららしいカズキは、やはりどこか打ったのか、ちよっとふらふらした様子だ。

そんなカズキを隣にいたレイとサンが支え、立ち上がらせる。

「ここは……前にヒナタと出会った、海岸……………？」

ということとは……………僕達……………」

「無事に戻ってこれた、みたいね……………」

暗黒に支配されていない、元の世界に
あまり実感がわかなかつた。でも、ちゃんと帰ってこれた。
みんなのいる 暖かい世界に…。

「うっ……」

「あ、ジュプトル！」

背後から聞こえた呻き声。振り返ると、ジュプトルが立ち上がって
いるところだつた。
まぶしそうに目を細め、それを見上げている。

「ジュプトル！僕達帰ってこれたんだよ！元の世界に！！」

「…そうか……。無事に…来れたんだな。」

俺達はまた、この世界に……」

カズキはとつても嬉しそうだ。ようやくみんなのいる世界へ戻って
これたのだから無理はない。

…だけど…ウインはまだ……

はしゃぐカズキとは対照的に、私の心は暗く、重かつた。

「そつだよ！この浜辺はヒナタと初めて出会つた場所なんだ。」

……ちようどこの辺で倒れてたんだよ。」

「そつだつたのか。俺がタイムスリップで着いたのは東の森だつた
から、だいぶ離れたところに降りてしまつたんだな。」

東の森はここから遙か東に行ったところにある広大な森だ。

行ったことはないが、結構難解なダンジョンらしい。

「そのタイムスリップのことも含めていろいろわからないことがあるから訊かせてよ。」

「……といってもここじゃ何だから、プクリンのギルドに」

「……カズキ、この世界でのジュプトルの立場を忘れたの？」

「だよな……」

この世界ではジュプトルはお尋ね者だ。それも星の停止をもくろんだ大悪党。

探検家が集うギルドに行こうものなら、みな驚き、捕まってしまうのがオチである。

「どこかい場所はないの？」

「「うーん……」」

……あれ？

カズキの唸り声と同時にどこからか呻き声が聞こえた。

全員の視線が横を向く。そこにいたのは

「うーん……」は……？」

半分寝ぼけたような顔で辺りを見回すグラエナ　ハイドだった。

ハイドはしばらくぼう、としていたが、やがて目的を思い出したのかバツ、と起き上がる。

「よ、よおし！休戦はここまでだ！覚悟……」

「するのはお前のほうだ！」

瞬時にハイドの背後に回ったレイが電撃で作った槍　電撃槍を突きつける。

ハイドは、ひいひい！なんて言いながらちじこまった。

……本当にルナティックなのか怪しくなってくる。

「お前にはいろいろ聞きたいことがあるからな。一緒に来てもらおうぞ。」

「わ、わかったから槍を突きつけるのはヤメテェ！」

ビクビクしているハイドを引っ張って、レイはどこかへ行ってしまった。

そんなレイを苦笑いで見ていたサンも続いていた。

…すれ違いざま、ウインのことは心配しないで、と言い残して。

正直心配するなというのは無理な相談だが、私よりもウインと付き合いが長いサンが言うんだ、大丈夫なだろう。

そう結論付けて、私は話を元に戻した。

「で？どこかいい場所はあるの？」

「…え？あ、うん…。あるにはあるんだけど……」

カズキは言いよどむ。何か都合が悪いことでもあるのだろうか？

「トレジャータウンを通らなきゃいけないんだよ。」

「なるほど…。人目についちゃうわね……」

「隠れながら進めば問題ないだろう。案内してくれ。」

「う、うん！わかった！」

案内されたのはトレジャータウンを抜けた先にある崖の上。茂みや建物の陰に隠れながら進んできたので、少々疲れた。

「この崖はサメハダ岩って呼ばれる場所だよ。」

「サメハダ岩？」

「そう。岩の形がサメハダーってポケモンに似ていることからそう呼ばれているんだ。」

……とりあえず、見た目は変わってないかな。」

カズキは一度辺りを見回すと、積み重なった草の前に来てそれを退かした。

すると、下に通じる階段が現れた。

「この下だよ。さあ、中にはいって。」

そう言って階段を下りていく。

私とジュプトルはそれに続いた。

中にはほとんど何もなかったが、目の前には大きな海を見渡せた。

「崖の中にこんな空間があったのか。」

「結構広いわね。」

「よかった！誰にも荒らされてないや。」

僕、ギルドに入る前はここに住みついていたんだよ。」

「ここなら目立たないし、しばらくはここにいたほうがいいかもね。」

「そうだな。」

時は流れて夜。

バッグの中に残っていたリンゴを食べ、三匹で話していた。

「しかし、お前があのヒナタだとはな……」

「……………」

「詳しく教えてよ、ジュプトル。」

カズキの問いにジュプトルは頷くと話し出した。

「俺とヒナタは、星の停止について調査していたんだ。」

「人間とポケモンのペアで？」

「ああ。ヒナタは他の誰にもない特別な力を持っていた。」

その特別な力が、星の停止を調査するのに重要な役割を持っていたのだ。」

私の持つ特別な力…。それは間違いなく

「時空の叫び」、だね？」

「その通りだ。ただ、時空の叫びが発動するには条件があった。その条件とは、信頼できるパートナーが一緒にいること。」

「信頼できる、パートナー……」

「だから俺達は一緒に行動していたのだ。」

時空の叫びは、時の歯車が関係する場所に反応して起こる。俺達はその性質を利用して過去の世界でのときの歯車がどこにあるのかを探っていたのだ。」

「ち、ちよつと待って！」

時空の叫びは信頼できるパートナーと一緒にいないと発動しないって言ってたけど、僕達が出会って間もない頃にも時空の叫びは発動してたよ？」

「何を言う。それほどお前達が初めから信頼しあっていたということじゃないか。」

「うっ……。そんなストレートに言われちゃうと…ちよつと恥ずかしい、かな。」

カズキは顔を赤らめる。まあ、そういう私の顔も少し赤いのだが。

「それにヒナタは記憶を無くしていた。頼るものがないとき、カズキに出会ったことでヒナタの信頼もより強くなったのではないかな？」

「な、なるほど……。」

あ、あと、時空の叫びは時の歯車に反応して起きるの？」「

「そうだ。」

逆を言えば、時の歯車がない場所では時空の叫びは発動しない。」「

「うーん……。そんなことなかったような……。ねえ、ヒナタ。スリープの時とか、初めての探検の時とか、明らかに時の歯車とは関係ない場所でも時空の叫びは起こってたよね？」

カズキの問いかけに私は黙って頷いた。

確かに、時の歯車とは関係のない場所でも時空の叫びは発動した。

「そうなのか……。未来ではそんなことはなかったのだが……。」

もしかしたら、この世界で発動する時空の叫びは未来とはまた違う性質なのかもしれないな。」「

未来では時の歯車と関係のある場所以外では発動しない……。」

確かに、逃げてる途中に水飛沫に触ったが、時空の叫びは発動しなかった。

なぜそうなるかはわからないけど……。なんかすっきりしないな……。」

「とにかく、俺達は調査を続け、そしてこの世界にあるときの歯車の場所をすべて探し出したのだ。」「

このときになってようやく気づいた。
霧の湖の時や水晶の洞窟の時に見た、声だけの時空の叫び。
なぜか記憶に残らない不思議な声の正体は ジュプトルだ！

「そうして俺達は時の歯車の場所を突き止めた後、時の回廊を渡り
この世界に向かったのだが……」

『は、離してはダメだ！もう少し……。何とか頑張るんだ！
……う、うわああー！ー！ー！』

「タイムスリップ中に事故があり、俺とヒナタは離れ離れになって
しまった。

ヒナタが記憶を失い、ポケモンになってしまったのは……その事故
が原因じゃないかと思う。」

……私は……未来からやってきた……。星の停止を食い止める使命を
おって……。
ウインから聞いて、心構えはできていたはずなのにやはり規模が大
きすぎて、実感がわかなかった。

「ヒナタ。お前は覚えていないかもしれないが、お前は俺の相棒だ
った。

たとえ姿が変わり、ポケモンになろうともお前はお前だ。

……元気でよかった。ヒナタ。」

ジュプトルは優しく笑った。とても穏やかな笑みだった。
また逢えて、よかった。

「さて、これからのことだが。俺は前にも言ったように時の歯車を集める。」

「…お前達はとうする?」

「……時の歯車を取るとその地域の時間は止まっちゃうけど、これは一時的なものなんだよね?」

「ああ。“時限の塔”に歯車を収めさえすれば、また正常に動き出す。」

「だったら、僕達も行くよ!ジュプトルと一緒に!

時の歯車を取ると、そのポケモン達には迷惑がかかっちゃうけど……でも、星の停止はなんとしてでも食い止めないと!」

「わかった。じゃあ一緒に行こう。」

だが、今日はもう遅い。それに今までずっと逃げ回っていて疲れているはずだ。

とりあえず今日は休んで、明日の朝出発することにしよう。」

ジュプトルの提案に私達はそろって頷いた。

「まったくどいつもこいつも……」

今しがた受けた報告にこぶしを握り締める一匹のポケモン。

場所は暗くて把握できないが、ここは現代ではなく、“過去”だ。

「ルエルうゝ、落ち着きなつて。」

「これが落ち着いていられるか！幹部の連中もほとんど出払って、リヒトまで行ってるっていうのにまだ誰一人として抹殺できないつてのはおかしいだろうが！！」

ルエルと呼ばれたポケモンは苛立ちをあらわに食って掛かる。
そう、この二匹はルナティック。それも四天王だ。

「納得がいかないならお前も行ったらどうだ。どうせ暇だろ？」

落ち着いた口調でもう一匹が話しかける。
彼もまた四天王だ。

「こつ見えても忙しいんだよ！
おい！シエイド、出てこい！」

「はっ！お呼びでしょうか？」

怒鳴り声に応えて音もなく現れる一匹のムウマージ。
彼はルエルの補佐役的存在だ。

「あつちの世界に行つて奴らを潰して来い！どんな手段を使つてもかまわねえ！

人手が必要なら適当に引つ張つていけ！オレの権限で許可する！」

「承知しました。」

ルエルの怒号を聞き、ムウマージ シェイドは現れたときと同じくスツ、といなくなった。

ルエルはクククツ、と不気味に笑う。

残酷な響きを持った笑い声は、暗い空間に響き渡っていた。

第三十七話・元の世界へ（後書き）

ようやく帰還です。

ヒナタ

「ウインは大丈夫なのかしら？」

ちゃんと無事だから安心しなさい。

最後のは…まあ、お楽しみです

それでは

第三十八話：夜明けの想い（前書き）

第三十八話完成です

第三十八話：夜明けの想い

真夜中。ジユプトルはふと目を覚ました。

「……………？カズキがいないな……………」

隣で寝ていたはずのカズキの姿が見えない。周りを見回してみるが、視界に入るのは静かな海と相棒の寝顔だけ。

その寝顔にジユプトルは目を細める。とても穏やかな顔だった。

ジユプトルはヒナタを起こさないようにそっと立ち上がった。もしかしたら外にいるのかもしれない。

ジユプトルが外に出ると、崖の先で海のほうを見ているカズキの姿があった。

「あ、ジユプトル。」

気づいたカズキが顔を向ける。

ジユプトルはカズキに歩み寄った。

「どうした？眠れないのか？」

「ううん。ちょっと、考え事を、ね。」

カズキは視線をジユプトルから海へと戻す。

声こそ落ち着いているが、その瞳は不安に揺れていた。

「未来のことか？」

「うん……。正直、この世界を救えるかどうか不安でいっぱいなんだ…。」

以前の僕なら、逃げ出していたかもしれない。でもね……」

カズキは大切な宝物　遺跡の欠片を取り出す。

「これは遺跡の欠片。僕の宝物だよ。

この欠片を取り返したことが、僕とヒナタが探検隊になるきっかけだったんだ。この欠片が、すべての始まりだったんだよ。」

カズキは欠片を遠い目で見つめる。

「ヒナタは臆病だった僕に勇気をくれた。ヒナタと一緒にならどんな困難も乗り越えて行ける、そんな気がするんだ。

だから、僕は逃げない。最後まで絶対に諦めない。」

「……なんとなく、わかる気がするな。その気持ち…。」

あいつには……ヒナタには、そう思わせる何かがあるんだ。」

大して運動神経がいいわけではないが、とても頭が切れて、どんな状況でも次々に作戦を考える。

弱い人間でありながら、仲間のためなら自分の身を犠牲にするのも厭わない。

そんな奴。

「あつ！見てよジユプトル！」

東の空からだんだんとお日様が顔を出してきた。

その光はあまりにも眩しく、だが、背けたいとは思わなかった。

「……綺麗だな。」

「そうだね……。
ずっと未来にいたせいかな？夜が明けるのがこんなにも新鮮に感じるとは思わなかったよ。」

日が昇り、そして沈んでいく……。
当たり前のことだけど、その“当たり前”が、実はもの凄く大切なものだったんだね……

「俺は暗黒の未来世界しか知らなかったから、この世界に来て初めて太陽を見て衝撃を受けた。
そして、だからこそ、暗黒の未来を変えなくてはと、強く思ったんだ。」

この決意は、何者にも折ることのできない鋼の決意。
ジュルトルの強さを改めて知るのだった。

「あいつは……幸せ者だな。」

「え？」

「お前のような、友達がいて。」

「ジュプトル……」

ジュプトルの表情は、嬉しいような、悔しいような、とても複雑な顔だった。

しかしそんな表情は一瞬で、すぐにまた元の顔に戻った。
昇りきった朝日を見つめ、ジュプトルは言う。

「……もう朝だ。そろそろ出発するか。」

「そうだね……。ヒナタを起こさなきゃ。」

朝日に背を向け、二匹は中へと戻っていった。

目を覚ますと、すでに二匹は起きていた。

いつも私より先に起きたためしがないカズキが起きていることに少々驚くが、とりあえず今日の行動について話し始めた。

「さてと、時の歯車を取りに行くわけだが。まず最初にどこのときの歯車を狙うか、だな。」

「ここから一番近いのだと……地底の湖だね。」

地図を広げながら言うカズキ。

確かに距離的には近いが、少し問題がある。

「あそこには時の歯車の番人　エムリットがいる。エムリットは事情を知らないから、戦闘になってしまいうんじゃないかしら？」

「そうだな。そこで俺はここがいいと思うんだが。」

ジュプトルが示したのは、トレジャータウンから北東に位置する森　キザキの森と呼ばれるところだった。

「ここはユクシーやエムリットのように時の歯車を守る番人がいない。

少し距離はあるが、ここならスムーズにいけるだろう。」

ここは無駄な戦闘をするより確実にいったほうがいい。

ジユプトルの意見に頷き、私達はキザキの森へと向かうのだった。

キザキの森に到着すると、いったん休憩してから森の中へ入った。ジユプトルが言うには、前来たときと何か少し様子が違うらしい。…それが何なのかわからないけれど。

この森のポケモンは総合的にレベルが高かった。

私の苦手なエスパータイプのポケモンが多く、さらに特性“貫い火”を持つポケモンもいて、私達にとってはちよつと難関のダンジョンだった。

それでもジユプトルの力を借り、何とか奥地まで到達する。

「大丈夫？カズキ。」

「うん。平気だよ。ヒナタは？」

「私も大丈夫。」

お互いを気づかいないながら先へ進むと、辺りの木々に違和感を覚えた。

「こ、これって!？」

「入るときに感じた違和感はこれか。」

私の目に飛び込んできたのは、色を失い、灰色に染まった木々。
暗黒の未来で見たものと同じだった。

「ど、どうして！？確かあの時、ユクシー達は歯車を元の場所に戻すって！」

「だが、ここの時間は止まっている。」

「もしかしたら、元の場所に戻されていないのかな？」

「そうかもしれない。時の歯車があつたのはこっちだ。」

ジユプトルに続き、進んでみると、そこには蒼緑色に輝く歯車の歯車が浮かんでいた。

しかし、辺りを見回してみてもやはり時間は止まっている。

「風も吹いてないし、木の葉だって固まってる……。
やっぱり時は止まっているのね。」

「でも、時の歯車はちゃんと戻ってるのに、いったいなんで……？」

思案顔をするカズキ。ジユプトルはあごに手を当て考えていた。

「時の歯車を戻しても時が止まっているということは……。」

もしかしたら、“時限の塔”が崩れ始めたのかもしれない。」

「え……それって、つまり……！」

「星の停止に向けて世界が急速に動き出した、ということだ。」

「そんな！まだ一つしか集めてないのに！」

慌てた声で言うカズキ。無理もないだろう。

星の停止を食い止めるために必要な時の歯車は、全部で五つ。それに時限の塔がどこにあるかさえわかっていない。

時間が、足りない！

「仕方がない、二手に分かれよう。」

俺は時の歯車を集める。お前達は“幻の大地”という場所を探してくれ。」

「“幻の大地”？」

「ああ。そこに時限の塔はある。」

幻とつくようにどこにあるか検討もつかない。だが、確かに存在するはずだ。」

世界のどこかにある秘境、ってところかしら。…雲を掴むような話ね…。

でも、そんなことは言ってもらえない。このままでは、世界は星の停止を迎えてしまうのだから！

「情報が少なくてすまないが頼んだぞ。俺はこのまま時の歯車を集めにいく。」

ジュプトルは目の前の時の歯車を取ると、足早に去っていった。しまった。

「幻の大地、かあ……。いったいどこにあるんだろう?」

「そう簡単に行ける所ではないでしょうね。……たとえば、海の間うとか。」

何気なく呟いた言葉だが、この可能性だってあるのだ。

いまだ発見されていないほどの秘境。むしろ海の間うでもなければ今頃見つかっているのではないだろうか?

だが、たとえこの推論があつていたとしても海を渡る手段などない。万事休すだ。

しかし、諦めるわけにはいかない。一刻も早く幻の大地の場所を突き止め、時限の塔に時の歯車を収めなければ　星が、止まってしまふ。

それだけはなんとしてでも食い止めなければならない。それには、二匹だけでは荷が重すぎる。みんなの協力が必要だ。

話そう、カズキに。これしか手はない。

すべてを伝えよう　ギルドのみんなに。

「どうしたの、ヒナタ?」

考え込んでいたらしく、いつの間にかカズキが私の顔を覗き込むように見つめていた。

私は一度深呼吸をし、カズキをしっかりと見た。

「カズキ、プクリンのギルドに行こう。」

「…えっ!? な、何で!? 確かにみんな心配してるだろうし、僕もみんなに会いたいけど…。」

でも、今まで僕達が見てきたことをギルドのみんなに話したとして

……みんなは、信じてくれるかな？」

…確かに、未来で起きたことをすべて話したとしてもそう簡単には信じてもらえないだろう。

特にヨノワールはこの世界では有名な探険家。彼はこの世界でもても尊敬されている。

すぐに信じろ、と言うのは無理がある。
でも……

「私は伝えるべきだと思う。」

「どうして？みんな信じてくれないかもしれないんだよ！？
それでも言うべきなの！？」

「それでも言うべきよ！」

「どうして！？何でそう思うのっ！？」

「みんなの力が必要だからっ！！」

「！……みんなの…力……」

カズキははっ、として静かに呟いた。

今はこれしかない。それに、私はみんなの優しさを知っている。
大丈夫、彼らならきつと信じてくれる。

私は彼らを信じてる。

「………そっか。そうだよ。幻の大地を探すには僕達だけでなく…
…みんなの協力が必要だよ。」

僕達だけじゃ、とてもじゃないけど間に合わない……。

わかったよヒナタ。行こう！プクリンのギルドへ！」

「カズキ……。」

「驚かれるのは承知の上だ！でも、みんななら必ずわかってくれる。みんな優しいポケモンだもん。きっと信じてくれる。」

クスリ、と笑いあう。カズキもみんなを信じてるんだね。

私達はギルドに向かって歩き出した。とても暖かい、自分達の居場所へ……

第三十九話：ルナティックの襲撃（前書き）

第三十九話完成です。

第三十九話：ルナティックの襲撃

空は雲ひとつない快晴、とても澄んだ綺麗な空だった。

しかし、それは数十分前の話。

「……………何なのよ……………これ……………」

今の空は、血のような赤。大好きな青空はすっかり飲み込まれてしまっていた。

あちこちであがった炎が空に映し出されているのだ。

なぜ？どうしてこんなことになってるの？

悪夢としか言いようのないこの状況に誰かが答えてくれるはずもない疑問をぶつける。

「何で…こんな……………」

これが本当の悪夢なら早く覚めてほしかった。…しかし、これは紛れもない現実。

邪悪な何かに操られたとしか思えない“探検隊”が、トレジャータウンの平穏をぶち壊していた。

数十分前、キザキの森を後にした私達はトレジャータウンに向かって歩を進めていた。ギルドのみんなにすべてを話すと決意して。

私は歩きながらふと空を見上げる。

とても澄んだ青い空。降り注ぐ日の光の下で、柔らかな草原に寝転んだらさぞ気持ちがいいだろう。

私はこんな青空が大好きだ。そしてだからこそ、守りたいと想う。星の停止を迎えればすべては灰色に染まり、すべての時は停止する。…それだけは、絶対にさせない。

再度自分の使命を確認すると、私は歩くスピードを上げた。

「あつ、待ってよヒナタ！」

突然早くなつた私にカズキはあわてて走りよってくる。

少し臆病だけど、私の大切なパートナー……。

「どうしたの？急に速くなって。」

「別にどうもしないわよ。早くみんなに会いたいと思っただけ。」

「そっか！僕もだよ！じゃあ早く行こう。」

今度はカズキが歩くスピードを上げる。

私はクスリと笑うと、その後を追った。

しばらく歩き、トレジャータウンも間近に迫ってきた頃……。

「ん？なんかトレジャータウンのほう騒がしいね。」

「ええ……。」

トレジャータウンは確かに賑やかな所だが、今聞こえてくるこれは町の喧騒というよりも……

「これって…悲鳴!？」

誰かの叫び声や猛烈な破壊音、よく見ればトレジャータウンの上空は赤く染まり、炎があがっていることがわかった。

「急ぐわよ！カズキ！」

「うん！」

……そして話は冒頭に戻る。

トレジャータウンの被害は大きかった。

私達が着いた時にはすでにほとんどの施設が破壊されており、暴れまわってる探検隊を抑えようとギルドの弟子達が戦っている。町の住人の姿は見えなかった。

「ん？おお！ヒナタにカズキじゃねえか！？」

「え？…スカイさん！？」

暴れまわる探検隊達の合間を潜り抜けて一匹のウインディ スカイが走ってきた。

スカイは嬉しそうに顔をほころばせながら私とカズキの肩を叩く。
……痛いんですけど。

「あの一つ目と一緒に消えちまった時はどうしようと思ったが、とにかく無事でよかったぜ！」

……だが、今は感動の再会は後回しだ。それどころじゃねえ…。」

「スカイさん、いったい何があったんですか！？」

「タウンを拠点に活動してる探検隊が急に襲ってきやがった。おそ

らくこいつは　ルナティックの仕業だ！」

探検隊がいきなり襲ってきた！？でも、ルナティックの仕業ってことは、みんな操られてるってこと？

確かに暴れている探検隊は目が紅く染まり、正気じゃないことは明白だ。

でも、こんなにたくさん探検隊を操るなんて、相当な実力者ね。

「トレジャータウンの住人達はどこにいるの？」

「ギルドに避難させた！プクリンとルナちゃんが護ってるから心配ないぜ！」

「そう、よかったあ…。」

カズキはほっと胸をなでおろす。とりあえず住人は無事なわけだ。しかし、状況は最悪。早く鎮めなければ！

「とにかく今は暴れている探検隊達を止めなくちゃ！」

「もちろんそのつもりだぜ！…倒さねえで気絶させるつつうのはだいぶ骨が折れるけどな。」

大群を相手にする場合、こちらが少数なほど不利になる。しかも相手は探検隊のため倒すわけには行かない。倒さずに気絶させるとなると、相手の体力を考えて手加減しなければならぬ。

目隠して迷宮を抜けるといっているようなものだ。しかし、やるしかない。私達は分かれて行動した。

「眠り粉！」

私は緑色の粉をばら撒く。それに触れたポケモン達はたちまちのうちに眠ってしまった。

状態異常にする技はこういうときに役に立つ。覚えていてよかった。襲いくる探検隊をあらかた眠らせると、加勢しようとかズキのほうを見る。しかしその必要はなかった。

カズキは煙幕で牽制しながら、的確に相手の急所を捉え、ほぼ一撃でダウンさせている。

カズキの知識はクレセントが来てから格段にあがっていた。特にウインはポケモンの弱点に関することはほとんど知っていて、多少知識がある私も驚かされたものだ。

暇な時にちよくちよく聞いていたのが役に立ったわね。

「そつちも終わったか？次行くぞ！」

方が着いたららしいスカイが大声を上げる。

私とカズキは頷くとトレジャータウンの奥へと向かっていった。

カクレオン商店の前に背中合わせで戦っているブラッキーとポリゴンがいた。ガランとアランだ。

「ガラン！アラン！大丈夫か！？」

「ああ、問題ない！…ってヒナタにカズキ！？無事だったのか！？」

ちらちらと横目で見ていたガランは私達の姿を確認するとガバツ、と振り返る。

それを見て周りの探検隊が襲ってきたが、スカイが突風を発生させ、一瞬で気絶させてしまった。

「ガランさん。アランさん。無事に帰ってきましたよ。」

「よかった！ずっと心配してたんだぜ！」

「無事で何よりだ。」

ガランとアランはそれぞれの感想を述べる。スカイも含め、全員元ルナティックだが、心の優しいポケモンばかりだった。

先程スカイが吹っ飛ばしたので最後だったらしく、襲い来るポケモンはもういなかった。

「そういえば、ウインはどうした？レイもサンもあの日から姿が見えないからお前等の後を追ったのかと思ってたが。」

「それは……」

私はこれまでのことを話した。

スカイはそれを聞くとひどく驚いた顔をした。

「リヒトの奴が……」

スカイは呟くと俯いて黙ってしまふ。

「……ウインは私達のために一匹で残ったんです。たった一匹で……」

私はいまさらながら後悔する。

なぜあの時黙って帰ってきてしまったんだろう。いくらウインが強くてもしヒトはその上を行くということは、目の前で見せ付けられていたのに……。

ただただリヒトに恐怖して、ウインなら絶対に負けない！って勝手に

に結論づけて

私は…とんだ臆病者だ。

知らずの内に下がっていた顔を上げるのが怖い。

スカイヤイクリプスの二匹がこれを聞いて、私を怒り責めるのも、
悲しみ慰めるのも　すべてが、怖い……

「…………ツ!？」

ぼろり、と一雫の涙がこぼれ落ちる。

ワイン、ごめんなさい……どうか、無事でいて……。

「ヒナタ……。ワインは大丈夫だよ!元氣出して?」

カズキが優しく言うが、私にはそんな慰めはもはや意味をなさない。
私は悲しみの底にいた。

「…………ヒナタ、本当にリヒトだったのか?」

「…………え?」

「そいつは本当にリヒトだったのか、って言ってるんだ。」

思いがけない質問にきよとんとする。人違いならぬ、ポケ違いとでも
もいいたいのだろうか?

「自分では名乗ってなかったけど、一緒にいたハイドが『七星剣の
操り手、リヒト様』と言ってたから間違いないと思います。」

「四天王のあいつまで来てたのか……。」

スカイはなぜか嬉しそうに顔をほころばせる。その笑みの意味がわからず、私は首を傾げた。

「ヒナタ、安心しろ。ウインは絶対無事だぜ！」

「え…ええっ！？それってどういうこと!？」

驚きの声を上げる私にスカイはニコニコ顔で答える。

「リヒトは俺の親友だからな！」

またしても驚く。いつのまにか出ていた涙はもう止まっていた。

「リヒトはスカイの初めての友達なんだ。」

「前はよく一緒に行動していた……と聞いている。」

「へえ……」

スカイが元ルナティックだということはウインから聞いていたが、そこまでは知らなかった。

「スカイさんがリヒトと友達だったなんて……」

「…でも、何でウインが無事だって言い切れるの?」

いくら友達といっても今は敵同士。それだけでウインが無事だとは言えないのではないだろうか?

「そりゃあ、ダチだからってのもあるが

そもそも俺がルナティックを抜けたのは、リヒトのおかげなんだぜ？」

「……そんな話し聞いてないぞ？」

「そりゃそうだ。言ってないからな！」

アランの突っ込みを爽やかに返すスカイ。
アランはため息を吐いて黙った。

「俺が組織の本当の目的を知れたのもリヒトが手伝ってくれたからだ。」

リヒトはルナティックのことをよく思ってたからな、俺と考えが一致したんだ。」

「だからお前に情報を流したのか。」

「そういつこった。」

ええと……整理すると、リヒトはスカイさんの友達で、ルナティックのことをよく思ってたから、考えが一致したスカイさんに情報を流した……でいいのよね？

じゃあ、何でリヒトはあの時襲ってきたんだろう？スカイと同じなら自分も裏切ってくればいいのに……

「（いや、それじゃあダメなのか……）」

私は首を振って考えを改める。

リヒトは四天王だっていつてた。それが地位の高いことは大体わかる。

地位が高いと確かに情報は手に入りやすいけど、その分自ら動く機会が減るからそれでスカイさんに託したんだ。

それに四天王であるリヒトまで裏切ったら、それを押さえるために他の四天王も動き出してしまふ。

だからリヒトはルナティックにいるんだ。影でウイン達を助けるために。

「（……でも、それだけじゃない気がする。）」

これは本当に勘に過ぎない、けど、何かが引っかかる。

元の世界に送られる寸前に聞こえた声

『……絶対に、死ぬなよ』

…あの時は誰の声かわからなかったけど、よくよく考えればあの場に残っていたのはウインとリヒト、そしてセレビィの三匹だけ。

声の調子からセレビィでないのはわかるし、ウインはこんな言葉遣いはしない…。

と言うことは、あの時の声は……

「…ナタ…ねえ、ヒナタってば！」

「うえ！？」

「どうしたのヒナタ？急に黙り込んで。」

どうやらすっかり自分の世界に入っていたらしい。

私は心配そうに顔を覗き込んでいるカズキに、なんでもない、と返す。

「まあ、とにかくだ！」

スカイが急に大声を上げる。
私を見ていたカズキも驚いて振り返った。

「ウインのことは心配すんな！絶対無事だって、俺が保証する！
今は星の停止を食い止めるのが先だ。早速ギルドの連中に……」

「そうはさせませんよ。」

『！？』

突如として響いた声。慌てて振り返ると、そこにいたのは

「ごきげんよう、皆さん。四天王ルエルの命により、あなた方を抹
殺しにきました。」

「テメエは……シェイド！」

紫色の魔女のような帽子をかぶったポケモン ムウマーヅだ
った。

第三十九話・ルナティックの襲撃（後書き）

というわけで、ちょっとオリジナルはいります。

ヒナタ

「どんなオリジナルよ！よりもよってトレジャータウンを襲うなんて！」

まあまあ押さえて押さえて。

ルナティックの目的を考えると、こつこつ展開が浮かんだから。

オリジナルということ、またグダグダ文になりそうですが、よかつたら見てくださいな。

では

第四十話：戦慄の人形劇（前書き）

第四十話完成です。

第四十話：戦慄の人形劇

「今この場にいるターゲットは……全部で五匹ですか。」

突如現れたムウマージ シェイドは、確認するようにいった。
五対一と不利な状況のはずなのにその声には余裕の色が見られた。

「どういわけかブラックリストに載ってしまった可哀想なポケモン、ヒナタとカズキ。」

元ルナティック暗殺部所属の仲良しコンビ、ガランとアラン。

そして、同じく元ルナティックで幹部達を束ねる総隊長、スカイ。

……裏切り者ばかりですね。」

シェイドは残念そうにため息をつく。面倒くさい、というふうにも見えた。

それにしても、スカイさんてそんな重要な役職についてたんだ……。

「あなた方を殺してしまうのは実に惜しいですね。特にスカイは、総隊長の上りヒトの補佐役というすばらしい地位を授かっていたというのに……。」

仲良しコンビも、敵に一度助けられたくらいで考えを改めるなんて……残念すぎてため息も出ませんよ。」

そうやってわざとらしく盛大にため息をつく。

出てんじゃねえか、と元ルナティック組は心の中で言い返す。実際に声に出さないのは、シェイドの戦い方を知っているからだ。

「そのフシギダネとヒノアラシは攻撃した相手が悪かったですね。」

もしラクシアでなかったら、たかが毒状態にしたくらいでブラックリストになんか載らなかつたでしょうに。」

「……どういうこと？」

「ラクシアは我が主君、ルエル様のお気に入りでしてね。そしてブラックリストを管理してらっしゃる。

…自分の大切なコレクションを傷つけられたら、こうなるのは必然でしょう？」

そう言つて不気味に笑うシェイド。私は背中に氷塊が滑り降りたような感覚を覚えた。

静かで丁寧だけど、人を見下したような言い方。私は笑顔の裏に悪魔の顔を見た気がした。

汗が噴き出し、鼓動が早くなる。恐怖に似た何かが、私の心を締め上げてくる。

「まあ、ワタシならその件は水に流しても……」

「御託はいいからさっさと始めたらどうだ？ どうせテメエは、初めから俺達全員を殺すつもりだろ？」

と、そんな私をかばうかのように、スカイが一步前に出て言う。

ガランとアランは私とカズキに近づくと、そつと耳打ちしてくれた。

「あいつは相手を操ったり、惑わせたりするのが得意だ。あいつの言葉には耳を傾けないほうがいい。」

「

「あいつは何を言おうが当初の目的を遂行する。」

イクリップスの二匹は元ルナティックだ。シェイドのことも知っているのだから、さっき何も言い返さなかったのはそのせいか。確かにさっきスカイが止めてくれなかったら、あいつを倒すという前に“どうしたら助かるか”ということを考えていたはずだ。あの後「言うことを聞けば見逃してやる、さもなければ全員殺す。」などということ言われれば、“戦う”という選択肢は、薄れてしまっただろうから。

「劇前のトークは長ければ長いほど劇が盛り上がるというものですが…せっかちなお客さんですね。では、リクエストにお応えして始めるとしましょうか。戦慄の人形劇を！」

シェイドの瞳がギラリと紅く煌く。すると、倒れていた探検隊達が起き上がり、全員の視線が私達に向けられる。その瞳はシェイドと同じく紅く染まっていた。

「気味の悪い人形劇だな！ 火炎放射！」

スカイの口から灼熱の炎が放たれる。その炎は向かってきたゴリーキーに直撃し、吹き飛ばした。

しかし、ゴリーキーはすぐに立ち上がりまた向かってくる。

「無駄ですよ。このポケモン達はワタシの操り人形。

…人形が痛みや苦しみを感じると思えますか？」

シェイドは小さく笑う。目が紅いのもあって、その様子はとても不気味だった。

「それなら大元を断つまでよ！マジカルリーフ！」

「火炎放射！」

私はシェイドに向かって技を放つ。カズキも気づいて加勢したが、しかし……

「シャドーボール。」

シェイドが放ったシャドーボールにより、私達の技をいとも簡単に消滅してしまった。

「そんな攻撃でワタシを倒そうなんて、可笑しすぎて片腹痛いですよ。」

「くっ！」

さっきのシャドーボール。明らかに手加減していた。ウィン達の足を引つ張らないようにと、せめて自分の身は自分で護れるようにと、依頼でダンジョンに行く度に鍛錬してきたのに、それでもぜんぜん歯が立たない……。私は自分の無力さに歯噛みした。

「ヒナタ！危ない！」

「…えっ？」

俯き気味だった顔を上げると、そこには操られたストライクが鎌を振り下ろすところだった。

「ッ!？」

「ジェットナックル!」

神速の如し速さでガランがストライクに殴りかかる。ストライクは遠くへと飛ばされた。

「大丈夫か!？」

「え、ええ。何とか……」

「……ヒナタ、そんなに落ち込むことはない。お前の判断は正しかったぞ。」

元気がない私の心を察したのか、ガランは少し口調を柔らかくして言った。

「でも、ぜんぜん歯が立たなくて……」

「当たり前だ。あいつは四天王ルエルの補佐役だ。その辺の幹部よりよっぽど強い。」

そこに、会話にアランが入ってきた。

こちらは口調は変わらないものの、心配するよつにアランが言う。

「ヒナタ、元気出して?確かにあいつは強いけど、でも、きっと勝つ方法があるはずだよ!

今はその方法を考えなくちゃ!」

「自分一人で抱え込もうとすんなよ!俺達もいるんだぜ!？」

力を合わせて、な？」

カズキ、そしてスカイも続く。

「いつからこんなに弱くなっちゃんだらう？力が足りない部分は知識でカバー。それが私の考え方だったのに。」

こんなところで落ち込んでどうする。私だけでできないことでも、みんなでなら

「……ごめん、みんな。心配かけちゃったね。」

でも、もう大丈夫。今はあいつを全力で倒す！ みんなで力を合

わせて！！」

『 おおー！！ 』

みんなには心身ともに助けられてばかりだな。それに応えられる様に頑張らなくちゃね！

「よし！そうと決まれば作戦会議だ！

“トルネードウォール”張ったからしばらくは大丈夫だぜ！」

私達の周りには風の壁が渦巻いていた。

ぜんぜん攻撃がこないと思ったら、こういうことだったのね。

「まず、操られたポケモン達を止めるにはシェイドを倒さなくちゃならない。…これは合ってる？」

「ああ。シェイドが自分から洗脳をとく以外はそれしかねえ。」

「となると操られたポケモン達の攻撃を避けつつ攻撃するしかないわね。」

さつきは偶然にも攻撃できたけど、次はもつと警戒するはず。それに、さつきみたいに迎撃してきたりすることを考えると……かなり厳しいわね。」

さつきのシャドーボールはかなり強力だった。しかも、おそらくあれは全体の力の半分も出してない。

それに、もしもその迎撃をかくぐくつても、最悪の場合、探検隊を盾にしてくるかもしれない。

「あいつは特殊攻撃を極限まで高めたっていうしなあ。並みの攻撃じゃ抜けられないぜ?」

「だが、厳しすぎる鍛え方のせいで、そのほかの能力値はかなり低いと聞いたが。」

「えっ?それはホントですか?」

ガランの発言にピンと来て、私は確認を取った。

「ん?ああ。大技を決めればほぼ一撃だろう。」

……それができれば苦労しないが。」

「敵の動きをすべて封じれ”たらできるかもしれないが。」

アランが言った一言。一見無理だと思えるが、私はこれを行ってくれると思われるポケモンに心当たりがあった。

ワインと違って子供っぽいけど、ワインと同じように頼りになる存在

『ルナならできるんじゃないかしら(かな)?』

カズキと声が重なった。驚いてカズキのほうを見ると、同じように驚いた顔で私を見ているカズキの姿。考えていることは一緒のようだ。

「おお！なるほどな！！確かにルナちゃんならいけるかもしれねえ！よしっ！早速呼んで……」

「その必要はないよお」

風の音に混じって、子供っぽい声が聞こえてきた。声のするほうを見てみると、渦巻く風の一部が動きを止め、そこから中へと入ってきたキュウコンの姿が

『ルナ！？』

「久しぶり！ヒナタにカズキ！会いたかったよお！」

ルナは私に向かって飛びついてくる。

ちよ、ちよっとルナ！！？私今フシギダネなんだから！　く、苦しい……

姿は見えないが、カズキも同じような状況にさらされてるらしい、呻き声が聞こえてくる。

「……ルナ。その辺でやめとかないと本気で死ぬぞ？」

「え？……わあ！ご、ごめんねヒナタ！カズキ！嬉しくてつい……」

アランの冷静な言葉でようやく解放された。

つい、でこんな事やらないでほしい……。ああ、頭が痛い……

「ああ、綺麗なお花畑が見える……」

カズキが目を虚ろにして言う。

か、カズキ！しっかりしてえ！！

慌ててカズキの肩を揺すつたら正気に戻ったからよかったけど、アランの言葉が冗談に聞こえなくなってきた…。

ちなみにスカイが嫉妬して飛び掛ろうとしていたのをガランが必死に止めていたのはまた別の話。

「……ゴホン！それでルナ。こういうわけなんだけど、できる？」

気を取り直して、私はルナに説明をする。ルナは勢いよく頷いた。

「任せて！……でも、ちょっと時間がかかるかも。」

「大丈夫！俺の“トルネードウォール”がある限り、敵の攻撃は通さねえぜ！！」

スカイが自信満々に言う。

確かにこの風の壁は外の様子は見れないが、強固。そう簡単には破れないだろう。

「ルナちゃんの“封縛術”の準備ができたなら“トルネードウォール”をとく。」

「そして動きを止めたらオレ達の」

「ああ。合わせ技で止めだ。」

タイミングが大事だ。外の様子がわからない以上、いかに迅速に技が発動できるかが勝負。

一気に畳み掛ける！

しかしこの時、私は一抹の不安を抱えていた。

「（…静か過ぎる…。）」

いや、「トルネードウォール」の風の音があるから「静か」とは言いがたい。

だが、さつきから敵の攻撃音などが聞こえないのだ。まるで誰もいないかのように。

シエイドが強いのは先程の攻撃から痛いほどわかっている。おそらくあの手加減攻撃でも連発すればこの風のバリアを破ることもできるだろう。

しかし、攻撃の音は聞こえない。

「（こちらがバリアをとくのを待ってる？でも、壊せるだけの力を持つてるのにわざわざ敵に回復の時間を与えるわけ…。）」

と、ここで私はあることに気づく。よく嵐の前の静けさなんていうが、こういうことなんじゃないだろうか？

“私達と同じことをしようとしている”のではないだろうか？たとえば、こちらを一撃で倒せるような技を持っていて、いまはその力をためている。そして、バリアが消えた瞬間に ドカン。これなら攻撃が来ないのにも納得がいく。しかしだとしたら……

マズイ！

「準備オツケーだよ！」

「よし！ “トルネードウォール”をとくぞ！」

「ッ！？待って……！」

私は叫んだが、時すでに遅し。風のバリアは消失してしまった。

「やっと出てきましたね。この時を待っていましたよ！」

『ッ！！！？』

壁が消えて私達の目に飛び込んできたのは、真っ黒な巨大な球体を頭上に掲げるシエイドの姿。

シエイドはこちらが行動するより早く

「闇に沈め！デアボリック・インパクト！！」

真っ黒で巨大な球体を撃ち放った。

第四十話：戦慄の人形劇（後書き）

はい、いいところで切っちゃいました

スカイ

「ふざけんな！一体どうなるんだよ！？」

さあ、それは次回のお楽しみです
でも、まだこれからってところかな？

第四十一話：一難去ってまた一難（前書き）

第四十一話完成です。

第四十一話：一難去ってまた一難

目の前には真つ黒で巨大な球体。

それはまわりの物を飲み込みながら私達に迫ってくる。

その距離わずか数メートル。

攻撃する気でいたスカイ達は、急いで防御動作に入るが　距離が近すぎる。

ルナがとつさに張った守りの壁も球体に触れた瞬間、あっという間に霧散してしまった。

何もかもが手遅れだった。攻撃も防御もする時間など無かった。

終わった……

あれを受けたら無事で済むはずがない。私は覚悟を決めるしかなかった。

「バニツシュ！」

シェイドの掛け声と同時に真つ黒な球体は私達のもとに着弾し、そして

ドカーーン！！

大爆発を起こした。

「…………え？」

だが、私はいつまでも意識を保っていた。

あれだけの爆発なら即死でもおかしくはないのに　ん？

私は身を起こそうとしたが、何かが身体の上に乗っていて起き上がることができない。

それは全体が黒くて、所々に黄色いわつか模様がある

「が、ガランさん!!?」

なんと上に乗っていたのはガランだった。

まさか……私を庇って……

「ひ、なた……無事か……?」

と、ガランはとても弱々しい声で問い掛けてきた。

私はなんとか抜け出しガランの方を見て頷いた。

「よか……た……」

「ごめんなさい……私……」

「何で……謝るん、だよ……。俺が…勝手にやった、ことだ……」。

それに……他の奴らだって、そうだぜ……?」

ガランの言葉にハッ、と顔を上げ、まわりを見してみる。

隣ではアランがカズキを守るように倒れていて、後方を見ても、ルナが倒れているスカイを涙目で揺さ振っている。

「みんな……大切な奴を守るために動いた……

ただ、それだけだ……」

「ガランさん……」

ヒナタの声にガランはニツ、と笑うとガクリと意識を失った。

「……………」

私は無言で立ち上がると、ツルを伸ばしてカズキを手繰り寄せる。

「カズキ。ほら、起きて。」

「ふえ……………あ、ヒナタ！無事だったんだね！？」

カズキは私の姿を見るなり安堵の表情を見せた。
しかし、私は無言のまま何も言わない。

「……………ヒナタ？」

「カズキ……………あいつを、倒そう。絶対に！」

「！？」

カズキはとても驚いた表情になった。

私が急に大声を上げたというのもあるが、一番の原因は、私が“泣いていた”ことだろう。

ただしその涙は、悲しみではなく怒りの涙だ。

「みんなを傷つけたあいつを　絶対に！！」

「ヒナタ……………うん、わかったよ！

あいつを　シエイドを倒そう！」

「ルナも協力して！」

「もちろん！スカイをこんなにしちゃって、許さないんだから！」

私達はキツ、と前を見る。そこにいるのはムウマージ シェイドだ。

「まさか三匹も仕留めそこなうとは……。この技は反動が大きいというのに……。」

シェイドは悔しげな声を上げる。

宙に浮いているが、その体はふらついていて相当ダメージが溜まっていることがわかる。

デアポリック・インパクトは威力こそ反則的だが、与えたダメージの二分の一を受けるといってデメリットが存在するのだ。

「ヒナタ！あいつは技の反動で動けないみたい。攻撃するなら今だよ！」

「ええ。でも、動けなくても迎撃ぐらいはできるはず。みんな私の指示通りに攻撃して！」

「わかった！」

「オツケ〜！」

庇ってくれたみんなのためにも、こいつだけは絶対に倒す！
私は背中の種に力を込め

「タネ爆弾！」

種類の爆弾を放った！

しかしシェイドはいかにも余裕といった表情を見せる。

「その程度ではワタシは倒せませんよ!?」
「シャドーボール!」

シェイドが放った黒い弾によって、私のタネ爆弾はいとも簡単に相殺されてしまった。

タネ爆弾は途中で爆発し、黒煙がお互いの姿を隠す。
でも、これは計算のうち!

「カズキ!」

「うん! オーバーヒート!」

「なっ!?!」

カズキの放った灰白い炎は、黒煙を突っ切ってシェイドに向かって飛んでいく。

「ま、守る!」

シェイドは緑色に輝くバリアを前方に作り出しそれを防ぐ。
くっ、守を覚えてたのね……!

さすがにこれは予想外だった。

だが、いい方向で予想外のことも起こった。

「裂破!」

ルナの掛け声とともに白銀に輝く鳥がシェイドに向かっていき、そして

バリーン！

ガラスが割れるような音を立てて、守るを打ち砕いた！

「ぐあっ！？」

裂破はそのままシェイドに直撃し、ダメージを与えた。

「ヒナタ！今だよ！」

「え、あ、うん！カズキ、日本晴れをお願い！」

「わ、わかった！」

こんなこともできるのか、と感心していたが、ルナの声にあわてて指示を出す。

「合わせていくわよ！？」

『うん！』

「ソーラービーム！！」

「オーバーヒート！！」

「火炎放射！！」

日本晴れの効果で強化された技が一つに合わさり、シェイドの身体を貫いた。

「ぐ……く、そ……」

攻撃をまともに受けたシェイドは地面に倒れ伏していた。
もはや宙に浮かぶ余力もないようだ。

「倒した、の？」

「やったよヒナタ！僕達勝ったんだよ！」

「わーいわーい」

はしゃぐカズキとルナに対し、私は妙な胸騒ぎを覚えていた。
なんだろう……この感覚。まだ何かあるようない……この胸のざわめ
きは……

「は……はは……」

『ツ！？』

突然シェイドが笑い声を上げた。
私達は揃ってシェイドに視線を向ける。

「………何がおかしいの？」

「はは………まさか……ワタシが、敗北するとは………思いませんでした
が………念のため、保険を用意して、おいて……よかった………」

「！？？どういう意味！？」

「なに………あの盗賊に、部下を二匹、差し向けただけですよ………」

「なん……ですって……!?!」

盗賊　これは紛れもなくジュプトルのことを指している。

なぜジュプトルを!?! ジュプトルは無関係のはずなのに!?!

私が絶句している隙にシェイドはふらふらしながらも宙に浮かび上がる。

「さて……ワタシは一時退却しますか……。さすがにダメージを受けすぎました……。」

「ま、待て!!」

カズキは叫んだが、その時にはすでにシェイドはテレポートの体制に入っていた。今から攻撃しても間に合わない!

シェイドの体が透けていき、その顔がニタリと笑う。

しかし、完全にその体が消える次の瞬間!

「がつ!!?!」

『!?!』

突如、私達の背後から何かが飛来し、シェイドに直撃した。

消えかけていたシェイドの体が再び実体を持ち、地面に突っ伏する。

「何逃げようとしてんだシェイド? まだオレの言った命令を果たせてねえだろ?」

「る、ルエル……さま……」

苛立ったような声で喋りながら現れたのは、右目に黒い眼帯を付けたバンギラス。

その手には少し大きめの銃が握られていた。

しかもただの銃ではなく、銃口のしたにナイフがついた銃剣だった。バンギラスは私達の前を素通りし、倒れた状態で驚いているシェイドの前に来る。

「ルエル様……なぜ、ここへ……？」

「レインの奴が仕事を代わってくれたんだよ。

……それより、無様な姿を晒しやがって、オレの顔に泥を塗ってんじゃないねえよ！」

「も、申し訳　ぐあっ!？」

バンギラス　ルエルは、銃に付いている剣でシェイドの身体を刺した。

苦痛に声を上げるシェイドをルエルはさらに痛め付ける。

「この役たたずが！」

「……………」

ルエルが罵声を浴びせるがシェイドは応えない。
どうやら気を失ってしまったようだ。

「つたく！スカイはともかく、ほかはみんな雑魚じゃねえか。苦戦する意味がわからねえ。」

そう言っつてルエルは人を見下すような目で私達のほうを見る。

しかし私は、新たな敵の登場に焦りを覚えた。
くっ！ジュプトルが危ないっていうのに！

私は自分の危険の前にジュプトルのことを心配していた。ジュプトルはルナティックのことを知らない。それを知らずに戦闘になったら、いくらジュプトルでも苦戦するはず。
早く助けなくちゃ！

「フンツ！シエイドの姑息な作戦が心配か？他人のことより自分のことを考えたらどうだ！？」

「！？」

ルエルが素早く銃口を私に向け 撃った。

放たれた弾丸は私の頬をかすり、地面にめり込む。

「安心しろ。せいぜい痛くないようにあの世に送ってやる。感謝するんだな！」

「禁！」

二発目の発砲。今度はまっすぐに私の額を捉えていた。
ルナが瞬時に不可視の壁を展開するが

「無駄だ！」

「ウソツ！？」

弾丸は壁を貫き、そのまま直進した。

私は思わずギョツと目を瞑った。
が、その時！

「守る！」

突如響いた聞いたことのない声。そして何かが弾かれる音。私は恐る恐る目を開けてみた。そこには

「何とか間に合ったようですね。」

「間一髪、ってところかな？」

ドククラゲ、そしてツボツボ。

長と無月の姿がそこにあった。

第四十一話：一難去ってまた一難（後書き）

新たな敵の登場、さらに長い引きこもり期間を経て、無月と長が登場です！

無月

「誰が引きこもりだ！誰が！？」

え？君だけど？

無月

「よし、歯食いしばれ……」

や、ヤバ……

ここは、逃げる！

無月

「待ちやがれえ！！」

長

「無月様、落ち着いてくださいよ……（汗）」

第四十二話・影の協力者（前書き）

第四十二話完成です。

第四十二話・影の協力者

薄暗い洞窟。

ヒナタ達とシェイドが戦いを繰り広げていた頃、黒いマントを纏ったポケモン　リヒトはあるものを見つめていた。

「シェイドの差し金か。抜け目の無い奴め。」

リヒトが見つめるあるものとは、氷で作られた丸い鏡だった。もっと正確に言えば、鏡に映っている光景を見ている。

「もし自分が倒されたとしても、ジュプトルを襲うことで時の歯車の回収を遅らせ、幻の大地に行かせないように時間を稼ぐ。」

「……姑息なまねを。」

リヒトは忌々しげに舌打ちをする。

鏡面に映っているのは、急いでいる様子のジュプトル、そして、それを追う二つの影。

この鏡はリヒトの持つ七星剣のうちの一つ　氷牙から派生する技の一つ　“水鏡”という技だ。

効果は、離れた場所にある光景を映し出すというもの。ただし、映し出す場所の近くに湖なり水溜りなり、とにかく近くに“水”がないとこの技は使えない。

「あいつがどうなるうとおれには関係ないが……コトネの　ヒナタの悲しむ顔は見たくない。」

「……伝えるか。」

リヒトはもたれていた壁から背中を離すと、洞窟の入り口に向かう。

役目を終えた鏡は、その場に小さな水溜りを作って消失した。

「あいつらがいるとすれば……おそらくレンレン村だな。」

リヒトは瞬時に頭の中に地図を呼び出し、レンレン村の場所を確認する。

まあ、今は村としての機能は失われ、村と言える状態ではないが……

「そろそろハイドも限界だろうから、ちょうどいいか。

素直に応じてくれるといいけど……」

やがて洞窟の入り口に着いた。

先程まで晴れていた空は、今では雲が覆い澄んだ青空を見ることができない。

ヒナタの好きな青空を隠す雲はリヒトは嫌いだった。

「ヒナタに不幸が訪れなければいいが……」

リヒトはトレジャータウンにいるであろうヒナタのことを想う。

だが、それも一瞬で、すぐさまリヒトは走り出した。

キザキの森でヒナタ達と別れてから数時間。

ジュプトルは二つ目の時の歯車を手に入れるため、“大鍾乳洞”というダンジョンを目指していた。

時の歯車を五つ集め時限の塔に収めなければ、塔は崩壊し、世界の時間は止まってしまふ。

残された時間は少ない。急がなければ！

「……見えた！」

しばらく走っていると、前方に巨大な岩がいくつも並ぶ洞窟が見えた。

ここは“巨大岩石群”というダンジョンで、このダンジョンの先に“大鍾乳洞”はある。

目的地を目視で確認したジュプトルは、さらにスピードを上げて走っていた。

と、その時、

「かみなり！」

「ッ!？」

突如背後から放たれた雷撃は、ジュプトルの後を追う様に物凄い速さで迫る。

気配を察したジュプトルは、とっさに横に飛びこんでかわした。

「誰だ!？」

ジュプトルは雷が飛んできた方向を見る。

そこには小さな林が存在していたが、その一角の茂みがガサガサッと音を立て、一匹のポケモンが姿を現した。

「チツ、はずしたか。」

憎々しげに舌打ちしながら現れたのは一匹のライボルト。その前脚には、鋭く尖った長い爪があった。

「おい、ベルク！仕留め損なつたぞ！？」

「うむ……まさかここまでの速さとはな。予想外だ。」

ライボルトはジユプトルの後ろのほうを向いて苛立ったような声を上げる。

その声に応え、背中に大きな剣を背負ったサイドンが姿を現した。前方にライボルト、後方にサイドン。挟み撃ちにされてしまった。

「……お前等、何者だ？」

ジユプトルはなるべく隙を見せないように二匹を見る。

ジユプトルの問いにライボルトは面倒くさそうに答えた。

「あたしはルナティックのラクシア。そっちの図体でかいのがベルクだ。」

「おい！図体でかいとは何だ！」

ラクシアの言葉が癪に障つたのか、ベルクは地面を踏み鳴らして大声を上げる。

それを軽くスルーして、ラクシアはジユプトルが肩にかけているバッグを見る。

「とりあえずそのバッグを渡してもらおうか！」

「！？」

このバッグの中にはダンジョンで使う道具のほか、時の歯車も入っ

ている。

相手の目的が何であれ、このバッグを盗られるわけには行かなかった。

「…………断る！」

「あっそう。なら…………死ね！」

「くっ！？」

ラクシアはいきなり前脚を横なぎに振ってきた。

爪だと思っていたのはナイフだったらしく、ジュプトルはそれを寸での所でリーフブレードで弾く。

しかし…………

「アックスブレード！」

「ぐあっ！！？」

いつの間にか接近していたベルクが、背負っていた大剣でジュプトルを吹き飛ばした。

手加減したのか峰打ちだったのと、とっさに回避動作をしたため直撃は避けたが、左肩を強打され思わずその場に蹲ってしまう。

何だこの威力…！あんなのまともに受けたら、全身の骨がバラバラになるぞ…！！？

激痛が奔る肩を右手で押さえながら、ジュプトルはこの状況が圧倒的不利だと悟った。

「（無月から聞いていたが…………まさかこれほど強いとは…………）」

ジユプトルは無月との情報交換でルナティックのことは少なからず知っていた。

だがそれでも、対等にやり合えるくらいの実力だと思っていた。しかし結果はこれ。対等どころか、攻撃のチャンスすらつかめない。奴らの目的はわからないが、このままでは確実に殺される……！ジユプトルの心にわずかな恐怖心が芽生えた。

「何だ、もう終わりか？あいつらの仲間にしちゃあたいた事ないな。」

「不意打ちは好かないが、これも任務の一環だ。仕方あるまい。」

いまだに蹲っているジユプトルにルナティックの二匹がゆっくりと近づいていく。

しかしジユプトルは、まだ諦めたわけではなかった。

「高速移動から電光石火！」

ジユプトルは連結した技で一気に接近すると、ありったけの力でリーフブレードを繰り出した。

反撃を予想していなかった二匹はその勢いで飛ばされ、岩壁に激突した。

もうもうと砂煙が上がり、二匹の姿が見えなくなった。

「ぐっ……！！！」

ジユプトルは左肩を押さえてうめく。

ベルクに食らわされた一撃は大きく、自分の技でさえ反動で痛みが奔る。

早く……逃げなくては……

今の一撃くらいでは倒れない。そう考えたジュプトルは一刻も早くこの場を立ち去ろうと足を動かす。自分の技の反動にさえ耐えられないこの状態で、まともに戦うなど不可能だ。

「……調子に乗るなよガキが！」

「ッ!？」

怒りの声とともに砂煙の中から電気を帯びたナイフが飛んできた。砂煙で見えないはずなのにそのナイフはまっすぐジュプトルへと飛んできた。何とか避けるが、わずかに身体をかすった。

「このあたしに傷を負わずとはいいい度胸だ！よほど死にてえらしいな!?!？」

「ラクシア落ち着け。感情的になるな。」

徐々に煙が晴れてくる。

そこには、怒りに肩を振るわせるラクシアと、大剣を支えに立ち上がっているベルクの姿があった。

二匹ともほとんど傷はなく、ベルクにいたってはかすり傷すらない。二匹はしばらく言い争っていたが、やがて視線をジュプトルに向ける。

「一撃でしとめてやる。感謝するんだな！かみなり!！」

ラクシアの体から超高压の電流が迸る。そしてそれは、一直線にジュプトルの元へ

「死ねえ!!!!」

「疾風迅雷!!!」

バチィ!!!

かみなりがジュプトルに届く直前、何者かが間に割って入った。

そのポケモンは手に白銀に輝く長い槍を持ち、同じく長い尻尾には二本の傷がついている。

その隣には黄色い体に大きな瞳が可愛らしいポケモンが立っている。

「何とか間に合ったようだな……」

「ギリギリセーフだね!」

それぞれ安堵の台詞をはく。ジュプトルはその姿に見覚えがあった。

「レイ……それにサン……。」

ジュプトルの前に、過去からやってきた兄弟の姿があった。

第四十二話・影の協力者（後書き）

今回はジユプトル方面のお話です。

出す順番を間違えてる気もしますが、そこは触れないでください（笑）

レイ

「おいおい……」

あ、それとお知らせです。

もう皆さんご存じかと思いますが、ユーザ登録していない方でも感想を書くことが可能になりました。

この小説だけでなく、「く思い出の歌」や「星を救え」も規制を解除しましたので、どうぞお気軽に書き込んでください。ご指摘などもお待ちしております。

では、この辺で

第四十三話・圧倒的に不利な戦い（前書き）

第四十三話完成です。

第四十三話：圧倒的に不利な戦い

間一髪ジュプトルを助けることに成功したレイとサン。今はルナティックのラクシアとベルクと対峙している。

「貴様はあの時のライチュウ……。」

ベルクは拳を握り締め、体をわなわなと震わせながらとても低い声で言った。

その声に気圧されて、ごくりと唾を飲み込むジュプトル。レイはジュプトルを庇うように前に出た。

「お嬢様を狙ってきたあのサイドンか。今度はジュプトルを狙うとは、いったい何を考えている？」

「黙れ！我が部下であるリグドを殺された恨み、ここで晴らしてくれよう……！」

そう言っただけ地面を踏み鳴らす。大剣を構え、今にも飛び掛りそうだ。そんなベルクをきよとんとした様子で見ているラクシアだが、やがてうんうんと頷き、ベルクと同じく戦闘体制に入る。

「よくわかんねえが、ベルク。テメエがああのライチュウをぶっ殺してえのはわかった。」

あたしはそのピカチュウを殺る。テメエはライチュウを殺れ。」

「恩に着るぞ、ラクシア！」

完全に戦闘体制に入る二匹にレイは軽く左手をあげ、ジュプトルに

後ろへ下がるように言った。

ジユプトルは少し不服そうだったが、今の自分は満足に戦えない。足手纏いになるだろうと思いい、後方にある岩陰まで避難した。

「兄ちゃんと一緒に戦うのっていつぶりだろうね？」

「さあな。だが、久しぶりということとは間違いない。」

そう言いながらレイは電撃槍を構え、サンはパンパンと頬を叩いた。ベルクとレイ、ラクシアとサンがそれぞれ睨みあう。辺りの雰囲気は張り詰めていき、林の木々がざわざわと音を立てる。

風が吹き、飛ばされた木の葉が横切ったその瞬間　　！

「剣の舞！」

ベルクの攻撃が始まり、戦いの火蓋は切って落とされた！

ベルクは勇ましい舞を舞い、攻撃力を上げつつ大剣で攻撃してくる。レイは槍でそれを捌いているが、一振りするたびに威力が上がってくるその攻撃に、だんだんと押され始める。

「くっ！剣の舞を攻撃に使うとは、考えたな。だが　　」

レイはタイミングを見て後ろに飛びのくと、槍を持つ手に力を込め、ベルクの上にジャンプした。

「　　上ががら空きだ！食らえ、雷！」

レイから放たれた高圧の電気はベルクに直撃し、そこに砂煙を起した。

攻撃を終えたレイはそのままベルクを飛び越え、綺麗に着地した。

「さっすが兄ちゃん！やるう！」

「テメエは他人より自分の心配したらどうだ!？」

「うわっ!？」

レイの活躍を見てはしゃいでいるサンにラクシアは容赦なくナイフを飛ばす。

それをギリギリでかわしたサンは不満げな顔でラクシアを睨んだ。

「危ないなあ！不意打ちなんて卑怯だぞ！」

「戦いに不意打ちもくそもあるか！ポーっとしてるほうが悪いんだよ！」

そう言つてナイフを飛ばしてくる。サンは危なっかしいがそれを何とか避けた。

「それならこつちだつて行くよ！貫け！ライティングスラスト!!」

サンの体から雷を凌駕するほどの電流が放たれる。

しかし、ラクシアはそれを見て避けようとも防御しようともせず、ただニヤリと口端を吊り上げた。

そして、攻撃がラクシアに当たると思われたその瞬間

「えっ!？」

雷はカクンと突如軌道を変え、ラクシアの右にそれた。その先には、先程レイが攻撃した際に起きた砂煙。つまりベルクのいる場所へと

向かっていったのだ。
雷の衝撃で煙が吹き飛ばされる。するとそこには、大剣を支えに立ち上がるベルクの姿が

「な、何で……」

「確かに手ごたえはあつたはず！」

驚きの表情を浮かべるレイとサンにラクシアは高らかに笑い出した。

「あつはは！ テメエら本気であたし達に勝とうとしたのかい？ こつちには“避雷針”があるって言うのに！」

“避雷針”。それは電気タイプの技をすべて引き寄せ、その攻撃を無効化してしまうという特性だ。

電気タイプの技を中心に戦うレイ達にとって、この特性は圧倒的に不利だ。

リヒトからジユプトルがピンチと聞いて急いで飛び出してきたので、そんなことを考えている余裕などなかったのだ。

後から考えると、なぜ敵であるリヒトがこんな事を教えてくれたのかとても不思議だが。

「テメエらがどんなに技を放とうと、あたしらには無意味なんだよ！ あつはは！」

「くっ……」

“避雷針”があるとわかった今、もう電気技は使えない。

電気技以外の技もあるにはあるが、それで倒しきれなかったら終わりだ。

逃げるにしても、怪我をしたジュプトルを連れてではそれも難しい。途中で追いつかれるのは目に見えている。さて、どうしたものだろうか……

「もうテメエらには“降参する”って言う選択肢しか残ってないんだよ！」

「さあ、覚悟するがいい！」

じりじりと迫ってくる二匹。もう後がない。

もはやこれまでか　！

「死ねえ！！」

「タネマシンガン！！」

大剣を振り上げるベルクに突如、タネ型のエネルギー弾が背後を襲った。

気配を察知したベルクは振り上げた大剣を盾にし、それを防御した。

「……悪あがきだな。そんな傷を負っても、まだ戦うつもりか？」

ベルクは呆れたような目で、攻撃してきた相手　ジュプトルを見る。

ジュプトルは苦痛に顔を歪ませながら肩を押さえている。ベルクに貰った一撃は相当なものだった。

だが、それでもジュプトルは技を放った。もう自分の攻撃でさえ痛みを感じると知りながら

「馬鹿！何やってるんだ！！殺されるぞ！！！」

「そうだよ！早く逃げて！」

ベルクとは対照的に驚愕の表情を浮かべるレイとサンは、必死に叫ぶ。だが、ジユプトルは動こうとしなかった。

くそっ！なぜ逃げない！？お前が死んだら、誰が世界を救うんだ！？物凄い形相にレイに一瞥をくれた後、ジユプトルはおもむろに口を開いた。

「……俺は最初、お前達のことを疑っていた。俺に協力すると見せかけて、最後には裏切るつもりだと思っていた。だから、逆に利用しようともしていた。」

ここで一度言葉を切り、「だが……」と続けた。

「お前達は何度も俺を助けてくれた。水晶の洞窟の時も、未来世界の時も、そして今だってそうだ。自分の身の危険も顧みず、迷わず助けに来てくれた。」

俺は嬉しかった。ヒナタとはぐれ、孤独だった俺に手を差し伸べてくれた、その暖かさが……。」

「ジユプトル……。」

ジユプトルは深呼吸すると、閉じていた目をカッと開き、力強く言った。

「お前達が俺のために命を張るなら、俺もお前達のためにこの命をかけよう！お前達が俺を信じるなら、俺もお前達を信じ抜こう！……」

……俺達は 仲間だ！……」

しんと静まり返る。まるで時が止まってしまったかのように、しばらくの間静寂が流れた。

「……フツ。」

そんな静寂を破ったのは、驚きからいち早く正気に戻ったラクシアだった。

プルプルと肩を震わせ、やがて堪えきれなくなったのか、大声で笑い出す。

「あつはははっ！！何をぬかすかと思えば、仲良しごっこの王道だな！仲間だの信頼だの、そんなものがなんの役に立つ？そんなものは戦いにおいて邪魔なだけだ！倒れた奴に気を使ったら、勝てるもんも勝てねえんだよ！」

「……ふっ、お前達には到底理解できないだろうな。仲間を信じる、その大切さは！」

そう言つて戦闘体制に入るジュプトル。肩を負傷しているこの状態では、勝つことは絶対に無理だと知りながら。

レイとサンを　仲間を助けるため、俺は全力で戦う！

「このあたしに説教とは、よっぽど死に急ぎてえらしいな。だつたら望みどおり、さっさとあの世に送つてやるよー！！」

ラクシアは後ろ足で地面をけると、瞬時にジュプトルに接近する。ジュプトルの高速移動よりも早いスピードで迫るラクシアにジュプトルは身構えることしかできなかった。

「ジュプトルー！！」

ベルクの間を突いてサンが電光石火で助けに入ろうとするが、ラクシアのほうが早い。

お願い、間に合って!!

そう切に願ったときだった。突如一陣の風が吹き荒れたのは!

「くっ、何だこの風!？」

竜巻並みの威力があるその風にラクシアは攻撃を断念せざるを得ない。

強風が吹き荒れる中、レイやサン、そしてジュプトルやベルク、ラクシアも風が吹いてきた方向を見つめた。

しばらくして風がやむ。晴れた視界に飛び込んできたのは、一匹のポケモン。

全身を薄い青色の体毛が覆い、背中からは青みがかった白い“四枚”の翼が生えている。そしてさらに尻尾は二つに枝分かれし、瞳の色は吸い込まれそうな深い蒼色だった。そのポケモンは、本当にポケモンかどうか怪しくなるほどに神秘的な雰囲気醸し出していた。ふわり、と羽ばたく音すら立てずにその場に浮いていたそのポケモンは、ゆっくりとこちらに近づき、やがてジュプトルの前に降り立つ。

「……あなたの強い思い。僕にも、伝わりましたよ。」

「お前………ウイン?」

優しく落ち着いた声。それは記憶の中のウインの声に酷似していた。驚愕の色を浮かべるジュプトルに、ウイン(?)は優しく微笑んだ。

「その思い、どうかいつまでも忘れないください。」

風が吹き出す。しかし、それは先程のような強風ではなく、そよそよと優しく流れるそよ風だった。その風はジユプトルを包み込み、淡い緑色の光を放つ。

「これは…いつたい…」

体の痛みが抜けていく。まるで、風が痛みを拭い去っていくかのようになつていった。

風がやみ体を見回してみると、傷はなくなり、肩もしっかり動かせるようになっていた。

驚きの表情で体を動かしているジユプトルを見て満足したのか、ウイン(?)は一歩進み出て、ルナティックの二匹を見る。

「さて、あなた達レイ達を傷つけたことを反省する気はありますか？もしあるのなら、今回は許しましょう。」

「な、なんだと…?」

ウイン(?)の放つプレッシャーに押され退き気味になっていたラクシアは、思わず目を丸くする。声を出すことはなかったが、ベルクも同様にきよんとしていた。

だが、だんだんと状況を理解したのか、ラクシアは振り絞るような声で言った。

「だ、誰が反省なんかするかっ!!あたしは誰かに命令されるのが大っ嫌いなんだよ!!」

「そうですね…残念です。」

言い終えたと同時にひゅっ、という風を切る音が聞こえたかと思うと、先程までラクシアの前にいたウイン(?)がラクシアの背後に立っていた。そして、それと同時にラクシアは地面に突っ伏する。

「ラクシア!!?」

突然の事態に目を見開くベルク。

今、何が起きたんだ?なぜラクシアが倒れるんだ!?

「貴様あ!!ラクシアに何をした!!?」

「彼女の中の“悪魔”を断ち切っただけです。大丈夫、死んではいけませんよ。」

憤激するベルクにウイン(?)は冷静に返す。しかし、頭に血がのぼったベルクは大剣を振り上げ、迫ってきた。それを見たウイン(?)は

「祝福の風……“エンジェルブリーズ”」

その四翼で宙に浮き上がり、そして、翼を大きくはばたかせた。

「“一陣の烈風”!」

四枚の翼から風の刃が放たれる。その刃は淡い緑色の光を纏っていた。

「ぐあっ!」

刃がベルクに直撃する。しかし、それはベルクの体に切り傷一つ

けることはなかった。

この風は、“攻撃であって攻撃でない”ものだから。
ドシン！と大きな音を立ててベルクが倒れる。衝撃で揺れる地面に、
レイ達は少しよろめいた。

「……先の未来に、祝福あれ。」

ウィン（？）はそう呟くと、翼をはためかせ、暗くなり始めた空に
消えていった。

レイ達は、それを呆然と見つめるしかなかった。

第四十三話・圧倒的に不利な戦い（後書き）

やっとワインを出せたよ……

サン

「あれ、本当にワインだったの!？」

そうですね。ちょっと曖昧な表現になってしまいましたけどね……。

二度目の滑り込み救済。こんなに都合よく助けはこねえよ!って思う方もいらっしやると思いますが、そこは突っ込まないでくださるとありがたいです（笑）

レイ

「お前なあ……」

第四十四話：無月の考え（前書き）

第四十四話完成です。

第四十四話：無月の考え

私は驚きの表情を浮かべていた。

突如現れた見知らぬ二匹のポケモンが、私を守ってくれたのだ。

驚いているのはカズキ達も同じようで、目を見開き、口をポカンとあけている。

しかし、そんな中

「無月に長！？何でここにいるの！！？」

声を上げたのはルナだった。ということは、この二匹も過去から来たポケモン！？

ルナの声に、私を攻撃から守ってくれたツボツボ　無月は一瞬こちらに顔を向けると、ニツと笑ってすぐに顔を戻した。

行動からして味方みたいだけど、いったい何者なのかしら？

「ねえルナ。あの二匹は、いったい誰なの？」

「えーと…ツボツボのほうが無月で、ドククラゲのほうが長だよ。二匹とも私達のいた世界から来たポケモンで、ウインの友達だよ。」

ルナの説明を聞き、改めて二匹を見る。

特に無月は、ルナの守りの壁を貫くほど強力な弾丸を簡単に弾き返していた。相当な実力があるに違いない！

「オレの“デザート・ブレット砂弾”を弾くとはな。…貴様、何者だ？ブラックリストには載ってなかったはずだが？」

「別に誰だっていいだろ。何で君に教える必要があるのさ？」

「ルナティック四天王の一角、『砂塵の射手』、ルエル」！もうこれ以上、仲間を傷つけさせはしません！」

ルエル、無月、長の三匹の視線がぶつかり合い火花を散らす。どちらが攻撃してもおかしくない。一触即発の状態だ。

それにしても、ここでの戦力アップは嬉しい限りだ。私達を含め、五匹で協力して立ち向かえば、おそらくあいつを倒すことができるはず！

ジユプトルのことも心配だが、助けに行くにしてもどの道ルエルを倒さなければ助けに行くことは不可能なのだ。ここはルエルを倒すのが先決だろう。

ジユプトルのことも含めて、一緒に戦おうという意味を伝えようと無月に近づこうとしたが、それは次の瞬間無月が発した言葉によって止まる。

「……長、ガラン達の傷の手当をお願い。こいつは僕だけでやる。」

「！？し、しかし相手は四天王の一匹で」

「そんなことわかってるよ！大丈夫、こんな奴僕だけで十分さ！」

なんと無月は一匹でルエルに挑むと言い出した。

絶対に勝てるという自信があるのだろうか？それともただの意地？どちらにしても、これには納得がいかない。一刻も早く、ジユプトルを助けに行かなければならないのだから！

「あ、あの！」

「ん？何、ヒナタ。」

私が声をかけると、無月は視線を長から私へと向けた。

なぜ私の名前を知っているか疑問に思ったが、今はそんなことより

「あの、私達も一緒に戦います！一匹でなんて無茶ですよ！

……それに、ジュプトルが 私の仲間がピンチなんです！！早く助けに行かないと」

「ジュプトルなら大丈夫だよ。」

「……えっ？」

私の言葉を遮って無月は静かに、しかし強い口調でそう言った。
ジュプトルなら大丈夫？ いったいどういうこと？

「ジュプトル様のところには、スターズの二匹が向かっています。」

「スターズ？ レイとサンが向かっているの？」

「はい。彼らなら必ずやジュプトル様を助けるでしょう。」

長の言葉を聴いて少し安心できた。あの二匹なら、ルナティックにも十分渡り合える。そう思ったから。

しかし、ここで疑問が生じる。

「でも、何でジュプトルがピンチなのかわかったの？ 僕達のこともそうだけど。」

私の疑問を代弁するかのようにかズキが長に問いかけた。

ジユプトルへの奇襲はシエイドの策略。当然味方以外に他言はしていないはず。なのに、なぜそのことを知っているのだろうか？この問いに長は少し困ったような顔を見ると、ゆっくりと答えた。

「……ある方に…教えていただいたのです。」

「ある方？」

「別に今はそんなのどうでもいいだろ？」

“ある方”が誰なのか聞こうと迫ったとき、無月がぶっきらぼうな声で割り込んできた。

「今はそんなこと気にしてられる状況じゃないだろ？あと、助けなんて要らないよ。僕だけでやるから。」

「で、でも……」

「しつこいなあ……はっきり言わないとわからないの？君達は足手纏いなんだよ！」

「え……」

フン！と不機嫌そうな顔をして無月はルエルのほうへ向き直った。

「ずいぶんと待たせるじゃねえか。覚悟はできてんだろっな？」

「それはごっちの台詞だ！返り討ちにしてやる！」

お互い気合十分で戦いが始まった。

攻撃に特化するルエルと、防御に特化する無月。激しい戦いになると思われる。

しかし、ヒナタはそんな激戦を見るでもなく、ただその場で俯いていた。

私が……足手纏い……？

確かに私はルナ達と比べたら強くはない。でも、強くなろうと毎日鍛練を重ねてきたつもりだ。

……だから、無月の言葉はとても痛い。

まるで、今までの努力は無駄だと言われてるみたいで、とても悲しい……。

私は、何もできない、のかな……

「………あなた……。ねえ、ヒナタってば！」

「！？……カズキ……？」

自分と呼ぶ声に驚きはっ、と顔を上げると、そこには心配そうな顔をしたカズキの姿があった。

「ヒナタ、また一匹で悩んでたでしょ？」

「う………」

な、何で、わかったの……？

「やっぱり……。ダメだよヒナタ。スカイさんも言ってたでしょ？
一匹で抱え込んだじゃダメだって。」

ヒナタにはヒナタにしかできないことがあるんだから、落ち込んだ
やダメだよ？

それに「

カズキはいったん言葉を切ると、深呼吸をし、意を決したように口を開いた。

「たまには、その……僕に頼ってくれても、いいんだよ？」

「カズキ……」

また、やってしまった……。何で私はいつも自分一人で悩んでしま
うのだろう？

私のそばには、とても信頼できるパートナーがいるというのに

「……なんて。僕が言っても不安になるだけだよね……。」

ごめん。変な事言つて。」

そう言つて照れ臭そうに頭を掻くカズキ。

全然変なんかじゃないよ、カズキ。ありがとう……

「……さて、長さん、私も手伝います。」

「あっ！待ってよヒナタ！」

私は心の中でお礼を言つと、ガラン達の手当てをしている長とルナ
のもとへ走りよつた。

カズキも慌ててそれに続く。

ルナはオレンの実の果汁を使って傷を消毒し、長はどこから取り出
したのか、長い包帯を傷に巻いていた。

その手際の良さに思わず感嘆の声が漏れる。

「は、早いですね……」

「これでも医術の心得はありますからね。」

……それと、先程は無月様が失礼なことを言つてすいませんでした。しかし、どうか無月様を責めないでいただけないでしょうか？」

「……………え？」

包帯を巻く手を止め、申し訳なさそうな表情を向けてくる長。

確かに無月の言葉には傷ついたが、それは長が謝る事ではない。それに、責めるなどはいつたいどうということだろうか？

「無月様は不器用なだけなのです。誰かを守りたいという気持ちは強いのに、それをうまく言葉にできずについ、棘のある言い方をしてしまうのです。」

本当は、もう誰かが傷つくのを見たくないから、なんですがね。」

「……………だから、一匹で？」

「その通りです。」

私は思わず無月のほうを見た。ルエルの放つ銃弾にマシンガンで対抗する無月。

ヒナタは知らないが、無月は以前ジュプトルと時の歯車を回収するとき、ジュプトルを置いて逃げてしまった。そうしなければ全員やられていただろうし、あの時はそれが最良の選択だといえた。

しかし、ジュプトルを見捨ててしまったという事実と、レイに言われた言葉。それに無月はずっと悩まされていた。だから、無月は決意した。

次こそはどんな手段を使つても守り通す。たとえそれで命を落

とそうとも！

守護者の意地。いや、使命感といったほうがいいかもしれない。戦うことを嫌い、争いの中で盾として使われ、そしてその命を散らせていった守護者達。無月の両親も、仲間も、友達も みんな。ただ一人、戦うことを嫌わなかった無月は、何の抵抗もせずによられていった守護者達の考えが理解できなかった。仲間が死んだとき、悲しみより怒りがこみ上げてきたほどだ。

……でも、今はその気持ちが痛いほどわかる。誰かを守りたい。その気持ちが

「一匹で戦うことが、みんなを守る最善の方法。それが無月様の考えです。」

「……………」

私は無言で無月を見つめ続けた。一匹で戦うというのは、確かに自分しか傷つかない。でも、私は納得いかないな。

一匹でできることはごく少ない。でも、みんなならできることはとても多くなる。

一匹じゃできないことでも、みんなならできる。それは、さっき私が教えられたことだった。

第四十四話：無月の考え（後書き）

ルエルVS無月のバトルは次回になってしまいました（汗）

ヒナタ

「無月さんにはつらい過去がありそうね……。」

友達のリクエストしたキャラの中では、かなり大きな過去ですね。ちゃんとできてるかなあ……

ちなみに守護者とは、無月の一族が代々受け継いできたもので、主人と決めた相手を文字通り守護するポケモンのことです。

無月の場合はフィンノンですね。

では、わかりにくい補足とともに後書きを終了します。

第四十五話：VS砂塵の射手（前書き）

第四十五話完成です。

第四十五話：VS砂塵の射手

「デザート・ブレット
砂弾！」

「おりゃあー！！！」

ヒュンヒュンと風を切る音が辺りに響く。

ルエルの持つ銃剣と、無月の持つマシンガンから繰り出される弾丸は、お互いにぶつかり合って小さな爆発を起こしている。

しかし、ルエルの放つ砂弾の威力は半端じゃない。ルエルの弾を一発相殺するのに、無月は最低でも二十発は撃っている。

ルナの持つ強力な守りの壁をいともたやすく打ち抜いたことから、尋常な威力じゃないことはわかってたけど、まさかこれほどとは……顔には出していないが、無月は内心焦っていた。攻撃の隙が、見つからない！

「どうした？いつまでもこうやって撃ち合っていても勝負はつかねえぜ！？」

「そんなに勝負を急ぎたいならそっちが動けば？僕には効かないけどねー！」

「減らず口を……」

そう言った瞬間、ルエルの姿が消えた。

ルエルの代わりに、細かな砂を残して

そのことに驚いている無月の背後に、突如生じる大きな気配。

「叩くなあ！！！」

「ぐあっ!?!」

突如無月の背後に現れたルエルは、その強靱な尻尾で無月を吹き飛ばした。

攻撃をもろに受けてしまった無月は、歯を食い縛ってなんとか立ち上がる。

「う、ぐ……。まだまだ!」

無月の言葉とは裏腹に、身体はミシミシと悲鳴を上げていた。攻撃を受けた部分を中心に、殻に小さな亀裂が入っている。

「今度は……こっちの番だ!」

無月は殻の中からグレネードランチャーを取り出す。

「さあ、覚悟しろ!」

「……甘いな。」

「なっ!?!」

照準を合わせようとしていた無月の手が止まった。

ルエルの身体から砂が舞い乱れ、あっという間に砂嵐と化した。砂嵐に視界を遮られ、ルエルの姿を見ることができない!

「覚悟しろ?それはこっちの台詞だ!」

ルエルの声が響く。しかし、視界が遮られているために敵の位置が

分からない。

どこだ？どこにいる！？

キョロキョロとまわりを見るが、見えるのは砂、砂、砂。完全にルエルを見失った。

と、その時

「ッ！？」

砂嵐の音に混じって、ヒュン、という風を切る音が聞こえた。その瞬間、首筋を鋭い痛みが駆け抜ける。

「な、なんだ……？」

訳が分からず首を押さえる無月。触手を伸ばしてみると、その場所からは血が出ていた。

その後も風切り音とともに、無月の身体に鋭い痛みが走る。

防ぐ方法も判らず、あっという間に身体中が傷だらけになってしまった。

「なかなかしぶとい野郎だな……」

「お、まえ……」

ゼイゼイと肩で息をする無月の前に、緑色の巨体が姿を現す。

「この俺様を前にたった一匹で挑んできたのが間違いだっただな！ さあ、これで終わりだぜえ！」

そう言って銃剣を突きつけてきた。

この時になって、無月はようやく気付いた。

先ほど感じた鋭い痛み。あれはルエルの持つ銃剣から繰り出された弾丸だ。砂嵐の中に姿を隠し、死角から敵を仕留めるスナイパー……。

それが、ルエルが『砂塵の射手』の異名で呼ばれる理由。絶体絶命の無月。得意の守りも砂嵐の暗幕に翻弄されて真価を發揮できない。力の差は歴然だった。

しかし

「くっ……………」

無月は痛む身体に鞭打って、なんとか態勢を整える。

無月はまだあきらめていなかった！

この状況でルエルの力を凌ぐ力をする方法。それを無月は知っていた。

しかし、それは守護者が決して使ってはならないという禁忌の技。

“守りを捨て、防御の力を攻撃の力に変換する技”だ。

この技を使うということは、守護者の禁忌を“破る”ということ。だが、無月に迷いはなかった。誓ったのだ。どんな手段を使っても守り通すと！

「我願う、定められし力を覆せ！ “パワートリック”！！！」

「な、なんだ！？」

無月が叫んだ瞬間、紫色の輝きが無月を包んだ

一方、ガラン達の手当てを済ませたヒナタ達は、心配そうな表情を浮かべながら目の前で繰り広げられる戦いを見守っていた。…いや、

正確にはルエルの生み出した砂嵐によって、戦いの様子はわからないのだが。

「無月さん、大丈夫かしら？」

「見えなくなっただけからだいぶ経つよね……」

見えなくなっただけ、というのは、途中からルエルの砂嵐によって二匹の姿が見えなくなってしまったのだ。

「心配ありません。無月様はそんなにヤワじゃない。」

そういって長は、さっきからやたらとソワソワしていて、一番心配そうな顔をしていた。

「でも、相手は四天王だよ？やっぱり無茶だったんじゃない……」

そう、相手は四天王の一匹。無月の実力が高くても、相手はその上をいくかもしれない。そう考えるとぞつとした。と、その時

「う、うん……」

「あ、気が付いた！」

気絶していたガラン、アラン、スカイの三匹が目を覚ました。

「う……うんは……」

まだ意識がはっきりしていないのか、キョロキョロと辺りを見回し

ている。
やがてその視線がヒナタ達を見つけると、バツと勢い良く飛び付いてきた。

「大丈夫だったかルナちゃん!!?」

「怪我とかしてないか!？」

スカイはルナに、そしてガランは私に、それぞれ自分が守った相手に早口で聞いた。

本当に飛び付いたスカイと違って、ガランはちゃんと私のことを考えて目の前で止まってくれたので、ルナの時のように潰される事はなかった。

ちなみにスカイは、その後ルナにげんこつをもらったのは言うまでもない。

「……………で、今はどういう状況なんだ？」

ただ一匹冷静だったアランが問う。

「そついや、何でここに長がいるんだ？」

「それにあの砂嵐はなんなんだ？」

「説明を願う。」

三匹の真剣な視線は自然と長に集まる。スカイの頭にできたたんこぶに私は少し笑ってしまったが、長は気にすることなくここに至るまでの経緯を話した。

もっとも、長が知っているのはここに到着してからのことだけなの

で、私達も補足を入れたが。

「……ってことは、あいつは今一匹で戦っているということか!？」

「そうなりますね。」

「あのバカ! かつこつけやがって!!」

スカイが憎らしげに眼の前の砂嵐の壁を見る。

「相手は四天王だぞ! たった一匹で勝てるわけねえじゃねえか! 無謀にもほどがあるだろ!!」

無謀。今の無月にはぴったりの言葉だ。ルエルは四天王の中でリヒトに次いで強い。そんな相手にたった一匹で挑むなど、まさに無謀だった。

「とにかく早く助けねえと! 無月が殺されちまう!!」

「落ち着いてください!!」

砂嵐に突進しようとするガランに長が待ったをかける。焦った様子のガランに対し、長は冷静だった。

「この砂嵐の壁は、砂弾と同じ性質をもっているのですよ? そんな壁に突っ込んだら、ただでは済みません。」

「じゃあ何か!?! このまま黙って見てるって言うのか!?!?」

「そうは言ってません! ただ冷静になってくださいと言っているの

です！」

「ガラン、よせ。長をよく見る。」

「え？……！」

アランの言葉にガランは長を観察する。長は触手に力を込め、鋭い眼光でガランの後ろ　砂嵐の壁を見ていた。頭に付いている赤い球体がきらりときらめく。

一番助けに行きたいのは、長だった。

気まずい沈黙が流れる。辺りには、砂嵐の音が響いていた。だが、その次の瞬間

「！？みんな伏せて！！」

何かを感じ取ったらしいルナの言葉にその身を地面に伏せた直後、轟音と共に砂嵐の壁が吹き飛ばされた。まき散らされた砂は一瞬太陽を覆い隠し、トレジャータウンを覆うように降り注いだ。

「な、なんだ…？」

「いったい何が起こったの？」

強風とともに吹き飛ばされてくる砂に目を細めながら、私は先ほどまで砂嵐があった場所を見た。

そこにいたのは、驚いた表情でたたずむルエルと、紫色のオーラを纏いながらルエルをにらみつける無月の姿だった

“パワートリック”。それは防御の力を攻撃の力へと変換する技。守りを捨てた一撃必殺の諸刃の剣だ。

過ぎたる力の代償は喪失。破壊の力では何も守ることはできない。それが、代々の一族の教えであり、この技が“禁忌”といわれる理由だ。無月は一度自分の体を見つめると、その視線をゆっくりと目の前の敵　ルエルへと向ける。

今の僕の花なら、あいつを倒すことができる。　みんなを守ることもができる！

傷ついた体が痛む。相当久し振りだが、ちゃんと体は付いてきてくれるだろうか？

無月は両の触手をルエルに向け

「ストーンエッジ」！

「ぐう…！？」

鋭利に尖った岩がルエルを襲う。ルエルは苦痛の呻きをあげた。

「（な、なんだこの威力…。尋常じゃねえ…。）」

岩タイプを持つルエルにとって、同じく岩タイプの技であるストーンエッジは効果が薄いはずなのに、体には抉られたような傷ができている。その傷が、先ほどの“ストーンエッジ”の威力を物語っていた。

怯むルエルに無月はさらに追い打ちをかける。

「“毒突き”！」

「そう何度も食らってたまるか！砂弾！」

「くっ！」

無月は接近するのを止めとっさに守るが、砂の弾丸はそれを打ち破り無月の首をかすった。

“パワートリック”状態のため、極端に防御力が低下しているのだ。当然守るの防御力も落ちる。

無月の桁違いの攻撃力に一時は焦ったルエルだったが、先ほどの無月の様子を見てにやりと口端を吊り上げる。

「どうやらいろいろと欠点があるようだな？その力。」

「守るを抜いたくらいでいい気になるなよ。」

「その減らず口、いつまでもつかない？」

そう言つてその手に持つ銃剣から弾丸を連続で繰り出す。無月は先ほどよりも強固な守るを展開するが、連続でぶつかる弾丸にだんだんと亀裂が入っていく。

もう、限界……かも……

守るの耐久力の限界を感じ、無月は目の前に迫る死を感じた。と、その時

「封！！」

「葉っぱカッター！」

「火炎放射！」

「バブル光線！！」

「竜巻!!」

「悪の波動!!」

「サイケ光線。」

目の前に迫る弾丸が急にスピードを落としたと思うと、直後に背後からの攻撃ですべてが撃ち落とし、さらにルエルにもダメージを与える。無月しか眼中になかったルエルは、突然の攻撃にひるんだ。突然の事態に驚いて振り返ると、そこには守るべき仲間の姿

「大丈夫か、無月!?!」

その中でも、真っ先に無月の元に駆け寄り声をかけたのは、悪友とも呼べる存在のガランだった。

ガランの後に続き、長やスカイ、私達も無月のそばに駆け寄る。

「う、うん…平気だけど……」

「こんな怪我して何が平気だ!?!ボロボロじゃねえか!?!」

体中に何かが掠った様な跡があり、殻に至ってはひびが入っている。とても強固なその殻にひびを入れるほどの攻撃。そんな攻撃を食らって、平気なほうがおかしい。

私は無月の傷の具合をみると、素早く指示を出した。

「長さん、傷の手当をお願いします。ルナは手当てをする間攻撃を防いで。スカイさん、ガランさん、アランさん、そしてカズキと私は、あいつを　ルエルを倒すわよ!」

『おう！』

みんなは頷くと、それぞれの役割を果たすべく行動を開始した。

「……どうして？」

「ん？」

「どうして…手を出したの？」

無月は長に向かって少し怒ったような口調で言った。

「あいつは僕だけでやるって言ったのに、どうして手を出したのさ？僕だけじゃ勝てないと思ったから？大口叩いた割には全然歯が立たなかったから呆れたの？」

「……………」

「…ねえ、答えてよ。」

無月の声がわずかに震えた。その怒りの矛先は仲間ではなく、自分に向けられたのもだった。

「……確かに、無月様一匹では不安でした。相手は四天王の一角。下手をすれば、無月様が殺されてしまうのではないかと胸が締め付けられる思いでした。」

長はオレンの実の果汁で傷を消毒しながら、顔をしかめる。
一呼吸おいて、長は続ける。

「無月様の考えは、確かに皆の安全を第一に考えておられます。ですが、それで無月様に何かあったら　ワタシ達は一生後悔することになる。肉体的には守っていますが、精神的にはズタボロにされているのです。」

「……………」

「皆を守り、自分も助かるのが、本当の意味で“守る”ということだとワタシは思います。」

「一匹で背負うのではなく、みんなで協力する。そう考えたら、助けずにはられませんでしたよ。」

長は傷をしっかりと包帯で巻くと、ルエルと闘っている五匹に視線を向けた。

「それでは、ワタシも戦闘に参加したいと思います。無月様は」

「待てよ。」

長の言葉を遮って無月は長を引き留めた。再び無月を見る長は無月は

「あいつは僕がやる。けど、次はちゃんと協力して、ね。」

「……………勿論です、無月様。」

長は微笑むと、無月を頭の上に乗せた。無月の定位置だ。

「みんな、集まって！」

僕はもう一匹じゃない。みんなの力であいつを倒すんだ。
僕は今度こそ、みんなを守る！

第四十五話：VS砂塵の射手（後書き）

久しぶりの投稿のうえに、かなりグダグダになってしまいました（汗）

無月

「何だか凄く散々な目にあってる気がするのは気のせいじゃないよねえ？」

今回はルエルの強さを伝えるためにちょっと劣勢になってもらいました。

次回、無月の反撃が始まります。

お楽しみに！

第四十六話：結束の力（前書き）

第四十六話完成です。

第四十六話：結束の力

無月を長に任せた私達は協力してルエルと闘っていた。

……でも、闘ってるうちに私達六匹の力でもルエルを打ち倒すことはできないことに、私は薄々ながら気づき始めた。

私とカズキ、そして、ガランさんとアランさんとスカイさん。この五匹でルエルの周りを五角形の形で取り囲み、その後ろでルナが防御に徹している。

「スナイフ・ショット
狙い撃ち！」

「ッ!？」

「封、禁！」

しかし、そんな圧倒的不利な状況でもルエルは強かった。

私を狙った弾丸はルナの力によって速度を失い、不可視の壁で弾かれる。しかし、それができるのは一発のみで、連射される他の弾丸は紙一重で避けるしかない。

その隙をついて、カズキとスカイが火炎放射を繰り出す、瞬時に発生させた砂嵐によってその攻撃は阻まれる。

弾切れを知らない銃に何物も通さない砂嵐。私達はルエルに傷一つ付けられずにいた。単体で攻め込んだら一瞬で終わってしまうだろう。この陣形をもってやつと互角だ。

「これが……四天王の実力……」

認めざるを得なかった。私達六匹でやつと互角……いや、もしかしたらまだ本気ではないかもしれない。

このままでは負けてしまう。早く作戦を立てないと……
と、その時

「みんな、集まって！」

戦闘中の私達にもよく聞こえる声が聞こえた。振り返れば、そこには体中に包帯を巻いた姿の無月が呼びかけているのが見て取れた。無月の体からは今でも紫色の光が迸っており、失礼ながら少し不気味に思った。

「どうした、無月？」

「僕に考えがある！みんな力を貸して！」

私はその言葉を聞いて一瞬だけ動きを止めた。
やっと、協力して戦うことの意味に気付いたようね……。
そんな気持ちに心がよぎった。一人で戦うことほど、孤独なことはない。

「考え？」

「あいつの砂嵐は相当な防御能力を持つてる。並大抵の力じゃ敗れないよ。それに敗れたとしても、あいつ自身の防御力も高いから、正面から行っても勝ち目はない。」

今はルエルと戦闘中のため、私は後衛にいたルナにルエルを任せ、無月の話を聞いた。

確かに、正面から行っても倒せない。しかし、隙をついたとしても瞬時に展開される砂嵐によって攻撃は阻まれてしまう。それすらも掻い潜らなければならぬとなると、ルエルを倒すには一撃で大き

なダメージを与えるしかない。

「今の僕なら、あいつを吹っ飛ばすだけの力はある。けど、僕のスピードじゃあいつには追いつけない。

僕が一撃をくらわせるためには、あいつの動きを遅くするか、あるいは止めるか。……あいにく“駿足のタネ”はもうないからね。

ヒナタ。作戦を任せたいんだけど、やれるか？」

「……ええ。もちろん！」

「サンキュー！」

無月さんが協力を求めてるならば、断る理由なんてない。

さて、ルエルの動きを止める方法か……。ルエルのスピードはバンギラスにしてはとても速い。こちらも付いていくのがやっとの状態だ。

ルエルがこちらを狙ってるとき、あるいはこちらが攻撃を仕掛けた時は一瞬だけ止まってくれるけど、砂嵐で防がれる上にそんな短い時間では無月は間に合わないだろう。ツボツボにしては速いが、短すぎる。

ウサギとカメほどのスピード差があるこの状況で、どうすれば攻撃を通せるだろうか？

「（いや、ちょっと待ってよ……？）」

スピード差を埋めるためのアイテムや技はこの場にはない。だけど、そのスピードを逆転できるとしたら

私はすぐに行動を起こした。

「アランさん、こちらに来られますか？」

「……援護を頼む。」

「了解。」

アランはルエルの攻撃を掻い潜ってこちらに向かってくる。抜けたアランの代わりとして長が陣形に加わった。

「アランさん。確認したいことがあります。」

「なんだ？」

私はアランさんに顔を近づけ、あることを聞いた。それを聞いたアランは無表情の顔をぴくりと動かした。

「どうですか？」

「使える。広範囲にはできないが、大丈夫だ。」

それを聞いた私はにやりと笑った。これなら、行ける！

「作戦開始！みんな指示通りに動いて！」

私の声に反応して、みんなは一瞬こっちを見ると小さく頷いた。よしっ！まずは

「ガランさん、スカイさんは前衛で攻撃をお願いします！カズキは援護に回って！」

「わかった！」

「おう！」

「まかせて！」

スカイは風を体にまとわせ空から、ガランは地上から攻撃を繰り出す。

「ちつ、何を考えてるかしらねえが、オレに攻撃は無意味だぜえ！」

ルエルは銃を下ろし、守りに専念する。ルエルを囲う様に作りだされた砂の壁は、ガラン達の攻撃をすべて防いだ。ルエルはにやりと笑った。

しかし、すでに次の手は考えてある！

「カズキ、日本晴れを！」

「うん！日本晴れ！」

カズキの日本晴れにより、砂が舞っていた空が明るくなってくる。それと同時に

「なっ！？」

ルエルを囲っていた砂の壁も消えてしまった。

砂嵐によって作り出された砂の壁。やはり天気を変えれば打ち消されるようね！

読みが当たったことに心の中でほくそ笑む。だけど、ここからが肝心

「アランさん、無月さん。準備はいいですか？」

「大丈夫だ。」

「いつでも行けるよ！」

二匹の確認を得て、私は日の光を吸収する。そして

「ソーラービーム!!！」

日差しが強いおかげで瞬時に繰り出されたソーラービームはルエルに一直線。

当然ルエルは防ごうとするが、それよりも前に

「トリックルーム。」

アランの口から静かに発せられた言葉を合図に、この周辺の空間が灰色に染まり、歪んでいく。

それに合わせて、防御しようとしていたルエルの動きが急に鈍くなり攻撃が直撃する。

「ぐあッ!!!？」

岩タイプを持つルエルにとって草タイプのソーラービームはかなり効果があったようだ。

倒れこそしなかったが、足はふらついていて立っているのもつらそうだった。

“トリックルーム”。それは周りの空間を歪め、素早さの遅い者は速く。速い者は遅くなるという不思議な空間を作り出す技。

つまり、この中でもかなり速い部類に入るルエルは行動が遅くなっ

たというわけだ。そして、逆に行動が速くなった者　無月が、ルエルにとどめをさす。

「最大パワーで行くよ！！毒突き！！！」

目にも止まらぬスピードでルエルに向かっていく無月。その攻撃は、パワートリックの効果で最大限に引き出されている。

行動が遅くなっているルエルは防御するのは無理だと判断したのか、手に持った銃で発砲してくる。だが

「バリアー！」

「縛！」

長のバリアーによって弾丸は弾かれ、さらにルナがルエルを拘束する。

もう反撃はできない！

「や、やめろー！ー！ツ！ー！！！」

ルエルの叫び。だが、そんな叫びはドスツ、という鈍い音と共に途切れた。

無月の渾身の一撃がルエルの腹にめり込み、ミシミシと嫌な音をたてる。

「ぐほッ……があッ……あ……」

ここで気を失わないあたり、さすが四天王というべきだろう。もっとも、骨の二、三本はいったかもしれないが。

「しぶとい奴…だね……」

ルエルから一步後退した無月はその場にへたり込む。無月を包む紫色のオーラが消えたことから、パワートリックの効果が切れたのだろう。反動からか、とてもつらそうだった。

「てめ……絶対、ころす……」

腹を押さえながらも銃を向けるルエルに私達はとっさに身構える。と、その時

「胡蝶の参…“空間断絶”。」

パリーーン！！

何かが碎ける音とともに灰色の空間に亀裂が奔り、碎けた。

そして、それをやったであろう黒いマントを纏ったポケモン　リヒトはルエルの前に静かに降り立つ。その手には、薄いピンク色に輝く二本の剣が握られていた。

リヒトは、突然の登場に驚く私達を確認すると、視線を私達に向けたままルエルに話しかけた。

「ここはいったん引け、ルエル。」

「リヒト……てめ、何言っ……」

「引けと言っている。今の貴様では奴らには勝てない。」

「ぶざけんじゃ……ッ！？」

反論しようとするルエルをリヒトは一睨みで黙らせた。

リヒトは未来でディアルガにやったのと同じように薄紫色の球体でルエルを包み、別の場所へとワープさせた。

何度見ても凄い……。これも簡単にポケモンを消せるものなのか？

「さて……」

リヒトは胡蝶をマントの中にしまうと改めて私達のほうを見る。

予期せぬ強敵の登場。シエイド、ルエルとの戦いに続いて、四天王最強のリヒト。連戦でポロボロの状態の今の状態ではリヒトに勝つことは不可能だ。1パーセントの望みもない、まったくもって不可・能だ！

もしもリヒトが私達を殺す気ならば、一分と経たないうちに全滅するだろう。私の心は絶望に包まれた。

「……………」

と、そんな私の心配などよそにリヒトはじつと私達のほうを見つめている。……いや、私達ではなく、その後ろ　すっかり荒れ果ててしまったトレジャータウンを見ていたのだ。その行動の意図が分からず、私達はただリヒトを見つめるしかなかった。

「……………来たか。」

しばらくして、リヒトがようやく言葉を発した。

来た？誰が？

私は釣られてリヒトのしているほうを見る。そこにいたのは

「お久しぶりですね、皆さん。」

全身を薄い青色の体毛が覆い、背中からは四枚の翼が生え、さらに尻尾は二本に枝分かれしている。

吸い込まれそうな深い蒼色の瞳を向け穏やかな口調で話すポケモン。

『ウイン!!!?』

日本晴れの効果が切れ、すっかり暗くなつた空に私達の声が響いた。

第四十六話：結束の力（後書き）

ようやく決着がつきました。長かったあ……

無月

「結局倒し切れなかったけどね。それより最後のは!?!」

ようやく合流したウインです。はたしてこれからどうなるのでしょ
うか（笑）

無月

「気持ち悪い笑いやめなよ……。」

失礼しました。
それでは

第四十七話・リヒトの正体（前書き）

第四十七話完成です。

第四十七話：リヒトの正体

リヒト。そしてウイン。立て続けに登場した二匹に私は終始驚きっぱなしだった。

それに、ウインのあの姿は何？ウインドモードにしては羽が四枚だし、尻尾も二つに分かれている。いったい何があったのだろうか……

「……その様子だと、だいぶ使いこなせてきたようだな。」

リヒトはウインを品定めするように見たあと、静かに口を開いた。抑揚のない声だが、ほんのわずか笑いが漏れていた。その様子に、ウインは笑顔で答える。

「ええ。これもあなたのおかげです。ありがとうございます。」

「礼を言われる覚えはない。おれが勝手にやったことだ。」

どうやらウインとリヒトの間で何かがあったらしい。その正体が気になっていた私は、知らずのうちにウインに問いかけていた。

「これは、どういうことなの？」

「ええ、実はですね……」

私の問いかけに対し、ウインは未来世界で起こったことを説明した。

……

……

…

「リヒトは始めからヒナタさんを殺す気なんてなかったんです。僕を助けたのも、すべて……あなたを守るためだったんですよ。」

これは推測にすぎないが、リヒトがヒナタを守るために動いていたのは明らかだ。だからこそ、僕の力を解放させた

「そう、なんだ……。」

信じられない話だが、認めざるを得ない。リヒトに初めて会った時、リヒトはウイン以外はすべて見逃してくれた。それに結果としてウインも殺してはいない。ルナティックの目的はウインや私達全員の抹殺のほすなのに、リヒトはそれをしていない。未来世界から戻るときに聞いた「絶対に死ぬなよ」という言葉。あれは、リヒトのものだったんだ。

「……勝手に話を進めているようだが。」

と、今まで私達の様子を黙殺していたリヒトが口を開いた。

「真実がどうであれ、表面上は敵同士。おれは貴様らを抹殺しなければならぬ。」

表面上……。つまり、本質的には味方してくれるということ。やはりこの読みは正しかった。

「……なあ、リヒト。俺らの側につくって選択肢はないのか？」

ためらいがちに聞いたのはスカイ。スカイにとってリヒトはかけがえのない親友。できることなら、ずっと一緒にいたいと思っている。

だが、リヒトはルナティックを抜けるという選択はしなかった。

「……おれは四天王の一角だ。もし裏切れば、他の四天王や幹部達が総出でおれを抹殺しにくるだろう。そうなれば、ヒナタの身が危険に晒される可能性が高まる。だから、おれはそっち側にはつけない。」

これはリヒトなりに考え抜いた答え。完全にルナティックを敵に回して裏切るよりも、内部から密かにフォローするほうがより安全となる。

「……そっか。残念だな。」

「おれと貴様らは敵と味方の関係だ。相反する者同士、手を取り合うことはできない。」

「でもさ、そう言ってる割にはだいぶ協力してくれてる気がするけど?」

と、無月が会話に割り込んできた。リヒトは無月のほうを向く。

「表面上は敵。でもやってることはその敵を裏切る行為。結局お前は敵なの?それとも味方なの?」

「……………」

リヒトは答えない。いや、答えられないのだ。

リヒトにとって、敵か味方かなどさして重要なことではない。故にそんなことは考えたこともなかった。

おれは……敵なのか？

おれは……味方なのか？

「そもそも、マントで正体を隠してこそそやつてる奴を信じることなんて僕にはできないよ。たとえお前が味方でもね。」

「無月様！そのような発言は……」

「わかった。」

長がみなまで言う前にリヒトは口を開いた。

おれは敵なのか味方なのかの判断はつかない。だが、おれはこいつらの味方でありたいと思う。だから

「無月。貴様はおれの正体さえわかれば、おれを認めてくれるのだろうか？　ならば、見せてやろう。おれの正体をな。」

リヒトはかぶっていたフードの端を掴むと、それをゆっくりと持ち上げた。

深くかぶっていたフードに隠れていたリヒトの素顔が露わになる。

『！？』

その場にいた全員が驚愕の表情を浮かべた。

黄色い体毛に覆われ、ピンと尖った先が黒い耳。頬つぺたにある赤い電気袋。ぴよんと跳ねた前髪が風に揺れ、閉じられた右目には何かに切り裂かれたような傷がある。

小柄な体に似あわない威圧感を醸し出しているが、その種族ははっきりとわかる。

「ピカチユウ……？」

振り絞るように言葉を紡ぐカズキ。
そう、その正体はねずみポケモン　ピカチュウだった。

「……これで、いいのだろうか?」

「あ、あ……」

驚きのあまり言葉が出ない。あのヨノワールとヤミラミ達を一瞬で倒し、ウインですら勝てなかったあのリヒトの正体が、まさかピカチュウだなんて夢にも思わなかったから。四天王最強というくらいだから、ものすごいのを想像していたけど……
誰も答えないのを見てリヒトはため息をつく。

「ウイン。」

「……はっ! な、なんですか?」

リヒトの言葉に我に返るウイン。リヒトは真剣な顔をしていた。

「貴様のその力。多用はするなよ。」

「えっ?」

「その力は貴様の思っている以上に身体に大きな負担をかける。長時間使用すれば、命すら危うくなる。」

「ッ! ?」

リヒトの宣告にウインはごくりと唾を飲み込んだ。

この力がそれほど強大なものとは思っていなかったから

「貴様は“楯”だ。そう簡単に死んでもらっては、わざわざ貴様の力を解放させた意味がなくなるからな。使い方には気をつける？」

「わ、わかりました……」

鋭く睨みつけてくるリヒトにウインは少したじろきながらも頷いた。リヒトはそれを見たあと、おもむろに私の前に歩み寄ると、耳元で囁いた。

「おれが裏切り行為をしていることはいずればれる。おれが殺されるのも時間の問題だろう。」

「ッ!？」

私は何か言おうとしたが、それよりも早く

「……死ぬなよ。ヒナタ。」

リヒトはそう言うと、薄いピンク色に輝く剣　胡蝶を取り出し、自らの体を薄紫色の球体で包んだ。

そして次の瞬間には、その場からいなくなっていた。

第四十八話：リヒトの苦悩 非情な四天王達（前書き）

第四十八話完成です。

第四十八話：リヒトの苦悩 非情な四天王達

どんよりとした空。夜でもないのに地上に暗い影を落とす空は、黒を基調とした建物群をさらに黒く染め上げる。建物にところどころ奔るラインから放たれる鈍い黄色の光が、黒に染まったこの場所

ダークシティの唯一の光源だった。

そんなダークシティの中でも最も大きな建物。天にも届きそうな高いビルの前に、突如薄紫色の光が現れた。一瞬強い光を放つが、それはだんだんと薄れていき、一匹のポケモンを残して消えた。

「ふう……………」

そのポケモン リヒトは小さなため息をつく、手にしていた剣をしまう。

ヒナタ達の前では平静を装っていたが、時間や空間を移動するのは相当な力が必要となる。見た目以上に疲弊しているのだ。

「遅かったっすね、リヒト先輩。」

と、少年のような声が聞こえた。振り返ってみれば、ビルの中から一匹のポケモンが歩み寄ってきた。ベージュ色の毛色にツンと尖った鼻。そして後ろで揺れる二本の尻尾。フローゼルというポケモンだ。

「レインか。何の用だ？」

「何の用？もうわかってると思ってたんすけどねえ。」

少し高い少年のような声色で喋りながら静かに歩み寄るレイン。

その軽い口調につい余裕を見せてしまいそうになるが、油断してはいけない。レインの目的はおそらく

「さっきのやり取りは全て見てたっスよ。随分とあのフシギダネに肩入れしてるみたいっスねえ。」

やはり、そういうことか。もうおれの裏切りはバレているらしい。

「スカイヤガラン達の裏切りを黙認していたのは……まあ、いいとして。さすがに今回の件は完全な裏切り行為とみなさなければならないうっス。」

「……………」

「殺すことはおろか、ウインに力を与えたり、ルエルの殺しを邪魔したり……。さすがに無視できないレベルっスね。」

レインの怒気をはらんだ声に周囲の空気がざわめいた。そしてそれは、徐々に殺気へと変わっていく。そしてそれリヒトは左手を腰に据え、慎重に言葉を返す。

「だったらどうする。この場でおれを殺すか？」

「いや。そんなことはしないっス。」

思っていた答えと違う反応にわずかに表情を変える。あれだけの殺気を放っておいて、てっきりおれを抹殺するためにここに来たのかと思っていたが……

レインは構わず続ける。

「ここであなたと闘っても、四天王最強の實力を持つあなたに、言いたかないけど四天王最弱のこのオレが勝てるわけないっすからね。それに、あなたには完全に組織を裏切られると困るんでね。」

「だったらどうする?」

「取引に応じてもらっす。」

「……取引?」

いつものことだが、こいつの考えは読みづらい。ここは様子を見るか

リヒトが黙ったところで、レインは取引の説明をし始めた。

「まず、あなたの裏切り行為を知ってるのはオレだけっす。もちろんボスに報告するつもりっすけどね。」

ボスにこのことが知れたら間違いなく処刑っすけど、オレはあなたを殺したいわけじゃない。」

そこでオレは一つの提案をしたい。」

「なんだ?」

「オレはあなたのことをボスに報告しない。その代り、これ以上裏切ることはしないでほしいっす。」

なるほど、そういうことか。

オレが唯一勝てない相手。それはルナティックのボス　アルテルだ。つまり簡単にいえば、死にたくなければもう裏切るなどいうわけか。……せこい真似を。」

「さあ、答えはなんスか？できればいい返事を期待したいんスけど？」

ここで否と答え、裏切るのは簡単だ。この秘密を知るのがレインだけとわかった今、この場でレインを殺せば秘密を知る者はいなくなる。……だがそれは、ルナティックを完全に裏切ることになる。それだけは避けたい。

四天王が裏切ったとなれば、ボスが直々に動いてもおかしくはない。そうなれば、ヒナタが確実に危険な目に遭ってしまう……。今組織を裏切るわけにはいかない！

「……わかった。その取引、のんでやる。」

「物分かりがよくて助かるっス。ふう……」

心底ほっとした様子のレイン。見た目より緊張していたらしい。ずっと怖い顔をしていた表情が笑顔に変わった。

「じゃあ、ボスに報告に行っていっスよ。オレのほうから時間とっておいて何ですけど。」

「ああ。では……」

「あ、ちょっと待った！」

その場から立ち去ろうとするリヒトをレインが引き止める。まだなにかあるのか、と不満げな顔を向けるリヒトだが、レインの表情を見て背筋に氷塊が滑り下りたかのような錯覚を覚えた。

「その恰好じゃ、ちよつと不自然っスねえ。」

「なん、だと……？」

先ほどとは打って変わって低い声で威嚇するように言うレインにわずかにたじろくりヒト。

笑顔は狂気じみたものに変わり、釣り上った口端から鋭い牙が顔を見せる。まるで別人だった。

「だって、四天王のルエルがああ傷つスよ？いくらあんだでも無傷で対面っていうのは、さすがに怪しまれるんじゃないんすか？」

確かに戦闘を行わなかったりヒトの体には傷一つ付いていなかった。戦う気がなかったのだから当然である。

しかし、あの状況で戦わなかったというのは組織からしてみれば不自然。つまり、ボスに会うには戦った痕跡を付ける必要がある。と、レインはそう言いたいんだろう。

リヒトは戦慄を覚えた。ここにはいけない。早くこの場から離れると頭の中で警鐘が鳴っている。しかし、時すでに遅しだった。

「オレに任せて下さいよ、リヒト先輩。すぐにズタボロにしてあげますから。」

数瞬後、レインの狂気に満ちた笑いとともにリヒトの断末魔が上がった。

ダークシティを見下ろすように聳え立つ城。ルナティックの本拠地であるこの城の一角で轟音が鳴り響いた。

「くそっ!!」

粉碎された壁を前にそう叫ぶのはバンギラス　ルエルだ。
ルエルはまだ怒りが収まらないのか、手当たりしだいに部屋を破壊していく。どうやら轟音の正体はこれのようだ。

「ああ忌々しい!ああ憎たらしい!!」

ルエルの後ろには、止めに入ったのだろうか?たっくさんのポケモンが山になっている。皆気絶しているが。
そんな城を全壊させる勢いで暴れるルエルの背後にふっと現れる影。その気配にルエルの動きが止まった。

「シエイドか。何しに来やがった?」

「ルエル様……」

現れたのはルエルの腹心であるムウマージ　シエイドだった。
ルエルの怒号に体が竦んだのか、一瞬体が透けて気配が弱まる。しかし、シエイドは勇気を振り絞り、ルエルに声をかけた。

「ルエル様。ほんの一時お静まり下さい。伝えたいことがあるのです。」

「なんだ?言いたいことがあるならさっさと言え!」

「はい。では……」

シエイドは恐怖を堪え、ルエルの耳元で自分が見聞きしたことを伝えた。

最初はぶすつとした顔のルエルだったが、シエイドの話を聞いていくうちに顔色がどんどん変わっていく。

「……おい貴様。その情報は確かなんだろうな？冗談なんて言ったらぶつ殺すぞ！」

「確かな情報です。私がこの目と耳でしかと見聞きしたのですから。」

シエイドの伝えたことは他でもない。リヒトの裏切りについてだ。ルエルによって気絶させられ、気配の薄れていたシエイドは、ルエルの登場によってその存在感をかき消され、誰一人としてシエイドに気づく者はいなかった。

そうとは知らず乱入してきたリヒトは、ルエルを強制送還した後ヒナタ達に素顔を見せ、さらにヒナタをかばうような発言。シエイドは悟った。

リヒトはルナティックを裏切っている、と。

「いかがいたしますか？やはりアルテル様に報告しますか？」

「いや、待て。これはもしかするとチャンスか？」

ルエルは口に手を当てて考える。

リヒトの野郎は前からぶつ殺してやりてえと思ってたし、オレがりヒトの裏切りを暴き奴を抹殺すれば、ボスにも褒められ、さらにオレが四天王最強となる。こんなうまい話はない……。

「あの、ルエル様……?」

「よし！貴様に名誉挽回のチャンスをくれやる。もちろん協力するよなあ?」

ルエルの鬼のような形相について頷いてしまっシェイド。それを満足げに見届けると、くつくつと笑い始めた。

「リヒト。てめえをぶっ殺してオレは最強になってやる！せいぜい今のうちに残り少ない人生を楽しむがいい。」

笑い声がだんだん大きくなっていく。やがてその声は城の外にまで轟いた。

そして、その声と誰かの断末魔が上がったのはほぼ同時だった。

「なにやら、下が騒がしいな?」

城の最上部。灰色一色に染められたに無機質な部屋に設けられた祭壇のような場所。

屋根はなく、真っ黒な空が顔をのぞかすそんな場所で、据えられた玉座に座っていたそのポケモンはゆっくりと呟いた。

「恐怖に身をすくませる悲鳴。狂気に満ちた笑い声。 今宵は宴でも催すのか?」

そのポケモン アルテルはゆっくりとした動作で立ち上がると、

祭壇を降り階段を降りて、街が見渡せる場所まで来た。

「そんな予定はないが……それも面白そうだな。」

と、そんなアルテルの背後に唐突に現れた一つの影。

漆黒の毛並みに赤い鬃。狐のような体躯で、赤い三つの爪を有する。鋭角の目蓋が開かれると、水色の双眸がアルテルを見つめた。幻影を自在に操るポケモン　ゾロアークだ。

「狂宴は大歓迎だ。美しい闇には、狂気に満ちた宴がふさわしい。」

「まあ、そんな暇はないだろうがな。ただでさえ忙しいのに。」

やれやれとため息をつきながらアルテルに背を向けて歩き出すゾロアーク。

もともと暗い場所だが、ゾロアークの周りはさらに闇が深かった。

「影。どこへいくのだ？」

「ちょっとラクシアとベルクを回収してくる。」

そう言うと、ゾロアークは闇に包まれ、その場から姿を消した。

あとに残されたアルテルは振り返ることもせず、生気のこもっていない瞳で街を見下ろす。

「光に毒された者など、もはや助ける余地などないが……宴の肴に^{なぶ}翔るのも一興、か？」

口端を吊り上げ、不敵に笑うアルテル。しかし、その笑いからは何の感情も見いだせなかった。

瞳は街を見ているというより、虚空に視線を彷徨わせているようだった。

「今宵の宴は、格別の断末魔が期待できそうだ。フッフツ。」

しばらくの間、城には無機質な笑い声が響いていた。

第四十八話：リヒトの苦悩 非情な四天王達（後書き）

本当はリヒトのくだりだけのつもりでしたが、あまりの少なさに急遽追加してしまいました（汗）
無理な展開なのはご容赦ください。

第四十九話：待ち望んだ再会（前書き）

第四十九話完成です。

第四十九話：待ち望んだ再会

リヒトが去り、静かになったトレジャータウン。その中心で私達はしばし茫然としていた。

先ほどまでの戦闘がまるで嘘のように静まり返ったその場所で、私はリヒトがいた場所を見つめながら彼のことを想う。

リヒトはルナティックにいたけど、私達を殺そうとはしなかった。

リヒトは私達に味方してくれている。ルナティックの中でもかなりの実力を持つリヒトが味方してくれるなど、これほど心強いことはない。

……心強いだけけれど

「（なんで……私なの？）」

私は最初、親友であるスカイのために私達に加勢してくれているんじゃないかと思っていた。でも、実際は違った。

ウインに力を与えたのだから、親友のスカイや仲間だったガラン達ではなく、私のためだった。会ったこともない見ず知らずの私のために、ルナティックを裏切ってまで……

私は彼のことを全く知らない。それとも、以前に会ったことがあるが、忘れていただけだろうか？

私は 彼の何なんだろう？

「 はっ！そ、そうだ！ウイン、早く元の姿にならないと危険だよ！」

と、素っ頓狂な声を上げたのはルナだった。それに呼応して、ウインもハツとなる。

「そ、そうですね。リヒトも言っていましたし……」

私はその様子をなにげなく眺めていた。その視線は、やがてウィンへと移る。

リヒトはウィンのことを私を守る楯だと言った。だから、わざわざ力を与えたのはわかるけど、どうやってあんな力を与えたんだろう？ 薄い蒼色の肢体に、背中からは蒼みがかかった白い四枚の翼。さらに尻尾は二つに枝分かれし、その瞳はいつもより深い蒼色。その姿はとても神秘的で、神々しさすら覚えるほどだ。

「ウィンドモード、解除。」

ウィンの周りを風が駆け抜ける。やがて風はウィンの体を包み込み、その姿を本来の姿に変えていく。

翼や尻尾は風に溶け、毛の色も蒼色から元の明るい茶色へと戻った。役目を終えた風は次第に霧散し、やがて完全にやんだ。

「うわっ……と。」

ウィンドモードをといた瞬間フラッとよろめくウィン。それを見て慌ててルナが体を支えた。

「大丈夫？」

「え、ええ……。ちょっと力が抜けただけです。」

そう言っつて笑顔を浮かべるが、その笑顔は明らかに無理をして作ったものだった。

私は一度しかウィンドモードを見たことがないけど、あの時は気絶しちゃったわよね。やっぱりリヒトのおかげでパワーアップしたっ

てことかしら？

「それにしてもウィン。なんでウィンドモードがあんな姿になったんだ？」

「それはたぶん、リヒトが僕に施した“リミットブレイク”が原因だと思います。」

スカイの問いかけに辛そうながらも答える。

深呼吸をして息を整えると、ウィンは自分の身に起こったことを詳しく話した。

……

……

…

「つまり、ウィンの中にはもともと“破壊の神”の力が眠っていて、リヒトはその力を解放させた。その影響でウィンドモードに変化が現れたわけだな？」

「そうなりますね。」

簡単に言うとききガランが言った通りだ。この、“破壊の神”って言うのがよくわからないけど、その力をウィンの言う“リミットブレイク”で解放したということ。

つまり、リヒトは力を与えたのではなく、力を呼び覚ましたというわけね。

「確かに力は強くなってるみたいだな。ウィン、お前どれくらいウィンドモードを発動させてたんだ？」

「えーと……未来からこの世界に帰ってきた後、レイさん達を助けた時からずつとあの姿でした。」

「通常のウィンドモードの限界時間を軽く超えてるな。」

アランの冷静な解析に驚きを隠せない。十分程度でも危険な状態になるのに、その距離なら最低でも一時間以上はウィンドモードを発動していたことになる。

それにもかかわらず、発動中は息切れしてた様子もなかったし、解除してもふらつく程度で済むのだから、やはり力は格段に上がっているわね。

……と、今はそれよりも　！

「レイさん達に会ったの!？」

「え？あ、はい。巨大岩石群の近くで偶然見つけました。」

確か長の話では、レイ達はジュプトルを救出するために動いていたはずだ。そのレイ達がそこにいるということとは

「それじゃあジュプトルは……？ジュプトルは無事なの!？」

「もちろんです。少々怪我をしていたので、回復させた後ラクシアとベルクを一掃してきました。」

よかった……無事だったのね。シェイドに言われた時は凄く心配したけど、生きてて良かった……。

思わず涙ぐんでしまう。記憶はないが、私は彼のパートナーだったのだ。無事でホントに良かった。

私の涙を見て大丈夫？と心配そうに見つめてくるカズキ。彼もまた、私の大切なパートナー！。

「そう言えばあいつらのこと忘れてたね。」

無月は傷ついた体を長に治療してもらいながら思い出したように言う。

「その状況ですと、少々危なかったようですね。」

「レイ達もたいしたことないんだねえ。……ま、今回は相手が悪かったのもあるだろうけど。」

無月はまだ治療中にもかかわらず立ち上がり、長の頭の上へと移動した。

「さて、ちょっと心配だから僕達はそっちに行くとするよ。長、行くぞ。」

「わかりました。では、皆さんお元気で。」

そう言ってさっさと行ってしまおう二匹。

そつえば、まだ助けてもらったお礼を言っていなかった。後で言わなくちゃ。

「それにしてもウィン。幹部二匹相手によく勝てたな？」

と、去っていく無月達を一瞥した後、スカイがウィンに問いかけた。

「僕も驚きでしたよ。レイ達が弱らせてくれていたおかげか、どち

「らも一撃で倒れてくれましたから。」

「マジかよ……」

スカイが冷や汗を垂らす。

ラクシア　私達がウインとルナに会った時に見たあのライボルト。ポケモンでありながら武器を持ち、電撃を纏ったナイフを操るルナティックの幹部。

そしてベルク。私は直接は会っていないけど、ルナを奇襲してきたポケモンだと聞いている。種族はサイドンだが、その背中には斧にも似た巨大な剣が背負われている。そして、ラクシアと同じくルナティックの幹部。

弱っていたとはいえ、この二匹を一撃で倒すということは、それこそ四天王に匹敵する力を持っているということだ。

「お前もどんどん強くなっていくなあ。なんで俺の周りの奴はこんなに強い奴ばかりなんだ？」

「……気づいてないと思うから言うが、お前も十分強い。」

「そうか？」

アランの冷静な突っ込みに首をかしげるスカイ。

ウインを除けばこの中で一番強いのはスカイだと思うのだ。リヒトの補佐役として、リヒトとともに様々なことを経験してきた強者なのだから。多分、そうだと思う。よく知らないけど。

そんな会話が流れ始め、だんだんいつもの雰囲気に戻り始めたときだった。

「ハイハイ……ひどい目に遭ったぜ……」

「ちょっとドゴーム！寝てないでさっさと起きなさいですわ！」

「うあ？もう朝か？」

トレジャータウンの入り口側で、突然湧き上がった声。

声だけでわかる。その懐かしい声の正体は

「ヘイガニ！キマワリ！ドゴーム！」

先立ってその名を呼ぶカズキ。先の戦闘での疲れなどまるでないかのようにみんなの下へと駆け出した。

それに続き、私も駆け出す。ずっと会いたかった仲間の下へ

「キヤー！カズキとヒナタですわ！！！」

「ヘイヘイ！！ホントだぜ！」

「お前達無事だったのか！！？」

驚きの表情を浮かべながら口々に言う三匹。そしてその表情は、しだいに喜びへと変わっていった。

「みんな……みんなあ……」

みんなに会えた喜びと安堵からか、次々と涙が流れてくる。

湧き上がってくる嗚咽を堪えるので精一杯のカズキに変わり、私は滲んできた視界のせいでよく見えない彼らに向かって一言だけ言った。

「ただいま……みんな……！」

思ったより声にならなかったが、想いは伝わっただろう。
その証拠に、彼らとはびつきりの笑顔でこう返してくれた。

『お帰りなさい。』

すっかり涙もろくなっていた私は、みんなの見ている中でカズキとともに声をあげて泣いた。

やっと……やっと帰ってこれた……！

明るくなってきた東の空。未来世界で失われてしまった太陽の輝き。夜の終わりを告げるその朝日は、私の心を優しく包み込んでくれた。

第四十九話：待ち望んだ再会（後書き）

やっとギルドメンバーと再会することができました。

おそらく、あの場に弟子達がいたことは忘れられていたのではないかと思います（笑） 忘れてた人

スカイ

「おいおい、しっかりしてくれよな。作者さんよお。」

すみませんでした。以後気をつけます。

それでは

第五十話：仲間の絆（前書き）

第五十話完成です。

第五十話：仲間の絆

太陽が徐々に水平線から顔を出し、朝の少し冷たい風が吹き抜けるトレジャータウン。

ルナティックとの激しい戦闘の末、感動の再会を果たした私達は、ウインやスカイ達と共にギルドへと向かった。

すっかり見る影をなくしてしまったトレジャータウンとは違い、高台に建っているギルドはほぼ無傷だった。

親方であるプクリンの姿を模した入り口はもちろん、色々なポケモンをかたどったトーテムポールや入り口の前にある見張り穴も何も変わっていない。

私は久しぶりに見るその光景に自然と顔がほころぶのを感じた。

とうとう……とうとう帰ってきたのだ。私達の帰る場所に

私は一度後ろを振り返る。カズキやウイン、そしてギルドの仲間達。九匹の視線は、優しく私を見つめていた。それは、私の背中を後押ししているように見えた。

「……さあ、ヒナタ。」

耐えきれなくなったのか、カズキが一步前に出て言う。

カズキが　そしてみんなが言わんとしていることは聞かずともわかってる。

私はコクン、と頷くと見張り穴の上に乗った。

「ポケモン発見！ポケモン発見！」

「ん？誰の足形だ？」

見張り穴の下から聞きなれた声が聞こえる。

よく通るその声は、顔を見ずとも驚いているのがわかるほど慌てた声に変わっていった。

「足形は……え、この足形は!？」

「お、おいデイクダ!? 穴を掘ってどこに行く!?!？」

もう一匹、慌てた声を上げるポケモン　ペラップに見張り番
デイクダは地上へと穴を掘り進めながらギルドにいるポケモン全員
に聞こえるような大きな声でその名を　私の名を告げる。

「足形は　足形はヒナタさんです!！」

「え」

「な……」

『なんだってー!?!?!??』

外にいてもよく聞こえる大音量で、みんなの驚愕の声が聞こえてきた。

思わずクスリと笑ってしまう。

「あ、やっぱりヒナタさんだ! それにカズキさんやウィンさんまで……!！」

ポコツ、と地面を盛り上げてデイクダが姿を現す。
そして、それと同時にドドドドッ! と地響きが鳴り響くと思つと、
入り口の鉄柵が開き、中からポケモン達が溢れだした。

「わあ！ほんとにヒナタさんです！」

「お前らよく無事でいてくれたな！心配したんだぞ！？」

「うう、よかったでゲス。ヒナタ達がいなの間、あっしは…あっしはあ……」

チリーン、ペラップ、ビツパ　ギルドの仲間達やトレジャータワーに住むポケモン達が一斉に出迎えてくれた。

「み、みんなあ……」

みんなの姿を見て、またしても涙腺が緩くなる。それはカズキも同様で、今にも泣きそうだった。

「ヒナタ。カズキ。それにウィン。」

泣いたり笑ったり、そんな騒がしかった場所がその声で一気に静まり返る。

声の主　プクリンはみんなの横を通り抜けて私達の肩に手を置いた。

「みんな、お帰り」

プクリンでも滅多に見せないような飛びっきりの笑顔に、私は一度涙をぬぐったあと声が震えないようにしっかりと言った。

「　　ただいま！」

その後、私達はギルドの中へと入り、現在地下二階で弟子達に囲まれている状況だ。

トレジャータウンに住むポケモン達は、タウンの様子を見てすぐに復興作業に取りかかった。

ヨマワル銀行やカクレオンのお店なども含め、すべてが瓦礫の山と化したトレジャータウンを見て落ち込むポケモンの多々いたが、それも短い時間で立ち直り復興作業を開始する辺り、ここに住むポケモン達はかなり順応性が高いことがわかる。

本来ならばギルドが率先して復興作業に取りかかるところだが、私達がそれを引き留めたのだ。

先の戦闘ですっかりタイムリングを逃しているが、言うなら今しかない。

ここに来た目的　それを伝えるために。

「それで、伝えたいことって言うのは？」

プクリンは首をかしげながら問いかけてくる。私は一度、私達を中心に円上に並ぶ弟子達を見渡すと口を開いた。

「実は　力を貸してほしいんです！」

私はすべてを話した。

未来世界での出来事。実はヨノワールは敵で、星の停止を食い止めるべく過去の世界にとんだジュプトルを消すために闇のディアルガが送り込んだ刺客であること。

このままでは星は停止してしまうこと。そしてそれを阻止するには、時の歯車がどうしても必要だと言うこと。

ディアルガの住む時限の塔は幻の大地と言う場所にあつて、そこに時の歯車を納めれば星の停止を食い止められること。そしてなにより、もう時間は残り少ないと言うこと。

私達は知つてのことすべてを嘘偽りなく話した。

正直不安だつた。今まで姿を消していたと思つたらひょっこり現れて、そしてみんなが信頼しているヨノワールが敵だのジユプトルは実はいい奴だの言つても信じる方がおかしい。

だけど、私はこの選択を後悔していない。みんななら、きっと信じてくれる！

『……………』

暫しの沈黙。その表情はみな困惑の色をしていた。重苦しい空気のなか、私はひたすら返答を待った。

「……………お前達。」

と、そんな静寂を破つたのは、プクリンの一番弟子であるペラップだつた。普段見せることのない神妙な面持ちでこちらを見ている。

「お前達……………」

「な、なんですか？」

とても真剣な声に自然と背筋が伸びる。

緊張した様子の私を見て、ペラップは私の肩に片翼を置くと呟くように言つた。

「早く寝な。」

「…………へ？」

思わず私の口から間抜けな声がこぼれる。

すると、さっきまでの神妙な顔つきが嘘のような笑顔でペラップは私の肩を翼でバシバシと叩いた。

「お前達、悪い夢でも見たんだろう。早く寝て疲れを取りな」

…………どうやらペラップは私達の話を全く信じていないようだ。

「ペラップ！僕達嘘なんて言っていないよ！？」

慌ててカズキが取り繕うがペラップは全く本気にせず、笑って私達を見ている。

「わかってるわかってる 大丈夫、一日寝れば治るから」

「ペラップ！！僕達ホントに…………」

それでも食い下がるカズキ。しかし、ついにペラップも苛立ちが募ったのか、怒鳴り声をあげた。

「お黙り！！」

ヨノワールさんが敵だなんて信じられるわけないだろ！」

「うつ…………。そりゃあ、僕だってすぐには信じられなかったけど…………でも…………」

確かに、カズキと同じようにヨノワールのことを強く尊敬していたペラップにとって、この話は信じがたいことだろう。他の弟子達も、

声には出さずともきつとそう思っているに違いない。

……やっぱり、信じてもらえないのかな。

顔が下を向いていく。気持ち沈んでいく。

話すべきじゃなかったのかな……

「ヒナタさん達が言っていることに嘘はありませんよ。」

と、沈んでいる私に手を差し出す者がいた。

それは、私達がしゃべっている間ずっと黙って見守っていたウインだった。

「ウイン、お前までそんなことを言うのかい!?!」

カズキに向けられていた怒りの矛先がウインへと向けられる。

もはや聞く耳持たず、何がなんでも信じないと言った感じのペラッ
プにウインは怯むことなく続けた。

「ヒナタさん達と同じように姿をくらませていた僕が言っても信憑性は低いでしょうが、ヒナタさん達は決して夢の話をしている訳ではありません!」

「うぐっ……」

ウインの迷いのないまっすぐな目で見つめられ、言葉を飲み込むペ
ラップ。

「わたしだって信じてるよ!ヒナタが嘘なんてつくわけないもん!」

そう言っただけウインの横に立ったのはルナだ。

その言葉に、他のポケモン達も次々と前に出て来る。

「ルナちゃんが信じるなら俺も信じるぜ！」

「俺もだ！ヒナタは嘘を言うようなやつじゃない！」

「……同感だ。」

「みんな……」

スカイ、ガラン、アランと続けざまに名乗り出る三匹を見て、ペラッパはいよいよたじろき始めた。

「じゃ、じゃあなにかい！？お前達はヨノワールさんが敵だって言うのかい！！？」

ペラッパは翼をバタつかせながらキョロキョロと回りを見る。

「み、みんなはどう思う？やっぱり信じられないよな！？」

苦し紛れに弟子達に助け船を求めるペラッパ。

弟子達はしばらく黙っていたが、やがてポツリと声が聞こえた。

「……あつしは、信じるでゲス。」

「ビッパ！？じゃあ、お前もヨノワールさんが悪者だって言うのかい！？」

ここまで来るとヨノワールさんへの尊敬というより、ヨノワールさんが悪者であるはずがないと言う式が頭のなかで出来上がっているに違いない。この反応はいくらなんでも異常だ。

ペラップの剣幕に一瞬たじろくビツパだったが、それでも彼は意思を貫いた。

「確かにそれを言われると辛いでゲスが、ヒナタとカズキはあつしの後輩で、仲間なんでゲス！
あつしはヒナタ達のこと大切なんでゲス！！」

「ビツパ先輩……」

くっ、また涙が……さっきから泣いてばかりだ。
ビツパに感化されたのか、他の弟子達も次々に声をあげる。

「私も信じるですわー！」

「おいらも信じるぜ！へいへい！」

「俺も信じるぞー！」

「仲間を信じられなくてどうするのだ！」

「みんな……ありがとう……！」

嬉しかった。ただただ嬉しかった。
信じてくれた。やっぱり私は間違っていなかったんだ！

「……話はまとまったみたいだね」

と、落ち着きを孕んだ声に皆が静まり返る。弟子達が向ける視線の先には、みんなの様子を終始見守っていたこのギルドの親方 プクリンだ。

「みんな信じてくれてよかった
それじゃ、早速幻の大地を探しに……」

「ち、ちよつと待ってくれよ親方様！話はまだ終わってないんじゃないか？」

話を進めようとする親方をドゴームが止める。

そう、まだこの話は終わっていない。あと一匹、信じてないポケモンがいる。

「俺達はいいとして、ペラップはまだ納得してないんじゃないかと。」

「うぐっ……」

みんなの視線が一斉にペラップへと向けられる。

その視線にペラップはたじたじになる。

だが、プクリンは「なんだ、そんなこと？」とまるで問題ではないようにペラップを見る。

「大丈夫 ペラップもちゃんと思ってるもんね？」

『ええ！？』

いやいや、あのペラップの反応を見てそれはない！と誰もが思っただろう。

しかし、プクリンは自信に満ちた表情でペラップを見続けている。

「……ふ、ふふふ、あはははははっ！……」

暫しの沈黙の後、まるで壊れたかのようにいきなり笑い出すペラッ
プ。

その姿に弟子達はビクツ、と体を震わせた。

「……ふ、さすが親方様。仕方がないなあ。」

と、笑いを止めたと思うと今度はうつむき加減にちよつと気取った
口調で喋り出す。

そして次の瞬間、満面の笑みで弟子達に告げた。

「実は私は初めから信じていたのさ。」

『ええー！！??』

まさかの発言に弟子達は再び驚きの声を上げる。

疑惑の視線にペラッは笑顔をひきつらせながらも続けた。

「でも、私が始めに信じると言っちゃつとみんなそれについてきち
やうからな。」

「（な、なんだそれ……）」

「だから私はあえて突き放すフリをしてみんなの絆を試していたの
さ。」

「（ほ、ホントでゲスか……）」

「だが、私は確信していたよ。みんなは絶対に信じるとね。」

「（よく言ってますわ……）」

「あは、あはははは、ははははははあ」

……どうやら親方様の威圧感に堪えかねて壊れてしまったようだ。
無事（？）に全員に信じてもらえたところで、プクリンは私達の前
まで近寄ってきた。

「ヒナタ。カズキ。僕は信じるよ。なんたってギルドの仲間だから
ね」

「親方様あ……」

私は思わずさがり付いてしまった。そんな私をプクリンは優しく宥
めてくれた。

「今、世界各地で時が止まり始めている。
そして、ヒナタ達の話でこの世界が危機に瀕しているということが
わかった！
であれば、何とかしなくちゃね このプクリンのギルドの名に懸け
て、必ず幻の大地を発見するよ！
みんな、頑張って行こー！！」

『おおー！！』

プクリンの掛け声に弟子達の声が重なる。
みんなの気持ちが一瞬になった瞬間だった。

「ペラッブー！」

「は、はい！
いいかいみんな！これからすべての仕事を幻の大地搜索にシフトする！

また、この事をトレジャータウンのみんなにも伝えなくてはならない。

トレジャータウンの復興作業もあるが、今は一刻を争う。忙しくなるだろうが、みんな、気を引き閉めてかかれ！」

「わかってるぜ！」

「よし、なら俺達はトレジャータウンのみんなに真実を伝えにいこうぞ！」

「……無論だ。」

「あつしも一緒に行くでゲス！」

「それならワタシ達はアグノム達のところへ行きますわ！湖にいるようならジユプトルと戦闘になってしまいますわ！」

「それなら私もいきます！」

弟子達が次々と分担を決めてそれを実行すべく動き出す。

「よし、では他のみんなは幻の大地の搜索。キマワリ達もそれが終わったら搜索に回ってくれ！」

『了解！！』

掛け声と共にみんなは動き出した。

残された時間はあとわずか。この世界の命運は、私達の手にかかっている。

第五十話：仲間の絆（後書き）

久々の更新ですっ！

なんだかヒナタのキャラが崩壊しているような気がしないでもない
（笑）

カズキ

「ねえねえ、僕パートナーなのに影薄くない？」

そういえば。いつのまにかヘタレキャラから空気キャラに変わって
いたようだ（笑）

カズキ

「笑い事じゃないよ！」

まあまあ、ギルドのメンバーに会えただけでもよかったじゃないか
（笑）

と、久しぶりに原作に戻ってきた訳ですが、いつまで続くことやら
こんな作者ですが、これからもどうぞよろしくお願いします！

第五十一話：ウインの異変！？迫りくる危機（前書き）

第五十一話完成です。

第五十一話：ウインの異変！？迫りくる危機

ギルドのみんなを信じすべてを話した私達は、ギルドのみんなの協力を得ることができた。

約一名微妙なポケモンがいたが、みんな私達の話しを信じて幻の大地を捜索するために各々動きだし、今やギルドにいるのは見張りのデイグダを除いて、親方様とペラップ。そして、私　ヒナタとカズキ、ウイン、ルナだけとなってしまった。

「ぐすつ……ありがとうございます親方様。」

プクリンの胸のなかで泣き続けた私は、しばらくしてようやく泣き止んだ。

プクリンは「気にしないで。」と私の頭を撫でる。

その感触が嬉しくて優しく、体の力が一気に抜けた。

あれ、なんだか…眠い……

「ねえ、プクリンは幻の大地についてなにか知らない？」

「ごめんね。それについてはボクも全く情報がないんだ。」

「そっか……」

カズキがしょんぼりと顔をうつむかせる。しかし、プクリンは「でも……」と続けた。

「コータス長老なら、なにか知っているかもしれない。」

「コータス長老？」

「トレジャータウンに住んでる物知りなじいさんだ。温泉が大好きでいつも温泉にいるから、温泉にいけば会えると思うぞ。」

「温泉……コータス……」

ペラップの情報にカズキは暫し考えを巡らせた。そして、なにか思い出したのかポンと手を叩く。

「あの子のコータスだ！」

「知っているのですか？」

ウインの質問にカズキはうんうんと頷きながら答える。

「僕とヒナタが初めての探検のときに温泉で会ったことがあるんだ」
「！」

あの子の記憶がよみがえる。水に流されたときはどうなることかと思っただよ。

「亀の甲より年の功って言うしね。」

「きっと力になってくれると思うぞ。」

「うん。じゃあ、早速会いに行ってみるよ！ヒナタ、いこ……う？」

トサッ

突然寄りかかっていった私を受け止めるためにカズキは言葉を中断

せざるを得なかった。

目を閉じ、すうすうと規則正しい呼吸をしている。私はいつのまにか眠ってしまった。

「寝ちゃったみたいだね。」

「まあ、当然と言えば当然でしょう。あんなに激しい戦闘をしたのですから。」

いつもは冷静でしっかり者のヒナタだけど、今は屈託のない純粹な子供みたいだ。

ヒナタの体を支えながらカズキはくすりと笑った。

「今日のところはゆっくり休みなよ。カズキだって疲れてるはずだよ?。」

「そう、だね。あれ、なんだか僕も眠くなってきちゃった……」

言った途端、足元がおぼつきだし、ふらふらと体が揺れ始める。

「ほら、早く部屋に行きな。」

「うん……」

ペラップに促され、ふらふらと危なっかしい足取りで歩き始める。しかし、そんな状態でヒナタを運べるはずもなく、すぐにつまづいてしまった。

「はあ……。全く世話のやける。」

そんな様子を見てペラップはため息をつく、カズキを立ち上げらせた。

「おいルナ。ちょっと運ぶのを手伝ってくれないか？」

「はぁーい。」

ペラップに応え、慣れた手つきでヒナタを背中に乗せる。ペラップもカズキに肩を貸すと、そのまま部屋へと向かった。

「……ねえ、ワイン。」

プクリンとワイン、二人きりになったところでいつになく真剣な声で話しかけるプクリン。

「なんですか？」

プクリンのただならぬ気配を感じ思わず身構えるワイン。

「いや、気のせいかな？ワイン、なんだか雰囲気が変わったみたい。」

「え？」

プクリンの言葉に口をぽかんとあけるワイン。しかし、言った本人のプクリンもなんだか納得がいかないのか、口元に手を当ててうーんと唸っている。

「……きつと僕の気のせいだね。変なこと言っでごめんね。」

「いえ……」

「ワインも疲れてるでしょ？今日はゆっくり休みなよ。」

「は、はい。」

ワインは自分の部屋へと足を向けた。しかし、先ほどのプクリンの言葉が気にかかる。

雰囲気が変わった。それはどういう意味なのだろう？前の僕と変わったところと言えば、ウィンドモードの変化した姿が思い浮かぶ。

ドクン……

「うっ……」

心臓が大きく脈打つ。その存在を示すように大きく、大きく思わず立ち止まり胸を押さえた。体が熱くなる。気分が悪くなる。

「ワイン、どうしたの？大丈夫？」

と、ワインの異変に気付いたプクリンが近づいて背中をさすってくれた。

「だ、大丈夫です。ちょっとめまいがしただけですから。」

ワインは精いっぱい笑顔を作った。プクリンに言った。その笑顔は苦しさからわずかに引きつっていたが、プクリンは気付かなかったようだ。

「ホントに大丈夫？部屋まで歩ける？」

「はい。ちょっと疲れが出ただけですよ。」

そう言つてウインは自分の部屋へと再び歩き出した。その背中をプクリンは心配そうに見つめていた。

……………

部屋に到着するなりウインは藁のベッドへ倒れるように座り込んだ。

「はあはあ……………一体、何が……………」

ドクン、ドクン……………

心臓が脈打つたびに体を突き抜ける痛み。まるで見えない槍で貫かれるような激痛が走る。

しばし苦しみに悶えていたが、やがてその動きが止まると静かな寝息が聞こえ始めた。

ウインの異変に気付いた者は誰もいなかった。

一方、ルナティックの本拠地である城の一角。ルナティックのボス

アルテルが座する祭壇の間へと向かう階段の中腹でリヒトはルエルに声をかけられた。

「よおりヒト。てめえもどうやら殺り損なつたようだな?」

「……だつたらどうした。」

含み笑いを浮かべ、小馬鹿にしたようにリヒトを見下しながら言うルエルに、リヒトはわずかばかりの殺気を込めて睨みつけた。

黒いマントで隠してはいるが、その体には無数の切り傷があり、わずかに血をにじませている。レインめ、少しは手加減というものを知れというのに……。

心の中で悪態をつきながらも、この傷を作ってくれたレインにはわずかだが感謝している。おかげで怪しまれることなく無事に報告も終えられたのだから。

「いや、べつにどうもしねえよ。そんな怖い目で見ろなよ。」

おどけたようなしぐさを見せるが、目は変わらずに笑っている。

こいつ、何か企んでるな。

「要件はなんだ。報告はもう済んでるはずだ。わざわざこんなところまで来るといふことはおれに用があつてきたんだろ？」

「ふんっ、察しがいいな。なに、あいつらにリベンジしようと思つてな。」

あいつら　ヒナタ達のことか。まったく懲りない奴め。

「やめておけ。おれでも殺れなかつたんだ。」

「まあ聞け。あの時は数的に不利だつたからな。一匹一匹はそれほど強くない。」

「……何が言いたい？」

「奴らを分断させ、そこを俺様達で殺る。そうすりゃ負けることはねえ。」

さも完璧な作戦だと言わんばかりにくつくつと笑うルエル。しかし、リヒトが反応したのは作戦に関してではなく

「俺様“達”？」

「そう、俺様達だ。貴様も負けて悔しいだろう？もちろん協力するよな？」

なるほどそういうことか。こいつから協力なんて言葉が出るとは思わなかった。

「断る。」

「そんな選択肢はねえよ。この裏切り者。」

「ッ!？」

こいつ、今……
リヒトの頬に冷や汗が流れ落ちる。ばれていたのはレインだけではなかったか……!

「さあ、もう一度聞け。協力するよな？」

「……………ああ。」

ここは従わざるを得ない。ルエルがわざわざここまで登ってきたの

はそういうことか。

「くくく、そうだ。それでいい。」

完全に主導権を握ったルエルは勝ち誇った笑みを浮かべるとリヒトに背を向けた。

「詳しいことはシェイドの野郎に聞け。妙な真似はするなよ？命が惜しければな。」

高らかに笑いながら階段を下っていくルエル。残されたリヒトはチツ、と舌打ちした。

レインならともかく、ルエルに知られてはもう隠し通すのは不可能だ。覚悟を決めるしかない。

不気味に映えるダークシティを見下ろしながらリヒトは小さくこぶしを握りしめた。

「アルテル。こんなところにいたのか。」

「影。戻ったか。」

場所は変わって城の内部。ルエルの思惑は外れ、アルテルは祭壇の間から離れた城の中心部に來ていた。

灰色を基調とした無機質な壁に囲まれ、藍色の床には黒で模様が刻まれている。二階部まで吹き抜けになっており、上層部には部屋全体を見渡せる位置に通路が存在していた。

そして、そんな巨大な部屋の中心。淡い白の光を放つその巨大な球体は、重力を無視したように宙に浮いていた。神秘的だが、どこか禍々しい、そんな不思議なオーラを放つ球体の前に立つポケモン。アルテルは突如背後に現れた気配に振り返りもせずに応えた。

「ラクシア。そしてベルクはどうした？」

「回収したのち然るべき処分しておいた。それよりアルテル。どうやら宴は中止のようだ。」

「なに？」

影の言葉に振り返るアルテル。驚くほどの無表情だが、声にはわずかに疑問の色が含まれていた。それに対し、影は真剣な表情で続きを話す。

「“破壊の神”がわずかだが目覚めてしまった。奴が完全に覚醒したら勝ち目はない。早急に手を打たなければ。」

「うむ……」

破壊の神。それはウインの内に眠る力のことを意味する。その力が完全に解放されればどれほどの力になるか。ルナティックを壊滅させることなどたやすいだろう。

「“こつちの世界”もレインとフルールだけでは手が足りない。このままでは本当に」

「焦るな、影。完成の時は近いのだ。たとえ星の停止を食い止めよ

うとも、この世界を改変することはできる。

時を待つのだ。」

「……いいだろう。」

影はそれだけ言うと深い闇に消えていった。

残されたアルテルは再び球体に視線を向けると、片手を伸ばした。

「もう少し　もう少しだ……」

アルテルは感情の見えない声でしばし同じ言葉を繰り返していた。

第五十一話：ウインの異変！？迫りくる危機（後書き）

なんだかいつになくグダグダな展開（汗）

この先も急展開ばかりなので振り落とされないようにご注意ください
さい

第五十二話・手掛かりを求めて（前書き）

第五十二話完成です。

第五十二話：手掛かりを求めて

次の日の朝。普段ならギルド恒例のドゴ・ムの目覚ましがかかる時間。

頬に日の光が当たるのを感じ、私はゆっくりと目を開けた。

「うっ……ここは？」

光のまぶしさに目を細めながらもあたりを見回してみる。といても、目につくような家具類はなく、あるとすれば私が寝ていた藁のベッドくらいだ。しかし、この部屋は私達が探検隊結成した時から使わせてもらっている一室

「ここ、私達の部屋……？　　そうだ。私、いつのまにか寝ちゃったんだっけ。」

昨日の出来事を思い返してみるが、プクリンとペラップと話していたあたりから記憶が曖昧になっている。親方様の前で寝ちゃったのはまずかったかなあ……

「ふあ……。あれ、ヒナタ起きてたんだ。おはよう。」

と、隣のベッドで寝ていたカズキが眠そうに眼をこすりながら起き上った。

「おはよう。ねえ、カズキがここまで運んでくれたの？」

「いや、違うよ。ホントは僕が運ぼうとしたんだけど、僕も寝ちゃったみたいで。ペラップとルナが運んでくれたみたい。」

恥ずかしそうに頭に手を当てるカズキ。ルナはともかく、ペラップの優しいところがあるのね。後でお礼を言っておかないと。

「そういえば、ドゴーム来ないね？」

「あ、そういえば。」

ギルドの朝といえばドゴームのうるさ過ぎる目覚ましで始まるという少々特異な始まり方である。私は早起きなので今までまともに聞いたことはないが、カズキ曰く、頭がぐわんぐわんするらしい。そんな迷惑な目覚ましだが、ないと何だか変な感じがする。一体ドゴームはどうしたのだろうか？

「お、起きろおお！……ってもう起きてたか。」

と、あわてた様子で駆けてくるなり大声を上げるのは、先ほどから話題に上がっていたドゴームだ。

私はその大声に対処できたが、カズキにとっては不意打ちだったらしく耳を抑えている。

「うう、なんか久しぶり……」

「ドゴーム先輩、今日は遅かったですね。寝坊ですか？」

目を回しているカズキを横目に私はドゴームに尋ねてみる。ドゴームはうぐつと呻いた。

……冗談のつもりだったけど、もしかして凶星？

「うう、うるさい！早くしないと朝礼に遅れるぞ！？」

顔を真っ赤にしてそういうとさっさと行ってしまった。
普段から大きい声だけど、今のはちょっと鼓膜に響いたわ……。カズキの気持ちが変わったような気がする。

「とにかく、朝礼も始まるみたいだしいきましょうか？」

「う、うんっ。」

いまだにダメージが残ってるのか頭を押さえながら返事をするカズキをつれ、私は広場へと足を運んだ。

「……………というわけで、今日も各自幻の大地の搜索とトレジャータウンの復興作業にあたってくれ。
それじゃあみんな、仕事にかかるよ。」

『おおーっ！！』

朝礼を終え、弟子達はそれぞれの役割を果たすため動き始める。
私はカズキのほうを向くとこれからの動きを確認する。

「ええと、温泉に行くんだっただわよね？」

「うん。そこにコータスがいるはずだから幻の大地について何か知らないか聞いてみようってわけ。」

温泉かあ。聞いてみるついでに入ってきてもいいかな？それどころじゃないか。

……あれ？そういえば

「ペラップさん。ウインとルナはどこですか？」

朝礼にも出ていなかったが一体どうしたのだろうか？

「ああ。ウインならまだ部屋で寝てると思っぞ。」

「え？それって……」

「いや、怪我をしてるわけじゃない。きつと疲れてるんだろ。ルナはその付添いだ。」

「なるほど……」

やっぱりあのウィンドモードのせいかしら？何事もなければいいのだけど……。

「お前達はコータス長老に会いに行くんだろ？気を付けて行けよ。」

「わかりました。じゃあ、行ってきます。」

ウインのことは気になるけど、ルナもいるし大丈夫よね。

そう思い、私達は温泉へと向かった。

温泉と聞くと思い出されるのはやはりはじめての探検。

あの時は宝石を取ろうとして仕掛けを発動させちゃって、鉄砲水に流されてた流れ着いたのが温泉だった。

私は水には強いけど、さすがにあれは相性以前の問題だ。今思うとカズキが無事だったのが奇跡のように思える。

最も、今回は場所を知っているのでわざわざそんな危険を冒して滝壺の洞窟からいく必要はない。温泉まで直行だ。

「何だかんだで結構近かったのよね。この温泉。」

「そうだね。」

散歩で来るには少し遠いが、トレジャータウンからそうかからないうちに私達は温泉に到着した。

こんなに近いなら探検前に寄っても行けるかしら？

そんなことを想いながら温泉に近づく。

いつもならマンキーやヒメグマなどトレジャータウンに住んでいるポケモン達がいるのだが、さすがにトレジャータウンがあんな状態のためかその姿は見えなかった。

「コータス長老、いるかなあ？」

カズキが不安げな声をあげる。

確か、コータス長老の家もトレジャータウンのはずだからもしかしたらいないかもしれない

先にトレジャータウンから探した方がよかったかなあ、とほんの少し後悔していると、のそのそと動く誰かの気配を感じた。

「おお、お前さん達か。疲れを癒しに来たのかのお？」

「コータス長老……」

岩影から現れたのはコータスだった。

初めて逢ったときと同じ優しげな表情を見せながら定位置らしい岩場へと腰を下ろす。

「いや、今回はそうじゃないんだ。実は聞きたいことがあって……」

「ほう。なんじゃ？」

私達は温泉に入りコータスの前まで歩を進めると本題を切り出した。

「ふむ、幻の大地が……。それなら聞いたことがあるぞ。」

「ホント!？」

カズキが大きな声をあげる。しかし、コータスはそれを見て困ったような表情を浮かべた。

「しかし、幻の大地はまさに伝説の場所。もはや言い伝えでしかないのじゃが……」

「それでも教えてください!どんな小さなことでも構いませんから!」

全く手がかりがない今。例え些細な情報でも入手できれば、もしかしたら道が開けるかもしれない。

「そうか。では話すぞ。」

「ゴホン。幻の大地は、海に向こうの隠された場所にあるのじゃ。」

「隠された場所？」

「そうじゃ。幻の大地には選ばれた者しか行けん。そこに行くためにはある資格が必要なのじゃ。」

「選ばれた者しか行けない、資格……」

やはり幻の大地というだけあって誰にでも簡単に行けるというわけではないようだ。

「ねえ、その資格ってどんなものなの？」

「それはの……」

コータスはそこで言葉を切り、しばしの間沈黙が流れた。なかなか次の言葉が出てこない。焦れたカズキはコータスに一步詰め寄った。

「それは？」

「それは……あれ？なんだったかのお？」

コータスは首を傾げて考え込む。これってもしかして……

「すまん、忘れてもった。」

「ええ!?!」

やっぱり。高齢みたいだし無理はないけど、この情報は何としても手に入れておきたい。

「すみませんコータス長老。なんとか思い出してください!」

「そんなこと言われてものう……。うーん……………」

必死に思い出そうと唸るコータス。そして、ひとしきり唸った後、はっとして顔を上げた。

「そ、そうじゃ! 証じゃ! 幻の大地に行くためには、確か何かしらの証が必要だった……。ような……………」

最後のほうは声が小さくなり、いかにも自信がなさそうな口調だった。

「その証ってどんなものなの?」

「それは……………すまん、また忘れた。」

「ええ!?! またあ!?!?」

本日二度目のカズキの叫び声が温泉に響き渡る。うーん、これ以上は無理かしら?

「ホントに思い出せないの?」

「す、すまんのう……………」

しゅんとして頭を下げるコータス。
ちよつと残念だけど、少しでも情報が手に入っただけでも収穫だと思っべきよね。

「ほかに知ってることはありませんか？」

「……いや、それだけじゃ。」

すまん、せめて証が何だったか思い出したら知らせるからの。」

「ありがとうございます。よろしくお願いします。」

私は頭を下げるとコータスに背を向け、ギルドへと歩き出した。カズキもその後を追う。

その背中はどこか暗く、落胆の色が見て取れた。

ギルドにつくと、仕事を終えたのか他の弟子達はすでに集まっていた。

私は意外に時間が経っていたんだなあと思いつつもペラップに報告する。その報告にペラップは顔をしかめた。

「うーん、つまりコータス長老もよく知らなかったわけだな。残念

……」

「そんなことないよ 証が必要だってわかったただけでも一歩前進だ

よ」

前向きなプクリンの言葉にペラッは顔を上げる。

「ヘイ！おいら達も調べてるけどまだ何にもわからねえぜ……」

「でも、めげないで頑張るでゲス！」

「そうだよ。頑張って幻の大地を見つけよう！」

前向きな姿勢を見せる弟子達にカズキも元気を取り戻したようだ。ギルドの団結力はすごいと思う。

「トレジャータウンの復興もだいぶ進んできたし、あと一週間もすれば完全に復興できそうだね。」

「みんなご苦労だったな。今日は少し早いが晩御飯とする。みんなゆっくり休んで明日に備えてくれ。」

『はーいっ！ー！』

こうして幻の大地搜索の一日目が終了した。

夕食を済ませ、私達は自分達の部屋でくつろいでいた。

「なかなか思ったようにいかないね……。コータスから話を聞いた時はいける！って思ったんだけどなあ……」

藁のベッドに寝転がりながらため息をつくカズキ。
私は窓の近くに座るとカズキのほうを見る。

「焦らずじつくり……と言いたいところだけど、今はさすがにそんな状況じゃないしね。」

視線をカズキから窓の外へ移す。

見えるのは、暗闇で静かに葉を靡かせる木々。空には無数の星に白く輝く月。穏やかで静かな夜だ。

暗闇が苦手な私が夜にこうして外を見ることはあまりないのだが、今日はなぜだかその光景を見て落ち着いていられた。

「そういえば、今頃ジュプトルはどうしてるかな？無事に時の歯車を集めてるかなあ……」

「ジュプトルはきっと大丈夫よ。スターズや無月さん達も協力してくれてるみたいだし。」

でも、ルナティックの攻撃も激しくなってきたから油断はできない。今度またトレジャータウンが襲われたら……。そう思うとぞっとする。

それにウインのことも心配だ。部屋に戻る途中でウインの部屋をのぞいてみたが、ウインはいまだに目を覚ましていなかった。単なる疲れ？それとも

心配事が多すぎて次第に不安が増幅されていく。

「まあ、今日はゆっくり休んでまた明日頑張ろう、ヒナタ。……ヒナタ？」

「えっ？あ、うん。」

だめだ。頭が回らない。今日はもう寝よう……

「それじゃあお休み、ヒナタ。」

「おやすみなさい、カズキ。」

藁のベッドに横になり目を閉じる。

広がるのは不安の闇。しかし、どんな闇の中でも必ず光は存在する。希望という名の光を求め、私は逃げるように夢の世界へと旅立った。

第五十二話・手掛かりを求めて（後書き）

さて、そろそろまともにプロットを組んでいなかったツケが回って
きたかな？

第五十三話：復讐者と憤激の閃光（前書き）

第五十三話完成です。

第五十三話：復讐者と憤激の閃光

次の朝。私はいつもより早くに目を覚ました。体が重い。頭痛がする。怖い夢を見たような気もするが、覚えていない。

「しっかり、しなきや……」

私は頭を振って眠気とともに不安を振り払う。

何かが起こったわけでもないというのにこんなに不安な気持ちになるのはなんでだろうか？

しばらくの間、私はまだ薄暗い空を窓からぼーっと眺めていた。

「起きろおおお！朝だぞおおお！」

時は流れ、空も明るみ始めたころ、ギルドの目覚まし役であるドゴームがやってきた。

ボーンとしていたせいかわきをふさぎ損ねたが、どこか遠くでしゃべっているかのように特にリアクションはなかった。しかし、カズキはいつも通りまともに受けならしく、目を回してふらふらしていた。

「うう、おはようヒナタ……」

「……………」

「……………ヒナタ？」

「え、ああ、おはよう。」

いけないいけない。私はパンパンと頬を叩き意識をしつかりさせる。そんな私の様子を不審に思ったのか、カズキが心配そうに顔を覗き込んできた。

「大丈夫？」

「うん……」

「ヒナタ。いろいろと不安かもしれないけど、今は僕達にできることをしよう？そんな不安そんな顔しないでさ。」

私達にできること、か……。そうよね。こんな落ち込んでたって何も変わらないものね

「…うん、わかったわ。ありがとうカズキ。」

「どういたしまして。」

そう言つて笑顔を見せてくれるカズキ。その笑顔を見てたら、ずっと不安がついていた私がかみたいに思えてきた。きつと大丈夫。そう信じて、私はカズキに笑顔を見せた。

「ええ、というわけで幻の大地についてまだ詳しいことは分かっていない。しかし、我々は諦めないよーっ！みんな、今日も頑張っていこうー……」

『おおーっ!』

朝礼を終え、各自仕事に取り掛かる。幻の大地搜索二日目。わずかとはいえコータス長老から手がかりももらった。この調子で探していけば、きっとすぐに見つかるはず!

「ヒナタ、今日はどこに行ってみる?」

「うーん、そうねえ……」

とは言ったものの、もう当てがないのだ。どこから探したものか……

「……まあ、とりあえず外に出て考えましょう。」

「うん。」

ギルドの長い階段を降り、パッチールのカフェまで来た。

このカフェ、随分前にできていたが入ったことは一度もなかった。トレジャータウンからそれなりに離れているため襲撃にも遭わず、またギルドと同じように地下に店があるため避難所としても活用されたいらしい。

ここでは木の実やグミを持参するとパッチールがドリンクを作ってくれる。味はその時々によって変わるらしいが、飲んでみると結構おいしい。

私とカズキはオレンの実を渡してドリンクを作ってもらい、それを

飲みながらこれからの行動を思案する。

「思い出したら伝えるって言ってたし、またコータス長老のところに行ってみる？」

「うーん……」

確かにそれもありだが、あの様子だとまだ時間がかかるのではないかと思う。

もっと確実に情報を手に入れられる場所があればいいのだが……

「お悩みのようですね、お二方。」

『!?!?』

しばらく考えに耽っていると、突然背後から声をかけられた。驚いて振り返り、その姿を見て目を見開く。

「どうやら幻の大地の場所がわからず、これからどうしようかと考えあぐねているんですね。」

微笑を浮かべながら淡々と言葉を紡ぐのは、トレジャータウンをめちゃくちゃにした張本人　ムウマージのシェイドだった。

私達は即座に飛びのき、戦闘態勢に入る。

「なんであなたがここにいるんですか？」

「なんで？それはですね」

シェイドの体が紫色の怪しげな光に包まれる。その光はゆらゆらと

蠢きながら徐々に広がっていく。

「あなた方を、連れて行くためですよ！」

『ッ！？』

光がはじけ、視界が黒く染められた。それに、体が浮いているような感覚がする。

なに？なにをしたの！？

視界も効かず、気持ち悪い感覚に耐え切れず、私の意識は闇に落ちて行った。

……

……

…

「うっう………」

意識を取り戻した私は、いつの間にか自分が地面にうつぶせで倒れていることに気付いた。どうやらあれは、私達を巻き込んだ“テレポート”だったようだ。

うつすらと目を開けて周りを見回してみる。しかし、そこは見覚えのない場所だった。

「うっう、は………」

体を起こし全体を確認してみるが、やはり知らない場所。一言で表せば森。しかし、リンゴの森のように木の实がなっている木はなく、まだ昼間であるはずなのに妙に薄暗い。

「ぶっよ…っっ…」

「ううん………」

突然知らない場所に、しかも苦手な暗がりになり込まれた恐怖に身を震わせていると、すぐ隣でうめき声が聞こえた。その声にハツとし、すぐさま声の主を起こしにかかる。

「カズキ！早く起きて！」

「……ふえ？ヒナタ…… はっ！！」

初めは寝ぼけたような声だったが、やがて今の状況を思い出したのかガバツと起き上がる。

「ぼ、僕達どうなったの！？こごごこ！！？」

「お、落ち着いてカズキ！」

私が宥めるとカズキは息を弾ませながらも黙った。

……若干体が震えている。きっと心の内では泣いてしまいたいことだろう。恐怖しているのは私も同じだが。

「 サッサとしてくんねえか？」

『 えっ！！？ 』

突如響いてきたドスのきいた低い声にビクツと体を震わせる。
森の木々の合間をドシンドシンと大きな足音を立てながら現れたのは、右目に黒い眼帯を付けたバンギラス。　そう、ルナティック四天王の一匹ルエルだった。

「こちとらテメエらが目覚めるまでの間暇で暇で仕方なかったんだぜ？目覚めたんなら早く構えろよ。」

そういつて銃口を向けてくるルエル。

まさか、シェイドが私達をここに連れてきた理由って……

「その顔ならもうわかってるよな？今度はテメエらを確実に仕留められるように分断させたんだよ。シェイドも少しは役に立ったな。」

「くっ……」

まずい。この状況は非常にまずい。

ルエルの強さは身をもって体感済みだ。私達やルナ。それにスカイさん、ガランさん、アランさんの力を合わせてやっと互角かどうか。あんなのまともに相手にしたら勝ち目はない！

そんな考えを巡らせている間にも知らず知らずのうちに足が後ろへと下がっていく。逃げる。そう本能が告げている。

「おっと、逃げようなんて考えるなよ？本来ならテメエらごときオレだけで十分すぎるが、念には念を入れてって言うしな。」

「ま、まさかまだ誰かいるってこと!？」

「おい！いつまでも隠れてねえでさっさと仕事しろ！四天王最強の

「リヒトさんよお！」

「……………」

ルエルの怒鳴り声に反応し、背後からパキツと枝を踏みしめる音が聞こえてくる。

暗がりの中から姿を現したのは、ルエルと同じルナティック四天王の一匹　リヒトだった。

「わかってると思うが、妙な真似しやがったら……………」

その言葉の後、ルエルは自らが持つ銃についた剣を首を横に裂くように動かす。

つまりは…………言わなくてもわかるだろう。

リヒトはそれに小さくうなずくと、懐から薄くピンク色に輝く双剣　胡蝶を取り出す。

「……………すまない。」

とてもとても小さな声。しかし、私の耳には届いた。

謝罪の言葉。そして、先ほどのルエルの発言。私は察した。

リヒトの裏切りがばれてしまった。そういうことだろう。裏切りを知ったルエルはそれを利用し、私達を殺すための手助けをさせている。シェイドがここにいないのも、もしこの場で完全に裏切った場合に備えていつでもボスに報告できるようにするためだろう。卑劣な奴め。

しかし、リヒトが完全に敵にまわってしまったと考えると、いよいよ打つ手がない。リヒトの強さはルエルをし凌ぐ。ルナティックの戦力の中でも最強を誇るポケモンが二匹もいるのだ。

「どどど、どうする、ヒナタあ？」

半泣き声でカズキは私に縋り付いてくる。私だって泣きたい……。何か…何か作戦は……！

ヒュン！

風を切る音。そして、切り裂かれるような痛み。

「ぐっ!?!」

「ひ、ヒナタ!!」

砂の弾で左の前足を貫かれ前のめりに倒れこむ。傷口から血があふれだし、小さな血だまりを作っていく。

「し、しっかりしてヒナタあ!!」

涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら縋り付いてくるカズキ。そんな私達の様子を笑いながら眺めるルエル。

「いいねえその顔。最高だ。たっぷり苦痛を味わって死ね！」

ここからルエルの鬨り殺しが始まった。

私やカズキの腕を。足を。腹を。体の至る部分を打ち貫いていく。殺さない程度にいたぶっていく。

「おら、もう終わりか？まだ物足んねえなあ。」

「う、う……」

もはやうめき声も出ない。体が鉛にでもなってしまったかのように重くて動かせない。目が霞む。意識が遠のいていく。

ここで、死ぬのかな……？

「けっ、まったく弱い奴らだぜ。こんな奴らに負けたと思うと無性に腹が立つ。」

ルエルは無造作に右手をふるう。近くにあった木が切り倒された。

「さあて、このままぶっ殺してもいいが、まだ仕事をしてねえ誰かさんがいるんだ。せつかくだから一番いいところをくれてやる。」

そう言っただけで動かずに一部始終を見ていたりヒトに視線を向ける。

「とどめはテメエがやれ、リヒト。」

「なっ!?!」

ずっと黙秘を続けていたりヒトだったが、その言葉に思わず声を上げる。

とどめをさせ。つまり、息の根を止めろということだ。今まで陰から守ってきた相手を殺せと

「どうした？ さっさとやれよ。」

「……………」

剣を握っている手に無意識に力が入る。体がわなわなと震える。

ヒナタを殺せ、だと？そんなことできるわけがないだろうが！

「まさかできないって言うんじゃないかねえだろうな？テメエの命はオレが握ってるも同然なんだぜ？」

「……………」

リヒトはゆっくりと両手を上げ、技を出す構えに入った。それを見て満足げににやつくるエル。

しかし、この時ルエルは気付いていなかった。リヒトの目が怒りの色であふれていることに。

「胡蝶の漆……………」

リヒトの握る胡蝶から光が溢れ、だんだんと何かを形作っていく。目に痛いほどの光を纏い、そこに形を成したのは元の数十倍はあるうかという巨大な剣。

「時空裂破斬！……！」

怒号とともに振り下ろされた胡蝶はその輝きを刃と化し、私達めがけて襲い掛かってきた！

「（もう、だめだ……………！）」

かろうじて意識をつなぎとめていた私はギョツと目をつむった。しかし、すぐに目を開けることになる。それは驚いたようなルエルの声のせいだ。

「な、なんだこりゃ！？」

ルエルが見ているのは私でもなく、カズキでもなく、またリヒトでもなかった。

私達がいるこの“空間”を見ていた。ただし、それはさっきまでの空間とはまったく違うものだった。

「もうたくさんだ。貴様もろとも時空の渦に放り込んでやる。」

放たれた刃が空間を切り裂き、この“空間”を破壊していく。その様子は、かつて引きずり込まれた時空ホールの様子と似ていた。

「リヒト、貴様あ!!！」

「碎け散れ。崩れ落ちろ。時空の渦に消え去るがいい。」

リヒトはもう一度胡蝶を振り下ろした。

それを合図に胡蝶の輝きが増し、この場所を覆い尽くした。

……

……

…

光が消えたとき、そこには何も残っていなかった。

木も草も。そして、ポケモン達も

第五十四話：過去へ（前書き）

第五十四話完成です。

第五十四話：過去へ

「……はあ……はあ……」

誰かの息遣いが聞こえる。とても苦しそうで、時折咳を交えながら肩で息をしている。

どこから？とは考えなかった。私が目を開けたとき、目の前にいたポケモンがその荒い呼吸を繰り返す本人だったから。

「リヒト……ッ！？」

起き上ろうとして体を走る激痛に崩れ落ちる。当然だ。あれだけ撃たれば動けなくなるのは必然だろう。

「ゴホッ！……ん、起きたか。」

盛大に咳をした後、呼びかけに気付いたのかリヒトは私に近寄ってきた。

しかし、その足取りはどこか疲れた様子で、いつものような威圧感
は微塵もない。

「あの、これは……」

「喋るな。今説明してやる。」

リヒトの言葉に私は沈黙せざるを得ない。

私のすぐ隣まで来ると、ドカリと足を投げ出して腰を下ろした。

「おれは、この胡蝶の力であの場所にあつたすべてを時空の渦に放り込んだ。あの状況下でお前を助け出すにはこうするしかなかった。」

リヒトは懐から胡蝶を取り出し、それを上に掲げる。しかし、その剣にいつものような輝きはなく、鉄色の刀身を晒しているだけだった。

「だが、これはかなり体力を消耗する技。お前達を離れ離れにならないように維持するだけで精いっぱいだった。」

私はハツとして横を見る。そこにはいまだに意識を失っているカズキが横たわっていた。

その姿に安堵の息を漏らすと、私は再びリヒトの方に顔を向けた。

「おそらくだが、ここは“繋がり”の森”。　過去の世界だ。」

「過去の……世界!？」

私は目を見開き驚愕する。過去の世界　それは私達のいた時間の過去。つまり、ウイン達が住んでいた世界だ。タイムスリップしてきたってこと!？

大きく動揺している私をよそにリヒトは掲げていた腕を下ろし、胡蝶を懐にしまう。そして、大きいため息をついた。

そのまま仰向けに寝転がり、静かに目を閉じる。

「　　すまない。」

「えっ?」

沈黙が支配しようとした矢先、突然リヒトの口から洩れた言葉。私は思わず聞き返していた。

「守って、やれなくて……」

「……………」

そんなことない。あなたはいつだって、私を守っていてくれたでしょう？

私は強張る体からツルを一本伸ばし、リヒトの頭を撫でた。

こんなことしたら怒るかもしれないと思ったけど、実際はそんなことはなかった。

「ん……………」

リヒトはツルを掴むと仰向けから私に背を向けて横向きになった。

ツルを掴む手にはギョツと力が入っていた。

「コト、ネ……………」

その言葉を最後に小さな寝息が聞こえ始めた。警戒心を解いたその姿はまるで子供のようだ。

なぜかその姿に安堵を覚えて緊張していた体の力が抜けてしまった。すごく、眠い……………」

私がリヒトと同じ状態になるのにそう時間はかからなかった。

……………」

私が次に目を覚ましたのは数時間後。日暮れも迫ってきている時だった。

「…………え…………てよ…！」

誰かの声が聞こえる。必死に叫ぶその声には私は少しずつ意識を覚醒させていった。

「起きて！起きてっば…！」

「ううん……………」

なんだかどこかで聞いたセリフだが、その声は今までに聞き覚えのないものだった。

ゆっくりと目を開け、その声の正体を瞳に写した。

「あ、気が付いた！」

ぼやけた視界に飛び込んできたのは若草色の影。

パチパチと目を瞬かせ焦点を合わせていくとようやくその正体がわかった。

「君、大丈夫？ひどい傷だけど。」

亀のような体躯に頭に生えた双葉が特徴的なポケモン　ナエトル
だった。

心配そうに私の顔を覗き込んでくるナエトルには大丈夫だと伝えようとした。　　が、しかし。

「ッ！？」

ルエルに負わされた傷はいまだに癒えておらず、動かそうとした体に激痛が走る。

「あつ、まだ動いちゃだめだよ！今手当してあげるから！」

そう言つてカバンの中から取り出したのは体力を回復する木の実であるオレンの実。ナエトルはそれを葉っぱカッターで小さく切り、私に食べさせてくれた。

じんわりと少しずつ痛みが引いていく。やはりオレンの実は役に立つ。

しかし完全に治ったわけではなく、体を起こすのがやっとだった。

「ピカチュウ、そつちはどお？」

私の様子を見て少し安心したのか、視線を私の後ろへとずらす。つられてその方向を見てみる。そこには同じようにカズキを手当てしているピカチュウの姿があった。

「瞬リヒト？と思つてしまつたが、マントはつけてないし、雰囲気もだいぶ違う。それに大切な物なのか、緑色に輝く指輪に革ひもを通し、ペンダントにして首にかけている。」

さっきのナエトルの発言からおそらく仲間なのだろう。

「うーん、ダメ。全然起きない。」

振り返りながら首を振るピカチュウ。その言葉に私は一瞬不安に駆られた。

「カズキ　そのヒノアラシは大丈夫、ですよね？」

「え？あ、うん。ちゃんと息してるし、多分大丈夫だと思うよ。」

「よかった……」

目を覚まさない。死んでしまった、という考えがよぎり焦りと不安が増したが、ピカチュウの言葉にホッと安堵する。

「さて、あとはそっちの人だけね。」

そう言つて視線を向けたのはリヒトの方。そういえば、まだツルを握つてたんだ。

どうしようか考えたが、どうせ起こすんだし、と考えてすると戻した。

ピカチュウはリヒトに近づき、その手を伸ばす。しかし。

スパッ！

即座に放たれた氷の斬撃。その斬撃の軌道にあつた草は氷に覆われ、バラバラに砕け散つた。

「……貴様、何者だ。」

先ほどまで意識を失っていたとは思えないほど機敏な動きで起き上つたりヒトは、鋭い眼光でピカチュウを見つめる。その手には先ほどの斬撃を放つたであろう氷の太刀。氷牙が握られていた。

「あわわわ……ッ！？ぴ、ピカチュウ大丈夫！！？」

「うん、平気。」

間一髪、飛び退いて攻撃を回避したピカチュウは澄ました顔でナエトルに応える。

突然の状況にパニックに陥っているナエトルと違い、ピカチュウは至って平然としていた。

「いきなり危ないじゃない！ワタシがあなたに何かした？」

「……………」

緊迫した状況。まさに一触即発の状態だ。

は、早く止めないと！

敵と勘違いしてるのか知らないが、リヒトなら本当にやりかねない。そう思っただけを叫ぼうとしたが、リヒトの発言でその必要はなくなった。

「ワタシ、だと？……………貴様、女か？」

……………ぶちっ。

何かが切れるような音がした。そして

「だから男って言うなといっとうろつがあああ！……！」

「なっ！？」

叫び声とともにリヒトに向かって大量の電撃が放出される。リヒトは予想だにしていなかった攻撃に防御することもできず、まともに喰らってしまった。

ばちばちばち……………

日も落ちて暗くなってきた森の中を一気に明るく染め上げた電撃は収まった後もその残滓を残していた。
うう、目がちかちかする……

「ぴ、ピカチュウ、怪我人相手にそれはまずかつたんじゃ……」

「あ、いや、その……いつもの調子でつい。」

苦笑いを浮かべながらポリポリと頬を搔くピカチュウ。

「つい、じゃないよ！死んじゃったらどうす」

「あれぐらいで死ぬか。」

『えっ？』

大きく取り乱すナエトルといまいち緊迫感がないピカチュウの間に割って入ったのは、先ほど盛大に電撃を浴びたりヒトだった。

「さすがに少し堪えたけどな。」

「えーとお、ごめんなさい。」

それほどダメージを受けた様子のないリヒトを見て身を丸くするピカチュウ。

「一応謝罪の言葉をもらったリヒトはそんなピカチュウを見て……別にいいけど。」と言ってそっぽを向いた。

「それにしても、なんでこんなところで倒れてたの？しかも傷だら

けで。」

なんだか変な感じになった空気を取り繕うように話題を繰り出すピカチュウ。

しかし気になっていたのは本当のようで、さっきまでわたわたしていたナエトルもピカチュウの横に並んで答えを待っている。

「……………」

「実は……………」

ちらつと視線を向けてきたが一向に喋ってくれないので私がこれまでの経緯を説明した。

と言つても、私が覚えているのはルエルと戦闘になる以前のことまで。そのあとは意識が朦朧としていたせいかほとんど覚えていなかった。

時々リヒトが補足を加えつつ、こんな状態になった理由を伝えた。

「へえ、そんなことがあったんだ。」

「リヒトが助けしてくれたおかげで助かったけどね。」

あらかた説明し終わり、ホッと一息つく。ちょっと話疲れた。

ふとピカチュウ達の表情をうかがってみると、そろって険しい顔をしていた。そこから感じ取れるのは怒り。静かだが、激怒しているようだった。

「そういえば。」

しばしの沈黙の後、リヒトは思い出したかのようにつぶやいた。

それを聞き、伏せ見がちだった顔が上がり自然とリヒトに視線が集まる。

「貴様ら、名前は何という？」

意外な言葉に私は目を丸くした。正直、リヒトがそんなことを気にするようなポケモンには見えなかったから。

「そうというのは自分から名乗るものじゃないの？」

貴様なんて見下したような呼ばれ方をしたのが気に入らなかったのか、若干頬をひきつらせながら答えるピカチュウ。そんな彼女を見て、ナエトルはおろおろと落ち着かない様子で半歩下がる。

リヒト、相手は手当てをしてくれた恩人はわけだし、そんなに威嚇しなくてもいいんじゃない……

「ん、そうか。おれはリヒト。これでいいか？」

「……ええ、わかったわ。よーくわかったわ！」

「ピカチュウ落ち着いてよ……」

ピカチュウの眉がぴくぴくと動き、尻尾まで不機嫌そうに揺れ始める。

ナエトルが必死に宥めるが、下手をしたらまた電撃が飛んできそう。念のために一歩だけ退いておく。

「まあいいわ。自己紹介ね。ワタシはピカチュウ。言っとくけど、お・ん・な・の・こ、だからねっ！」

男に間違われたのが相当嫌だったのか、女の子という言葉を強調してくる。

今まで何回も間違えられたんでしょね…。

「あはは……。あ、ボクはナエトルだよ。よろしくね！」

と、いまだにプンスカしているピカチュウを見て苦笑いを浮かべていたナエトルが続いて自己紹介する。

「私はヒナタです。そこで気を失ってるのがカズキ。こちらこそよろしく願います。」

ぺこりと頭を下げる。オレンの実が効いてきたのかだいぶ体も動かせるようになってきた。

「そんなに律儀にならなくていいって。あ、そういえばちょっと聞きたいんだけど。」

と、何かを思い出したように手を叩くと、バックの中をあさり一枚の紙を取り出す。

「どうやら依頼書のようにけど……？」

「ワタシ達この依頼書を見てここまで来たんだけど、何か知ってる？」

見せてもらった依頼書はなんだか変だった。何が変かと言えば、通常の依頼書に書かれている難易度のランクや報酬、さらにはもっとも重要な部分である依頼内容まで全くの白紙であった。唯一書かれていたのは、場所と依頼主の名前。

「これって……」

私はそれを見て目を見開いた。なぜなら、その依頼主の名前は

「フィノン、って……」

「なに、フィノンだと？」

ぼつりと私の口からこぼれたその名にリヒトも反応を示した。

フィノンって、ルナのお母さんのあのフィノン？でも、なんで依頼書なんか……

依頼書をよく観察すると、私達のいた世界で使われている依頼書と全く同じ。どれくらい過去なのかは知らないけど、依頼書が全く同じなんて不自然だし、それにこの世界ではまだ探検隊すら存在していないはず。

「どお？何か知ってる？」

「ええ……まあ……」

「ほんと!？」

依頼書を睨みながら曖昧に返事をする私に食いついたのはナエトルだった。

驚いてナエトルを見てみれば、とても期待に満ちた顔をしていた。

「ねえ!どこにいるか知ってる？」

「え、ええと……」

私はそんなナエトルから視線をそらす。知ってると言っても名前くらいでどこにいるかまではわからない。この世界の地理も知らないのにわかるはずない。
苦し紛れにリヒトに視線を向けてみる。さっきは無視されたけど、今度はどうか

「……………」

またしても無言。やっぱりだめか

「……………あいつの正確な居場所は知らないが、レンレン村の場所ならわかる。」

と思っただら喋ってくれた。そういえば、レンレン村に住んでるって聞いたことあるような…。

「じゃあ、そこへ案内してくれないかな!？」

「待つてナエトル。今はそれよりヒナタ達を安全な場所に運ばないと。」

「あ、そっか。」

ちよつと申し訳ない気もするが、カズキも気絶してることだし、どこか休める場所に行きたいのは確かだ。

「じゃあ、いったんギルドに戻ろう。」

「待て。」

さっそく行動を開始しようとした矢先、リヒトの一声でその動きは止まった。

ピカチュウ達の視線を浴びる中、リヒトは背を向けて歩き出す。

「 来い。近くに村がある。 」

その様子には私達は顔を見合わせた。ここは過去の世界に詳しいリヒトを頼ることにした。

気絶しているカズキをナエトルが背負い、私はピカチュウに肩を貸してもらいながらゆっくりとそのあとをついていった。

第五十四話：過去へ（後書き）

ちょうど一か月ぶりの更新ですが、今回なんとコラボをすることになりました！

というわけで、春野ツバサさん作『ポケモン不思議のダンジョン』時の探検隊・闇の探検隊』より、ピカチュウとナエトルに参加していただきました。

それにしても、せっかくのコラボだというのにいつになく文章がひどい（汗）
こんな調子でやっていけるだろうか？

リヒト

「自力でなんとかしろ。」

はっい（汗）

第五十五話：ひとまず休息（前書き）

第五十五話完成です。

第五十五話：ひとまず休息

暗がりが目立ち、もはやお互いの姿をシルエツトでしか確認できないほどの森を抜けると、そこには夕焼けに照らされる草原が広がっていた。まるで金色の絨毯のようなそれは地平線の先まで続いており、その様子に感嘆していると後ろから風が吹き、さわさわと優しく小波を立てた。

「…………ええつとお…………」

私が思わず見とれて足を止めると、同じく足を止めたピカチュウが頬をポリポリ掻きながら困ったように首を傾げる。

「……ど……?」

「こんな場所あったっけ?」

背中に背負っているカズキを落とさないように気を付けながらピカチュウの横まで来ると、ナエトルも同様に首を傾げた。
あれ、そういえばピカチュウさん達ってどこから来たんだろう? “過去の世界”のポケモンじゃなかったのかしら?

「ピカチュウさんってこの辺に住んでいるポケモンではないんですか?」

「え? いや、違うよ?」

「実はボク達、探検隊なんだよ!」

「え、探検隊!？」

ま、まさか探検隊だったなんて…。あ、よく考えたら依頼書をもつてたわね。

でも、こんな探検隊ギルドでは見たことないわね。フリーの探検隊かしら？

「奇遇ですね。私達も探検隊なんですよ。」

「え、そうなの……?」

なぜかそれを聞いた途端固まるナエトル。さらにその顔はどんどん赤くなっていき、ついには顔をそむけてしまった。

……何か悪いこと言ったかしら？

「でも、ギルドでは見たことないわね。もう卒業してフリーでやってるの?」

「いえ、まだギルドで修業中です。」

「へえ〜。ワタシ達もだよ。どこのギルド?」

「プクリンのギルドです。」

『……………え?』

突然二匹の視線が私を向いて固まってしまった。

え?ええ??な、何か変なこと言ったかなあ……………?

「嘘……………ボク達と一緒に……………」

「え……」

今度は私が固まる番だった。ボク達と一緒に。それはつまり、彼らもブクリンのギルドの探検隊だということである。

お互いに同じギルドに所属しているはずなのにお互いに姿を見たことがない。これって、一体……

「……おい。」

『ッ！？』

お互いに固まっていると横から何者かが割って入った。思わず後ろに下がりに身構えるが、よく見てみればそれは敵でないことがすぐにわかった。

「り、リヒト……」

「話は後にしろ。真っ暗な夜の道を歩きたいのか？」

「うっ……」

静かに、しかし苛立ちが込められた声に私はハッと空を見る。太陽はまだ完全には沈んでいないものの、すでに半分ほど山の陰に隠れてしまっている。

このまま話し続け気づけば真っ暗。そんな展開は絶対にごめんだ。暗いの怖い……

「貴様もだピカチュウ。今はヒナタとカズキを休ませるのが先決。貴様の感じる疑問などは二の次だ。」

「それは、そうだけど……」

「わかったらさっさと歩け。このまま歩けば日が暮れる前にはつけるはずだからな。」

そう言っただけでさっさと歩きだすリヒト。苛立ちも手伝ってかその歩調は少し速かった。

一方ピカチュウは眉をぴくぴくさせながら私に近づくと耳元で囁いた。

「あいつ、いつもあんな感じなの？」

「え、ええ……まあ……」

今まで逢った感じではいつも少し冷たい感じがしたけど、こうやって助けてくれようとしているんだから本当は優しいんじゃないかな。そう思うと、ピカチュウの問いにはっきりと断言することはできなかった。

「おい、早くしろ!!」

「ああもう！わかってるわよ!!」

すでになんか先を行くリヒトから怒声が放たれる。

これ以上この場所にいたら確実に夜になってしまう。私は夜になったときのことを想像し身震いすると、あわててリヒトの後を追った。

日は落ち、太陽に代わって月が空を支配し始めた頃、私達はようやくリヒトの言う村　ミルト村へとやってきた。背後に巨大な山を見据えたその村の入り口に差し掛かった時、不意にリヒトが足を止めた。

「どうしたの？」

「…………おれはこの先には行けない。」

「えっ？」

急に弱腰になったかと思うと、その身を一步下がらせた。

「ねえ、一体どうしたの？」

「なんでもない。ただ、行きたい場所ができただけだ。」

「行きたい場所？」

「この村の一番奥にある屋敷。そこに行けば休ませてもらえるだろう。じゃあな。」

「ちょ、どこいくのよー!？」

言っや否やリヒトは逃げるように立ち去って行った。

「はあ…………なんなの、あれ？」

「私にもよくわかりません。」

リヒトが去って行った方を見て考えを巡らせるが彼の行動に思い当たる点はない。

行きたい場所ができたと言っていたが、どこへ行くのだろうか？

「まあさ。とにかく休もうよ。ヒナタも疲れてるでしょ？」

「そう、ですね。行きましようか。」

疑問は残るものの疲れているのは本当なので素直に休ませてもらうことにした。オレンの実で傷の方は大分回復したものの、体の疲れはいまだ取れない。

リヒトがいなくなったことでなんとなく不安だが、村の奥に見える屋敷を目指して歩き出した。

入口からまっすぐ進みたどり着いたお屋敷。それなりに大きく、ちよつとした庭園まであるその屋敷の玄関にたどり着くと、出迎えてくれたのは一匹のロコンだった。まだ幼さの残る顔立ちをしたそのロコンは、引き戸の隙間から私達の様子をうかがうと、「どちらさまですか？」と警戒気味に聞いてきた。

「えつと、ちよつと怪我してる子がいて、休ませてほしいんだけど。」

「

「怪我、ですか？」

ロコンの様子に遠慮がちに言うピカチュウだったが、ロコンはその言葉を聞くとすんなり戸を開けてくれた。どうやら休めそう……かな？

「わかりました。こちらへどうぞ。」

「ありがとうございます。」

通されたのは畳が敷き詰められた和室だった。開け放たれた障子の先には廊下を挟んで庭園がのぞめ、夜になり気温が下がったのか、涼しい風が吹き込んできた。

「うわぁ、すごい家だね！」

「確かにすごい……」

畳敷きの部屋なんて私達のいた世界では見たことがない。まるで人間の住む家のようなようだ。それに広さもかなりある。おそらくギルドの1フロア分くらい余裕であるだろう。

昔は人間と共存していたって聞いたけど、その名残かしら？

「怪我をされたというのはそのヒノアラシですか？」

しばらく部屋の様子を観察していると、さっきのロコンが話しかけてきた。

その傍らには清潔そうな白い布団が敷かれていた。い、いつのまに

……

「え、あ、うん。後こっちの子もね。」

「私はもう大丈夫ですけど。」

「ダメだよ！ちゃんと休まない！」

うーん、ちょっと疲れてるくらいなんだけどなあ……
と言ったらまた何か言われそうなのでおとなしくその場に腰を下ろす。

「とりあえず、そのヒノアラシをここへ寝かせてください。」

「わかった。」

ナエトルはロコンの言うとおりに落とさないように慎重にカズキをおろす。

いまだに目を覚まさないカズキに不安を覚えるが、呼吸は安定して
るし大丈夫……だよね？

心配そうに見つめる私をよそにロコンは私達に下がるように言うと
深呼吸をし始めた。

「おじい様みたいに完全には治せないけど、少しくらいなら……」

目を閉じて精神を集中させるその姿を私はどこかで見たことがある
ような気がした。この感じ　ルナにそっくりだ。

やがてロコンの周囲に灰白い青色の火の粉が浮かび上がったかと思
うと、それはカズキの体を取り囲み、溶け込むようにして消えた。

「……これで少しは楽になったかと思えます。」

「な、なにをしたの？」

一連の動作を見ていた私達だったが、それでも何をしているのかわからなかった。ナエトルに至っては首を傾げて訝しげな顔をしている。

対してロコンの方はさも当然のようにまじめな顔で答えた。

「傷がひどかったので、“癒しの炎”を使わせていただきました。たぶん、明日の朝には目を覚ますと思います。」

「ホントに!？」

「え、ええ……多分ですが。」

思わず大声を上げてしまった。いや、心配だったからつい……じゃなくって!

「あ、ありがとうございます!」

「いえいえ、お役にたてたならおれ……いや、わたしもうれしいです。さて、今度はあなたの番ですね。」

そう言って同じように目を閉じると、どこからともなく仄白い炎が出現し、私の体を包み込んだ。

タイプ上の関係で炎は苦手な私だが、その炎は触れても熱くはなく熱気も感じない。むしろ冷たさを含むオーラを感じられ、それがとても心地よく感じた。

「……ふう、どうですか？」

「すごい……本当に楽になりました。」

体の中にとどまっていた疲れが一気に放出されたというか、伸びをした後のような感覚を覚える。
すごく、すっきりした。

「ありがとうございます。」

「いえいえ。」

照れくさそうに頭を掻くロコン。私も自然と笑顔になった。
あ、そういえば

「そういえば、名前はなんていうんですか？」

「あ、まだ名乗ってませんでしたね。わたしはセイジと言います。」

「セイジ、さん……。私はヒナタつて言います。そっちのヒノアラシはカズキです。」

「わたしはピカチュウよ。で、こっちがナエトル。」

「ヒナタ殿にカズキ殿。そして、ピカチュウ殿とナエトル殿ですね。よろしく願います。」

では、今日はもう遅いですし、ここでゆっくり休んでいってください。」

「ありがとうございます！」

なんだかお世話になりっぱなしで申し訳ない。そう思いつつも当て

もないのでお言葉に甘えさせてもらうことにする。

「あ、そういえば」

と、何かを思い出したように声を上げたのはセイジだった。そして、続けて発せられた言葉に私は言葉を失うことになる。

「ピカチュウ殿とナエトル殿はどこの世界から来たのですか？」

『…………え？』

これには私だけでなくピカチュウ達も驚いたようだ。その丸い目をさらに丸くし、きよとんとした様子でセイジを見つめている。

「セイジさん、それはどういう……………」

「あなた方からはこの世界のものではない異質な気が感じ取れます。この世界のものでも過去や未来から来たものでもない、まったく別の気配。それを踏まえると、こことは別の空間からやってきたという結論が妥当だと思っただけですが。」

別の空間…………？ということは、ピカチュウさんとナエトルさんは俗に言うパラレルワールドと呼ばれる世界から来たということ！？

「そんなこと言われても、ワタシ達はただこの依頼書に書かれた場所に行っただけで」

「依頼書？」

取り出された依頼書は、会った時に見せてくれた依頼人がフィン

である謎の依頼書。

セイジはそれを見た瞬間、目を大きく見開いた。

「フィノン様……。なるほど、あなた方は特別な存在のようですね。」

うんうんと頷きながら納得するセイジ。しかし、私達にはちんぷんかんぷんだった。

特別な存在？ 一体どういうこと？

「詳しいことは明日お話しします。明日になればおじい様もいるでしょうし、おじい様の方がよく知ってると思うので。」

過去へのタイムスリップ。リヒトの裏切り。そして、別の空間から来たというピカチュウとナエトル。

今日一日だけで様々なことが起き、頭の中がいっぱいになりそうだが、最も気になっているピカチュウとナエトルの存在。私は知らず知らずのうちにいるいろいろな質問を問いかけていた。眠りに落ちる、その時まで

第五十五話：ひとまず休息（後書き）

今回はほとんど移動場面でした。

最後の方強引になってないか心配です（汗）

第五十六話：心の悪魔（前書き）

第五十六話完成です。

第五十六話：心の悪魔

ヒナタ達が眠りについたその頃、村の入り口で別れたりヒトは一人山の中を歩いていった。

傾斜が激しく、危険な場所も多いこの山に月明かりだけが頼りの夜に踏み込むのは通常は自殺行為だが、それでもリヒトにはこの山修行の山を登らなければならない理由があった。それは

「はあはあ……やっと見つけたぞ、ムゲン。」

やっとの思いで山頂にたどり着くと、一匹のネイティオがこちらに背を向けて月を眺めていた。

リヒトは肩で息をしながらも懐から氷牙を取り出すとその切っ先を向けた。

「ほお、お主の方から会いに来るとは思いなんだ。あの御嬢さん方と一緒に村へと足を踏み入れていると思うたが。」

「……村全体に結界を張り、おれを退けたのは貴様の仕業だろうが。」

ネイティオ　ムゲンは全く動じた様子もなく振り返ると、わずかに微笑を浮かべた顔で剣を向ける。ピカチュウを見据える。

その様子に苛立ちを覚えたのか、剣を握る手には自然と力が入っていた。

「確かに。間違っただけに敵に入られたらたまったものではないからのお。」

「このチキンが……」

「して、わざわざわしに会いに来たということは、何か目的があったからじゃろっ？それとも、わしに戦いを挑みに来たのかのお。」

舌打ちをして小さくつぶやいたリヒトは不機嫌そうに表情をゆがめながらも剣を下ろすと、それを懐に戻した。そして、一呼吸開けてから静かに語る。

「貴様なら知っているはずだ。心の中に巣くう“悪魔”の存在を。」

「……ルナティックのボス　アルテルが虚無より生み出した、心の闇を具現化した存在、じゃな？」

「そうだ。奴は自分に逆らうポケモンが出ないように心の中に悪魔を宿らせ、正義という邪魔な代物が表に出ないように抑制している。」

「ふむ。じゃが、お主は“悪魔”とやらに操られているようには見えんがのお。」

「だが、おれの中に存在しているのは事実。スカイヤガランのように“完全な正義”ではないおれのような奴には振り払うことができないんだよ！」

普段の冷静さが欠け、大声を上げるリヒト。その必死の訴えが通じたのか、ムゲンはパチパチと目を瞬かせると、驚いた様子でリヒトに聞いた。

「まさかお主　　わしに悪魔を浄化させる方法を聞きに？」

「……そうだ。」

力なく膝をつきつつむいたリヒトの声はとても悲しそうだった。

「悪魔が存在する限り、おれはヒナタを助けてやることはできない。ルナティックの目的を阻止できない。悪魔を浄化しない限り、おれは奴の　アルテルの操り人形だ……」

リヒトは姿勢を整え正座すると、地面に頭が付くくらい深く頭を下げた。

「頼む、教えてくれ！」

「ふむ、まあ、なんとというか……」

そんな様子に戸惑いを隠せないのかあいまいな言葉を並べるムゲン。四天王の頂点に立つ男が土下座までするとはのう。じゃが

「とりあえず顔を上げい。わしが悪者のようじゃ。」

「教えてくれるのか？」

「うむ、まあ、そこまで頭を下げられては無下にも扱えまい。」

その言葉を聞き目を輝かせたりヒトは、すつくと立ち上がってさらに問い詰める。

「なんだ？その方法はなんなんだ？」

「とにかく落ち着きなさい。」

まるで駄々をこねる子供をあやすようにその翼で頭をなでると、リヒトは一瞬にしておとなしくなった。

ムゲンは一度咳払いをするとそつと口を開いた。

「お主ならすでに気づいていると思うたが……」

「御託はいいから早く話せ。」

「せつかちな奴じゃのお。では、わしなりの仮説じゃが、その方法を教えよう。」

ゴホン、と一度咳払いを挟み、話し始めた。

「お主が言う“悪魔”とはの、“心の弱さ”のことじゃ。」

「……“心の弱さ”？」

「さよう。ポケモンでも人間でも誰しも得意不得意がある。それと同じように心というものは強さと弱さ 光と闇とも言えるのを併せ持っているじゃ。そして、その均衡がどちらに傾いているかによって善悪は分けられるとわしは考えておる。」

「……つまり、悪魔という巨大な闇のせいで善意が失われ、悪意に満ちた心を支配しているということか？」

「おおよそはな。じゃが、お主の言うスカイのように正義に目覚めたものもいる。それはつまり、心の強さが悪魔を凌駕したということ

とじゃ。……もう、わかるじゃろ？」

強力な力を打ち消すにはそれを凌駕する力をぶつけなければいい。つまり、心に満ちる悪を浄化するにはそれに勝る正義の心をぶつけなければいいのだ。

「……おれにはできない。」

「そんなネガティブな思考回路では無理じゃろうな。 じゃが、お主の場合は例外が生じている。」

「なに？」

さりげなく返しつつも話を進めると、ムゲンはキョロキョロと辺りを見回し始める。

意味深な言葉に首を傾げているリヒトをよそにムゲンは歩き出すと、近くにあった岩に触れた。

「お主、これを十万ボルトで砕いてみよ。」

「……は？」

突拍子のない注文にぽかんと口を開ける。

こいつ、なんのつもりだ？

「なんじゃ？できんのか？」

「……馬鹿にするな。十万ボルト！」

リヒトの体から勢いよく放たれた一筋の電撃は夜の闇を切り裂きな

がら直進すると岩に直撃した。

「……………やはりの。」

「……………」

岩は砕かれ木端微塵……………ということにはならず、あたった場所にわずかな黒い焦げ跡を残すにとどまっていた。電気タイプの中でも強力な技の部類に入る十万ボルトならば、ある程度使いこなせているポケモンならこれくらいの岩は難なく砕くことができるだろう。それができなかつたということは

「お主、技を満足に使えんのじゃろう？」

「……………なぜ、わかつた？」

そう、リヒトは七星剣という強力な武器を使える半面、ポケモンなら誰しもが使えるはずの“技”を扱うことに関しては全くの素人。七星剣の存在がなかつたら普通のポケモンと互角か、あるいはそれ以下かもしれない。

「お主の今までの行動を見て、というのもあるが、確信に至ったのはお主の気からは悪意をほとんど感じ取れんかった。結論から言ってしまうえば、お主の正義は“悪魔”を凌駕している。」

「なん、だと……………？」

思ってもみなかった発言に大きく目を見開くリヒト。

どういう、ことだ……………？おれがスカイ達と同じく、悪魔を凌駕しただと？ならばなぜ

「そんなわけがあるか！おれの心に悪魔がいるということとは、貴様の張った結界を通れなかった時点で明らかのはずだ。おれはまだ、“悪魔”に打ち勝つてはいない！」

「いいや、お主は悪魔に打ち勝つておる。ただ、お主には決定的な力が不足している故、完全に浄化できていないだけじゃ。」

「決定的な力……？」

“悪魔”を断ち切るのに必要な力が不足している。それは戦闘においての戦力などの力ではなく、もっと根本的な力。他のポケモン達にできてリヒトにできないこと。つまり

「お主の中に宿る“悪魔”を打ち消す方法。それは 技を習得することじゃ。」

「……………」

「技とは、いわばポケモンの基本的な潜在能力。一見関係ないように思えるじやろうが、技を使えるのと使えないのでは心の余裕に大きな違いが出る。お主はそこに付け入られたようじゃな。」

長い沈黙が流れる。

今まで、技が使えないことに何の不便も感じなかった。技を犠牲にして手に入れた七星剣があれば何でもできたから。だから、技が使えないことがこれほどまで苦痛になるとは思ってもみなかった。技が使えないせいで、ヒナタを守れない。技を使えないせいで友達を守れない。……そんなのは嫌だ！

何が何でも技を習得する。そして“悪魔”を断ち切る。それが

あいつらを守る最善の策！

「……決意は固まったようじゃの？」

「ああ。」

「うむ、よい返事じゃ。頑張るのじゃぞ。」

そう言ってムゲンはリヒトに背を向けると、閉じていた翼を広げ離陸の準備をした。

「どこへいくつもりだ？」

「なに、家に帰るだけじゃよ。この老体に寝不足はちときついものがあるからのお。」

疲れたように目を細めるが、どう見ても口元が緩んでいる。絶対嘘だろ……。

それを見るだけでなんだかムツとした。

「今のお主に害はないようじゃからの、特別に村へ入れるようにしておこう。何か困ったときは来なさい。お茶の歓迎くらいはできるじゃろつ。」

「いらん。」

「ほっほっほ。それならそれで構わんがな。では、また逢うこともあるじゃろつ。さすればじゃ。」

飛び立ったムゲンはまっすぐ村へと向かって進んでいき、やがて夜

の闇にまぎれて見えなくなった。

鳥のくせに夜に飛べるのか。エスパーなのだからテレポートで戻ればいいものを……

リヒトはムゲンが飛んで行った方を見ながら心の中でそう思った。

翌日。山に隠れていた太陽が姿を現し、その光がやさしく大地を照らし始めた頃、私は目を覚ました。

「……ここは、どこ？」

薄く開いた目に映りこんできたのは知らない天井。

私、どうしたんだっけ……？ 確か

「お目覚めですか？」

「ッ！？」

記憶を手繰ろうと考えようとした時、突如横から聞こえた声に思わずビクツとなった。

だ、誰　！？

「その様子だと怪我はもう大丈夫そうですね。」

「え、あの……」

そこにいたのは一匹のロコン。驚きのあまり一瞬思考が停止するが、

そのロコンの顔を見て昨日の記憶が呼び起された。そうだ……私、過去の世界に……。あつ、そうだ！

「カズキは、目を覚ましましたか？」

「ええ。先ほど目覚められて、今は朝食を食べ終えて庭にいるかと思われませんが。」

「え、朝食……？」

ということばはまさか……寝坊、した？う、うう……なんだかすごく恥ずかしい。かあつと顔が熱くなるのを感じる。

「まあ、疲れていたようですし、寝坊してしまうのも無理はありませんよ。それに、寝坊したとしても誰も咎める人はいませんから。」

「いや、そういう意味じゃないんだけど……」

私は顔をぱしばしと叩くと眠気を覚ますと同時に顔のほてりを紛らわす。

とにかく、早くみんなのところへ行かなくちゃ！

「あ、朝食を用意してますのでこちらへどうぞ。それと食べ終えたらおじい様から皆さんに話があるそうですよ。」

「え、でも……」

「さ、こっちですよ。」

半ば強制的に前足を掴まれ、連れて行かれてしまつ。

い、意外と強引ね……

何が何だかわからぬうちに朝食を終えると、カズキとの再会もそこそこに私達四匹はある部屋へと案内された。そこにはこの村の長だというネイティオ　ムゲンが待っていた。

「うむ、皆集まったようじゃの。」

私、カズキ、ピカチュウ、ナエトル、そしてセイジ。それぞれに視線を向けると厳かに口を開いた。

「話というのは、お主が持っているその依頼書のことについてじゃ。」

「これのこと？」

ムゲンの言葉にピカチュウはカバンから例の依頼書を取り出す。それを見たムゲンは大きくうなずいた。

「さよう。そしてそれは、旧友であるフィンオン殿が書いたものじゃ。」

「それも、助けを求める内容でな。」

「助けて……」

「それってどういうこと!？」

これにはピカチュウ達だけでなく私も驚いた。

あの何も書かれていない奇妙な依頼書が助けを求める内容だった? ということは

「まさか、ルナティックと何か関係があるのですか？」

「いや、違う。」

「え……？」

ルナティックじゃない？だったら何の目的で……
思わず考え込んでしまつ。と、そこに

「ねえ、ルナティックってなあに？」

つんつんと私の肩を小突きながら小声で聞いてきたのはナエトルだった。

そうか、ナエトル達は別の世界から来たからルナティックのことを知らないんだっけ。

「世界を我が物にしようと思論む組織ですよ。」

「うう、悪い奴なんだね。」

答えたのは一歩後ろで話を聞いていたセイジだった。
それを聞いたナエトルは少し怒ったような口調で返す。

「ゴホン。」

「あ、すみません。」

ムゲンの咳払いで慌てて姿勢を正す私達。そういえば話の途中だったわね。

「でもさ、ルナティックじゃないならなんなの？」

カズキの問いに皆の視線がムゲンに集まる。

「うむ、それはの」

一度目をつむり、一時の間が開く。ゴクリ、と唾を飲み込む音が聞こえた。

ムゲンは静かに口を開く。

「それは　ルナティックとは別の新たな勢力じゃ。」

第五十六話：心の悪魔（後書き）

今回はちょっと重要な話になった……のかな？

第五十七話：新たな勢力（前書き）

第五十七話完成です。

第五十七話：新たな勢力

「それは　ルナティックとは別の新たな勢力じゃ。」

しんと静まり返る部屋。その衝撃の言葉に私達は声が出せなかった。そんな勢力があることなどウィン達からは一度も聞いたことがなかったから。

「　半月ほど前でした。奴らが姿を現したのは。」

と、沈黙を破りセイジは一步前になると、静かに説明を始めた。

「奴らの目的はまだわかりませんが、ルナティックと同様強奪等を繰り返しているらしいです。しかし、殺害より支配を欲する傾向があり、奴隷として使っているとか。クレアとフルスの情報によれば、西の方で村が一つ占領されたとか。それで　」

「ちよちよちよ、ちよっとまってよ!」

淡々と説明を続けるセイジに手を上げたのはひどく慌てた様子の子ナエトルだった。

「それってつまり、ボク達にそいつらを倒して、っていうことだよ
ね!？」

「　まあ、そうなりますね。」

「む、無理だよ!絶対無理!!そんな恐ろしい奴と戦うなんて無理

だつてえー!!」

「ナエトル……」

若干涙声を交えながら必死に否定するナエトル。その姿にピカチュウですらあきれた顔をした。

「確かに危険な依頼じゃ。下手をすれば命を落とすこともありうる。そんな相手に、この土地の地理もよく知らぬ者だけに任せるのはわしとて反対じゃ。」

「じゃあ、どうするの?」

「まずはレンレン村に向かうがよい。この依頼主であるフィンオン殿が収める村じゃ。」

何の策もなしに異世界の者に出すほどフィンオン殿も愚かではない。会って話せば、力になってくれるじやろう。」

「レンレン村、ねえ……」

ピカチュウはそつとつぶやくと、相変わらず怯えた様子 of ナエトルに近寄り視線を合わせた。

「じゃあ、とりあえずそこにいこっか。」

「えっ、でも」

「ここにいたって何も始まらないでしょ?そのフィンオンって人なら、元の世界に戻る方法も知ってるだろうし。それに」

ここで一度言葉を切る。そして

「困っているポケモンを助けるのが、ワタシ達探検隊でしょ？」

「あ……………」

探検隊は未知の場所を開拓し、そこに眠る財宝を見つけるだけが仕事ではない。困っているポケモンから依頼を受け、それを助けるのも仕事の内だ。

その言葉にナエトルはハツとしてピカチュウの顔を見る。

「そう、だよ。ごめん、ボク大切なことを忘れてたよ。」

「うん、それでこそナエトルだよ。」

やる気を取り戻した様子 of ナエトルを見て満足げな笑みを浮かべるピカチュウ。その笑顔につられてか、ナエトルもまた笑みを浮かべた。

「（この二人、お互いに信頼しあってるんだね。…………私は、どうだろう？）」

私はふと隣にいるカズキを見る。しかし、すぐにふつと笑って視線を外した。

大丈夫。私はカズキを信じられる。何よりも大切な、パートナーだから

「レンレン村にはセイジが案内する。こちらの勝手な都合ですまんが、どうか力を貸してくれ。」

「うん、わかってるよ。」

「では早速行きましょう。日が暮れないうちに、ね。」

「よろしくお願いします、セイジさん。」

「ヒナタ、カズキ。少し残りなさい。」

ムゲンの話が終わり、準備のために部屋を出ていこうとしたところ、なぜか私とカズキだけ引きとめられた。すでにピカチュウ達は先に行っており、この部屋に残るのは私達とムゲンの三匹だけだった。な、何かしら……？引きとめられたことに少し緊張しながらもムゲンに向き直る。

「お主らは、この世界の未来から来たポケモン。そうじゃな？」

「は、はい……」

威圧感とも取れるその真剣な態度に自然と背筋が伸びる。な、何かまずいことがあるのかしら……？

「お主らにはすぐにこの時間から立ち去ることを勧める。」

『え……？』

思わずぼかんと口を開けて黙り込んでしまう。一瞬意味が分からない

かった。

「それって……」

「お主らはわしらの希望の光じゃ。お主らの使命は他にあるはず。」

使命。星の停止を食い止めることが私達の使命だ。それは承知している。でも

「……私はピカチュウさん達と一緒にいきますよ。」

「今までのように、レジスタンス達が守ってくれるとは限らぬぞ？
危険な」

「危険は承知です。でも、困っているポケモンが目の前にいるのに、それを見捨てて帰っちゃうなんて私にはできません！」

「ヒナタ……」

ピカチュウだって言っていた。困っているポケモンを助けるのが探検隊の務めだって。そして私は探検隊だから！

「ぼ、僕だって同じだよ！困ってるポケモンを助けたいんだ！」

若干声を裏返らせながら言ったカズキの体は少し震えていた。
怖いのは私も同じだ。

「……そうか。」

ムゲンは私達に背を向け、わずかに上を見る。そして、小さくため

息をついた。

「そこまで言うなら仕方がない。行くがよい。」

『ムゲンさん！』

「ただし 無茶するでないぞ？」

その瞳の奥にわずかな不安の色をにじませながら振り返ったムゲンは、その翼で私達をやさしく撫でた。

「気を付けてな。」

「はい！」

「ありがとうムゲンさん！」

私達は一度頭を下げて部屋を出る。
その足取りはとても軽かった。

「…………クレア。フルス。」

ヒナタ達が退出し一匹となったムゲンは、小さくつぶやくように私
を呼んだ。

それに反応し、二つの影がムゲンの前に現れる。

「どうした、ムゲン。」

ムゲンの右に立つ影。青を白を基調として、まるで戦闘機のような
体躯をしたポケモン。ラティオスは静かに問う。

「うむ。ちと頼まれてほしいのじゃが。」

「また情報集め？クレアもう飽きちゃったあ……」

ムゲンの左に立つ影。ラティオスと同じような外見だが、青ではな
く赤と白を基調としたポケモン。ラティオスはまるで苦虫を噛み
潰したような顔であからさまに嫌そうな顔をする。

「いや、今回は護衛じゃ。それも秘密裡でな。」

「誰の？」

「ヒナタとカズキだ。」

「あー、なるほどねえ。」

先ほどまでいやそうに歪めていた表情がヒナタとカズキの名前を聞
いた途端嘘のように真剣なものになる。ラティオス。フルスも表
情を険しくした。

「今回は相当重要な任務のようだな。」

「案ずるな。彼女らを守りたいと願うのは皆同じ。仲間が多い。じ
やが、念には念を入れて、な。」

「なるほど。」

「ねえねえ、無事に終わったら何かご褒美くれる？」

「ああ、好きなだけフルスに抱き着くがいいさ。」

「ちょ、ムゲン!!?」

「わあ、ありがとう クレア頑張るね」

子供のようにしゃべりクレアに対して、ご褒美の対象とされたフルスはたじたとする。

そんなフルスの様子をいつの間にかやけた顔になったムゲンは面白いものを見るようにくつくつと笑う。

「なんじゃ？妹に抱かれるのが不満かのお？」

「いや、そういうわけじゃないが……って違う!!」

「素直になろうよお兄ちゃん」

「こ、こら、抱き着くなあ!!」

べたべた抱き着く妹に顔を赤くしながら反抗する兄。当初の目的を忘れていたのではないかと心配になるほどにぎやかな二匹を、ムゲンはやけた表情を浮かべながら見つめていた。

「え、ええ。」

なんというか、鈍感(?)なのかな……?うまく言えないけど。

「でも、結構距離があるのね。うう……」

距離がある。つまり夜の道を歩くこともあるということだ。これが遠征とかだったら気にならないんでしょうけどね……

「……おれが送ってやるうか?」

「ッ!?!」

まるで自分の考えを見透かしているかのような発言にビクリと体を震わせる。が、それは杞憂に終わったようだ。

それより驚いたのは、村の入り口にたたずむ黒いマントを纏ったポケモン、そう

「り、リヒト!?!」

「……………」

近くの木に背を預けていたリヒトは私達の姿を認めるとゆっくりと近寄ってきた。

「むっ、今までどこ行ってたのよ!?!」

「貴様には関係ない。」

「あのねえ……」

「ま、まあまあ……」

なんだかいきなり険悪な(?)ムード。こ、こんなに仲悪かったっけ？

ナエトルとカズキがそれぞれをなだめる様子を見ながら私は苦笑した。

「なぜお前がここにいるんだよ？何度来てもお前のような邪悪な奴にこの村は」

「黙れ。貴様に用はない。」

「なんだと!？」

「せ、セイジさん落ち着いて……」

うう、セイジさんまで……。確かにリヒトはルナティックだから仕方がないんだろうけど、別に襲いに来たわけじゃないみたいだし。

「さっき、おれが送ってやるうか?って言ったわよね?どういうこと?」

「そのままの意味だ。おれなら、貴様らを一瞬でレンレン村まで連れて行ける。」

「そうやっておれ達を殺す気だろ!」

「貴様は黙ってると言ったはずだ、セイジ。」

「うぐっ……」

瞬時に出現させた氷牙をのど元に突き付けてくるリヒトにセイジは黙らざるを得ない。

な、何もそこまでしなくても……

「おれは貴様らを殺す気もないし、この村を襲う気もない。ヒナタの力になりたいだけだ。」

「え……？」

最後、なんて言ったの？

「あの……」

「だがその前に、ピカチュウ。」

「……なによ。」

リヒトの威嚇に一瞬怯むものの気丈にふるまうピカチュウ。そんなピカチュウを見て、リヒトは剣をおさめるところで止まった。

「おれと、バトルしろ。」

第五十七話：新たな勢力（後書き）

何気に新キャラ登場ですw

クレア

「よつろしく〜！」

フルス

「よろしく頼む。」

正確には名前だけは登場してましたけどねw

〜思い出の歌〜で登場させようと思ってたのにいつの間にかこっちで登場していました

第五十八話：リヒトVSピカチュウ（前書き）

第五十八話完成です。

第五十八話：リヒトVSピカチュウ

「おれと、バトルしろ。」

「……はあ？」

リヒトの思わぬ発言に目を丸くするもすぐに反論するピカチュウ。

「なんでワタシがそんなことしなくちゃならないのよ？」

「それは………」

口ごもるリヒト。困ったような表情を見せるリヒトも珍しい。しかし、なんでいきなりバトルしようだなんて……？

「……今の實力を見極めたいんだ。頼む。」

「實力、ねえ………」

ポリポリと頬を掻きながら困ったように表情をゆがませる。

そういえば、ピカチュウさん達って探検隊なんだよね……？
私の心に好奇心の種が生まれる。リヒトがどういふつもりか知らないけど、ピカチュウさんの實力は見てみたいかも。

「いいんじゃないですか？バトルには交流を深めるといふ意味もありますし。」

「え？うーん、確かにそうだけど………」

いつの間にやら口についた言葉。無意識に手助けしてしまったようだ。ちらりとこちらを見たりヒトが一瞬口元をゆるませるのが見えた気がする。

「……まあ、別にいつか。いいよ、バトル。」

「ではついて来い。この先だ。」

そう言っただけ私達に背を向けるとスタスタと歩いて行ってしまふ。私達はその後を足早に追いかけた。

行き着いたのは、昨晚通った草原の近く。昨日は金色の絨毯を敷き詰めたような神秘的な光景だったが、今は夕日ではなく太陽の日差しを浴びてキラキラ輝いて見える。優しく吹き抜ける風に耳を躍らせながら前に出るピカチュウ。その目の前には、マントを靡かせながらたたずむりヒトの姿。

「来たか。では、始めるか。」

「望むところよ。言っとくけど、ワタシ強いからね?」

「実力を確かめるには好都合だ。」

二匹の間にバチバチと火花が散るのが見えるようだ。お互いやる気

満々である。

私達は邪魔にならないように少し離れた場所にある岩の上に腰を下ろした。

「ねえ、ピカチュウって強いの？」

「もっちろんだよ！」

カズキが何気なく聞いた質問にナエトルは二つ返事で答えた。

「ボク、前に宝物を盗られちゃったことがあってね。その時一緒に取り返してくれたのがピカチュウだったんだあ。それがきっかけでボク達は探検隊を結成したんだよ！」

「そうなんだ。僕と一緒にだね！」

「え？」

「僕も同じように宝物を盗まれちゃって、ヒナタと一緒に取り返してくれたんだ。ヒナタは臆病だった僕に勇気をくれたんだよ！」

「カズキもそうなんだ。なんだかボク達、似た者同士だね！」

「そうだねっ！」

なんだか二匹で盛り上がっている。バトルのこと忘れてるんじゃないかなあ？

蚊帳の外状態になった私はいつの間にか始まっていたバトルに視線を移す。ちなみにセイジは村で待っているそうだ。まあ、リヒトのことあんなに嫌ってたからねえ。

「電光石火！」

「アイアンテール！」

突っ込んでくるリヒトをすんでのところでかわしカウンターを決めるピカチュウ。しかし決定打にはならず、リヒトの頬をかすめるだけにとどまった。

「やるな。」

「言ったでしょ？強いつて。」

今のところ互角の戦いを見せる二匹。リヒトの強さを知っていた私は驚きを隠せなかった。

二匹とも冷静に状況を見極めて技を繰り出してる。でも、ちょっと気になることがあるのよね……

私の視線の先にいるのはリヒト。フードは取っているものの全身をすっぽりと隠せるほどのマントを纏っていて動きにくかったりしないのだろうか？普通素早さが半減しちやいそうだけど……。さっきのアイアンテールだってマントのせいでかわしきれなかったように見えるし。

それに

「（なんで、剣を使わないんだろう？）」

私が見てきた限り、リヒトは戦うときいつも剣を構えていた。でも、今は純粹な技のみで戦っている。一体どうしたのだろうか？

「そろそろ決めるよつ。十万ボルト！」

「ならばこつちも十万ボルトだ！」

お互いの体から高圧の電気が入り、一筋の電撃が放出される。それは二匹の間で衝突し、激しい閃光を辺りにまき散らした。が、それも一瞬で終わる。

「くっ……」

リヒトの電撃が徐々に押され始めると、それはやがてリヒトの元に押し返されピカチュウの電撃が直撃した。電気タイプ故ダメージは軽いものの、昨晚ムゲンに会いに行くために起伏の激しい修行の山に登り、ムゲンが去った後もずっと練習を重ねていたりヒトにとっては少々痛手かもしれない。

一方ピカチュウは簡単に押し返せたことに訝しげな表情を浮かべるが、今はバトル中だと割り切ると距離を詰めてアイアンテールを仕掛けた。

「くっ、電光石火！」

電撃を受けながらも何とか回避するリヒト。荒い呼吸で疲れているのがうかがえる。

「一か八か、かみなり！」

ある程度の距離をとって切り返すと、体中の電気をかき集めほつぺたの電気袋から放出した。

それを見てピカチュウも応戦しようと思える。が、しかし

クイツ

ピカチュウめがけて放たれたかみなりは途中で進路を変えまったく別の方向に飛んで行ってしまう。
そして、その先には

「へ………？」

バチバチバチイ！

「あばばばば！?!?!?!」

「なんでボクまでえ!!!?!」

不運にもそこには楽しそうに話しているカズキとナエトルがいた。
かみなりの直撃を受けた二匹はプスプスと黒い煙を上げながら仰向けに倒れこむ。

「だ、大丈夫？」

少し離れていたせいかな難を逃れた私は二匹の顔を覗き込む。
うーん、ちよつと焦げてるけど大丈夫、よね？

「ヒナタ！怪我はないか？」

と、そこへ文字通り飛んできたリヒトが私の体をペタペタ触ってきた。

あの、リヒト………？

「わ、私は大丈夫だけど、カズキとナエトルが………」

「よかった。怪我はないようだな。」

……「二匹のことはスルーですか。私のことを心配してくれてるのは嬉しいけど、ちょっと酷いような。」

「ねえ、ちょっと。」

と、バトルが中断されたのが不満だったのか、ピカチュウが歩み寄ってきた。

それを見たりヒトはすぐさま立ち上がりピカチュウの前に立つ。

「すまない。さっそく続きを……」

「もしかして、手加減してる?」

リヒトの言葉を遮り強い口調で迫るピカチュウ。それを聞いたリヒトはわずかに目を見開くと、その視線をピカチュウから外す。

「……いや。」

「まさかあんなので本気なんて言わないよね? 十万ボルトがあんな弱いわけじゃない。電気ショック並みよ?」

「……………」

「それにかみなりだって軌道が安定してないし、威力も普通のかみなりより低い。ワタシを馬鹿にしてるの?」

「ち、違う! おれは……………」

黙り込むリヒト。その様子を見て、ピカチュウの頭にある考えが浮かんだ。

「……もしかして、電気容量が少ないんじゃない？」

「……ああ。」

「やっぱり。」

そっぽを向いて答えるリヒトを見て、ピカチュウは腰に手を当てふうと息をつく。

「そんなんでよく探検隊やってられたわね？」

「……おれは探検隊じゃない。」

「え？」

「いや、なんでもないですよ！はい！」

リヒトのつぶやきに慌てて割って入る。

うう、まだ言い訳考えてないんだから探検隊ってことにしておいてよ……

ちらりとリヒトを見やるとしゅんと肩を落とした。

「……頼みがある。」

「え？」

ピカチュウが私の行動に訝しげな表情を浮かべる中、リヒトの声で

視線がそちらに移った。

「おれを、鍛えてくれないか？」

『……はい？』

今、なんて言った……？

「貴様の言うとおり、おれは技をまともに使えない。だが、おれは何としても技を使えるようにならなければならない。」

「……なんで？」

「……悪いがそれは言えない。だが、どうか頼む。」

「うーん、どうしよっかなあ。」

頬をポリポリと掻きながら思索するピカチュウ。
それにしても、技が使えないなんて初めて知ったわ。特に電気技の威力が低いみたいだけど、ピカチュウさんはどうする気なのかしら？

「うーん、まあ、鍛えてあげてもいいけど……」

「本当か!？」

「でも、鍛えるからには手加減しないからね？」

「手加減など無用だ。感謝する。」

「どういたしまして。」

うーん、なんだか凄いことになってきたような……。
半黒焦げ状態のカズキとナエトルにオレンの実で応急処置をしつつ、
内心で苦笑していた。

第五十八話・リヒトVSピカチュウ（後書き）

だんだんとリヒトのキャラがおかしくなってきたるような気がするw

リヒト

「おい。」

第五十九話：特訓（前書き）

第五十九話完成です。

第五十九話：特訓

技をまともに使えないことが分かったリヒト。そんな彼を特訓するべくピカチュウが始めたのは、電気容量をアップさせるというものだった。

「いい？電撃っていうのは身体に溜めた電気を放出して繰り出すものなの。つまり、身体に溜めこめることができる電気容量が多いほど強力な電撃を使えるってわけ。」

「早く始めてほしいんだけど……」

「説明は最後まで聞く！鍛えてあげないよ？」

「うっ、すまない……」

なんだかりヒトが完全にピカチュウの言いなりになってるような……。クールなイメージだったリヒトの姿がまるでない。

「んで、電気容量を大きくするには、より強力な電気を体に溜めこめるようにするために高圧の電気を浴びて慣れること。つまり」

言いながら尻尾をリヒトにぴたっとなげかけると思いっきり放電した。その電流は尻尾を伝ってリヒトに直接流れ込んでくる。

「ッ！？」

いきなり流れてきた電流が体中に走り痛みを生む。それに耐えきれず、リヒトは思わず飛び退ってそれを逃れた。

「な、なにをする!?!」

「こつやって高圧の電気に耐えるようにするの。ほら、強くなりた
いなら逃げない。」

「あ、ああ……。」

わずかに顔をひきつらせながら戻ってくるリヒト。

技を強くするためとはいえ、あの放電は相当堪えているはず。大丈夫
かしら?

「それじゃ、もう一回行くよ?」

「ああ、来い!」

先ほどと同じようにピカチュウの電撃がリヒトの体に直接流れ込む。
しかし今度はリヒトは逃げようとせずひたすら耐えていた。

全身の毛が逆立ち、バチバチと音を立てて渦巻いている。今リヒト
の体に触れたら感電することは間違いないだろう。時折うめき声を
あげるリヒトを心配しながらも私はその様子を静かに見守っていた。

しばらくこの特訓を繰り返しているうちに時は過ぎ、いつの間にか
日没も近づいてきた頃

「ま、まだやるのかな……？」

「ピカチュウ、さすがにやりすぎなんじゃ……」

途中で復活したカズキとナエトルと一緒にその様子を傍観していた私だったが、さすがに心配になってきた。

「ふう……これくらいで大丈夫かしら？」

「ぜえ……ぜえ……」

そう言ってやっとピカチュウが放電をやめた時にはリヒトはかなり疲弊していた。

両手を地面につき、激しく肩を上下させていかにも苦しそうな表情を浮かべている。特訓の影響か、体中からバチバチと電気が爆ぜる音が聞こえる。

「リヒト、大丈夫？」

「心配、するな……。どうってこと、ない……」

心配になって近寄ってみると苦しげに呻きながらも何とか立ち上がった。

手を貸してあげたかったけど、今のリヒトに触ったら私も感電しちゃういそいで触れない。

「ピカチュウやりすぎだって。」

「そおかなあ……」

リヒトほどではないが若干息を切らせたピカチュウは困ったように笑う。

「まあでも、これで少しは電気容量が上がったはずよ。」

「そうか……」

せめて回復だけでもと思って差し出したオレンの実のおかげで多少元気を取り戻したりヒトは自分の手を見つめる。握ったり開いたりしていると、体の中にピリピリした感覚が渦巻いているのを感じた。

「……十万ボルト!」

体の中に溜めた電気を凝縮し一気に解き放つ!

バトルの時、私達が座っていた岩めがけて放たれた電撃は狙い通りの場所に直撃し、粉々に打ち砕いた。

「これが、十万ボルトの本来の力……」

昨晩は焦げ跡を残すだけにとどまっていた十万ボルトが岩を砕くまでに強化されたことに驚きを隠せないリヒト。

慣れない高電圧にほったの電気袋に違和感を感じるものの、昨日まで罅を入れることすらできなかった岩を破壊できたことに呆然とした。

「うん。ちゃんと威力は上がっているみたいだね。」

「ああ。」

「でも、これはまだきっかけに過ぎない。今のは一時的に溜まって

いた私の電流を打ち出しただけで、マスターするにはまだまだ特訓が必要だからね？」

「わかっている。……ありがとうな。」

そう言って手を差し出すリヒト。その行動に一瞬目を丸くするものの、ふっと笑ってその手を握った。

「どういたしました。」

今までのリヒトからは想像もできない行動を私はぽかんと口を開けて眺めていた。

リヒトにも、こんな一面があるのね。

「いつまでも返ってこないと思ったらまだやってたのか……」

『えっ。』

と、突然背後からドスの利いた声が聞こえてきた。驚いて振り返ってみると、そこには

「せ、セイジさん……」

「まったく、あんまり遅いから何かあったのかと思ったよ。」

ふう、とため息をついたセイジはきつと眼を鋭くさせる。その視線の先にはリヒトの姿。

「皆さんに妙な真似してないだろうっな？」

「安心しろ。前にも言ったように、おれは貴様らを殺す気も村を襲う気もない。」

「ふん、どうだか。」

相変わらずリヒトのことを敵視している。なんでこんなに仲が悪いのかわからないが、私はその様子を見て苦笑するしかなかった。

「ねえ、日も暮れてきたしいったん村に戻ろうよ。」

「そだね。この時間から出発しても仕方ないし、ちょっと疲れちゃったしねえ。」

肩を回しながら歩き出すピカチュウ。確かにここにいっても仕方がないので私達も自然な流れでついていった。早く戻らないと夜になってしまう。

「そだ。リヒト、特訓ならいつでも付き合っただげるからね？」

「もう少し手柔らかにしてくれるなら頼もう。」

「あら、手加減なんていらないんじゃないの？」

「ふっ、そうだったな。」

なんだかんだ言っても結構仲いいわよね。

前を歩く二匹を見て、私はふとそう思った。

明るく日の朝。リヒトとともに一夜を過ごしたピカチュウ、ナエトル、カズキ、そして私は、今度こそレンレン村へ向かうため村の入り口に集まっていた。

昨日はリヒトと一緒に泊まると言い出したり、それをセイジさんがものすごく毛嫌いしたり、出発したはずの私達が戻ってきたのを見てムゲンさんが目を丸くしたり、部屋に向かう途中目の前にムゲンさんの弟子だというラティオスのフルスが突然現れて尻餅をついてしまったり、同じく突然現れたラティアスのクレアがいきなり抱きついてきて苦しかったり、なんだかいろいろあつてなかなか寝付けなかった。

これから凶悪な組織に挑むというのにまったく緊張感がないのが気にかかるが、緊張しすぎて普段通りの活躍ができなくては元も子もないのでこれはこれでいいかと割り切った。

「さて、連れて行ってやると言ってたけど、どうやって行くの？」

近道でも知ってるの？と訝しげな表情を浮かべながら問うピカチュウ。それはナエトルも同様のようピカチュウと肩を並べている。まあ、私には大体の予想はついてるんだけど。

「ああ、それは」

「皆さん待ってくださいーい！」

リヒトがいざその方法を言おうとした瞬間、それは突如聞こえた高い声によって遮られた。

その声に私達が振り返ってみると、村の方から一匹のポケモンが駆けってくるのが見えた。

腹から顎にかけてはクリーム色のやわらかな毛、背中から額にかけては紺色の毛に覆われ、ぴよこんと尖った耳にわずかに吊り上った瞳。そして、頭の上と腰元から上がる特徴的な大きな炎　マグマラシというポケモンだ。

「ふうふう……ま、間に合った。」

「あの、あなたは？」

何かを抱えて、しかも通常四本足で走るところを二本足で駆けてきたせいかたどり着いた瞬間息を切らせてへたり込んでしまった。応える余裕もないのか、何度か深呼吸を繰り返して呼吸を落ち着かせている。そして、しばらくしてようやく返事をしてくれた。

「あの、わたしはアキと言います。その……これを渡したくて。」

恥ずかしそうに顔を赤く染めながら渡してきたのは小さな包みだった。開けてみると、何やらピンク色の小さな木の実が入っている。

「モモンの実を乾燥させたものです。おまじないをかけてあるので効果は高いですよ。」

「あ、ありがとう。」

そう言ってほほ笑むアキに私は曖昧にお礼を言った。左耳にリボンをつけているし、多分女の子ね。

それにしても

私はもう一度包みの中を見る。モモンの実を乾燥させたというそれは小さく、形もいびつな丸い形をしている。

「（梅干しにしか見えない……）」

その物体を見た瞬間初めに思ったことがそれだった。

いや、別にモモンの実は好きだし、梅干しも嫌いっていうわけじゃないけど……。梅干しが甘いつていうのは今まで体験したことがないせいかあまり食べたいと思えない。

しかし、ここで露骨に嫌な顔をすることはできない。この子がだれかは知らないけれど、私達を心配してくれたということは確かだから。

「あ、アキ！？こんなところにいたのか！？」

と、素っ頓狂な声を上げて出てきたのはセイジだった。

ムゲンに事情を話したところ、リヒトがいるなら道案内は必要ないと言われ自宅待機を言い渡されたセイジだが、一体なぜここにいるのだろうか。

「アキ、家にいなきゃダメだろ？」

「で、でも……」

「でも、じゃない。さあ、帰るぞ。」

そう言ってアキの前足を掴むとそのままずると引きずっていった。しかし、途中でその足を止めると振り返って鋭い視線でリヒトを睨みつける。

「おれはまだお前を信用したわけじゃないからな。」

「信用されなくて結構。」

「ふん、次に逢った時は覚悟しとけよ？」

不満げな表情で言うだけ言うとさっさと戻って行ってしまった。

あのアキって子連れ戻しに来たのかしら？でも、なんのために？

「さて、とんだ邪魔が入ったが、さっそく行くとしよう。」

気を取り直して再度話し始めるリヒト。私はアキからもらった包みをバッグに入れ、向き直った。

「そだ、近道を知ってるんでしょ？」

「近道なんて知らない。一瞬で着く。」

そう言って懐からピンク色に輝く双剣　　胡蝶を取り出すとそれを目の前でクロスさせた。

「なにそれ、剣？つてどこから出したの！？」

「静かにしろ。それとできるだけ動くな。」

見慣れぬ物体を目にして目を丸くするピカチュウ。それを遮るように強めの口調でそう言うと、目を閉じ精神を集中させる。

「胡蝶の壱：“空間転移”。」

交差した剣の中央から薄紫色の膜のような物体が姿を現す。それは次第に大きさを増していき、リヒトの体をすっぽり覆うくらいの大きさになったところでブツンと分裂した。

ふよふよと空中を漂うそれはさらに分裂し、五つの丸い膜となった。

「な、なにこれ!？」

「動くな。」

得体のしれない物体に思わず逃げ出しそうになったナエトルをリヒトが止める。若干の威圧感を含んだその言葉は、ナエトルの動きを止めるには十分だった。

「転移対象、ピカチュウ、ナエトル、カズキ、ヒナタ、リヒト。」

まるで無重力空間に浮かんでいる水のようなその球体は、私達の体に触れると何の抵抗もなく全身をすっぽりと包み込んだ。

「転移!」

わずかに間を置き、クロスさせていた剣を一気に振りぬく。それと同時に私達の体を覆った球体が揺らめき、次第に薄れていった。身体が消えていく感覚。不思議と怖さは感じないが、やはりどこか違和感を感じる。しかし、そんな思考さえも消え去り、私達はミルト村を後にした。

第五十九話：特訓（後書き）

たった数時間特訓しただけで上達できたのは、リヒトの実力ですよ

ww

短すぎじゃね？という文句は受け付けません

リヒト

「短すぎだろ。」

ほ、本人から来た！？

第六十話：レンレン村へ（前書き）

第六十話完成です。

第六十話：レンレン村へ

視界は白く染まり、体は宙に浮いているような錯覚に包まれていた。しばらくの間そんな感覚が続いていたが、ふとした瞬間、浮遊感がなくなったと同時に何かに叩きつけられたような痛みが走る。

「いててて……」

いつの間にか視界は回復しており、うつぶせに倒れていた私はツルで打ちつけた部位をさすりながら起き上った。周りを見渡してみると、そこは先ほどまでいたミルト村の入口とは景色がまるで違う。まったく別の場所だった。

「じ、じじは……？」

「レンレン村の近くにある山　七宝山だ。」

そう教えてくれたのはいつの間にか私の隣に立っていたリヒトだった。

リヒトはおもむろに手を上げると、ある方向を指さす。

「そして、あれがレンレン村だ。」

その指が示す先には一つの村が存在した。

周りをぐるりと山に囲まれ、さらに目を凝らせば海まで見える。こんな閉ざされた場所にあったんだ。

「あれがレンレン村……」

「フィンンって人はいるかしら？」

気づけばピカチュウ達も私の横に並びその景色を見ていた。
一体いつの間に……

「じゃあ、さっそく行きますか。」

「ええ。」

フィンンってルナのお母さんだね？ 一体どんなポケモンなんだろう？

わずかに期待しつつ、私達はレンレン村に向かって歩き出した。

レンレン村へと足を踏み入れた私達は、リヒトの案内でフィンンが
住むという屋敷の到着した。

ミルト村で見たムゲンの屋敷と違い洋風で、ムゲンの屋敷とはまた
違う趣があった。

「それにしても静かね。」

「そう言われてみれば、確かに……」

キョロキョロと不安そうに辺りを見回すナエトル。確かに私もうす
うす感じていた。

村に入ってからここまでそれなりに歩いたはずだが、ポケモンの姿
は一度として見なかった。

「みんなまだ寝てるのかな？」

「カズキじゃあるまいし、そんなことはないと思うけど。」

「そ、そうだよね……」

「他の奴らはどうでもいい。貴様らはフィノンに会いに来たはずだ。」

先頭に行くリヒトがぶっきらぼうに言う。

まあ、リヒトにとっては本当はフィノンにすら会いたくないのだから。

「そんなことより、フィノンの家はここだ。早く入れ。」

「リヒトは入らないの？」

「……おれは外で待っている。」

そう言っただスタスタとどこかに歩いて行ってしまふ。ピカチュウはその様子にはあ、とため息をついた。

「なんなのかしら？まるでポケモンと逢うのを嫌ってるみたい。」

「だよ。ねえカズキ、何か知ってる？」

「うえ！？僕！！？」

いきなり話を振られたことに動揺したのか素っ頓狂な声を上げて後

ずさる。

「え、えーとお……ぼ、僕にもよくわからないや。」

「そ、それより早く入りませんか？」

これ以上カズキに任せておいたらリヒトがルナティックであることをしゃべってしまいそうだ。

そう思い、私は屋敷の扉に触れる。すると

キィイ……

「え？きやつ！？」

いきなり扉が打つ側に開き、私はそのまま倒れこんでしまった。うう、今日はなんだか倒れる機会が多い気がする……

「あの、大丈夫ですか？」

「え、あ、はい。」

手を差し出してきたのは、扉を開けたと思しきエネコロロだった。私はその手を取って起き上がると軽く体をはたいて埃を払う。

「ありがとうございます。えっと……？」

「わたくしはエーネと申します。あなたは？」

「私はヒナタと言います。あの、フィンソンさんに会いに来たのですけど……」

「フィンロン様に？」

訝しげな表情を浮かべるエーネにピカチュウは一枚の紙を手渡した。そう、フィンロンが書いた依頼書だ。

「ワタシ達、この依頼書を見てきたんだけど……？」

「なるほど。あなた方でしたか。」

一瞬驚いたように目を丸くするものの、すぐに扉を開けて私達を中へと促した。

「どうぞこちらへ。あなた方のことはフィンロン様から伺っております。」

「あ、どうも……」

エーネの殊勝な態度に何かムズムズした感覚を覚える。ここではこれが普通なのかしら？

よく教え込まれたメイドのような振る舞いを見せるエーネに先導され、私達は屋敷の中へと足を踏み入れた。

エーネを先頭にエントランスを抜けて階段を上り、私達はある部屋の前へと案内された。おそらくここにフィンロンがいるのだろう。

「フィンロン様。探検隊“ポケダズ”の皆様がご到着しました。」

「わかりました。どうぞお入りください。」

エーネは「失礼します。」と言ってから静かに扉を開いた。エーネに促され私達は中へ入る。

その部屋は、壁をぐるりと本棚が一周し、その中には所せましと本がぎっしり詰まっていた。

そんな本に囲まれた空間には、何冊かの本が積み上がった机に、座り心地の良さそうな立派な椅子。床には暖色を主とした絨毯が敷かれ、シャンデリアの明かりが淡いオレンジ色の光を放っていた。

「ようこそお越しくださいました。初めまして、ここレンレン村の長を務めるフィンロンと申します。」

そんな立派な部屋の中心には、美しい銀色の毛並みを持つキュウコン フィンロンの姿。

そのあまりの美しさに私は思わず感嘆の息を漏らした。

「ワタシはピカチュウです。よろしくお願ひします。」

「ボクはナエトルだよお！」

「僕はカズキ。どうぞよろしく！」

「わ、私はヒナタです。よろしくお願ひします。」

お互いに自己紹介が終わったところでフィンロンは早速本題へと移った。

「大体のことはムゲン氏から聞いていますと思いましたが、私があなた達に依頼したいのはある勢力の拡大を防いでほしいのです。」

「新たな勢力つてやつですね？」

「その通りです。彼らの目的は不明ですが、目撃情報によれば西の方でいくつかの村が占領されているようです。」

「本来ならわたくし達だけで対処すべき問題なのですが……」

エーネは言いにくそうに顔をしかめながらちらりとフィンノンの方を見る。

フィンノンはコクリと頷いた。

「この大陸を脅かしている組織　ルナティックとの戦闘の影響で、新たな勢力に手を回してられない状況なのです。」

「ここに来るまでにポケモンを見かけなかったのはそのせいなのね……」

ルナティックの強さはこれまでに何度も体験している。それにここは過去の世界　つまりはルナティックの本拠地がある世界なのだ。そう考えるとあの静けさも頷ける。

「そして、わざわざ異世界からあなた達を呼び出したのにはもう一つ理由があります。」

「もう一つの理由？」

「はい。彼らは私達にとって少々特異な存在なのです。」

フィノンにはエーネに目配せをして合図すると、エーネは本棚の中から一冊の分厚い本を取り出し、フィノンに渡した。

「これは私が今まで見てきたポケモンの種族や特徴などを記したもののなのですが、ムゲン氏から得た情報を元にこれを見返してもどこにも見当たらないのです。」

フィノンはボスン！と大きな音を立てて置いた本を数ページめくってみせる。

そこには簡易的な絵とともにそのポケモンの種族名や特徴、住んでいる地域などが事細かに記述されていた。さながらポケモン図鑑のようだ。

「あ、ボクのこと書いてある！」

「え？あ、ほんとだ！すごい！」

「なに喜んでるのよ……」

本をめくりながらきゅきゅとはしゃぐカズキとナエトルに私は呆れてため息をつく。

変なところで子供っぽくなるというか好奇心が強いというか、ともかくカズキとナエトルには何か近いものを感じる。

「それって、どんなポケモンだったんですか？」

「ある者は蛇のような体躯に見るものを一瞬で凍りつかせてしまい、そんな鋭い瞳を持ち、ある者は鉄の拳とすさまじい熱気を纏い、ある者は四肢の鎧に何でも切り裂く剣を持ち合わせる　ムゲン氏は

そう言っていました。

……もう少しわかりやすく教えてくれてもいい気がします。」

……さっぱり見当がつかない。最後に小声で呟かれた言葉も頷けたでも、それとピカチュウ達を呼んだのとどう関係があるのかしら？

「何か心当たりのあるポケモンはいませんか？」

「うーん、蛇のような体躯のポケモンと言ったらギャラドスとかハブネークとか思い浮かぶけど、それは違うんですか？」

「見た目の色から判断して、それぞれ草、炎、水タイプだと思われるます。」

エーネが補足を聞いてまたうーんと考え込むピカチュウ。私も本を見ながら考えるがやはり答えは出てこない。

私達が知らない未知のポケモンがいるというのだろうか？

「まあ、正体はわからないけど、とにかくそいつらを鎮静化できればいいんだよね。それならワタシ達に任せてください！」

「うん！ボク達に任せて！」

二匹の言葉にフィノンは一瞬目を丸くするもののすぐに微笑みを浮かべて頭を下げた。

「ありがとうございます。」

「ご協力感謝します。」

その後、フィノンから新たな勢力についての情報を得た私達は今、エーネに連れられてある部屋へと向かっていた。なんでも案内役としてあるポケモンが同行しれくれるらしいのだ。一体どんなポケモンだろうとわずかに好奇心を膨らませながらついていくと、ある扉の前でエーネが立ちどまる。

「ソルト、入りますよ？」

「え、ちょ、待て　！」

ゴンツッ！

エーネが扉を開くと同時に鈍い音が響き渡る。そして、私達の目の前には頭を押さええてうずくまっているアブソルの姿があった。

「……………またですか？」

「うう……………いい加減いきなりドアを開けるのやめろよ……………」

痛そうに頭をさすりながらエーネを睨むアブソル。どうやらこのポケモンがソルトさんらしいけど……………

「ちゃんとノックもしましたし、声もかけました。わたくしに非はありません。」

「……………わかったよ。それで、何の用だ？」

「はい。実はですね」

エーネはソルトに事情を話した。それを聞いてソルトの赤い瞳がキツと鋭くなる。

先ほど見せた情けない姿をは裏腹にその表情は長年戦いを繰り返してきた戦士のようにも見えた。

「だが、本当にいいのか？オレが行ったら」

「わたくしはあなたと違って戦う力に秀でていません。それになにより、フィンソンの様のご指名でもありますから。」

「わかった。後のことは頼んだぞ。」

「言われなくても心得ています。あなたは災難に遭わないように気を付けていればいいのです。」

「無茶なこと言うな……」

額に汗を浮かべながら引き気味に笑うソルト。

それにしても、後のことは頼んだってどういう意味なのかしら？

そんな疑問を浮かべていると、エーネの横を通りぬけてソルトが目の前まで歩いてきた。

「オレはソルト。今回お前達の案内役を引き受けることになった。以後、よろしく頼む。」

「あ、はい、こちらこそ。」

上から降り注ぐ視線に自然と背筋が伸びてしまう。
うう、ちよつと怖いかも……

「ソルト、くれぐれも足を引つ張らないようにお願いしますね。」

「ちよ、少しは信用してくれよ……」

「念には念を入れておきませんとね。今回は思わぬ助っ人もいるらしいですし。」

「助っ人？」

「会えばわかるでしょう。フィン様はそう言っておられました。まあ、気を付けて行ってらっしゃいませ。」

ソルトは首を傾げるものの深くは追及せず私達についてこいと促した。

そういえば、リヒトはどうするんだろう？ フィンさんとは一応敵対関係なわけだし、一緒に行動するのは難しいような……
そんな不安も交えつつ、新たな勢力の鎮静化に向けて私達はソルトの後を追った。

第六十話：レンレン村へ（後書き）

久々に登場したキャラの扱いに手間取ったのはここだけの話

第六十・五話：呼びかけるは彗星の煌めき（前書き）

第六十一話の前にちょっと挟み込みました。
短いですが結構重要な話だったりします。

今回はウィン視点でお送りします。

第六十・五話：呼びかけるは彗星の煌めき

夢を見た。暗く狭い闇の世界。輝きが溢れる光の世界。二つの世界が混ざり合ったかのような混沌とした場所。そんな場所に僕は立っていた。いや、浮いていたという方が正しいかもしれない。一步前足を踏み出しても大地を踏みしめる感覚はなく、まるで水の中にいるようだ。

そんな混沌の海を漂って数分のこと。僕の前に巨大な影が現れた。破壊者のように冷徹で、かと思えば包み込むような優しさを持つ、不思議な姿。眩しいほどの光を纏い表情を見せないそれは、何をするでもなく僕を見下ろしている。

しばらくの間沈黙が続いた。僕を見下ろしてくるその影は、まるで僕の心を覗き込んでいるかのような印象を受ける。そして、一言だけ言葉を発した。

『我を、感じているか？』

心の底に響くようなその声を聴いた途端、僕の体は何かにつ張られるように混沌の海の底から急速に浮上していく。やがて意識は薄れて視界を黒が覆い尽くした。

ゆっくりと頭を持ち上げ、辺りを見渡してみる。僕達に割り当てられた、ギルドの一室だ。

わずかに耳を揺らす冷たい風がここが現実の世界だと教えてくれる。

「あの声は、一体……」

胸に手を当ててみる。いつの間にかあの貫くような痛みは治まっていた。

自分が生きている事を伝える鼓動を聞きながら考えてみる。あれは、一体なんだったのだろうか？

部屋に戻ろうとしたあの時、異常に高鳴る鼓動は激痛を引き起こし、僕の意識を現実の世界から遠ざけた。僕の中に存在するもう一つの鼓動。それがあの声の主なのだろうか？

我を感じているか。謎の声はそう言っていた。リヒトの言っていた“破壊の神”と何か関係があるのだろうか？

「ん？」

ふと、尻尾が何かに触れる。しかし、その柔らかな感触ですぐにわかった。

振り返ってみれば、寄り添うように寝息を立てるパートナー　　ルナの姿。

「んう……ウイン……」

寝言だろうか。僕の名前をつぶやいた。

どうやらずっと看病していてくれたらしい。僕はそつと頭を撫でた。

「ありがとう、ルナ。」

身体は大きけれど中身はまだまだ子供なルナの寝顔を見ながらふと考える。僕はどのくらい寝ていたのだろうか？ふと窓の外を見やれば漆黒の闇。どうやら夜のようだ。

ルナを起こさないように気を付けながら窓に近寄ると、満天の星空が視界に入る。今日は雲もなく、星や月が一望できた。

助けてください

「ッ!？」

しばらくの間夜空に映る星々を数えていると、突如どこからか声が聞こえてきた。耳を介さずに直接頭に響いて聞こえるそれは、かすかな音ながらも確かに聞こえる。

助けてください

まるで囁くようなかすかな声。しかし、どこから声が聞こえるのかわからない。窓から顔を出し辺りを見渡してみてもポケモンの姿は誰一人として見えなかった。

それでも助けを求める声が聞こえるのは事実。僕は無我夢中で窓から飛び出した。

「うわっ、と……」

着地の際にわずかにバランスを崩す。まだ本調子ではないらしい。

「(さっきの声は頭の中に直接響いてくる感じだった。もしかしたら、誰かがテレパシーで助けを求めているのかもしれない!)」

それならば近くに姿が見えないのも納得できる。しかし、テレパシーと言えどそれほど遠くにいては聞こえない。それなら

わずかに痛めた後ろ足をかばいつつギルドの裏の林を抜けまっすぐ進むと、そこには小さな森があった。心なしか声も大きくなってい

る気がする。多分、ここだ。

助けてください

森の奥に進むごとに鮮明になっていく声。若干荒くなってきた呼吸を整えつつ、僕はその声に尋ねてみた。

「あなたは誰ですか？どこにいるんですか？」

私は彗星。あなたのまだ知らない、世界の向こうから来た者です

初めて助けを求める以外の声を発した。僕の声が届いたようだ。この近く、なのか？

自然と歩調が速くなる。時折声をかけながらしばらく進むと、森を抜けて小高い丘の上に出た。

あの子達を……アルムやテイルを救えるのは、あなただけなんです

今でははつきりと聞こえる謎の声。いまだにどんな種族なのかわからないが着実に近づいているのは確かだ。しかし姿は見えない。一体どこにいるのだろうか？

「僕の力が必要というならば、喜んで力を貸しましょう。ですが、その前に姿を見せていただけませんか？」

姿を見せずに語りかけてくる謎の声。いろいろと気がかりなことを言ってくるその声に僕は少し疑問を抱いた。が、やはり困っているのを見過ごすことはできない。

感謝しますウイン。神の器に選ばれし者

「え……」

なぜか僕の名前を知っている謎の声。最後に発したその言葉に僕は無意識に手を伸ばす。

むなしく空を切る前足を戻すことも忘れて、僕は星がちりばめられた夜空を見上げた。周りの星々を押しつけるように強い光を纏った流星がこつちに向かって落ちてくるのが見えたから。

まるで狙い澄ましたようにまっすぐ向かってくる流星に危機感を覚えたのは、すでに目前に迫ってきてからのことだった。

「！？」

わけもわからず叫んだ声は目を開けていられないほど青く輝いた流星の前にかき消されてしまう。

視界を真っ白に染められ、奇妙な浮遊感に襲われながら少しずつ意識が薄れていく。

ウイン。あの子達のこと、頼みましたよ

その言葉を最後に、僕の意識はプツンと途切れた。

第六十・五話：呼びかけるは彗星の煌めき（後書き）

というわけで、久々の登場のウィンは目覚めてすぐにコラボする
ことになりましたとさw

この続きを知りたい方は、コメントさん作『エトワール・フィラン
テ』星降りの夜の導かれし出逢い』よりご覧くださいます！

第六十一話：案内役は不幸体質？（前書き）

第六十一話完成です。

第六十一話：案内役は不幸体質？

太陽が空高く昇り、だんだんと熱気を感じられるようになった頃。案内役として同行することになったアブソル ソルトとともに私達はレンレン村を出発し西へと歩を進めていた。フィノンの話では、新たな勢力はここから西の方角にある海沿いを中心に活動をしているらしい。一体どんな敵が待ち受けているかわからないけど、探検隊として頑張らなくちゃ！

「ここから海までは大体四、五日くらいかかる。準備の方はしつかりできているか？」

先頭を歩くソルトが後ろを振り返り私達の方を見る。

初めて会った時に感じた怖さは時間とともに無くなりつつあった。まだ歩き始めて数分だが、こんな風にいると気にかけてくれているし、それに

ゴンッ！

「あだっ!?!？」

鈍い音を響かせてソルトがその場にうずくまる。どうやら木に頭をぶつけたようだ。

こうやって度々ドジを踏んでるところが面白くて怖さなんて全然感じなくなってきたのだ。

「ソルトさん、ワタシ達の心配より自分の心配をした方がいいんじゃない？」

「僕だってそんな場所でぶつからないよ！」

「うっ、うるさいっ！」

笑いながら指摘するピカチュウ達に顔を赤くしながら反抗するソルト。

そんな彼らの様子を上空からクレアとフルスが静かに見守っていた。

.....

「ふっ、相変わらずソルトはドジだねえ」

「さすがは災いポケモン。あの不幸さは恐れ入る。」

クスクスと笑い声をあげる二匹の姿は空の青に溶け込んで目視することはできず、気配すらも微弱である。光を屈折させることで姿を消すことができる二匹は普段はこのように姿を消しているのだ。

「それにしても、ルナティック以外にも敵が現れるとはな。」

「ホントだよ。今のところ目立った活動はしてないし、ルナティックよりはおとなしいけど……クレアの仕事を増やさないでほしいなあ。」

「そう僻むなクレア。うまくいけば、彼らが何とかしてくれるだろう。っ、と、どうやらヒナタのナイト様のご登場のようだ。」

フルスは会話を中断し、下の道を進むヒナタ達を見下ろす。その目の前には、怪しげな黒いマントを纏ったピカチュウ　リヒトが立

っていた。

.....

「むっ、お前は……」

「案内役は貴様だったか、ソルト。」

七宝山に群生する葉の多い木の陰から現れたのは、フィノンの家に入る前にどこかに行ってしまったリヒトだった。
リヒトは先頭を歩くソルトの姿を見た瞬間はあ、と大きくため息をつく。

「なんだその溜息は！？なぜお前がここにいる！？」

「黙れドジソルト。おれはヒナタに協力したいだけだ。」

「ドジってお前……ん？協力？」

喰ってかかるうと声を荒げたソルトだったが、協力という言葉に目をぱちくりとさせた。

その顔は信じられないと言わんばかりに驚きの表情で満ちていた。

「……お前、ルナティックだよな？なぜそんなことをする？」

「貴様には関係ないことだ。とにかく、同行させてもらうぞ？」

「ん、まあ、協力したいって言うなら構わないが……」

「安心しろ。ヒナタが望まない限り危害を加えるつもりはない。」

いや、私はそんなこと望むわけじゃないですから。と、心の中で小さく突っ込みを入れておく。

それよりソルトさん、私が必死に隠そうとしていた事実をさらっと言わないでくれませんか？

「え、ルナティック……？」

案の定、その言葉に反応したナエトルがリヒトの方を見て呟く。その表情がだんだんと驚愕のものへと変わっていき、やがてそれは声となって放出された。

「え、ええーッ！！？？リヒトがルナティックう！！？」

耳をつんざくような大声に木々がわずかにざわついた。

ああ、まだ言い訳考えてないのに……

「な、なんだよ。リヒトがルナティックなのがそんなに」

「わぁーッ！ソルトは黙っててっ！」

「へぶっ！？」

何を思ったのかカズキがソルトの頭に体当たりして気絶させてしまった。まあ、これ以上ややこしくしてほしくないからこれでもいいんだけど。

それより今問題なのは

「リヒトがルナティックだったってことは……」

「まさかあなた達もルナティック!?」

ナエトルと同じように驚愕の表情を見せるピカチュウは、わなわなと体を震わせながら私達を指さしている。

……ってなんで私達まで!?

「ち、違います!リヒトがルナティックなのは本当だけど……で、でも、それも理由があつて」

「理由?理由つて何?」

「そ、それは……」

言葉に詰まる。そもそも私だつてなぜリヒトが協力してくれるのかわかってないのだ。

ちらりとリヒトの方を見してみる。さっきからずっと傍観していたリヒトだが、私の視線に気づいたのか組んでいた腕を下ろして一歩歩み寄ってきた。

顔をすっぽりと覆い隠しているマントの隙間からギンツと鋭い視線が放たれ、問い詰めてくるピカチュウの言葉を凍てつかせる。

「な、なによ……?」

「おれが裏切つたからだ。」

「え……?」

若干及び腰となったピカチュウだったが、リヒトの言葉でその表情は疑問へと変わっていく。

ガタガタと震えていたナエトルも恐る恐るといった姿勢で問い返し

た。

「ど、どういふこと？」

「そのままの意味だ。おれはルナティックを裏切り、ヒナタを守る
と決めた。ただそれだけだ。」

リヒトはそういうと、話は終わったと言わんばかりに背を向けて歩
き出してしまふ。

そんなリヒトを見て、私はその背に向かって無意識に声をかけてい
た。

「なんで、そこまで私のことを……？」

ピタリ。リヒトの歩みが止まった。しかし振り返ることはせず、背
を向けた状態のまま小さく呟いく。

「お前が、おれにとって大切な奴だからだ。」

「え……」

風に流されてしまいそうな小さな声。しかし、私の耳にはしっかりと届いた。

大切な奴？それって、一体……

困惑している私をよそにリヒトはカズキによって気絶させられたソ
ルトの角を掴むと、こちらを振り返った。

「早く行くぞ。目的地はまだ遠いらしいからな。」

「いででで！？ちよ、角を掴むなあ！！」

痛みによって目覚めたソルトを完全に無視してそのままずると引きずっていく。

私の疑問は晴れぬまま、場違いな悲鳴がこだましていた。

「……あいつ、なんなのかしらね？」

「私が聞きたいです。」

「変わってるけど、味方……なんだよね？」

「ちょっと怖いけどね……」

予測不能のリヒトの行動に困惑しているのは私だけではないようだ。いまだに底知れぬリヒトの全貌。いつか、話してくれるのだろうか？ そんなことを思いつつ、小さくなってきた悲鳴を見失わないように私達は駆けだした。

「うう、なんでオレがこんな目に……。これじゃ助っ人じゃなくて疫病神だろ……」

「喚くな。さっさと案内しろ。」

ようやく解放され、あちこちにできた擦り傷を気にしながらぶつぶつ呟いているソルトに追い打ちをかけるようにリヒトの言葉が降りかかる。

ペロペロと傷口をなめていたソルトだが、その言葉にカチンと来たのか不機嫌そうな顔で反論した。

「だったらお前が案内すればいいだろ？テレポートみたいな芸当ができるんだからそれでいけば」

「おれはその場所を知らない。そして知らない場所には転移できない。」

「……そうかい。」

はあ、と深いため息を一つ。そんな様子を見て、私は静かに苦笑した。

何というかその……お疲れ様です。

「そろそろ七宝山を抜けるな。」

その後、しばらくの間会話を交わすこともなく先へと進んでいくと、今まで辺りを囲んでいた木々がだんだんとまばらになり、やがて広い平原へと出た。

出発時に空高く上がっていた太陽は若干傾き、その色をだんだんと夕焼け色に染める準備をしている。

「できれば今日中に“水晶の岩場”辺りまでは到達したいところだな。」

「水晶の岩場」？」

日の傾き具合を見ながら言うソルトの言葉に興味を持ったのか、カズキは前に行くソルトの隣まで歩いていく。

「その名の通り、水晶などの宝石がたくさん採れる場所だ。確か近くにはそうした宝石を名産とした町があったはずだ。まあ、今は人間もいなくなってゴーストタウン状態だけだな。」

「へえ〜。」

水晶と聞くと以前時の歯車を発見した“水晶の湖”を思い出す。あの時はジュプトルと戦って負けちゃったんだっけ。あの時はホントにダメかと思った。まあ、結局ジュプトルは敵じゃなかったんだけどね。

「じゃあ、今日はそのゴーストタウンに泊まる気なの？」

「ん、まあ、できれば雨風がしのげる場所がいいからな。」

ピカチュウの質問に淡々と答えるソルト。

それにしても、ゴーストタウンか……。お化けとか……。出ないわよね？

そんな考えが浮かぶと何だか急に怖くなってきた。無意識に体がブルリと震える。

だ、大丈夫よ。みんなもついてるし、お化けなんて、い、いるわけないんだから……

道中、私はできるだけ表情には出さずに心の中でなんども自分にそう言い聞かせていた。

太陽は地平線の先に姿を隠し、代わって月が空を支配し始めた頃

「ここが、“水晶の岩場”……？」

「ああ。正確にはその近くの町だが。」

日が暮れてしまい視界が悪くなってしまったが、私達はなんとか無人の町へと到着した。

拾った木の棒にカズキに頼んで火をつけてもった松明の明かりに照らされたその町は、ソルトの言う通り廃墟が立ち並び、かつては活気があったであろう通りにも何の気配も感じられなかった。

時間が夜ということもあってその様子は何倍にも不気味に見える。

こ、こんなところで寝るの……？

「な、なんか不気味なところだね。お化けでも出てきそうな……」

「ひっ……」

「ど、どうしたのヒナタ？」

そ、そういうことを言わないでナエトルさん。想像しちゃうでしょ

……

思わずカズキにしがみついていた。

「あ、い、いめん……」

「大丈夫？顔色悪いけど？」

「大丈夫よ。大丈夫……」

そう、大丈夫。怖くない怖くない……

「もしかしてヒナタって、お化けとかダメな人？」

「いつ！？そそそ、そんなことないですよ？」

まずい、声が裏返ってしまった……。これじゃ「そうです。」って言うてるようなものじゃない！
案の定、ピカチュウの顔はニヤリとした笑みを浮かべている。

「へえ、ヒナタも意外と可愛いところあるんだね。」

「そんなんじゃないですってばあ！」

うう、これじゃ逆効果だ。落ち着け私。狼狽えちゃダメよ。

「安心しろ。ヒナタはおれが守る。」

「え、あ、はい。」

なぜだかりヒトが言うともものすごく説得力がある気がする。

「とりあえず寝床を確保するぞ。いつまでも入口にいてもしようがないだろ？」

「そうね。早く寝ましょ。」

「あ、置いていかないでえ！」

「あ、ナエトルもそういうのダメなんだね！」

「ち、違うよおー!!」

「さっさと来い。ホントに置いてくぞ？」

「ちよ、それはだめえ！」

わたわたと手をばたつかせながら必死になっているナエトルを見て私はほつと息をつく。

よかった、仲間がいた……

我ながら失礼だとは思ったが、私は知らぬ間にそんなことを考えていた。

第六十一話：案内役は不幸体質？（後書き）

ヒナタってこんなに怖がりだったっけ？

第六十二話：眠れぬ夜と裏切り者の決意（前書き）

第六十二話完成です。

第六十二話：眠れぬ夜と裏切り者の決意

真夜中。辺りは静まり返り、私達の安眠を妨害するものなど何一つ見受けられなかった。

ゆるやかに流れる風は優しい音色を奏でて通り過ぎ、まるで子守歌のようにポケモン達を眠りに誘うことだろう。……ただし、それが普通のポケモンだったらの話だが。

「つくしゅん！」

いくら中とはいっても、すでに家としての機能を果たしていない廃墟ではところどころから冷たい風が入り込んできて寒い。

なんとか使えそうな廃墟を見つけ、ソルトが持参してきた毛布をかぶり床に就いたわけだが、私はどうしても眠ることができなかった。暗闇が苦手な私にとって風の子守歌などただの恐怖の音色でしかない。まったくの無音というのももちろん怖いけど、唐突に聞こえてくる風の音も十分怖かった。

「みんな、よく寝てられるよね……」

ソルトがくれた毛布を羽織り、寒さをしのぎながら目の前で眠る仲間達を見る。

怖がりに見えたナエトルも最初は寝付けなかったみたいだけど今は爆睡してるし、結局怖がりなのは私だけのようだ。

みんなが寝ている手前明かりを灯すわけにもいかず、わずかに差し込む月明かりを光源にしてただただうずくまっていた。

「眠れないのか？」

「ッ!？」

と、突如発せられた声にビクッと小さく飛び上がる。だ、誰?!? ぶんぶんと首を回して周りを見回してみると、さっきまで寝ていたはずのリヒトが目を開けてこちらを見ていた。

「り、リヒト……?。」

「もしかして、暗闇が怖いのか?。」

「……ええ。」

「そうか。」

リヒトは短く返事をする、ムクリと起き上がり自分の毛布を手に私の方へ歩いてきた。

「……………」

そのまま無言で私の隣に腰を下ろす。

そして、私の毛布の中へ入ってくると私の手を取って……って!!

「な、なな、何やってるんですか!!?。」

「こうして一緒にいれば、怖くないだろ?。」

「う、うん……。」

もし明かりがついていたら私の顔が紅潮していくところをはっきりと見て取れただろう。今や私とリヒトの距離はお互いの呼気が感じ

られるほどに近い。先ほどまで寒さで震えていた体は収まり、代わりに心臓がバクバクと早鐘を打っている。まさかりヒトがこんなことをしてくるなんて思っていなかっただけに落ち着くまで少し時間がかかってしまった。

「落ち着いたか？」

「ええ……」

何回か深呼吸を繰り返し、ようやく落ち着くことに成功した。いまだに心臓の音は大きく聞こえるけど……。

「あの、リヒト」

「ヒナタ。」

私が声をかけようとした瞬間、リヒトもまた私の名を呼んだ。言葉を遮られた私はしかたなく続きを促す。

「実は、お前に頼みたいことがある。」

「頼みたいこと？」

「あ、ああ……」

なんだか歯切れ悪く話すリヒト。その顔を見て見れば、困ったように目を細めながら視線を彷徨わせている。

リヒトが口ごもるなんて、頼みって一体何なのかしら？

しばらくもごもごと小さな声で呟いていたが、やがて決心したようにこちらをみると、はっきりとした声で言った。

「おれを、お前のチームに入れてほしい。」

「え……？」

何を言われてもいいようにそれなりの覚悟はしていたが、これは全くの予想外だった。

思わず小さく口を開けたままポカンとリヒトを見てみると、その表情がだんだんと翳っていくのがわかる。

「……ダメか？」

「えっ、いや、その……」

「ダメならいい。悪かったな。」

「ち、違うんです！」

思わず声を荒げ、リヒトの目をしっかりと見つめた。

突然叫んだ私に驚いたのか、その表情は呆気にとられたようにぼんやりとしている。

「確かにリヒトはルナティックで私達から見れば敵だけ……。でも、あなたは何度も私を助けてくれた。」

敵でありながら陰ではいつも私を救ってくれた。それがどんなに危険なことかなんて私にだってわかる。

そんなリスクを負ってまで助けてくれたあなたを拒む理由なんて、何一つない！

「私は、あなたを歓迎しますよ。 リヒト！」

「ヒナタ……」

驚きに満ちていた顔が次第に崩れていくと、次の瞬間には私に抱き着いていた。

リヒトの目じりに一瞬だけ見えたきらりと光るものは、小刻みに体を震わせる姿から見て見間違いではなかったようだ。

「うう……ありがとう……」

わずかに震えの混じった声で何度も何度も繰り返すリヒトの背中を私はツルでそつと撫でる。

月の光だけが差し込む薄暗いその場所で、私達はしばらくの間そうしていた。

明るる日の朝。起床した私達は旅支度を済ませ町を後にした。

昨日、あれからしばらくして私は眠ってしまったが、遅くに寝たせいかいまだに眠気が取れない。

しかし、時折あくびを交えつつ歩を進める私に対し、同じく遅くに寝たであろうリヒトはあくび一つ洩らさない。

起きたらもういなかったから私より寝てないはずなただけだなあ……。リヒトのことだから寝てないって可能性もあるけど。

「 見えた。あれが“水晶の岩場”の入り口だ。」

と、そんなことを考えていると、前方に洞窟らしき入り口が見えた。

かつて採掘をしていた名残からか、錆び付いた線路が奥へと続いている。松明などもあったが、そのほとんどは壊れ、今では光源としての役割は果たしていないようだった。

「ここには廃坑になって人間がいなくなつて以来、洞窟を住処とするポケモンが住みついている。

もしかしたら襲われるかもしれないから、みんな注意しろよ？」

洞窟の奥を見据えながら注意を促すソルト。私はその言葉に気を引き締めた。

「みんな、行くぞ！」

『おおーッ！！』

片手を空に向かって突き上げ気合を入れると、私達は“水晶の岩場”へと足を踏み入れた。

中はとても暗かった。まだ使えそうな松明に火を灯して照らしてみるのが、かなり複雑に入り組んでいるようだった。これはちょっと難しいかも……

松明を持つリヒトとソルトを先頭に慎重に進んでいく。

「そう言えば、ソルトは道わかつてるの？」

と、後方を歩いていたピカチュウが唐突に口を開いた。そう言えば、

と自然とソルトに視線が集まる。

確かに、こんな暗い洞窟、来たことがあったとしても迷いそうなものだけねど……

しかし、当のソルトは得意げに答えた。

「まあな。ここには一度しか来たことがないが、なんとなくわかる。」

「……それ、当てになるんですか？」

「大丈夫だって！オレは記憶力はいい方だから　ツギヤン！？」

と、意気揚々と話していたソルトの顔が急に視界から消えた。リヒトが松明を近づけると、そこには顔を地面に伏せてピクピクしているソルトの姿。どうやら石に躓いたようだ。なんだか前にも似たような光景を見たような……

「……役に立つのか？こいつ。」

その姿に思わずつぶやくリヒトに、私達は全員で頷いた。

傷薬代わりに顔にオレンの実の汁を塗りたくって応急処置を済ませると、私達は再び歩き出した。

なるほど、ソルトさんのかばんの中がほとんどオレンの実で埋め尽くされていたのはこういうわけか。

「よく案内役なんて任されたな。」

「う、うるさいッ!」

そう言いながらも足取りは先ほどよりかなり慎重になっている。さすがに顔は堪えたのだろうか？

「それにしても、さっきから全然ポケモンに会わないね。」

「そう言えば、確かに。」

ナエトルの言葉にキョロキョロと辺りを見回してみる。が、やはり誰もいない。

ここに入ってからおそらく三十分以上は経ったと思うのだが、まだ一度も遭遇していない。

「ソルトさん、本当にポケモンが住んでるんですか？」

「あ、ああ。そのはずだが……」

口ではそう言うものの、自信がなくなってきたのか不安そうに視線を彷徨わせる。

「……ん？あれは……？」

と、あちこちを向いていた視線がある方向に向かって固定された。その視線を追い、私もその方向を見てみると

「なに、あれ……？」

その先に見えたのは鬼火だった。
いや、鬼火と言っても技の“鬼火”ではない。かなり遠くの方にぼんやり見えるそれは、時折明滅を繰り返し、ウロウロと彷徨っていた。

「お、お化けじゃない、よね？」

「あ、当たり前ですよ！ねえ、リヒト？」

「……ポケモンの気配は感じるが。」

「だよ。よかった……」

私達よりずっと感覚が鋭いリヒトが言うのだから、あれはポケモンなのだろう。

でも、こんな洞窟にあんなポケモンが住んでいるのかな？

「ねえ、とりあえずあそこに行ってみない？」

「そうだな。もしかしたら、迷い込んだポケモンかもしれない。」

そう言って歩き出すソルト。なんだか嫌な予感がするんだけど……私は一抹の不安を胸に先を行くみんなの後を追った。

結果として、近づいたのは失敗だったと思う。なぜかって？

それは、この洞窟に住んでいると思われるポケモン達に囲まれてい

る現状を見ればわかると思う。

「な、なんかすっごい敵視されてるけど……」

「ここ、縄張りっぽいですね。」

私が推測するに、あの鬼火のポケモン（実際には体に炎を纏っていただけだが）が縄張りに迷い込んできて、それを追い払おうと洞窟のポケモン達が集まってきたところに行くわしちゃったんじゃないかなあ、と思う。

もっとも、私達が来たことよって標的が変わったようだけど。

「話し合いで解決……できそうな相手じゃないよね。」

「ゴローンにゴローニヤ、それにドンファン、か。地面タイプが多いわね……」

私やナエトルはともかく、ピカチュウやリヒトには少し厳しいかもしれない。

「リヒト、ピカチュウ、大丈夫か？」

「問題ない。」

「まあ、ワタシ強いから。」

心配するソルトをよそに、リヒトは“氷牙”を取り出し、ピカチュウは尾を銀色に輝かせてすでに戦闘態勢である。

「それじゃ、一気に倒すよっ……」

『おお！！』

ピカチュウの掛け声とともにそれぞれ別々の方向に散る。
お互いに自分の背中を味方に任せ、私達は目の前の相手に突撃して
いった。

第六十二話：眠れぬ夜と裏切り者の決意（後書き）

なんだかリヒトのキャラが若干崩れてきてるような……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3938h/>

時空を乗り越えて～探検の歌～

2011年12月23日23時53分発行